

ジャン・クリストフ

JEAN-CHRISTOPHE

第四卷 反抗

青空文庫

序

ジャン・クリストフの多少激越なる批評的性格は、相次いで各派の読者に、しばしばその気色を寄せしむるの恐れあることと思うから、予はその物語の新たな局面に入るに当たつて、予が諸友およびジャン・クリストフの諸友に願うが、吾人の批判を決定的のものとみなさないでいただきたい。吾人の思想のおのおのは、吾人の生しょうが涯がいの一瞬間にすぎない。もし生きるということが、おのれの誤ご謬びゅうを正し、おのれの偏見を征服し、おのれの思想と心とを日々に拡大する、というためでないならば、それは吾人になんの役にたとう？ 待たれよ！ たとい吾人に謬びゅうけん見けんあろうとも、しばらく許されよ。吾人はみずから謬見あるべきを知っている。そしておのれの誤謬を認むる時には、諸君よりもさらに苛か酷こくにそれをとがむるであろう。日々に吾人は、多少なりとさらに真理に近づかんと努めている。吾人が終末に達する時、諸君は吾人の努力の価値を判断せらるるであろう。古ことき諺わざの言うとおり、「死は一生を讃ほめ、夕ゆうべは一日を讃ほむ。」

一九〇六年十一月

ロマン・ローラン

自由！……他人にも自分自身にもとらわれない自由！一年この方彼をからめていた情熱の網が、にわかには断ち切れたのであった。いかにしてか？それは彼に少しもわからなかった。網の目は彼の生の圧力をささえることができなかつた。強健なる性格が、昨日の枯死した包皮を、呼吸を妨ぐる古い魂を、荒々しく裂き捨てる、生長の発作の一つであつた。

クリストフは何が起つたのかよくわからずに、ただ胸いっぱい呼吸した。ゴツトフリートを見送つてもどつて来ると、氷のような朔風さくふうが、町の大門に吹き込んで渦巻うずいていた。人は皆その強風に向かつて頭を下げていた。出勤の途にある工女らは、裳衣しやういに吹き込む風と腹だたしげに争つていた。鼻と頬ほおとを真赤まっかにし、腹だたしい様子で、ちよつと立ち止まつては息をついていた。今にも泣き出しそうにしていた。クリストフは喜んで笑つていた。彼は嵐あらしのことを考えてはいなかつた。他の嵐のことを、今のがれて来たばかり

の嵐のことを考えていた。彼は冬の空を、雪に包まれた町を、苦闘しつつ通つてゆく人々を、ながめまわした。自分のまわりを、自分のうちを、見回した。もはや何かに彼をつないでるものはなかった。彼はただ一人であつた。……ただ一人！ ただ一人であることは、自分が自分のものであることは、いかにうれしいことだろう。つながれていた鎖を、思い出の苦痛を、愛する面影や嫌悪すべき面影の幻を、のがれてしまったことは、いかにうれしいことだろう。ついに生きぬき、生の餌食とならず、生の主人となることは、いかにうれしいことだろう！

彼は雪で真白くなつて家に歸つた。犬のように愉快げに身を揺つた。廊下を掃いていた母のそばを通りかかると、あたかも子供にでも言うように、愛情のこもつた舌つたるい声を出しながら、彼女を抱き上げた。年老いたルイザは、雪が融けて湿つてる息子の腕の中で、身をもがいた。そして子供のよくな仇気ない笑いをしながら、「大馬鹿さん！」と彼を呼んだ。

彼は自分の居室へ大股おおまたに上がつていった。小さな鏡に顔を映したが、よく見えなかつた。それほど薄暗かつた。しかし彼の心は喜び勇んでいた。ろくに動きまわることもできないほどの狭い低い室も、彼には一王国のように思われた。彼は扉を鍵で閉め切り、満足

して笑った。ついに自分自身をまた見出しかけていたのだ！ いかにも久しい前から自分を
 取り失っていたことだろう！ 彼は急いで、自分の考えの中に沈潜していった。その思想
 は、遠く金色の靄もやの中に融とけ込んでゆく大きな湖水のように思われた。苦熱の一夜を明か
 した後、足を清せい冽れつな水に洗われ、身体を夏の朝の微風になでられながら、その湖水のほ
 とりに立っていたのだ。彼は飛び込んで泳ぎ出した。どこへ行くのかわからなかった。し
 かもそれはほとんどどうでもいいことだった。ただ当てもなく泳ぎ回るのが愉快だった。
 彼は笑いながら、自分の魂の無数の音に耳傾けながら、黙っていた。魂には無数の生物が
 うごめいていた。何にも見分けられなかった。頭がくらくらした。ただ眩まぼゆいほどの幸福ば
 かりを覚えた。自分のうちにそれらの見知らぬ力を感じてうれしかった。そして自分の能
 力をためすことは不精あとしげに後回しとして、まず内心に咲き乱れる花に誇らかに酔って、
 陶然としてしまった。数か月来押えつけられていたのが、にわかに春が来たように、一時
 に咲きそろった花であった。

母は彼を食事に呼んでいた。彼は降りていった。一日戸外で暮らしたあとのように、頭
 が茫然ぼうぜんとしていた。しかし彼のうちには深い喜びの色が輝いていた。ルイザは彼にどう
 したのかと尋ねた。彼は答えなかった。母の胴なべ体をとらえて、スーなべプ鍋から湯気が立って

いる食卓のまわりを、無理に一回り踊らした。ルイザは息を切らして、彼を狂人だと呼びたてた。それから彼女は手を打った。

「まあ！」と彼女はきがか気懸りそうに言った、「また恋したのに違いない！」

クリストフは笑いだした。ナフキンを宙に投げた。

「恋だつて！……」と彼は叫んだ、「おやおや……嘘です、嘘です、もうたくさんだ。安心していらつしやい。もうするもんですか、一生しょうがい涯うそしません！……あああ！」

彼は水をなみなみと一杯飲み干した。

ルイザは安心して彼をながめ、頭を振り、はほえ微笑ほえんでいた。

「当てにはならない酔っ払いの約束だね、」と彼女は言った、「まあ晩までのことでしょうよ。」

「それだけでも何かになるわけですよ。」と彼は上きげん機嫌きげんに答えた。

「なるほどね。」と彼女は言った。「だがいったい、どうしてお前さんはそううれしがつてるんですか？」

「僕はうれしんです。それつきりです！」

彼は食卓にりょうひじ両りょうひじ脇ひじをつき、彼女と向かい合いにすわって、今後どんなことをするか、

それを彼女に話してやった。彼女はやさしい疑念の様子でそれに耳をかし、スープが冷めてしまうと静かに注意した。彼は自分の言うことを彼女が聞いていないのを知っていた。しかしそれを気に止めなかった。彼は自分自身にたいして語つてるのであった。

二人は微笑みながら顔を見合つていた、彼は語り、彼女はよく耳も傾けずに。彼女は息子を自慢にしていたが、その芸術上の抱負にはたいして重きを置いていなかった。彼女は考えていた、「この人は幸福なのだ、それがいちばん肝心なことだ。」——彼は自分の話にみずから酔いながら、母のなつかしい顔を、頸には黒い襟巻を緊とまとい、白い髪をし、若々しい眼で自分をやさしく見守り、寛容にゆつたりと落ち着いてる母の、その顔をながめていた。彼女の心のうちの考えがすっかり読み取られた。彼は冗談に言つてみた。

「お母さんにとつてはどうでもいいことなんでしょうね、僕の話してることなんかは。」
彼女は軽く反対をとなえた。

「いいえ、いいえ！」

彼は彼女を抱擁した。

「なにそうですよ、そうですよ！ まあ言い訳なんかしなくてもいいんですよ。お母さんの方が尤もです。ただ、僕を愛してください。僕は人に理解してもらわなくてもいいんで

す。——あなたにも、だれにも。もう今じゃ、だれもいりません、何もいりません。自分のうちに何もかももってるんです……。」

「そうら、」と彼女は言った、「こんどはまた別な狂気沙汰ざたになってきた！……だがそうならなければならぬなら、まだこんどの方がよい。」

おのが思想の湖上に漂う心楽しい幸福！……舟底に横たわり、身体は日の光に浴し、顔は水の面を走るさわやかな微風になぶられて、彼は宙に浮かびながらうとうととしている。寝そべった身体の下には、揺らめく小舟の下には、深い水が感ぜられる。手はひとりで水に浸される。彼は起き上がる。子供のおりのように、舟ふなべり縁あしに顔をあもたして、過ぎてゆく水をながめる。稲妻のように飛び去ってゆく、不思議な生物の輝きが見える……また他ほかのが、次にまた他のが……。いつもそれぞれ異なった生物である。彼は自分のうちに展開してゆく奇怪な光景に笑っている。自分の思想に笑っている。思想をどこにも固定させる必要はない。選ぶこと、それら数限りない夢想のうちになんで選択の要がある？ まだ時間は十分ある。……あとのことだ！……好きな時に網を投じさえすれば、水中に光っているのが見える怪物を、いつでも引き上げられるだろう。今はそれをただ通らしておく。

……あとのことだ！

暖かい風とわからないくらいのかすかな流れとのままに、舟は漂っている。穏やかで、日が輝り渡り、寂然としてゐる。

ついに彼は懶げに網を投じる。水沫の立つ水の上に身をかがめて、見えなくなるまで網を見送る。しばらくぼんやりしたあとに、ゆるゆると網を引く。引くに從つて網は重くなる。水から引き上げようとする間ぎわに、ちよつと手を休めて息をつく。獲物を手に入れることはわかるが、どんな獲物だかはわからない。彼は期待の楽しみをゆるゆると味わう。

彼はついに意を決する。燦然たる甲鱗の魚類が、水から現われてくる。巢の中の無数の蛇のように、身をねじっている。彼はそれらを珍しげにながめ、指で動かし、美しいのをちよつと手に取りたくなる。しかし水から出すとすぐに、その光沢は褪せてきて、その姿が指の間に融け込む。彼はそれを水に投げ込み、また他のを漁り始める。自分のうちに動いてる幻想を、どれか一つ選び取るよりも、むしろそれらを皆代わる交わるながめてみたくなる。透明な湖水の中に自由に泳いでる時の方が、ずっと美しいものに思われる……

∴。

彼はそのあらゆる種類のものを漁りだした。いずれも皆奇怪なものばかりだった。数か
月来彼のうちにはあらゆる観念が積もっていて、しかも彼はそれを利用して費消することが
なかった。今やその豊富さになやんでいた。しかしすべてが雑然と交り合っていた。
彼の思想は物置場であり、ユダヤ人の古物店であって、珍稀な器物、高価な布、鉄屑、襪
褌などが、同じ室の中に堆く積まれていた。どれが最も価値あるものであるかを、彼は見
分けることができなかつた。いずれにも同じく興味もてた。和音のそよぎ、鐘のように
鳴り響く色調、蜜蜂の羽音に似た和声、恋せる唇のように微笑む旋律。また、
風景の幻影、人の面影、熱情、靈魂、性格、文学的観念、形而上学的観念。また、雄
大不可能な大計画、あらゆるものを音楽で摘出し種々の世界を包括せんとする、四部
作や十部作。また多くは、一つの声音、街路を通る一人の男、風の音、内心の律動、
など些細なものからに呼び起こされる、仄かな明滅する感覚。——それらの計画の
多くのものは、ただ題名だけでしか存在していなかつた。一つもしくは二つ限りの主調に
まとめられるものであつたが、それで十分だつた。ごく若い人々と同じく彼もまた、創造
しようとしていたものを創造したのだと信じていた。

しかし彼はかかる煙のごときもので長く満足するには、あまりに多く生活力をそなえていた。彼は空想的な所有に飽きて、幻想を実際につかみ取ろうとした。――まずいずれより始むべきか？ いずれの幻想も皆等しく重要なものに思われた。彼はそれらをくり返しまたくり返して調べた。投げ捨ててはまた取り上げた。……否もう、元のを取り上げるのではなかつた。もう同じものではなかつた。二度ととらえることはできなかつた。たえず幻想は変化していた。ながめてるうちにも、手の上で眼の前で、変化した。急がなければならなかつた。しかも彼は急いでやることができなかつた。自分の仕事の緩慢さに困りぬいた。全部を一日に仕上げたいほどであるのに、わずかな仕事をしでかすのにも非常な困難を感じた。最もいけないことには、着手したばかりでもう厭いやになった。幻想は通り過ぎてゆき、彼自身も通り過ぎていった。一つのことをやっていると、他のことをやれないのが残念だつた。りっぱな主題を一つ選み取っただけで、もうその主題に興味がなくなるように思われた。かくてそのあらゆる財宝も、彼には役にたたなかつた。彼の思想は皆、彼が手を触れさせなければ生き生きとしていた。首尾よくとらえると、もうすでに死んでいた。それはタンタルスの苦痛に似ていた。届く所に果実がなっているけれど、それを手に

取ると石になつた。唇の近くに清水があるけれど、身をかめると遠のいてしまった。

彼は渴を癒さんがために、すでに手に入れた泉で、自分の旧作で、喉をうるおそうとした。……厭な飲料！ 彼はそれを一口含むや、のしりながらすぐに吐き出した。何事ぞ、この生温かい水が、この空粗な音楽が、自分の音楽であつたのか？——彼は自分の作曲をひとわたり読み返してみた。そして駭然とした。さらに腑に落ちなかつた。どうしてそんなものを書く氣になつたのかもわからなかつた。彼は顔を赤らめた。ある時などは、最も幼稚なページを一つ読んだあとで、室にだれもいないかふり返つて見て、それから恥づかしがつてる子供のように、寢台のところへ行つて枕に顔を隠したこともあつた。またあゝる時は、自分の笑うべき作品がいかにも滑稽に思えて、我れながら自分の作であることを忘れた……。

「ああ馬鹿だなあ！」と彼は腹をかかえて笑いながら叫んだ。

しかし最も厭味なのは、恋愛の苦しみや喜びなど、熱烈な感情を表現したつもりでいる曲譜だつた。彼は蚊にでもさされたかのように、椅子の上に飛び上がった。テーブルを拳でうちたたき、憤怒の喚き声をたてながら、みずから頭をたたいた。荒々しくみずからののしり、豚だの恥知らずだの大馬鹿者だのと自分を呼んで、しばらくはある限りの悪口を

自分に浴びせた。しまいには怒鳴り散らしたために真赤まつかになって、鏡の前につつ立った。そして頤あごをつかみながら言った。

「見ろ、見ろ、間拔まぬけめ、なんとという馬鹿な顔をしてるんだ！ 嘘もいい加減にしろ、無な頼も漢のめ！ 水だ、水だ！」

彼は顔を盥たらいにつき込んで、息がつまるまで水につけておいた。そして顔を充血さし、眼をむき出し、海豹あざらしのように息を吐きながら、水から顔を出すと、身体にしたたる水を拭ぬぐいもやらず、急いでテーブルのところに行き、のろわれたる作品を引つつかみ、それを猛然と引き裂きながら、つぶやいた。

「こら、やくざ者め！……こら、こら！……」

そしてようやく胸をなでおろした。

それらの作品がことに彼を激げつ昂きやうさせたゆえんは、その虚偽であることだった。ほんとうに感じたものは何もなかった。暗あん誦しやうした句法、小学生徒の修辞法ばかりだった。盲人が色彩のことを語るような調子で、彼は恋愛を語っていた。流行の幼稚な説をくり返しながら、聞きかじりで語っていた。そしてただに恋愛ばかりでなく、あらゆる熱情が、放言の題目に使われていた。——それでも彼は常に真実たらんと努めたのであった。しかし

真実たらんと欲するだけでは足りない。真実であり得なければいけない。そして、まだ少しも人生を知らないうちに、いかで真実たることを得よう？ それらの作品の虚構を彼に開き示してくれたものは、彼と彼の過去との間ににわかこつきよに溝渠うがを穿つたものは、最近半年間の経験であつた。彼は幻影から脱出していた。今や彼は、おのれのあらゆる思想の真偽の度を判断するためにあてがい得る、現実の尺度を所有していた。

彼は熱情なしに作られた昔の曲譜に嫌悪けんおの情を覚えたので、その結果例の誇張癖から、熱烈な要求に迫られて書かせられるもののほかは、もういつさい書くまいと決心した。そして観念の探求をそこに中止して、もし創作熱が雷電のように落ちかかつて来るのでなければ、永久に音楽を捨てようと誓つた。

彼がかくみずから誓つたのは、雷鳴が到来しつつあることをよく知っていたからである。雷は、みずから欲する所にまた欲する時に、落ちる。しかし笛を引きよせる高峰がある。ある場所——ある魂——は、雷鳴の巢である。それは雷鳴を創つくり出し、あるいは地平の四方から雷鳴を呼ぶ。そして一年のある月と同じく、生しょうがい涯がいのある年齢は、きわめて多くの電気を飽和しているの、迅しんらい雷らいがそこに生じてくる——随意にでなくとも——少なくとも期待する時に。

全身が緊張する。幾日も幾日もの間、雷鳴が準備される。燃え立った入道雲が、白けた空にかかっている。一陣の風もない。澱んだ空気が発酵して、沸きたっているように見える。大地は茫然として沈黙している。頭脳は、熱にとどろいている。全自然は、蓄積された力の爆発を待ち、重々しく振り上げられ、黒雲の鉄礫の上に一挙に打ちおろされんとする、鉄槌の打撃を待っている。陰惨な熱い大きな影が通り過ぎる。熱火の風が吹き起こる。全身の神経は、木の葉のようにうち震える。——それから、また沈黙が落ちてくる。空はなお雷電を醸しつづける。

かかる期待のうちには、一つの歓ばしい苦悶がある。不安に押えつけられながらも、人はおのれの血脈中に、宇宙を焼きつくす火が流れるのを感じる。醸造樽中の葡萄の実に、飽滿せる魂は坩堝の中で沸きたつ。生と死との無数の萌芽が、魂を悩ます。何が生じて来るであろうか？ 魂は妊婦のように、自分のうちに眼を向けて口をつぐみ、胎内の戦きに気づかわしげに耳傾ける。そして考える、「私から何が生まれるであろうか？」時には、期待が無駄になることもある。雷鳴は破裂せずに消えてしまう。人は頭が重く、張り合いがぬげ、気力疲れ、厭気を催して、我れに返る。しかしそれは時期が延びたばかりである。雷鳴はやがて起こってくる。今日でなければ明日であろう。延びれば延びるほど

ますます激しくなるだろう……。

それ今起こった！ 要は一身のあらゆる深みから湧き出した。青黒色の濃密な集団となつた雲は、狂わんばかりに打ちはためく電に劈かれて、魂の地平を取り囲みながら、息をつめてる空を双の翼で荒々しく打ちながら、日の光を消しながら、眼眩むほどにかつ重々しく翔つてくる。狂暴の時間！……猛りたつた自然原素は、精神の平衡と事物の存在とを確保する「法則」から閉じ込められていたその籠を脱して、巨大雑多な形を取り、意識界の暗夜を支配する。人は臨終の苦悶を感ずる。もはや生きようとは望まない。ただ望ましいものは、終末のみである、解放の死のみである……。

そしてにわかには、電光がひらめく！

クリストフは喜びの喚き声をたてていた。

喜び、激越なる喜び、存在し存在するであろうすべてのものを照らす太陽、創造の崇高なる喜び！ 創造することより他に喜びはない。創造する人々より他に生きてるものはない。他の者はすべて、生命とは無関係で地上に浮かんでいる影にすぎない。生のあらゆる喜びは、恋愛、才能、行為など、皆創造の喜びである！ ただ一つの火炉から立ちのぼる

力の火災である。その大なる竈かまどのまわりに席を有しない人々も——野心家、利己主義者、空疎な遊蕩ゆうとう見なども——その色褪あせた反映に身を暖めようとする。

肉体界もしくは精神界において、創造することは、身体の牢獄ろうごくから脱することであり、生命のひようふう風中に飛び込むことであり、「存在する者」となることである。創造すること、それは死を殺すことである。

永久に生命の炎が一つも発しないような、おのれの干乾ひからびた身体とおのれのうちにある暗夜とを、ただいたずらにうちながめながら、地上に孤独のまま埋もれてる無益なる存在者こそ、げ実にも不幸である。花をつけた春の樹木のように、生命と愛とのほうじょう豊饒な重みを、少しも感ずることのない魂こそ、げ実にも不幸である。世間は名誉と幸福とをその上に積み重ねるとも、それは死骸しかいに冠するものである。

クリストフは一閃せんの光に打たれた時、一つの放電が全身に伝わった。彼はぎくりとして震えた。それはあたかも、海洋の中にあつて、暗夜の中にあつて、陸地を見出したようなものだった。あるいはまたあたかも、群集の中を通りながら、二つの深い眼にぶつかつたようなものだった。そういう現象はしばしば、精神が空虚のうちに身悶みもたえをするしやうちん沈沈

の時間のあとに起こった。しかしまた、人と話をしあるいは街路を歩きながら、他のことを考へてゐる瞬間に、なおしばしば起こった。街路にある時には、人前をはばかり、その喜びをあまり激しく現わすことができなかつた。しかし家にいる時には、もうなんの拘束もなかつた。彼は足を踏み鳴らした。勝鬨かちどきの喇叭らうぱを奏した。母はそれに慣れてきて、ついにはその意味を覚さとるようになった。卵を産みだすの牝めんどり鶏どりのようだと、彼女はよくクリストフに言つた。

彼は音楽的觀念に浸透されてゐた。その觀念は、独立した完全な楽句の形をなしてゐることもあつたが、多くは、一つの作品全部を包み込む大きな星雲の形をなしてゐた。その楽曲の結構は、主要の筋道は、彫刻的の明確さで影から浮き出している眩まばゆいばかりの楽句を、ところどころに鏤ちりばめた覆おほいを通して、おのずから見えてゐた。それは一つの閃せん光こうにすぎなかつた。また時とすると、相次いで多くの閃光が起ることもあつて、各閃光は暗夜の各すみずみを照らした。しかし普通は、その気まぐれな力は、いったん不意に現われたあとに、輝いた尾をあとに残しながら、おのれの神秘的な隠れ家の中に消え失うせて、数日姿を現わさなかつた。

そういう インスピレーション 靈 感 の悦よろこびは、クリストフに他のすべてをきらわしたほど熾しれつ烈なものは、

だった。経験に富んだ芸術家は、靈感はまれなものであることを知っており、直覚の作品を完成するには理知にまつべきものであることを、よく知っている。彼はおのれの観念を搾しぼりぎ木にかけ、それに含んで醇じゆんりよう良しるな汁を、最後の一滴までも滴したたらせる。——（時によつては白水を割ることさえも辞さない。）——しかしクリストフは、まだきわめて若くきわめて自信に富んでいたから、そういう方法を軽けい蔑べつしていた。まったく自発的なものでなければ何も作らないという、不可能な夢想をいだいていた。もし彼が眼を閉じてみずから快しとしていなかったなら、自分の企図のばかばかしさをたやすく認めただであらう。もちろん彼は当時内部充実の時期にあつて、虚無こゝろが潜入するような隙間すきまは少しもなかった。彼にとつてはすべてのものが、その無尽蔵の豊富さを裏書きするものとなっていた。眼に見るすべてのもの、耳に聞くすべてのもの、日々の生活においてぶつかるすべてのものが、一つの眼つきも、一つの言葉も、魂のうちに幻想の収穫をもたらしていた。彼の思想の無際限な天には、無数の星が流れていた。——とは言え、その当時でもやはり、すべてが一挙に消滅する瞬間もあつた。そして、たとい暗夜は長くつづかなかつたにしろ、魂の沈黙がつづくのを苦しむ隙ひまはほとんどなかつたにしろ、その不可知な力にたいするひそかな恐れがないでもなかつた。その力は、彼を訪れては立ち去り、またもどつてきては消えてい

った——。こんどはどれくらいの間か？　またもどつて来ることがあるだろうか？——彼は傲慢ごうまんにもそういう考えをしりぞけ、そしてみずから言った。「この力こそ、俺おれ自身だ。この力がもうなくなる日には、俺ももう存在すまい。俺は自殺してやろう。」——彼は身体からだの震えが止まなかった。しかしそれもやはり悦びだった。

けれども、当分泉の涸かれる憂うれいはなかったにしても、クリストフはすでに、その泉が作品全体を養うには足りないことを知り得た。観念はたいていいつも、生地きじのまま現あわれてきた。それを母岩から分離させることに骨折らなければならなかった。また観念はいつも、躍おどり立ちながらなんらの連絡もなく現あわれてきた。それをたがいに連絡させるためには、慎重な理知と冷静な意志との一要素を加味して、新しい一体に鍛え上げなければならなかった。クリストフはきわめて芸術家的だったので、それをしないではなかった。しかしそう是認したくはなかった。内心のモデルをそのまま謄写してると無理にも思い込んでいた。しかし実はそれを読みやすくするために、多少の変更を余儀なくせしめられていた。——否その上に、意味を曲解することさえもあった。音楽的観念がいかに猛然と襲いかかってくるか、その意味を解き得ないことがしばしばあった。その観念は、「存在」の底深いところから、識域を越えたはるかかなたの彼方から、にわかはとばしに迸り出て来るのだった。そして

普通の尺度を越えたまったく純粋なその「力」のうちには、意識といえども、自分に関係ある事柄を、自分が定義し分類すべき人間的感情を、少しも認めることができなかった。

喜びも悲しみもことごとく、ただ一つの熱情のうちに交っていた。しかもその熱情は理知を超越したものであったから、とうてい理解しがたかった。それでも、理解するしなにかかわらず、理知はその力に一つの名前を与えたり、人がおのれの頭脳の巢の中に営々として築いてゆく論理組織の一つに、それを結びつけたがっていた。

それでクリストフは、自分の心を乱すその陰闇いんあんな力には一定の意味があり、しかもその意味は自分の意志と調和してるものだと、確信していた——確信したがっていた。深い無意識界から迸り出て来る自由な本能は、それとなんら関係のない明確な観念と、理性の軛くびきの下において、否応なしに連絡させられていた。かくてそういう作品は、クリストフの精神が描き出した大なる主題と、彼自身の知らないまったく異なった意味をもってる粗野な力とを、無理に並列させたものにすぎなかった。

彼は自分のうちで相衝突してるたがい矛盾せる力に駆られながら、また、描出することはできないが、しかし誇らかな喜びをもつて感ぜらるる沸きたった力強い生命を、支離

滅裂な作品にやたらに投げ込みながら、頭を下げて手探りに進んでいった。

自分の新たな力を意識した彼は、自分の周囲にあるものを、尊重するように言い聞かせられてるものを、文句なしに尊敬してるものを、初めて正視することができた。——そして彼はただちに、傲慢ごうまんな自由さをもつてそれを批判した。覆面は裂けた。彼はドイツの虚偽を見た。

いかなる民族にも、いかなる芸術にも、皆それぞれ虚構がある。世界は、些少さしょうの真実と多くの虚偽とで身を養っている。人間の精神は虚弱であつて、純粹無垢むくな真実とは調和しがたい。その宗教、道徳、政治、詩人、芸術家、などは皆、真実を虚偽の衣に包んで提出しなければならぬ。それらの虚偽は各民族の精神に調和している。各民族によつて異なっている。これがために、各民衆相互の理解がきわめて困難になり、相互の輕蔑けいべつがきわめて容易となる。真実は各民衆を通じて同一である。しかし各民衆はおのれの虚偽をもつていて、それをおのれの理想と名づけている。その各人が生より死に至るまで、それを呼吸する。それが彼にとつては生活の一条件となる。ただ数人の天才のみが、おのれの思想の自由な天地において、男々おおしい孤立の危機を幾度も経過した後に、それから解脱することを得る。

つまらないふとした機会が、ドイツ芸術の虚偽をクリストフに突然開き示した。この虚偽に彼がその時まで気づかなかつたのは、それを眼前に目撃することがなかつたからではない。否彼はあまりにそれに接しすぎていて、適當の距離を有しなかつた。しかるに今や山から遠ざかつたので、その山が見えてきた。

彼は市立音楽堂の音楽会に臨んでいた。茶卓が十一、二列——二、三百ばかり並んでる広間だつた。奥に舞台があつて、そこに管絃楽団が控えていた。クリストフのまわりには、薄黒い長い上着をきちつとまとつた将校連中！ 髯ひげを剃そつた、赤い、真面目まじめな、俗氣しやくきたつぷりの、大きな顔の連中、それから、例の誇張癖ほほえを發揮して、盛んに談笑してゐる貴婦人たち、それから、齒並みをすつかりむき出した微笑ほほえみ方をする、善良な令嬢たち、それから、髯ひげと眼鏡との中に潜み込んで、眼の丸い人のよい蜘蛛くもに似ている、大男たち。彼らは健康を祝して杯を挙げるたびごとに、椅子いすから立ち上がった。そういう行ないを、宗教的な敬意をこめてやつていた。その瞬間には、彼らの顔つきも音調も変わった。ミサでも唱えてるような調子で、奠てんしゆ酒しゆをささげ合い、聖杯を飲み干し、莊嚴こつげいと滑稽との交つた様子だつた。音楽は談話と皿音さらの間に打ち消されていた。それでも皆、つとめて低声に話し

ひそやかに食べてるのだった。音楽長は背の曲がった大きな老人で、白鬚はくげんを尻尾しつぽのように頤あごにたれ、反そり返つた長い鼻をし、眼鏡をかけて、言語学者のような風采ふうさいだった。――すべてそれらの類型的人物を、クリストフは久しい以前から見慣れていた。しかしその日はややもすれば、それらを漫画視しがちであった。そういうふうには、人物の奇怪な点が、平素は気づきもしないのに、別になんという理由もなく、突然眼についてくるような日が、往々あるものである。

管絃樂の曲目には、エグモントの序曲、ワルトトイフェルの円舞曲ワルツ、タンホイゼルの口ーマ巡礼、ニコライの陽気な女房の序曲、アタリーの宗教行進曲、および、北極星といふファンタジア、幻想曲ファンタジア、などが含まれていた。管絃樂は、ベートーヴェンの序曲を几帳面きちょうめんに演奏し、それから円舞曲ワルツを猛然と演奏した。タンホイゼルの巡礼が奏されてる間に、酒瓶さけびんの栓せんを抜く音が聞えた。クリストフの隣りのテーブルにすわっていた大男が、陽気な女房ふしの節ふしを取りながらフォルスタフの身振りをした。空色の長衣を着、白い帯をしめ、御子鼻ししに金の鼻眼鏡をかけ、腕の赤い、胴の大きな、肥満した年増の婦人が、シューマンとブラームスとの二、三の歌曲リートを、しっかりした声で歌った。彼女は眉まゆをつり上げ、横目を使い、瞬またたきををし、左右に頭をうち振り、月のようなその顔に、凍りついた大きな微笑を浮かべ、そし

て、彼女のうちに輝き出してる厳格な正直さがなかったら、奏楽コーヒー店を時々しの偲しのばせるような、大袈裟おおげさな身振りを盛んにやった。一家の母親たる彼女は、熱烈な娘や青春や情熱などを演じたのである。かくてシューマンの詩は、なんとなく育兒院めいた無趣味な句にいおいを帯びてきた。聴衆は歓喜していた。——しかし、「南ドイツ男声合唱団」が現われた時、聴衆の注意は厳肅になった。彼らは感傷に満ちた種々の合唱曲を、順次にささやいたり喚わめいたりした。四十人の人員で、四人で歌つてるような調子だった。あたかもその合唱から、本来の合唱的特色をことごとく除き去ろうと努めてるかと思われた。大太鼓をたたくような急激な大声を交えながらも、細かな旋律的效果を、内気な涙つぽい細やかな気分を、息も絶え絶えの最弱音の調子を、ねらったものであった。豊満と平衡との欠除であり、甘つたるい様式であった。ボツトムの言葉ことばを思わせた。

——私わたしに獅子ししの役をやらしてください。雛ひなに餌えをやる女鳩めほとのように、私はやさしく吼ほえてみせます。鶯うぐいすかと思われるように、私は吼えてみせます。

クリストフは初めから耳を傾けながら、次第に呆あつけ気にとられてきた。そういうものは彼にとつては少しも珍しいものではなかった。それらの音楽会、管弦楽団、聴衆、それを彼はよく知っていた。ところが今にわかに、そのすべてが嘘うそであるように思われた、すべて

が、最も好んでいたものまでが、エグモントの序曲までが。その莊麗な混乱と正確な紛擾ようとは、今は誠実を欠いてるかのようにな彼の気色を害した。もちろん彼が聞いたのは、ベートーヴェンやシューマンではなく、その滑稽こっけいな演奏者らであり、その鶉呑うのみにしたがつてる聴衆であつて、彼らの濃厚な馬鹿ばかさ加減は、重々しい雲のように作品のまわりに立ちこめていた。——がそれはそれとして、作品の中にも、最もりっぱな作品の中にさえも、クリストフがまだかつて感じたことのないある不安なものがこもっていた。——いたいそれはなんであるか？ 彼は愛する大家を論議することの不敬を考えて、それをあえて分析して考察することができなかつた。しかしいくから見まいとしても、それが眼について。そして心ならずも見つづけていた。ピザのヴェルゴニョザのように、指の間からぞいていた。

彼は赤裸々なドイツ芸術を見た。すべての者が——偉大な者も愚かな者も——一種感傷的な慇懃いんぎんさで自分の魂を披瀝ひれきしていた。感動があふれ、高尚な道德心が滴したたり、心をこめて夢中に感情が吐露とろされていた。恐るべきゲルマン多感性の水門が、切つて放たれていた。その多感性は強者の元気を希薄にし、弱者を灰色の水の下におぼらしていた。一つの汎はんら濫らんであつた。ドイツの思想がその底に眠っていた。しかも、メンデルスゾーン式の、ブ

ラームス式の、シューマン式思想は、また引きつづいては、誇張的な空想的な歌曲のちつぽけな作者たち一団の思想は、往々にしてなんたるものであったか！ 皆砂でできていた。一つの岩もなかつた。湿った怪しげな土器であつた……。それらは皆、いかにもくだらない幼稚きわまるものだったので、全聴衆がそれにびっくりしていなかろうとは、クリストフには信じ得られないほどだつた。ところがまわりをながめると、安泰そうな顔つきばかりだつた。聞いているのは美しい曲ばかりであり、愉悦が得られるに違いないと、前もつて思い込んでしまつてる連中だつた。その彼らにどうして、みずから批判をくだすことなんかできたらう？ 彼らはそれら神聖な大家の名前にたいして、満腔まんこうの尊敬をささげていた。彼らの尊敬しないものは何があつたらう？ その番組にたいしても、酒杯にたいしても、自分自身にたいしても、みな恭うやうや々しかつた。近くとも遠くとも、すべて自分に關係のあるものにたいしては、「閣下」の尊称を頭の中で与えてるらしかつた。

クリストフは代わる代わるに、聴衆と作品とのことを考えてみた。あたかも庭の飾りの球たまのように、作品は聴衆を反映し、聴衆は作品を反映していた。クリストフは笑い出した。気持ちになつて、顔をしかめた。それでもなお我慢していた。けれども「南ドイツ人」の一団が現われて、恋に落ちた若い娘の気恥ずかしい告白を、堂々と歌いだした時には、も

う堪えられなかった。彼は放笑ふきだした。憤りの叱しつせい声こゑが起こった。隣席の人々は驚いて彼をながめた。それらの憤慨した善良な顔を見ると、彼は愉快になった。彼はますます笑い、笑いつづけ、涙を出して笑いこけた。それには人々も怒った。「出ろ！」と人々は叫んだ。彼は立ち上がり、こみ上げてくる哄こう笑しょうに背中を震わしながら、肩をそびやかして出て行つた。その退席は人々の憤慨を招いた。それが、クリストフとその町との間の敵意の始まりであつた。

右の経験のあとで、クリストフは家に帰ると、「神聖なる」音楽家らの作品を読み返してみた。そして自分が最も愛していた楽匠中にも、嘘うそをついてる者のあるのを認めて駭がいぜ然ぜんとした。初めはそれを疑おうとつとめ、自分の誤解だと思おうとつとめた。——だが、どうしても駄目だめだつた。……大国民の芸術的至宝をこしらえている凡庸ぼんようと虚偽との量に、彼は驚かされた。審査に堪え得るページは、いかに僅きんしょう少しょうなことだつたらう！

それ以来彼は、敬愛していた他の作品を読むにも、もはや懸念に胸を震わさざるを得なかつた。……嗚呼ああ、彼は何かに誑たぶらかされたようだつた。何物にも同じような不満ばかりだつた。ある楽匠にたいしては、断腸の思いをした。愛する友を失つたようなものだつた。

信賴しきつてゐる友から数年来欺かれていたことに気づいたようなものだった。それを彼は泣いた。もう夜も眠れなかった。たえず苦しんだ。みずから自分をとがめた。もう自分には判断ができなくなつたのか？ 自分はまつたく馬鹿になつてしまつたのか？ 否々、晴れやかな日の麗わしきは、いつもよりずっとよく眼にはいった。人生のみごとな豊富さは、いつもよりずっとよく感ぜられた。彼の心は少しも彼を欺いてはいなかつた。

なお長らく彼は、自分にとつて最もりっぱな人々、最も純粹な人々、聖者中の聖者とも言うべき人々、そういう楽匠にはあえて手を触れなかつた。彼らにたいしていだいてる信仰が傷つけられはすまいかと恐れた。しかしながら、最後まで突進して、たとい苦しみを受けようとも、事物の真相を見きわめんと欲する、誠実な魂の仮借かしゃくなき本能には、どうして抵抗することができよう？——で彼はついに神聖なる作品をひらいた。最後の予備隊むきず近衛兵このえ……をもくり出した。そして一目見ると、それらもやはり他の作品と同じく無瑾むきんではなかつた。彼は読みつづけるだけの勇氣がなかつた。時々、読みやめては本を閉じた。彼はノアの息子むすこのように、父親の裸体にマントを投げかけたのであつた……。

やがて彼は、それらの廢墟はいきよの中に困惑してたたずんだ。神聖な幻影を失うくらいなら、むしろ自分の片腕を失つても惜しくなかつた。心の中の死の悲しみだつた。しかし彼のう

ちには強い活気が宿っていたので、芸術にたいする信頼の念は、そのために動揺されはしなかつた。青年のひたむきな自尊心をもって、あたかも自分より前にはだれも生きてきた者がいないかのように、ふたたび生活を開始した。生きた熱情と、それに対する芸術の表現との間には、ほとんど例外なしになんらの関係もないということ、彼は自分の新しい力に酔いながら感じていた——おそらく理由がないでもなかつたろうが。しかし彼がみずから熱情を表現した時、よりうまくより真実にやれたことと思つたのは、誤りであつた。彼はただそれらの熱情に満たされていたので、自分の書いたもののうちにそれらを見出すのは容易であつた。けれども彼以外の他人には、彼が使つたような不完全な彙語いごのもとにそれらを認知し得る者は、一人もなかつたであらう。彼が非難した多くの芸術家についても、同様であつた。彼らは皆、深い感情をいだしそれを表現した。しかし彼らの用いた言葉の秘訣けつは、彼らとともに死んでしまつたのである。

クリストフは少しも心理学者ではなかつた。それらの理由には少しも困らされなかつた。自分にとつて滅びたものは、永久に滅びたものとなるのであつた。彼は青春の自信深い強烈な不正さをもつて、過去の人々にたいする自分の批判を点検した。彼は最も高尚な魂をも赤裸になして、その滑稽こっけいな点をも無慈悲にえぐり出した。メンデルスゾーンのうちに

は、あり余つた憂愁、氣取つた幻想、空虚な思想などがあつた。ウエーバーには、ガラス細工や金ぴか、心の乾燥、頭だけの情緒。リストは、氣高い長老で曲馬師で新古典派で香具師、實際の氣高さと偽りの氣高さとと同分量の混合、晴朗な理想と厭味いやみな老練さとの同分量の混合。シューベルトは、無色透明な数メートルの水底にあるかのように、多感性の下にうずくまつてるのであつた。その他、英雄時代の古人、半人半神、予言者、教会の長老、皆クリストフの批判を免れなかつた。数世紀にまたがりおのれのうちに過去未来を包括ほうかくしてる、偉人セバスチアン——セバスチアン・バッハ——でさえも虚偽や世俗の愚劣さや書生じみた饒舌じょうぜつなどから、まったく免れてるとは言えないのであつた。神を見たこの人も、クリストフの眼から見れば往々にして、面白くもない甘っぱい宗教があり、偽善的な陳腐ちんぷな様式があつた。その交声曲カンタータのうちには、恋と信仰との憔悴しょうすいの曲調があつた。——（嬌態きょうたいの魂とクリストとの対話が。）——クリストフはそれに胸を悪くした。ダンスの足取りをしている豊類ほうきようの天使を見るような氣がした。それにまた、この天才的楽匠はいつも閉め切つた室の中で書いてたように、彼には感ぜられた。幽閉の感じが漂つていた。おそらく音楽家としては劣つていたろうが、しかし人間としてはすぐれた——ずっと人間的な——他の人々に、たとえばベートーヴェンやヘンデルなどにあるよ

うな、外界の強い空気の流れが、その音楽の中には存していなかった。また古典派作家クラシックらのうちで彼の気色を害したことは、自由の欠乏であった。彼らの作品では、ほとんどすべてが「組み立て」られたものであった。あるいは、月並みな音楽的修辭法で誇張される情緒があり、あるいは、機械的な方法であらゆるふうにくり返されこね回され配合される、簡単な律動リズムが、装飾的意匠があつた。それらの対照的な冗複な構造——奏鳴曲ソナタや交響曲シンフォニー——は、広大精巧な設計や端整さなどの美に当時あまり敏感でなかつたクリストフを、憤激させるのであつた。音楽家の仕事というよりむしろ左官屋の仕事のように彼には思われた。

彼はまた浪漫派ロマンチック作家らにたいしても、同じく峻厳しゅんげんだつた。不思議なことには、最も自由であり、最も自発的であり、最も建築的でないと、自称していた音楽家ほど——たとえばシューマンのように、無数の小曲のうちに、自分の全生命を一滴ずつ注ぎ込んだ人々ほど、彼をいらだたせるものはなかつた。みずから脱却しようと誓つた自分の少壮な魂やあらゆる稚氣を、彼らのうちにもやはり見出しただけに、なおさら憤激した。もとより、誠実なシューマンは虚構をもつて難ぜられるはずはなかつた。彼が言つてゐることはほとんどすべて、ほんとうに感じたことばかりだつた。しかし、ちやうどシューマンの例によつ

てクリストフが理解するにいたったことは、ドイツ芸術の最も悪い虚構は、その芸術家らが少しも実感しない感情を表現しようと欲したから起こったというより、むしろ彼らが実感する感情——実感する嘘の感情——を表現しようと欲したから起こったということであった。音楽は魂の仮借かしゃくなき鏡である。ドイツの音楽家にして、率直で信実であればあるほど、ますます彼が示すところのものは、ドイツ魂の弱点であつて、不安定な根底、柔情な多感性、率直さの欠乏、多少狡猾こうかつな理想主義、自己を見、あえて自己を正視することの不可能、などであつた。この誤れる理想主義は、最も偉大な人々の——たとえばワグナーの、急所であつた。その作品を読み返しながら、クリストフは齒ぎしりをした。ローエングリンは、罵倒ばとうすべき虚偽の作であるように思われた。その下卑げびた騎士道、偽善的なもつたい振り、好んでおのれを賛美しおのれを愛する我利冷酷な徳操の化身とも言うべき、恐怖も知らないが人情も知らないその英雄、それを彼は憎みきらつた。自分の面影を崇拜し、その神聖さにたいしては他人を犠牲にしても顧みない、自惚うぬぼれの強い几帳きちょうめん面な堅苦しい、かかるドイツ的偽善の人物を、彼はよく知りすぎてい、現実に見たことがあつた。さまざまえるオランダ人は、その重々しい感傷性と陰鬱いんうつな倦怠けんたいとで彼の心を圧倒した。四部曲の野蛮な頹廢たいはい的人物は、恋愛において堪たまらないほど空粗くろだつた。妹を奪つてゆく

ジューグムントは、客間式の華想曲ロマンスをテナーで歌っていた。神々の黄昏中のジューグフリート、ブリュンヒルデは、ドイツのりっぱな夫妻として、たがいの眼に、とくに公衆の眼に、浮華じょうぜつ饒舌じょうぜつな夫婦の情熱を盛んに見せつけていた。それらの作品中には、あらゆる種類の虚偽が集まっていた、嘘うその理想主義、嘘のキリスト教、嘘のゴチック主義、嘘の伝説味、嘘の神性味、嘘の人間味などが。あらゆる因襲くつがえを覆すものとせられてるその劇ぐらい、巨大な因襲を振りかざしてるものはなかった。眼も精神も心も、片時なりとそれに欺かれるはずはなかった。進んで欺かれようと思わないかぎりは、欺かれるはずはなかった。——ところが人々の眼や精神や心は、欺かれることを望んでいた。ドイツは、その老耄ろうもつなまた幼稚な芸術を、解き放された畜生ともつたいぶつた気取りやの小娘との芸術を、歓びよろこび楽しんでいた。

そしてクリストフ自身も、いかんともできなかった。彼はそういう音楽を聞くや否や、他人と同じく、他人よりもつとはなはだしく、音の急湍きゆうたんとそれを繰り出す作者の悪魔的意志とにとらえられた。彼は笑った、うち震えた、頬ほおを熱ほてらした。騎馬の軍隊が自分のうちを通るのを感じた。そういう暴風をおのれのうちにもってる人々には、すべてが許されてると考えた。もはやうち震えながらしか緝ひもとくことのできない神聖な作品のうちに、

愛していたものの純潔さを何物にも曇らされることなく、昔と同じ激しい感動をふたたび見出す時、いかに彼は喜びの叫びをたてたことだろう！ それは彼が難破から救い上げた光栄ある残留品だった。なんたる仕合わせぞ！ 自分自身の一部を救い出したような気持ちだった。そして実際、それは彼自身ではなかったであろうか？ 彼が憤激して非難したそれらドイツの偉人は、彼の血、彼の肉、彼の最も貴い存在、ではなかったであろうか？ 彼が彼らにたいしてあれほど峻厳だったのは、自分自身にたいして峻厳だったからである。彼以上に彼らを愛したものがあつたろうか？ シューベルトの温良さ、ハイドンの無邪気さ、モーツアルトの情愛、ベートーヴェンの勇壮偉大な心、それを彼以上によく感じたものがあつたろうか？ ウェーベルの森の戦ぎ（そとよ）の中に、または、北方の灰色の空に、ドイツ平原のはるかに、石の巨体と見通し尖頂（せんちよう）の大きな塔をそばだてている、ヨハン・セバスチアンの大伽藍（がらん）の大きな影の中に、彼以上に敬虔（けいけん）な情をもって身を潜めた者があつたろうか？——しかしながら彼はまた、彼らの虚偽を苦しんでいた。それを忘れることができなかつた。そして彼らの虚偽を民族に帰し、彼らの偉大さを彼ら自身に帰したのであつた。彼は間違つていた。偉大な点も弱点も、等しく民族に属するものである。この民族の力強い混沌（こんとん）たる思想は、音楽や詩の大河となつて逆巻き（さかま）、全ヨーロッパはその河水を飲

みに来る。——實際彼は、今彼をしてかくも峻烈しゅんれつに民衆を非難せしめている率直な純真さを、他のいかなる民衆のうちに見出し得たであろうか？

彼はそれらのことに少しも気づかなかつた。駄々だだつ児この恩知らずな心をもって、母体から受けた武器を母体に差し向けていた。あとになって、あとになってこそ、彼は初めて感ずるに違いない、母体に負うところがいかに多いかを、自分にとってその母体がいかに貴重なものであるかを……。

しかし彼は今、おのれの幼年時代の偶像にたいする盲目的な反動の時期にあつた。彼はそれらの偶像を憎み、自分が夢中になつて信仰したことを偶像に向かつて恨んでいた。——そして彼がそうあるのはいいことであつた。生しょうが涯がいのある年代においては、あえて不正であらなければいけない。注入されたあらゆる賛美とあらゆる尊敬とを塗抹とまつし、すべてを——虚偽をも真実をも、否定し、真実だと自分で認めないすべてのものを、あえて否定しなければいけない。年若い者は、その教育によつて、周囲に見聞きする事柄によつて、人生の主要な真実に混淆こんごうしている虚偽と痴愚とのきわめて多くの量を、おのれのうちに吸い込むがゆえに、健全なる人たらんと欲する青年の第一の務めは、すべてを吐き出すことにある。

クリストフはこの強健な嫌悪けんおを事とする危機を通つていた。自分の一身を閉塞へいそくして不消化物を本能的に排出していた。

まず第一に、湿つた黴臭かびい地下室からのように、ドイツ魂しただたから滴つている、胸悪くなる多感性があつた。光よ、光よ！ 荒い乾いた空気よ！ 沼沢の毒気を、ゲルマン魂ゲミユートが無尽蔵にみなぎっている、雨滴のように数多い歌曲リイドや小歌曲の白けた臭気を、一掃してくれないか。それらのものは無数にあつた。慾望、郷愁、跳躍、願い、いかなれば？ 月に、星に、鶯に、春に、太陽の光に、春の歌、春の快樂、春の会釈、春の旅、春の夜、春の使い、愛の声、愛の言葉、愛の悲しみ、愛の精、愛の豊満、花の歌、花の文、花の会釈、心の痛み、吾が心重し、吾が心乱る、吾が眼曇る、または、小薔薇ばらや小川や雉鳩きじぼとや燕つばめなどの、仇気あしけない馬鹿げた対話、または、次のようなおかしな問い——野薔薇に刺がなかりせば、

——老いたる良人と燕は巢を作りしならば、あるいは、近き頃燕は婚約したりしならば。

——すべてそれらの、空粗な愛情、空粗な情緒、空粗な憂愁、空粗な詩、などの汎濫ほんらん……。いかに多くの美しいものが俗化され、いかに多くの気高い感情が、あらゆる場合にゆえもなく使い古されてることだろう！ 最も悪いのは、すべてそれらのものが無駄むだになつ

てることだった。それは公衆におのれの心を開き示さんとする習癖であり、やかましく意中を吐露せんとする、態わざとらしいつまらない性癖であった。言うべきこともないのに常に口をきいていた。その饒舌はいつまでもやまないのであるか？——これ、沼の蛙かえるども黙らないか！

クリストフがさらにまざまざと虚偽を感じたのは、ことに恋愛の表現中であつた。なぜなら、彼はこの問題ではいつそうよくそれを事実と比較することができたから。涙っぽい几帳面きちょうめんな恋歌の因襲は、男の欲望にも女の心にも、なんら一致してゐるものがなかつた。けれどもそれを書いた人々は、少なくとも一生に一度は恋をしたことがあるに違ひなかつた。しからば彼らはそういうふうに恋したのであつたらうか？ 否、否。彼らは嘘うそをつき、例の通り嘘をつき、自分自身に向かつても嘘をついたのである。彼らは自分を理想化せんと欲したのである。理想化するというのは、人生を正視することを恐れ、事物をあるがままに見るを得ないことである。——いたる所に、同じ臆おくびよう病びょうさ、男らしい率直さの同じような欠乏。いたる所に、愛国心の中にも、飲酒の中にも、宗教の中にも、冷やかな同じ心酔、浮華な芝居じみた同じ嚴肅さ。飲酒の歌は皆、酒や杯にたいする擬人法であつた、「汝、尚とつとき杯よ……」と。信仰は、不意の波濤はとうのように魂ほとほしから迸り出るべきものでありながら、

一つのこしらえ物となり、一つの通用品となっていた。愛国の歌は、程よく鳴いてる従順な羊の群れのためにこしらえられたものであった……。——さあ怒号してみないか？……。なんだ、なお嘘を言いつづけるのか……。理想化しつづけるのか——陶酔においても、殺害においても、狂愚においても……。……

クリストフはついに理想主義を憎むにいたった。そういう虚偽よりも磊落な粗暴の方がまだ好ましかった。——根本においては、彼はだれよりも理想主義者であつて、むしろ好ましいと思つたそれら粗暴な現実主義者こそ、彼の最も忌むべき敵であるはずだった。

彼は自分の熱情に眼を眩くらまされていた。霧のために、貧血症かかに罹かかつてゐる虚偽のために、「太陽のない幽鬼的観念」のために、凍らされたような気がしていた。一身の力をしぼつて太陽を翹望ぎようぼうしていた。周囲の偽善にたいする、あるいは彼が偽善と名づけてゐるものにたいする、年少気鋭な軽蔑けいべつ心こころのあまりに、民族の実際的大智が眼に映じなかつた。この民族は、おのれの野蛮なる本能を統御せんがために、もしくはそれを利用せんがために、次第にその壮大な理想主義をうち立てたのであつた。民族の魂を變形し、それに新しい性質を帯びさせるものは、専断な理性でもなく、道徳および宗教の規範でもなく、立法家および為政家でも、牧師および哲学者でもない。それは幾世紀もの不幸艱難かんなんの所産であつ

て、生きんと欲する民衆はその間に生のために鍛えられる。

その間もクリストフは作曲していた。そして彼の作は、彼が他人に非難するその欠点から免れてはいなかった。なぜならば、彼にあつては創作はやむにやまれぬ欲求であつて、その欲求は理知が提出する規則に服従しはしなかった。人は理性によつて創造するのではない。必然の力に駆られて創造するのである。——次に、多くの感情に固有の虚偽や誇張を認めるだけでは、それらにふたたび陥るのを免れるものではない。長い困難な努力が必要である。時代相伝の怠惰な習慣の重い遺産をもちながら、現代の社会において、まったく眞実たらんとすることは最も困難である。多くは沈黙を守るが最上の策であるにもかかわらず、おのれの心をたえずしやべらしておく不謹慎な病癪をもつて人々や民衆にとつては、眞実たることはことに容易でない。

この点については、クリストフの心はきわめてドイツ的であつた。彼はまだ沈黙の徳を知つていなかった。そのうえ、それは彼の年齢にもふさわしくなかつた。彼はしやべりたい欲求を、しかも騒々しくしやべりたい欲求を、父から受け継いでいた。彼はそれを意識して、それと争つていた。しかしこの争いに彼の力の一部は麻痺まひしていた。——また彼は、

祖父から受け継いだ遺伝と争っていた。それもまた同じく厭いやな遺伝で、自己を正確に表現することのはなはだしい困難さであった。——彼は技能の児こであった。技能の危険な魅力を感じていた。——肉体的快樂、巧妙さや輕快さや筋肉の活動の快樂、おのれの一身をもつて数千の聴衆を征服し眩げん惑わくし支配するの快樂。それは年若き者にあつては、きわめて宥ゆう恕じよすべきほど罪なき快樂ではあるが、しかし芸術と魂にとつては、致命的なものである。——クリストフはその快樂を知っていた。それを血の中にもつていた。それを輕けい蔑べつしてはいたが、やはりそれに打ち負けていた。

かくて、民族の本能と天分の本能からたがい引張られ、身内に食い込まれて振り払うことのできない寄生的な過去の重荷に圧せられて、彼はつまりまづきながら進んでいった。そしてみづから排斥していたものに思いのほか接近していた。当時の彼の作品はことごとく、真実と誇張との、明敏な活力とのぼせ上がった愚蒙ぐもうとの、混合であった。彼の性格が、おのれの運動を拘束する故人の性格の外被をつき破ることができるのは、ごく時々にかすぎなかつた。

彼はただ一人であつた。彼を助けて泥でい濘ねいから引き出してくれる案内者はいなかつた。彼は泥濘から外に出たと思つてる時に、ますますそれに落ち込んでいた。不運な詩作に時

間と力とを濫費しながら、摸索しつつ進んでいった。いかなる経験をもなめつくした。そしてかかる創作的煩悶はんもんの混乱中であつて、彼は自分が創作するすべてのもののうちで、いずれが最も価値あるかを知らなかつた。無法な計画の中で、哲学的主張と奇怪な推測とをもつた交響楽詩の中で、途方にくれた。しかしそれに長くかかり合うには、彼の精神はあまりに誠実だつた。そしてその一部分をも草案しないうちに、嫌悪けんおの情をもつて投げ捨てた。あるいはまた、最も取り扱いたい詩の作品を、序樂の中に訳出しようと考えた。すると自分の領分でない世界の中に迷い込んだ。また、みずから演劇の筋を立ててみることもあつたが——（彼は何物にたいしても狐疑こぎしなかつたのである）——それは馬鹿げきつたものだつた。またゲーテやクライストやヘッベルやシェイクスピアなどの大作を攻撃する時には、まったくそれを曲解していた。知力が欠けてるのではなかつたが、批評的精神が欠けていた。彼はまだ他人を理解し得なかつた。あまりに自分自身に心を奪われていた。彼がいたるところに見出したのは、自分の率直な誇張的な魂をそなえてる自分自身であつた。

それらのまったく生きる術すべのない怪しい物のほかに、彼は多くの小さな作品を書いていった。折りにふれての情緒を直接に表現したもの——すべてのうちで最も永存すべきもので、

音楽的感想、すなわち歌曲 Liedであつた。この場合にも他と同じく、彼は世流の習慣にたいして熱烈な反動をなしていた。すでに音楽に取り扱われてる有名な詩を取り上げて、シューマンやシューベルトなどと異なつたしかもより真実な取り扱い方を、傲慢ごうまんにも試みようとしていた。あるいは、ゲーテの詩的な人物、たとえばウイルヘルム・マイステル中の豎た琴手ていしゅミニヨンなどに、その簡明にして混濁せる個性を与えようとつとめた。あるいは、作者の力弱さと聴衆の無趣味とが暗々裏に一致して、いつも甘っぽい感傷で包み込んでいゝる、ある種の恋歌にぶつかつていった。そしてその衣を剥ぎ取り、粗野な肉感的な辛辣しんらつさを吹き込んだ。一言にしていえば、熱情や人物を、それ自身のために生きさせようと考へ、日曜日ごとに麦酒亭ビールガルテンに集まつて安価な感動を求めているドイツ人らの玩具がんぐになるために、それらを生きさせようとはしなかつた。

しかし彼は普通、詩人らをあまりに文学的だと思つていた。そして最も単純な原文、かつて教訓本の中で読んだことのある、古い歌曲 Liedの原文を、古い靈歌の原文を、好んで捜し求めた。けれども彼はその賛美歌的性質を存続させまいと用心した。大胆なほど通俗な生き生きとした方法で取り扱つた。その他の彼が取り上げたものは、種々の俚諺りげん、時としては、通りがかりに耳にした言葉、市井しせいの会話の断片、子供の考え——たいていは拙い散文

的な文句ではあるが、しかしまったく純な感情がその中に透かし見られるものだった。そういうものになると、彼は楽々とやってのけた。そして自分では気づかないでいる一種の深みに到達していた。

彼の作品にはよいものも悪いものもあり、たいていはよいものより悪いものの方が多かったが、その全体について言えば、生命があふれていた。それでもすべて新しいものではなかった、新しい所ではなかった。クリストフは誠実のためにかえって平凡になることが多かった。すでに用いられてる形式をくり返すことがよくあった。なぜなら、それは彼の思想を正確に現わしていたし、また彼はそういう感じ方をしていて、異なつた感じ方をしていなかつたからである。彼は少しも独創的たらんことを求めなかつた。独創的たらんとあくせく齟齬するのほんようは凡庸なるがゆえである、と彼には思えた。彼は自分が実感してゐることを言おうと努めて、それがすでに前に言われていようといまいと、少しも気にしなかつた。しかもそれはかえつて独創的たる最上の方法であることを、またジャン・クリストフは過去にも未来にもただ一度しか存在しないということ、彼はごうまん傲慢にも信じていた。青春の素敵な無遠慮さで、まだ何物もできあがつたものはないように思つていた。すべてが作り上げるべき——もしくは作り直すべき——もののように思えた。内部充実の感情は、前

途に無限の生命を有するという感情は、過多なやや不謹慎な幸福の状態に彼を陥れていた。たえざる喜悅。それは喜びを求める要もなく、また悲しみにも順応することができた。その源は、あらゆる幸福と美德との母たる力の中にあつた。生きること、あまりに生きること……この力の陶醉を、この生きることの喜悅を、自分のうちに——たとい不幸のどん底にあらうとも——まったく感じない者は、芸術家ではない。それが試金石である。真の偉大さが認められるのは、苦にも楽にも喜悅することのできる力においてである。メンデルスゾーンやブラームスの輩は、小雨や十月の霧などの神たる輩は、かかる崇高な力をおかして知らなかつたのである。

クリストフはその力を所有していた。そして無遠慮な率直さで自分の喜びを見せつけていた。少しも悪意があるのではなかつた。他人とそれを共にすることをしか求めていなかつた。しかしその喜びをもたない大多数の人々にとっては、それは癩しやくにさわるものである。ということをお彼は気づかなかつた。そのうえ彼は、他人の氣に入らうと入るまいと平氣であつた。彼はおのれを確信していた。自分の信ずるところを他人に伝うることは、わけもないことのように思われた。彼はいわゆる楽譜製造人ら一般の貧弱さに、自分の豊富さを比較していた。そして自分の優秀なことを認めさせるのは、きわめて容易なことだと考え

ていた。容易すぎるくらいだった。おのれを示しさえすればよかった。

彼はおのれを示した。

人々は待ち受けていた。

クリストフは自分の感情をもつたいぶつて隠しはしなかった。事物をあるがまま見ようと欲しないドイツの虚偽を悟つて以来、作品や作家にたいするいかなる定評をも顧慮するところなく、あらゆるものにたいして、絶対的な徹な不断の誠実を事とするのを、一つの掟おきてとしていた。そして何をするにも極端に奔はしらざるを得なかったので、法外なことを言つては、世人を憤慨させた。彼はこの上もなく率直であつた。あたかも価値を絶する大発見を一人胸に秘めたく思わない者のように、ドイツの芸術にたいする自分の考えをだれ構わずにもらしては満足していた。そして相手の不満を招いてるとは想像だもしなかった。定評ある作品の愚劣さを認めると、もうそのことではいっばいになって、出会う人ごとに、専門家と素人しらうととを問わず、だれにでも急いでそれを言つて聞かした。顔を輝かしながら最も暴慢な批評を述べた。最初人々は本気に受け取らなかつた。彼の気まぐれを一笑に付した。しかしやがて、彼が厭いやに執拗しつようにあまりしばしばくり返すのを気づいた。彼が

それらの僻論へきろんを信じていることは明らかになつた。それにたいしては前ほどは笑えなかつた。彼は冒瀆者ぼうとくだつた。演奏の最中に騒々しい嘲弄ちやうろうを示したり、あるいは光榮ある楽匠らにたいする輕蔑けいべつの念を述べたてた。

何事もみな小さな町じゆうに伝わつた。彼の一言も取り落とされはしなかつた。人々はすでに、前年の行ないについて彼を憎んでいた。アーダといつしよなところを公然と見せつけた破廉恥なやり方を忘れていなかつた。彼自身はもう覚えてはいなかつた。日は日が消してゆき、今の彼は以前の彼とは非常に隔たつていた。しかし他人は彼のためにそれを覚えていた。隣人に関するあらゆる過失、あらゆる欠点、嫌な醜い不面目なあらゆるできごとを、一つも消え失せうないようにと細かく書きたてて、それを社会的職務としている連中が、すべての小都市に存在している。クリストフの新しい矯激な行ないは、昔の行ないと相並んで、彼の名義で帳簿に書きのせられた。両者はたがいに照合し合つた。道徳を傷つけられた恨みに、善良な趣味を流けがされた恨みが加わつた。最も寛大な人々は彼のことをこう言つた。

「わざと変わった真似まねをしたがつてるんだ。」

しかし大多数の者は断言した。

「まったく狂人だ。」

なおいつそう危険な風評が——高貴のところから出ただけに効果の多い風評が——広がり始めた。それは次のようなことだった。……クリストフはやはりつづけて公務のために宮廷へ伺候していたが、そこでも例の悪趣味を出して、親しく大公爵に向かつて、世に尊敬されてる楽匠らについてひんしゆく 響ひんしゆく 蹙ひんしゆくすべき無作法な言辞ろうを弄した。メンデルスゾーンのエリアを、「まやかし坊主ぼうずの祈禱きとう」と呼び、シューマンのある種の歌曲リートを、「小娘の音楽」と見なした——しかもそれは、貴顕の方々がそれらの作品を好んでいると仰おほせられた時である！ 大公爵はその無礼な言葉を片付けるために、冷やかに言われた。

「お前の言うことを聞いていると、それでもドイツ人かと疑われることがあるよ。」

そういう高い所から落ちてきたこの復讐ふくしゅう的な言葉は、ごく低い所までころがり落ちずにはいかなかった。クリストフが成功を博してるといふ理由から、あるいはいつそう個人的な理由から、彼にたいして遺恨の種があるように思ってる人々は皆、実際彼は純粋なドイツ人ではないということをもち出さずにはいかなかった。父方の家は——人の記憶するとおり——フランドルの出であった。それからというものは、この移住者が国家的光栄を誹ひ謗ぼうするのは別に驚くにも当たらないこととなった。右の事実はすべてを説明するものであ

った。そしてゲルマン式自尊心は、ますますおのれを尊むとともに敵を軽蔑するの理由を、そこに見出したのであった。

全然精神的なその復讐にたいして、クリストフは自分から、ますますよい材料を提供していった。自分が将に批評にのぼせられようとしている時に、他人を批評するくらい無謀なことはない。もつと巧みな芸術家なら、敵にたいしてもつと尊敬を示したであろう。しかしクリストフは、凡庸ほんようにたいする軽蔑けいべつと自身の力を信ずる幸福とを隠すべき理由を、少しも認めなかった。そしてその幸福の情をあまりに激しく示した。彼は近ごろ、胸中を披瀝ひれきしたい欲求に駆られていた。自分一人で味わうにはあまりに大きな喜びだった。他人に喜悦を分かたないならば、胸は張り裂けるかもしれない。でも友人がないので、心を打ち明ける相手として、管絃楽の同僚で第二楽長を志すジークムント・オックスを選んだ。ウルテムベルヒ生まれの青年で、根は善良だが狡こうかつ猾で、クリストフにあふれるばかりの敬意を示していた。クリストフはこの男を疑ってはいなかった。もし疑ったにしたら、自分で、自分の喜びを、赤の他人にまた敵にまでも打ち明けるのは不都合だと、どうして考え得たろう？ 彼らはむしろそれを彼に感謝すべきではなかったか。彼は味方と言わず敵と言わず、万人に喜びを伝えようとしていた。——彼らに新しい幸福を受け入れさせ

るのは最も困難であることを、彼は少しも知らなかった。彼らはむしろ古い不幸の方をよしとするだろう。彼らには幾世紀もくり返し嘔^かみしめてきた食物が必要である。しかし彼らにとつてことに忍びがたいことは、その幸福を他人のおかげで得られるという考えである。彼らはもはややむを得ない時にしかその侮辱を許さない。そして返報をしてやろうとくふうする。

それゆえ、クリストフの打ち明け話がだれからもあまり快く迎えられなかったのには、多くの理由が存していた。しかし、ジューグムント・オックスから快く迎えられなかったのには、さらにも一つの理由が存していた。第一楽長のトビアス・プアイフェルは、遠からず隠退することになっていた。そしてクリストフは、年少なのにもかかわらず、その後を襲うべき幸運を有していた。オックスはきわめて善良なドイツ人であるだけに、クリストフが宮廷の信任を得ているからにはその地位に相当すると認めていた。しかし彼は、もし自分の価値が宮廷からもつとよく知られたら自分の方がいっそうよく相当していると、信ずるだけの自惚^{うぬぼれ}をもつていた。それでクリストフが毎朝、引きしめようと努めながらもやはり熙々^{きき}とした顔つきで劇場へやって来ると、異様な微笑を浮かべてその打ち明け話を迎えるのであった。

「どうです、」と彼は狡猾こうかつそうに言った、「何かまた新しい傑作ができましたか？」
クリストフは彼の腕をとらえた。

「ああ、君、こんどのは一番すぐれたものだよ……君に聞かしたいな！……いやどうも、あまりりっぱすぎるくらいだ。それを聞く者を、神よ助けたまえ、聞いたあとで心に残るのは、ただもう死にたいという考えばかりだ！」

それらの言葉を聞いている者は聾者ではなかった。クリストフはもしその滑稽こっけいなことを感じさせられたらまつ先に笑い出したであろうが、そのクリストフを相手にオックスは、微笑ほほえみもせず、子供じみた感激を親しく揶揄からかいもせずして、皮肉にも恍惚こうこつたる様子をした。彼はクリストフをおだてて、なお他の法外なことまでも言わした。そしてクリストフと別れると、それをさらにおかしく誇張して、急いで方々に売り歩いた。音楽家の狭い仲間では、それをまた盛んに嘲笑ちやうしやうした。そしてだれも皆、その拙劣な作品——前もつてすっかり判断されていた——その拙劣な作品を判断する機会を、待ちかねていた。

ついにその作品が現われた。

クリストフは自分の多くの作品のうちから、ヘッベルのユーディットにたいする序曲を選んだ。ドイツ人の無気力にたいする反動から、その野蛮な元気に心ひかれたのであった。

（ヘツベルが常にいかにもして天才の面影をそなえようという下心からもつたいぶつてることを、彼は感じたので、すでに右の作には厭気がさし始めていた。）また生の夢というパールのベックリン式な誇張的題名と生は短しという題言のついで、一つの交響曲を添えた。なお番組の中には、一聯の彼の歌曲と数種の古典的作品と、オックスの祝典行進曲一つがはいっていた。クリストフはオックスの凡庸なことを感じてはいたが、同僚の誼みから、自分の音楽会にその作品を一つ加えたのであった。

稽古中はさしたることもなかった。管絃楽団はみずから演奏してるそれらの作品を全然理解しなかったし、また各自ひそかに、その新しい音楽の奇怪なのにすこぶる狼狽してはいたが、しかしまだなんらかの意見をたてる隙がなかった。ことに彼らは公衆が意見を吐かないうちは、自分の意見を作ることができなかった。そのうえクリストフの自信ある調子は、ドイツのあらゆる善良な管絃楽団の例にもれず、訓練のとどいた従順なそれらの音楽家らを、すっかり威圧してしまっていた。ただ困難は、女歌手の方から出て来た。彼女は市立音楽会に属する新しい女だった。ドイツにおいてかなり評判の歌手だった。一家の母親である彼女は、ドレスデンやバイロイトにおいて、議論の余地のない豊富な声量で、ブリュンヒルデやクントリーの役を歌っていた。しかし彼女は、ワグナー派について、そ

の派が当然得意としている技術、すなわち、口をぽかんと開いて聞き取れる聴衆に向かって、子音を空間にころばし棍棒こんぼうでなぐりつけるように母音を強調しつつ、りっぱに発音する技術を、よく学んではいたにしろ、自然たらんとする技術を学んではいなかった——当然のことではあるが。そして彼女は一語一語にもつたいをつけた。どの語も強調された。綴りつづが鉛の靴底くつぞこをつけて進んでゆき、各文句に一つの悲劇がこもっていた。クリストフは彼女にその劇的能力を少し節減してくれと頼んだ。彼女は初めのうちかなり快くそれを努めた。しかし生来の鈍重さと声を出したい欲求とに打ち負けてしまった。クリストフはいらだつてきた。自分は生きてる人間に口をきかせようとしたのであって、悪魔ファネルに拡声器で喚わめかせようとしたのではないと、その尊重すべき婦人に注意した。彼女はその非礼を——だれも想像するごとく——ひどく悪く取った。彼女は言った、ありがたいことには自分は歌うということがなんであるかを知っている、楽匠ブラームスの前でその歌曲リートを歌うの光栄を得たこともある、楽匠はそれを聞いて少しも飽きなかったと。

「だからなおいけない、なおいけないよ！」とクリストフは叫んだ。

彼女はその謎なぞのような叫びの意味を説明してもらいたいと、尊大な微笑ほほえみを浮かべながら求めた。彼は答えた、ブラームスは自然さのなんたるやを一生しょうがい涯がい知らなかったので、

その賛辞は最もひどい非難になるわけであつて、また、自分——クリストフ——は、彼女がちやうど認めたとおり、時とすると非常に礼を失することもあるけれど、ブラームスの賛辞ほど彼女にとつて不面目なことを決して言いはしなないと。

議論はそういう調子でつづいていった。彼女は頑固がんこに、圧倒的な悲痛さで自己流に歌いつづけた。——でついにある日クリストフは——もうよくわかったと冷やかに言い放つた。彼女の天性がそうである以上は、それを矯きようせい正せいすることはできない。しかしこれらの歌リード曲は、正しい歌い方で歌われないとすれば全然歌われない方がいい、もう番組から引きぬいてしまふばかりだと。——それは公演の前日のことだった。それらの歌曲リードが期待されていた。彼女みずからその噂うわさをしていた。彼女とても相当の音楽家で、そのある長所を鑑賞することはできたのだつた。クリストフのやり方は彼女にとって恥辱であつた。でも翌日の音楽会がこの青年の名声を決して高めないだろうとは、彼女は確信できなかったのだ、新進の明星スターと葛藤かつとうを結びたくなかつた。でにわかには折れて出た。そして最後の稽古けいこ中、クリストフの要求におとなしく服従した。しかし彼女は、自分の思いどおりに歌つてやろう——翌日の公演では——と、心をきめていた。

当日になった。クリストフはなんらの不安をもいだいてはいなかった。自分の音楽であまり頭がいつぱいになっていたので、それを批判することができなかった。ある部分は人の笑いを招くかもしれないと思っていた。しかしそれがなんだ！ 笑いを招くのは危険を冒さなければ、偉大なものは書けない。事物の底に徴するためには、世間体や、礼儀や、遠慮や、人の心を窒息せしむる社会的虚飾などを、あえて蔑視べっししなければいけない。もしだれの気にも逆さからうまいと欲するならば、生涯の間、凡庸者どもが同化し得るような凡庸ほんような真実だけを、凡庸者どもに与えることで満足するがいい。人生の此方こなたにとどまっているがいい。しかしそういう配慮を下に踏みにじる時に初めて、人は偉大となるのである。クリストフはそれを踏み越えて進んでいった。人々からはまさしく悪口されるかもしれない。彼は人々を無関心にはさせないと自信していた。多少無謀な某々のページを開くと、知り合いのたれ彼がどんな顔つきをするだろうかと、彼は面白がっていた。彼は辛しんら辣つな批評を予期していた。前からそれを考えて微笑していた。要するに、聾者ででもなければ作品に力がこもつてることを否み得まい——愛すべきものかあるいはそうでないかはどうでもいい、とにかく力があることを。……愛すべきもの、愛すべきものだって………ただ力、それで十分だ。力よ、ライン河のようにすべてを運び去れ！……

彼は第一の蹉跌さてつに出会った。大公爵が来られなかった。貴賓席はただ付随の輩ばかりで、数人の貴顕婦人で占められた。クリストフは憤懣ふんまんを感じた。彼は考えた。「大公爵の馬鹿は俺おれに不平なんだ。俺の作品をどう考えていいかわからないんだ。間違いをしやすまいかと恐れてるんだ。」彼は肩をそびやかして、そんなつまらないことは意に介しないというようなふうをした。ところが他の人々はそれによく注意を留めた。大公爵の欠席は、彼にたいする最初の見せしめであつて、彼の未来にたいする威嚇いかくであつた。

公衆は、主人たる大公爵よりいっそう多くの熱心を示しはしなかった。客席の三分の一はあいていた。クリストフは子供のおりの自分の音楽会がいつも満員だったことを、苦々しく考え出さざるを得なかつた。もし彼がもつと經驗を積んでいたら、つまらない音楽を作つてる時よりりっぱな音楽を作つてる時の方が聴衆の来るのが少ないことを、当然だと思つたであろう。公衆の大多数に興味を与えるものは、音楽ではなくて音楽家である。すでに大人おとなになつて皆と同じようにしてる音楽家が、人の感傷性に触れ好奇心を喜ばす小僧つ児の音楽家より、興味を与えることが少ないのは、きわめて、明らかなことである。

クリストフは客席のふさがるのをむなしく待ちつくしたあとで、ついに開演しようと思つた。そうして「少なくともよき友」の方がいいということ、みずから証明しようと思つた。

試みた。——が彼の楽観は長くつづかなかつた。

楽曲は沈黙のうちに展開していった。——愛情が満ちて今にもあふれんとしてるのが感ぜられるような、聴衆の沈黙もある。しかし今この沈黙の中には、何もなかつた。皆無だつた。まったくの眠りだつた。各楽句がくが無関心の淵の中に沈み込んでゆくのが感ぜられた。クリストフは聴衆に背中を向け、管絃楽団に気を配つてはいたが、それでも内心の一種の触角をもつて、客席で起こつてるすべてのことを感知していた。この触角は、真の音楽家には皆そなわつていて、自分の演奏しているものが、周囲の人々の胸底に反響を見出してるかどうかを、知り得させるものである。クリストフは背後のさじき棧敷から起るけんたい倦怠の霧に凍えながら、なおつづけて指揮棒を振り、みずから興奮していった。

ついに序曲は終わった。聴衆は拍手した。丁重に冷やかに拍手して、それから静まり返つた。クリストフはむしろのしられる方を好んだらう。……ただ一つの口笛でも！何か生き生きとした兆しるし、少なくとも作品にたいする反対の兆でも！……が何もなかつた。——彼は聴衆をながめた。聴衆はたがいに見合わしていた。たがいの眼の中に意見を捜し合つていた。しかし彼らはそれを見出し得ないで、また無関心な態度に返つた。

音楽はふたたび始まつた。こんど交響曲シンフォニーの順であつた。——クリストフは終わりまで

つづけるのに困難を覚えた。幾度も彼は指揮棒を捨てて逃げ出したくなつた。聴衆の無感に引き込まれて、ついに何を指揮してるかもわからなくなり、底知れぬ倦怠けんたいのうちに陥る心地をはつきり感じた。ある楽節で彼が期待していた嘲ちやうしやう笑の囁きさえなかつた。聴衆は番組プログラムを読みふけていた。番組のページが一時にさらさらとめくられる音を、クリストフは耳にした。そしてまた寂然じやくねんとしてしまった。そのまま最後の和音に達すると、やはり前と同じ丁重な拍手が起こつて、曲が終わつたのを彼らが了解したことをようやく示した。——それでも他の喝采かつさいがやんだ時に、孤立した拍手が三つ四つ起こつた。しかしそれはなんらの反響も得ないで、きまり悪そうに静まってしまうた。そのため空虚はさらにむなしく感ぜられてきた。そしてこのちよつとした出来事によって、聴衆はいかに退屈していたかをぼんやり悟つた。

クリストフは管絃楽団のまん中にすわつていた。左右をながめるだけの元氣もなかつた。泣き出したかつた。また憤怒ふんぬの情に震えていた。立ち上がって皆にこう叫びたかつた。

「僕は君たちが厭だ、厭でたまらないんだ！……出て行つてくれ、みんな！……」

聴衆は少し眼をさましかけていた。彼らは女歌手を待つていた——彼女を喝采するのに慣れていた。羅針盤らしんばんなしに迷い込んだその新作の大洋中では、彼らにとって彼女は、確

実なものであり、迷う危険のない案内知った堅固な陸地であった。クリストフは彼らの考えを見て取って、苦笑をもらした。歌手の方でも同じく、聴衆に待たれることを感づいていた。クリストフは彼女の出る番であることを知らせに行つた時、彼女の尊大な様子でそのことを見て取つた。二人は敵意を含みながら顔を見合つた。クリストフは彼女に腕も貸さないで、両手をポケットにつつまみ、そして彼女を一人で舞台にはいらした。彼女は憤然として先にたつた。彼は退屈な様子でそのあとに従つた。彼女が舞台に現われるや否や、聴衆は歓呼して迎えた。それは彼らにとつて一つの慰藉いしやであつた。顔は輝き出し、いつせいに元気づき、双眼鏡は頬ほおにもつてゆかれた。彼女は自分の力を確信していて、もちろん自己流に歌曲 Liedを歌い出し、前日クリストフからされた注意を少しも顧みなかつた。伴奏していたクリストフはまっさおになつた。彼はその背反を予想していた。彼女が違った歌い方をするとすぐに、ピアノの上をたたき、怒気を含んで言った。

「違う！」

彼女は歌いつづけた。彼は低い怒り声をその背中に浴びせた。

「違う！ 違う！ そうじゃない！……そうじゃない！……」

聴衆には聞こえないが、管絃楽団には漏れなく聞こえる、その激しい叱責しつせきに、彼女は

じれながらも、なお頑固がんこにつづけて、あまりに速度をゆるくし、休止符や延フェルマータ音符をやたらに用いた。彼はそれを構わずに先へ進んだ。しまいには二人の間は一拍子だけ隔たった。聴衆はそれに気づいていなかった。クリストフの音楽は快いものでもまたは正確なものでもないということは、すでに長い前から一般に認められていた。しかし同意見でなかったクリストフは、物に憑つかれたようなしなめ顔をしていた。そしてついに破裂した。彼は楽句の途中でぴたりと弾ひきやめた。

「もうたくさんだ！」と彼は胸いっばいに叫んだ。

彼女は勢いに駆られて、なお半小節ばかりつづけて、そして歌いやめた。

「たくさんだ！」と彼は冷やかにくり返した。

聴衆は一時惘然ぼうぜんとした。やがて彼は冷酷な調子で言った。

「やり直すんだ！」

彼女は呆気あっけに取られて彼をながめた。その両手は震えていた。彼の顔に楽譜を投げつけてやりたいと思つた。あとになつても彼女は、どうしてそれをしなかつたのか自分でもわからなかつた。しかしクリストフの威厳に彼女は圧服されていた。——彼女はやり直した。一連の歌曲リードをことごとく、一つの表情をも一つの速度をも変えないで歌つた。なぜなら、

彼が何物をも仮借かしやくしないだろうと感じていたから。そして、またしても侮辱を受けやすいかと思えては戦おのいでいた。

彼女が歌い終わると、聴衆は熱狂して呼び返した。彼らが喝采かつさいしてるのは、歌曲リードをではなかった——（彼女がたとい他の曲を歌ったのであっても、彼らは同じように喝采しただろう）——名高い老練な歌手をであった。彼女は賞賛しても安全であると彼らは知っていた。そのうへ侮辱の結果を償ってやるつもりもあった。歌手が間違えたのだということに漠然ぼくぜんと悟っていた。しかしクリストフがそれを皆の前にさらけ出したのは、恥知らずな仕業だと考えていた。彼らはそれらの楽曲を繰り返させようとした。しかしクリストフは断固としてピアノを閉じてしまった。

彼女はその新たな無礼に気づかなかった。あまりに惑乱していて、ふたたび歌おうとは思っていないかった。急いで舞台から出て、自分の室に引きこもった。そこで十五分ばかりの間、心中に積もり重なった恨みと怒りとを吐き出した。神経の発作、涙の洪水、憤激した罵詈ののり、クリストフにたいする呪詛じゆそ……。閉め切った扉とびら越しに、激怒の叫びが聞こえていた。その室にはいることのできた友人らは、そこから出て来ると、クリストフが無頼漢のような振舞いをしたのだとふれ歩いた。その話はすぐ聴衆席へ伝わった。それで、クリス

トフが最後の楽曲のため指揮台上がった時、聴衆はどよめいた。しかしその楽曲は彼ではなかった。オックスの祝典行進曲だった。その平板な音楽に安易を覚えた聴衆は、大胆に口笛を鳴らすほどのことをしなくても、クリストフにたいする非難を示すべき最も簡単な方法を取った。彼らは大袈裟げさにオックスの作を喝采し、二、三度作者を呼び出した。

オックスはそのたびにかならず姿を現わした。そして、それがこの音楽会の終わりだった。読者のよく推察するとおり、大公爵や宮廷の人々——饒舌じょうぜつでしかも退屈してこの

田舎いなかの小都会の人々——は、右の出来事の些細ささいな点をも聞きもらさなかった。女歌手の味

方である諸新聞は、事件には言及しなかったが、筆をそろえて彼女の技倆ぎりょうを称揚し、彼

女が歌った歌曲リードは、ただ報道として列挙したにすぎなかった。クリストフの他の作品につ

いては、どの新聞も大差なく、わずかに数行の批評のみだった。「……対位法の知識。錯

雑せる手法。インスピレーションの欠乏。旋律メロディーの皆無。心の作にあらずして頭の作。誠実の

不足。独創的たらんとする意図……。」その次に、すでに地下に埋もれてる楽匠、モーツ

アル、ベートーヴェン、レーヴェ、シューベルト、ブラームスなど、「みずから希こいねがわずし

て独創的な人々、「そういう人々の独創について、真の独創について、一項が添えてあ

った。——それから次に、自然の順序として、コンラード・クロイツェルのグラナダ

の露営が大公国劇場で新しく再演されることに、説き及ぼしてあった。「書きおろされたばかりのものかと思われるほど清新華麗なその美妙的な音楽」のことが、長々と報道されていた。

これを要するに、クリストフの作品は、好意を有する批評家たちからは、全然理解されず——少しも彼を好まない批評家たちからは、陰険な敵意を受け——終わりに、味方の批評家にも敵の批評家にも指導されない大部分の公衆からは、沈黙を被つたのである。公衆は自分自身の考えに放つておかれると、なんにも考えないものである。

クリストフは落胆してしまった。

彼の失敗はしかしながら、何も驚くには当たらなかつた。彼の作品が人に喜ばれなかつたのには、三重の理由があつた。作品はまだ十分に成熟していなかつた。即座に理解されるにはあまりに新しかつた。それから、傲慢な青年を懲らしてやるのが人々にはきわめて愉快だつた。——しかしクリストフは、自分の失敗が当然であると認めるには、十分冷静な精神をそなえていなかつた。世人の長い不理解と彼らの癒すべからざる愚蒙さとを経験することによつて、心の晴穩を真の芸術家は得るものであるが、クリストフにはそれ

が欠けていた。聴衆にたいする率直な信頼の念と、当然のこととして造作なく得られるものと思っていた成功にたいする信頼の念とは、今や崩壊してしまった。敵をもつのはもとよりであると思つてはいた。しかし彼を茫然たらしめたのは、もはや一人の味方をももたないことであつた。彼が頼りにしていた人々も、今までは彼の音楽に興味をもつてたらしく思える人々も、音楽会以来は、彼に一言奨励の言葉をもかけなかつた。彼は彼らの胸中を探ろうとつとめた。しかし彼らは曖昧な言葉に隠れた。彼は固執して、彼らのほんとうの考えを知りたがつた。すると多少真面目に口をきいてくれる人々は、彼の以前の作品を、初期の愚かな作品を、彼の前にもち出してきた。——それから彼は幾度も、旧作の名において新作が非難されるのを聞くことになつた。——しかもそれは、数年以前には、当時新しかつた彼の旧作を非難した人々からであつた。そういうのが世間普通のことである。しかしクリストフはそれに同意できなかつた。彼は怒鳴り声をたてた。人から愛されなくとも、結構だ。彼はそれを承認した。かえつてうれしくらいだった。すべての人の友たることを望んではいながつた。けれども、愛してるふりをされるのは、そして生長するのを許されないのは、生涯子供のままでいることを強いられるのは、それはあまりのことであつた！ 十二歳にしてはいい作も、二十歳にしてはもういい作ではない。そし

て彼はそのまま停滞しようとは思わなかった。なお変化し、常に変化したいと思っていた。……生の停滞を望む馬鹿者ども！……彼の幼年時代の作品中に見出せる興味は、その幼稚な未熟さにあるのではなくて、未来のために蓄えられてる力にあるのだった。そしてこの未来を彼らは滅ぼそうと欲してるのだった！……否、彼らは彼がいかなる者であるかをかつて理解しなかった。かつて彼を愛したことはなかった。彼らが愛したのは、彼のうちの卑俗な点、凡庸ほんような輩と共通な点ばかりであつて、真に彼自身であるところのものをではなかった。彼らの友誼ゆうぎは一つの誤解にすぎなかった……。

彼はおそらくこの誤解を誇張して考えていた。そういう誤解の例は、新しい作品を愛することはできないが、それが二十年もの歳月を経ると心から愛するような、朴ほくちよく直ちよくな人々にしばしばある。彼らの虚弱な頭にとつては、新しい生命はあまりに香気が強すぎる。その香気が時の風タイムに吹き消されなければいけない。芸術品は年月の垢あかに埋もれてから初めて、彼らにわかるようになる。

しかしクリストフは、自分が現在である時には人に理解されず、過去である時になつて人に理解されるということ、是認することができなかつた。それよりはむしろ、まったく、いかなる場合にも、決して人に理解されないと、そう思ひたかつた。そして彼は憤激

した。滑稽にも、自分を理解させようとし、説明し、議論した。もとよりなんの役にもたたなかつた。それには時代の趣味を改造しなければならなかつたろう。しかし彼は少しも狐疑しなかつた。否応なしにドイツの趣味を清掃しようとは決心していた。しかし彼には不可能のことだつた。辛うじて言葉を搜し出し、大音楽家らについて、または当の相手について、自分の意見を極端な乱暴さで表白する会話などでは、だれをも説服することはできなかつた。ますます敵を作り得るばかりだつた。彼がなさなければならぬことは、ゆつくりと自分の思想を養つて、それから公衆をしてそれに耳を傾けさせることであつたらう……。

そしてちようど、よいおりに、運——悪運——が向いて来て、その方策を彼にもたらしてくれた。

クリストフは管絃楽の楽員らの間に交わり、劇場の料理店の食卓につき、皆の気色を害するのも構わずに、芸術上の意見を述べたてていた。彼らは皆意見を同じゆうしてはいなかつたが、彼の恣な言葉には皆不快を感じていた。ヴィオラのクラウゼ老人は、いい人物でりつぱな音楽家であつて、心からクリストフを愛していたので、話題を転じたいと思つ

た。しきりに咳せきをしたり、または、機会をうかがっては駄洒落だじゃれを言ったりした。しかしクリストフはそれを耳に入れなかつた。彼はますますしゃべりつづけた。クラウゼは困却して考えた。

「どうしてあんなことを言ってしまったのか？ とんだことだ！ だれでもあんなことは考えるかもしれないが、しかし口に出して言うものではない！」

きわめて妙なことではあるが、彼もまた「あんなこと」を考えていた、少なくともちよつと思いついていた。そしてクリストフの言葉は、多くの疑念を彼のうちに喚よび起こした。しかし彼は、そうとみずから認めるだけの勇気がなかつた——半ばは、危険な破目に陥りはすまいかという懸念から、半ばは、謙讓のために、自信に乏しいために。

ホルンのワイグルは、ほんとに何も知りたがらない男だつた。だれをも、何物をも、よかろうと悪かろうと、星であろうとガス燈であろうと、ただ賛美したがっていた。すべてが同じ平面の上にあつた。彼の賛美には、物によつての多少の別がなかつた。彼はただ、賛美し、賛美し、賛美しぬいた。彼にとつてそれは、生きるに必要な欲求だつた。その欲求を制限されると、苦しみを感じるのでつた。

チエロのクーは、さらにひどく悩まされた。彼はまったく心から悪い音楽を好んでいた。

クリストフが嘲笑痛罵を浴びせていたものはことごとく、彼にとつてはこの上もなく貴重なものだった。彼がことに好んでいたのは、自然に、最も因襲的な作品であった。彼の魂は、涙っぽい浮華な情緒の溜まりであった。確かに彼は、似而非大家にたいする感激崇拜において、虚偽を装つてゐるのではなかった。彼がみずからおのれを欺く——それも全然無邪気に——のは、真の大家を賛美してゐるのだとみずから思い込んでゐる点にあった。過去の天才らの息吹きを、自分の神のうちに見出せると信じている「ブラームス派」の人々がいる。彼らはブラームスのうちにベートーヴェンを愛している。ところがクーはさらにはなはだしかった。彼はベートーヴェンのうちにブラームスを愛していた。

しかし、クリストフの妄言に最も憤慨したのは、ファゴットのスピッツであった。彼はその音楽上の本能的嗜好をよりも、生来の屈從的精神をさらにはなはだしく傷つけられた。ローマのある皇帝は、立ちながら死にたがったこともあつたが、スピッツは彼の平素の姿勢どおり、腹匍いに平伏して死にたがっていた。腹匍いが彼の生来の姿だった。すべて官僚的なもの、定評あるもの、「成り上がった」もの、そういうものの足下にころがって歎んでいた。そして奴僕どほくの真似まねをすることを邪魔されると、我れを忘れていらだつのだつた。

それゆえに、クーは慨嘆し、ワイグルは絶望的な身振りをし、クラウゼは取り留めもないことを言い、スピッツは金切り声で叫んでいた。しかしクリストフは自若として、さらにいつそう声高にしやべりたて、ドイツとドイツ人とに關するひどい意見を述べていた。

隣りの食卓で一人の青年が、笑いこけながらそれに耳を傾けていた。縮らしたまつ黒な髪、伶俐れいりそうな美しい眼、太い鼻、しかもその鼻は、先端近くになつて、右へ行こうか左へ行こうか決しかねて、まっすぐに行くよりも同時に左右両方へ広がつてい、それから厚い唇、敏活くちびるな変わりやすい顔つき、その顔つきで彼は、クリストフの言うことに残らず耳を傾け、その唇の動きを見守り、その一語一語に、面白がってる同感的な注意を示し、額ひたいや顚こめかみ顚めじりや眼尻めじりや、または小鼻や頬ほおへかけて、小さな皺しわを寄せ、相好そうこうをくずして笑い、時とすると、急にたまらなくなつて全身を揺ぶつていた。彼は話に口出しはしなかつたが、一言も聞き落さなかつた。クリストフが大言壯語のうちにまごつき、スピッツからじらされ、憤激のあまり渋滞し急せき込み口ごもり、やがて必要な言葉を――岩石を見出して、敵を押しつぶすまでやめないのを見ると、彼はことに喜びの様子を示した。そしてクリストフが情熱に駆られて、おのれの思想の埒らちが外がいにまで飛び出し、とてつもない臆説おくせつを吐いて、相手を怒号させるようになると、彼は無上に面白がっていた。

ついに一同は、各自に自分の優秀なことを、感じたり肯定したりするのに飽きて、袂たもとを分かった。クリストフは最後まで食堂に残っていたが、やがて出て行こうとすると、先刻さつきあんなに面白がつて彼の言葉を聞いていた青年から、敷衍ふせんぎわで言葉をかけられた。彼はまだその青年を眼にとめていなかった。青年はていねいに帽子を脱ぎ、笑顔をし、自己紹介の許しを求めた。

「フランツ・マンハイムという者です。」

彼はそばから議論を聞いていた無作法を詫わび、相手どもを粉碎したクリストフの手腕を祝した。そしてそのことを考えながらまだ笑っていた。クリストフはうれしくもあるがまだ多少狐疑こぎしながら、その様子をながめた。

「ほんとうですか、」と彼は尋ねた、「僕をひやかすんじゃないんですか。」

相手は神明にかけて誓った。クリストフの顔は輝きだした。

「それでは、僕の方が道理だと君は思うんですね。君も僕と同じ意見ですね？」

「まあお聞きなさい、」とマンハイムは言った、「実を言えば、僕は音楽家ではありません、音楽のことは少しも知りません。僕の気に入る唯一の音楽は——別にお世辞を言うわけではないが——君の音楽です。……というのも、僕はあまり悪い趣味をもってる男では

ないことを、君に証明したいので……。」

「そんなことは、」とクリストフはうれしがりながらも疑わしげに言った、「証拠にはならない。」

「手きびしいですね。……よろしい……僕も同意しよう、それは証拠にはならないと。それで、ドイツの音楽家らにたいする君の説を、批評するのはよそう。だがいずれにしても、一般のドイツ人、古いドイツ人、ロマンチックの馬鹿者ども、彼らにたいする君の説はほんとうだ。酸敗した思想をいだし、涙壺つぼのような情緒に浸り、われわれにも賛美させようとして、やたらにくり返すあの古めかしい文句、過去未来を通じて常に存在し、今日の掟であるがゆえに明日の掟たるべき、かの永久の昨日……！」

彼はシルレルの有名な一節のある句を誦しょうした。

……永久とわなる昨日、

そは常に在りき、また常にめぐり来たる……。

「彼がまつ先だ！」と彼は暗誦あんしょうの途中で言葉を切つて言った。

「だれが？」とクリストフは尋ねた。

「これを書いた旧弊家さ。」

クリストフにはわからなかった。しかしマンハイムは言いつづけた。

「まず僕の考えでは、五十年ごとに、芸術や思想の大掃除をやらなければいけない、前に存在していたものを少しも存続さしてはいけない。」

「そりゃあ少し過激だ。」とクリストフは微笑みながら言った。

「いやそうじゃない、まったくだ。五十年というのも長すぎる。まあ三十年でいい……それも長すぎるくらいだ！……その程度が衛生にはいい。家の中に父祖の古物を残しておかないことだ。彼らが死んだら、それを他処へ送っていいねいに腐敗させ、決してまたもどつてこないように、その上に石を置いとくことだ。やさしい心の者はまた花を添えるが、それもよかろう、どうだって構わない。僕が求むることはただ、父祖が僕を安静にしておいてくれることだ。僕の方では向こうをごく安静にしておいてやる。どちらもそれぞれおたがいさまだ、生者の方と、死者の方と。」

「生者よりいつそうよく生きてる死者もあるよ。」

「いや、違う。死者よりいつそうよく死んでる生者があると言った方が、より真実に近い

「あるいはそうかもしれない。だがとにかく、古くてまだ若いものもあるよ。」

「ところが、まだ若いんなら、われわれは自分でそれを見出すだろう。……しかし僕はそんなことを信じない。一度よかつたものは、もう決して二度とよくはない。変化だけがいんだ。何よりも肝要なのは、老人を厄介払いすることだ。ドイツには老人が多すぎる。老いたる者は死すべしだ！」

クリストフはそれらの妄論もうろんに、深い注意をもって耳を傾け、それを論議するのにいたく骨折つた。彼はその一部には同感を覚え、自分と同じ思想を多少認めたと同時にまた、愚弄ぐろう的な調子で極端にわたるのを聞くと、ある困惑を感じた。しかし彼は他人もすべて自分と同じように真摯しんしであると見なしていたので、今自分よりいつそう教養あるように見えつつも、たやすく論じているその相手は、おそらく主義から来る理論的な結論を述べてるのであろうと考えた。傲慢ごうまんなクリストフは、多くの人からは自惚うぬぼれすぎてるわけなされていたけれども、実は素朴そぼくな謙讓さをもっていて、自分よりすぐれた教育を受けた人々に対すると、しばしば欺かれることがあった——彼らがその教育を鼻にかけないで困難な議論をも避けない時には、ことにそうだった。マンハイムはいつも自分の逆説をみずから面

白がり、弁難から弁難へわたつて、ついには自分で内心おかしいほどの、途方もない駄弁だべんにふけてばかりいたので、人から真面目まじめに聞いてもらうようなことは滅多になかった。

ところが今クリストフが、自分の詭弁きべんを論議せんとしまたはそれを理解せんとして、いたく骨折つてるのを見ると、すっかりうれしくなった。そして冷笑しながらも、クリストフから重視されてるのを感じた。彼はクリストフを滑稽こっけいなまた愛すべき男だと思った。

二人はきわめて親しい間柄まがらになつて別れた。そして三時間後に、芝居の試演の時、管弦楽団の席に開いてる小さな扉とびらから、マンハイムのきき々とした引きゆがめられた顔が現われて、ひそかに合図あひづをしてるのを見て、クリストフは多少びっくりした。試演しげんがすむと、クリストフはその方へ行つた。マンハイムは親しげに彼の腕をとらえた。

「君、少し隙ひまがあるだろうね。……まあ聞きたまえ。僕はちよつと思いついたことがある。多分君はばかなことだと思ふかもしれないが……。実は、一度、音楽に関する、三文音楽家らに関する、君の意見を書いてくれないかね。木片を吹いたりたたいたりするだけの能しかない、君の仲間のあの四人の馬鹿者どもに向かつて、無駄むだに言葉を費やすより、広く公衆に話しかける方がいいじゃないか。」

「その方がいいとも！ 望むところだ！……よろしい！ だが何に書くんだい？ 君は親

切だね、君は！……」

「こうなんだ。僕は君に願いたいことがあるんだが……。僕らは、僕と数人の友人——アドルベルト・フォン・ワルトハウス、ラファエル・ゴールデンリンク、アドルフ・マイ、ルツイエン・エーレンフェルト——そういう連中で、雑誌を一つこしらえてるんだ。この町での唯一の高級な雑誌で、ディオニゾスと言うんだ。……（君も確か知ってるだろう。）……僕らは皆君を尊敬してる。そして君が同人になってくれれば、実に仕合わせだ。君は音楽の批評を受け持ってくれないか？」

クリストフはそういう名誉に接して恐縮した。彼は承諾したくてたまらなかつた。しかしただ自分の力に余る役目ではあるまいかと恐れた。彼は文章が不得手だつた。

「なに心配することはない、」とマンハイムは言った、「確かにりっぱに書けるよ。それに、批評家になればあらゆる権利をもつんだ。公衆にたいしては遠慮はいらない。公衆はこの上もなく馬鹿なものだ。芸術家というのもつまらないものだ。人から非難の口笛を吹かれても仕方はない。しかし批評家というものは、『彼奴を罵倒しろ！』と言うだけの権利をもっている。観客は皆思索の困難を批評家に委ねてるんだ。君の勝手なことを考えればいい。少なくとも何か考へてる様子をすればいい。それらの鷺鳥どもに餌を与えてや

りさえすれば、それがどんな餌だろうと構わない。奴らはなんでも飲み込んでしまおうんだ。
」

クリストフは心から感謝しながら、ついに承諾してしまった。そしてただ、何を言っても構わないということを条件とした。

「もちろんさ、もちろんさ。」とマンハイムは言った。「絶対の自由だ！ われわれは各人皆自由なんだ。」

マンハイムは、その晩芝居がはねた後、三度劇場へやって来て彼を連れ出し、アダルベルト・フォン・ワルトハウスや他の友人らに、彼を紹介した。彼らは彼を懇ろに迎えた。

土地の古い貴族の家柄であるワルトハウスを除けば、彼らは皆ユダヤ人であつて、そして皆すこぶる富裕だつた。マンハイムは銀行家の息子、ゴールドリンクは有名なぶどう園主の息子、マイは冶金工場長の息子、エーレンフェルトは大宝石商の息子だつた。彼らの父親らは、勤勉強韌な古いイスラエル系統に属していて、その民族的精神に執着し、強烈な精力をもつて財産を作り、しかもその財産よりその精力の方をより多く享樂していた。ところが息子らは、父親らが建設したものを破壊するために生まれたかの觀があつた。

家伝の偏見と、勤儉貯蓄な蟻ありのような性癖とを、嘲ちやうしやう笑しやうしていた。芸術家を気取っていた。財産を軽けい蔑べつして、それを投げ捨てるようなふうをしていた。しかし実際においては、その手から金が漏れ落ちることはほとんどなかった。彼らはいかに馬鹿な真似まねをしようとも、精神の明めい晰せきと實際的能力とをまったく失うほどには決していたらなかった。そのうえ、父親らはそれを監督して、手綱を引きしめていた。中で最も放縦なマンハイムは、もつてる物をことごとく本気で濫費したろうけれど、しかし彼はかつて何かをもつてることがなかった。そして父の貪どん欲よくを大声に罵倒してはいたけれど、心の中では、それをみずから笑いながら父の方が道理だと認めていた。で要するに、ほんとうに気を入れて自分の金で雑誌を維持していたのは、金が自由になるワルトハウスほとんど一人だけであった。後は詩人だった。アルノー・ホルツやウオルト・ホイットマンなどにならって、「多様韻ポリメートル」の詩を書いていた。ごく長い句と短い句とが交互になつてゐる詩で、一点符、二点符、三点符、横線符、休止符、大文字、イタリック文字、傍線付の言葉などが、頭韻法や反覆法——一語の、一行の、または全句の——などととも、きわめて重要な役目をさせられていた。またあらゆる国の言語や音が挿そうにゆう入いされていた。彼はセザンヌの手法を詩に用いるのだと言っていた。(その理由はだれにもわからなかった。)そして実を言えば、

空粗な事物をことによく感ずるだけの、かなり詩的な魂をそなえていた。感傷的で冷静であり、また幼稚で気取りやであった。その苦心した詩は、豪放な無頓着むとんじやくさを装っていた。彼は上流の人としては、りっぱな詩人であつたろう。しかしこの種の人は、雑誌や客間にあまり多くいすぎる。しかも彼は唯一人であることを欲していた。階級通有の偏見を超越してゐる大人物らしく振舞おうと、心がけていた。そのくせだれよりもいっそう偏見をもつていた。彼はそれをみずから認めてはいなかつた。自分の主宰してゐる雑誌で、周囲にユダヤ人ばかりを寄せ集めて、反ユダヤ党である身内の者らに不平を言わせ、みずからおのれの精神の自由を証明することを、いつも快しとしていた。同人らにたいしては、慇懃いんぎんな対等の調子を装っていた。しかし心の底では、平静な限りない軽蔑けいべつを彼らにたいしていただいていた。彼らが彼の名前と金とを利用して喜んでゐるのを知らないではなかつた。そして彼らのなすままに任して、彼らを軽蔑する楽しみを味わっていた。

そして彼らの方でもまた、彼が自分たちのなすままに任していることを軽蔑していた。なぜなら彼らは、彼がそのために利を得てゐることをよく知っていたから。与える者に与えよである。ワルトハウスは彼らに、自分の名前と財産とを貸与していた。彼らは彼に、自分らの才能と実務的精神と読者とを貸与していた。彼らは彼よりもいっそう伶俐れいりだつた。

と言つて、彼らがより多く個性をそなえてるといふのではなかつた。否おそらく個性はより少なかつたであろう。しかしながら彼らは、どこへ行つてもまたいつでもそうであるが、この小都市においても——異民族であるがために、數世紀來孤立してきて嘲笑的な觀察眼が鋭利にされているので——最も進んだ精神の所有者であり、腐蝕ふしょくした制度や老朽した思想の滑稽こっけいな点に最も敏感な精神の所有者であつた。ただ、彼らの性格は彼らの知力ほど、自由でなかつたので、彼らはそれらの制度や思想を冷笑しながらも、それらを改革することよりむしろ、それらを利用することが多かつた。彼らはその独立不羈ふきの信条にもかかわらず、紳士アダルトとともに、田舎いなかの小ハイカラであり、富裕無為な息子むすこさんたちであつて、娯樂や気晴らしのつもりで文学をやつてるのであつた。彼らはみずから尊大なふうをして喜んでいたが、人のよい威張りやにすぎなくて、若干の無害な人々、もしくは自分たちを決して害し得ないと思われる人々、などにたいしてしか尊大ぶりはしなかつた。他日自分たちがはいつてゆき、昔攻撃したあらゆる偏見と妥協しながら、世間普通の生活を静かに営むようになるだろうとわかつてゐるような社会とは、葛藤かつとうを結ぶ気はさらになかつた。そして、いよいよ戈ほこを揮ふるいもしくは弁を揮わんとし、現在の偶像——それもすでに揺ぎ始めてゐる——にたいして、騒々しく出征の途にのぼらんとする時には、いつも

自分の船を焼かないだけの用心をしていた。危険な場合にはまた船に乗り込むのだった。それにまた、戦いの結果がどうであろうとも——戦いが済みさえすれば、また戦いが始まるまでには十分長い時間があった。敵のフィリスチン人は静かに眠ることができた。新しいダヴィデ派が求めていたところのものは、なろうと思えば恐るべき者にもなり得るのだということ、敵に信ぜさせることであつた。——しかし彼らはなろうと思つていなかった。芸術家らと懇意にし、女優らと夜食をとにもする方を、彼らはより多く好んでいた。

クリストフは、その仲間にはいると勝手が悪かつた。彼らの話は、女や馬に關することが多かつた。しかも厚かましい話し方をしていた。彼らはひどく形式張つていた。アダルベルトは、白々しらじらしいゆるやかな声音で、みずから退屈し人を退屈させる上品なていねいさで、意見を述べた。編集長のアドルフ・マイは、重々しくでつぷり太つて、頭を両肩の間に埋め、粗暴な様子をしてる男で、いつも自説を通そうとしていた。あらゆることに断定を下し、決して人の答弁に耳を貸さず、相手の意見を軽蔑けいべつしてゐるらしく、なお相手をも軽蔑してゐるらしかつた。美術批評家のゴールデンリンクは、神経的に顔の筋肉を震わす癖があり、大きな眼鏡の陰でたえず眼を瞬またたき、交際してゐる画家たちの真似まねをしたのに違くないが、髪を長く伸ばし、黙々として煙草たばこを吹かし、決して終わりまで言つてしまうこと

のない断片的な文句を口ごもり、親指で空間に曖昧な身振りをするのだった。エーレンフェルトは、小柄で、頭が禿げ、微笑を浮かべ、茶褐色の頤髯を生やし、元気のない繊細な顔つきをし、鉤鼻であつて、流行記事や世間的雑報を雑誌に書いていた。彼は甘つたるい声で、きわめて露骨な事柄をしゃべつた。機才はあつたが、しかしそれも意地悪い才で、また下等なことが多かつた。——これらの富裕な青年らは皆、もとより無政府主義者であつた。すべてを所有してゐる時に社会を否定するのは、最上の贅沢である。なぜなら、かくして社会に負うところのものを免れるからである。盗人が通行人を劫掠したあとに、その通行人へこう言うのと同じである、「まだここで何をぐずついでるんだ！ 行つちまえ！ もう貴様に用はない。」

同人中でクリストフが好感をもつてゐるのは、マンハイムにたいしてばかりだつた。確かにこの男は、五人のうちで最も澆刺としていた。自分の言うことや他人の言うことを、なんでも面白がつていた。どもり、急き込み、口ごもり、冷笑し、支離滅裂なことを言いたてて、論理の筋道をたどることもできず、みずから自分の考えを正しく知ることでもできなかった。しかし彼は、だれにたいしても悪意をいだかず、また野心の影もない、善良な青年だつた。実を言えば、きわめて率直だといふのではなく、いつも芝居をやつてはいた。

しかしそれも無邪気にやつてるのであって、だれにも害を及ぼさなかった。奇怪な——たいていは大まかな——あらゆる空想にたいして、彼は怒りつぽかった。それをすっかり信ずるには、あまりに精緻せいせいでまた嘲ちやうしやう笑的せうじきだった。そして怒った時でさえも、冷静を維持する法をよく知っていた。おのれの主義を適用するのに、かつて危ない破目に陥ることがなかった。しかし彼には看板が一つ必要だった。彼にとってはそれが玩具がんぐであって、幾度も取り変えた。現在では、親切という看板をもっていた。もとより彼は、親切であるだけでは満足しなかった。親切に見せかけたがっていた。親切を説き回り、親切な芝居をしていた。家の者らの冷酷厳格な活動性にたいする、またドイツの嚴肅主義や軍国主義や俗物根性などにたいする、反発的精神から、彼はトルストイ主義者となり、涅槃ねはん主義者となり、福音ふくいん音信者となり、仏教信者となり——その他自分でもよくはわからなかったが——喜んであらゆる罪悪を許し、とくに淫逸いんいつな罪悪を許し、それらにたいする愛好の情を少しも隠さず、しかも美德の方はあまり許容しないような、柔弱な骨抜きほしいままの恣しな恵み深い生きやすい道徳——快樂の契約にすぎず、相互交歓こうかんの放肆ほうしな連盟にすぎないが、神聖という光輪をまとつてみずから喜ぶ道徳、そういう道徳の使徒となっていた。そこに小さな偽善が存していた。その偽善は、鋭敏な嗅覚きゆうかくにとつてはあまり芳かんばしいものではなく、もし真面まじ

目めに取られたら、實際胸悪いものともなるべきはずであった。しかしそれは真面目に取られることを別に望まないで、みずから一人で興きんがつていた。そしてこの放縦なキリスト教主義は、何かの機会がありさえすれば、すぐに他の看板に地位を譲ろうと待ち構えていた——どんなんでも構わない、暴力、帝国主義、「笑う獅子しし」などでも。——マンハイムは茶番を演じていた、心から茶番を演じていた。他の者らのようにユダヤの好々爺こうこうやとならないうちから、民族固有のあらゆる機才をもつて、自分のもたない感情をも代わる代わる背負かかっていた。彼はきわめて面白い男であり、この上もなく小癩こしゃくな男であった。

クリストフはしばらくの間、マンハイムの看板の一つだった。マンハイムは彼のことばかりを口癖くぐせにしていた。至る所に彼の名前を吹ふ聴いして歩いた。家の者らに向かつて、盛んに彼をほめたてて聞かした。その言葉に従えば、クリストフは天才であり、非凡な男であつて、珍妙な音楽を作り、ことに変へん挺ていな音楽談をなし、機才にあふれており——そのうえ好男子で、きれいな口と素敵な齒とをもつていた。彼はまた、自分はクリストフから感心されると言い添えた。——ついにある晩、クリストフを家に連れて来て御馳走ごちそうしてやった。クリストフは、新しい友の父親である銀行家口タール・マンハイム、およびフ

ランツの妹であるユーディットと、差し向かいになった。

彼がユダヤ人の家の中にはいり込んだのは、それが初めてだった。ユダヤ人の仲間はその小都市にかなり多数であり、またその富と団結力と知力とによって、重要な地位を占めてはいたけれど、他の人々と多少離れて生活していた。民衆の中には、ユダヤ人にたいする執拗しつような偏見と、素朴そぼくではあるがしかし不当な内密の敵意とが、いつも存在していた。クリストフ一家の感情もやはりそうであった。彼の祖父はユダヤ人を好まなかった。しかし運命の皮肉によつて、彼の音楽の弟子のうち最良の二人は——（一人は作曲家となり、一人は名高い名手となつていた）——ユダヤ人であった。そしてこの善良な祖父は困却していた。なぜなら、その二人のりつぱな音楽家を抱擁したいと思うことがあつた。それから、ユダヤ人らが神を十字架につけたことを悲しげに思い出した。そして彼は、その融和しがたい感情をどうして融和すべきかを知らなかつた。が結局、彼は、二人を抱擁した。二人は非常に音楽を愛していたから、神も彼らを許してくださいさるだろうと、彼はおのずから信じがちだつた。——クリストフの父のメルキオルは、自由思想家をもつてみずから任じていただけに、ユダヤ人から金を取ることをさほど懸念しなかつた。ごく結構なことだとさえ思つていた。しかし彼は、ユダヤ人を罵倒ばとうし軽蔑けいべつしていた。——クリストフの母

は、料理人としてユダヤ人の家に雇われて行くと、悪いことをしたと思わないではなかった。そのうえ、彼女を雇った人々は、彼女にたいしてかなり横柄であった。それでも彼女は、それを彼らに恨まず、だれにも恨まず、神から永劫えいけうの罰を受けたそれらの不幸な人々にたいして、憐憫れんびんの情でいっばいになっていた。その家の娘が通るのを見かけたり、あるいは子供らのうれしそうな笑い声を聞いたりすると、深く心を動かした。

「あんなに美しい娘が！……あんなにきれいな子供たちが！……なんとという不幸だろう！……」と彼女は考えるのだった。

クリストフが、晩にマンハイム家へ行つて御馳走ごちそうになるのだと告げた時、彼女は彼になんとも言いかねた。しかし多少心を痛めた。彼女の考えでは、ユダヤ人にたいする人々の悪口をすっかり信じてはいけないし——（世間の人はだれの悪口でも言うのである）——どこにでもりっぱな人たちがいるものではあるが、しかしそれでも、ユダヤ人はユダヤ人の方で、キリスト教徒はキリスト教徒の方で、それぞれ敷居をまたぎ越さない方が、いっそうよくいっそう好都合なのだった。

クリストフは少しもそういう偏見をもつてはいなかった。周囲にたえず反発したい気性から、彼はむしろその異民族に心ひかれていた。しかし彼はほとんどその民族を知らな

った。彼が多少の交渉をもつていたのは、ユダヤ民族の最も卑俗な成分とばかりだった。すなわち、小さな商人、ライン河と大会堂との間の小路にうようよして下層民らで、彼らは皆、あらゆる人間のうちにある羊の群れみたいな本能をもつて、一種の小ユダヤ町を建設しつづけていた。クリストフはしばしば、その一郭を歩き回つては、物珍しいまたかなり同情のある眼で、さまざまの型の女を通りがかりにうかがった。彼女らは頬ほおがくぼみ、唇くちびると頬骨とがつき出て、ダ・ヴィンチ式のしかも多少卑しい微笑を浮かべ、その粗雑な話し方と激しい笑いとは、穏やかなおりの顔の調和を不幸にも常に破つていた。しかし、その下層民の滓かすの中にも、大きな頭をし、ガラスのような眼をし、多くは動物的な顔をし、肥満してずんぐりしてるそれらの者どもの中にも、最も高尚な民族から墮落してきたそれらの末裔まつえいの中にも、その臭い汚泥おどいの中にさえ、沼沢の上に踊る鬼火のように輝く不思議な燐光りんこうが、靈妙な眼つき、燦然さんぜんたる知力、水底の泥土でいどから発散する微細な電気が、見て取られるのであった。そしてそれはクリストフを幻惑し不安ならしめた。身をもがいてるりっぱな魂が、汚辱から脱しようとする偉大な心が、そこにあるのだと彼は考えた。そして彼は、それらに出会つて、それらを助けてやりたかった。よく知りもしないで、また多少恐れながらも、彼はそれらを愛していた。しかしかつて、そのいずれとも親交を結

んだことがなかった。ことにユダヤ人仲間の選ばれた人々と接するの機会は、かつて到来したことがなかった。

それで彼にとつては、マンハイム家の晩餐ばんさんは、新奇な魅力と禁ぜられた果実の魅力とをそなえていた。その果実を与えてくれるイーヴのせいで、それがいつそう美味になつていた。クリストフはそこにはいつて行つた瞬間から、ユーディット・マンハイムにばかり見とれていた。彼女は、彼がその時まで知つていたあらゆる女とは、違つた種類のものだった。丈夫な骨格にかかわらず多少痩せ形やの高いすらりとした姿、多くはないがしかし房々ふさふさとして低く束ねられてる黒髪、それに縁取られてる顔、それに覆おほわれてる顛顛こめかみと骨だつた金色の額ひたい、多少の近視、厚い眼瞼まぶた、軽く丸みをもつた眼、小鼻の開いたかなり太い鼻、伶俐れいりそうにほつそりした頬、重々しい頤あご、かなり濃い色艶いろつや、そういうものをもつてして彼女は、元氣なきつぱりした美しい横顔をしていた。正面まともに見れば、その表情は少し曖昧あいまいで不定で複雑だった。眼と顔とが不釣り合あいだった。彼女のうちには、強健な民族の面影が感ぜられた。そしてこの民族の鑄型いがたの中には、あるいはきわめて美しいあるいはきわめて卑俗な無数の不均衡な要素が、雑然と投げ込まれてるのが感ぜられた。彼女の美はとくに、その口と眼とに存していた。口は黙々としており、眼は近視のためにいつそ

う奥深く見え、青みがかった眼縁のためにいつそう影深く見えていた。

前にいる女の真の魂を、その両眼の潤うるんだ熱烈なヴェール越しに読み取り得るには、クリストフはまだ、個人によりもむしろ多く民族に属してその眼に十分慣れていなかった。その燃えたつたしかも陰鬱いんうつな眼の中に彼が見出したものは、イスラエルの民の魂であった。その眼はみずから知らずして、おのれのうちにイスラエルの民の魂をもっていたのである。彼はその中に迷い込んでしまった。彼がこの東方の海上に道を見出し得るようになったのは、ずっと後のことであつて、かかる眸ひとみのうちに幾度も道を迷つた後にであつた。

彼女は彼をながめていた。何物もその視線の清澄さを乱し得るものはなかった。何物もそのクリスト教徒の魂から逃のがれ得るものはなさそうだった。彼はそれを感じた。彼はその女らしい眼つきの魅惑の下に、一種の無遠慮な乱暴さでこちらの意中を穿せん鑿さくして、明め晰せい冷静な雄々しい意力を感じた。その乱暴さのうちには、なんらの悪意もなかった。彼女は彼を手中に握っていた。それも、相手構わずにただ誘惑しようとはかりする追従女のやり方ではなかった。追従と言え、彼女はだれよりも追従的であつた。しかし彼女は自分の力を知っていた。その力を働かせることは、自分の自然の本能に任せていた——ことに、クリストフのようなたやすい獲物を相手の時にはそうであつた。——またいつそう

彼女が興味を覚えるのは、自分の敵を知るということだった。（あらゆる男は、あらゆる見知らぬ者は、皆彼女にとつては敵であつた——場合によってはあとで同盟の約を結ぶこともあり得る敵であつた。）人生は一つの勝負事であつて、れいり 怜悯な者の方が勝ちを占める。要は、自分のカルタ札を見せないで、敵の札を見て取るにあつた。それに成功すると、彼女は勝利の快感を味わうのだつた。それから利を得るか否かは問題でなかつた。慰みのための勝負だつた。彼女は知力を非常に好んでいた。しかし、もし気を入れるればいかなる学問においても成功するだけの堅固な頭脳を有してるとしても、また、兄よりもすぐれて銀行家ロタール・マンハイムの真の後継者となり得るとしても、抽象的な知力を好んでるのではなかつた。生きたる知力の方を、男子にたいして働かし得る知力の方を、彼女は好んでいた。彼女の楽しみとするところは、人の魂を洞どうさつ察することであり、その価値を測定することであつた。——（この測定に彼女は、マトシスのユダヤの女が貨幣を測つてのと、同じくらい細心な注意をこめていた。）——彼女は驚くべき洞察力によつて、よろい 鎧の間を、ひやく 魂の秘鑰たる欠点弱点を、たちまちのうちに見出し、ひけつ 秘訣を握ることを、よく知つていた。これが、他人を征服する彼女の方法であつた。しかし彼女は、その勝利に長くかわつてはいなかつた。獲物をなんとかしようとはしなかつた。好奇心と自負心が一度

満足すれば、彼女はすぐに興味を失つて、他のものへと移っていった。そのあらゆる力は、何物をももたらさなかつた。かくも生々たるこの魂の中には、死が宿っていた。彼女は自分のうちに、好奇心と倦怠けんたいとの天才をそなえていた。

かくて彼女は、彼女をながめてるクリストフをながめていた。ほとんど口をきかなかつた。口の片隅かたすみにかすかな微笑を見すれば、それでもう十分だった。クリストフは魔睡させられてしまった。その微笑が消えると、彼女の顔は冷静になり、眼は無関心になった。彼女は給仕の方に気を配つて、冷やかな調子で召使に言葉をかけた。もう何も聞いていないかのようだった。それから、眼がまた輝いてきた。そして的確な三、四語は、彼女が残らず聞いて理解していることを示した。

彼女はクリストフにたいする兄の批評を、冷静に点検してみた。彼女はフランスが法螺ほら吹きなのを知っていた。美貌びぼうであり上品であると兄が吹聴ふいちようして聞いたクリストフの現われるのを見た時、彼女の皮肉な心は好機に接した。——（フランスは明瞭めいりょうな事実の反対を見るのに特殊な才をもつてゐるかのようだった。もしくは、反対を信じて矛盾の面白みを味わつてゐるようだった。）——しかしながら、なおよくクリストフを研究してみると、

フランツの言ったことは嘘うそばかりでもないということ、彼女は認めた。そして発見の歩を進めるに従って、まだ不定不均衡ではあるがしかし頑がんけん健果敢な一つの力を、クリストフのうちに見出した。彼女は力の稀有けうなことをだれよりもよく知っていたから、それを喜んだ。彼女はクリストフに口をきかせ、その思想を開き示させ、その精神の範囲と欠点とをみずから示させることができた。また彼にピアノをひかせた。彼女は音楽を好きではなかつたが、理解はあつた。そしてクリストフの音楽からいかなる種類の情緒をも起こさせられはしなかつたけれども、その独創の点を見て取つた。そして慇いんぎん懃な冷淡さを少しも変えないで、決してお世辞でない簡單正当な二、三の意見を言つたが、それは彼女がクリストフに興味を覚えてることを示すものだつた。

クリストフはそれに気づいた。そして得意になつた。なぜなら、そういう批判がいかに価値あるかを、また彼女は滅多に賞賛することがないということ、感じたからである。彼は彼女の好意を得たいという欲求を隠さなかつた。そしていかにも無邪氣にそれをつとめたので、三人の主人らを微笑ほほえました。もはやユーディットへしか、そしてユーディットのためにしか、彼は口をきかなかつた。他の二人へは少しも取り合わないで、あたかもその存在を認めていないかのようだつた。

フランツは彼が話してるのをながめていた。感嘆と誇張癖とを交えて唇や眼を動かしながら、その一語一語を跡づけていた。そして父や殊に嘲り気味の目配せをしながら、ふき出し笑いをしていた。が妹は平然として、兄の目配せに気づかないふうを装っていた。

ロタール・マンハイム——少し背の曲がった頑丈な大きな老人、赤い顔色、角刈りにした灰色の髪、ごく黒い口髭と眉毛、重々しいがしかし元気で嘲弄的で、強烈な生活力を思わせる顔つき——彼もまた、狡猾なお人よしのふうをして、クリストフを研究していた。そして彼もまた、この青年の中に「何か」があることを、ただちに見て取った。しかし彼は、音楽にも音楽家にも興味をもたなかった。それは彼の部門ではなかった。何にもわからなかったし、わからないことを隠しもしなかった。むしろそれを自慢にさえていた。——（こういう種類の人が無知を表白するのは、それを誇らんがためにである。）——そしてクリストフの方でも、その銀行家なんか仲間に加わらなくても別に遺憾と思わないことや、ユーディット・マンハイム嬢との会話だけでその招待の一夜には十分であるということや、他に悪意のない無作法な様子で明らかにさまに見せつけていたので、ロタール老人は面白がって、暖炉の片隅にすわり込んでいた。そして新聞を読みながら、皮肉な耳をぼんやり傾けて、クリストフの訳のわからない言葉とその奇怪な音楽とを聞いていた。

そんな音楽を理解して喜びを感じずするような人があるかと思つては、おりおりひそかな笑いをもらしていた。もはや会議の筋道についてゆくだけの労をも取らなかつた。新来の客の真価を知るのは、娘の知力に一任していた。彼女は真面目まじめにその役目を果たしていた。クリストフが帰つてゆくと、ロタールはユーディットに尋ねた。

「やあ、かなり本音を吐かせたようだね。どう思う、あの音楽家を？」

彼女は笑い、ちよつと考え込み、一言にまとめて、言つた。

「少し足りないところがあるようですが、でも馬鹿じゃありませんわ。」

「なるほど、」とロタールは言つた、「わたしもそう思つた。で、成功するだろうかね？」

「するでしょうよ、しつかりしてますわ。」

「それは結構だ。」とロタールは、強者にのみ加担する強者のりっぱな理論をもつて言つた。「では助けてやらなくちやいけまい。」

クリストフの方では、ユーディット・マンハイムにたいする賛美の念をもち帰つた。けれども彼は、ユーディットがみずから思つてるほど心を奪われてはいなかつた。二人とも——彼女はけいびんその慧敏けいびんさによつて、彼は知能の代わりとなつてる本能によつて——等しく

相手を見誤っていた。クリストフは、彼女の顔がんぼう貌の謎なぞと頭腦生活の強烈さとに蠱惑こわくされていた。しかし彼女を愛してはいなかった。彼の眼と理知とはとらえられていたが、彼の心はとらえられていなかった。——なぜか？——それを説明するのはかなり困難に思える。彼女のうちに曖昧あいまいな気懸りきがかりな何かを、認めたからであつたらうか？　しかしそれは他の場合であつたら、彼にとつては、ますます愛するようになるべき一つの理由であるはずだつた。恋愛は、苦しい破目に陥つてゆくことを感ずる時、ますます強烈になつてゆくものである。——クリストフがユードイツトを愛しなかつたとしても、それは二人のどちらの罪でもなかつた。愛しない真の理由は、二人のいずれにとつてもかなり面白からぬことではあるが、彼が最近の恋愛からまだ十分遠ざかつていなかったといふことである。経験が彼を聡明そうめいにならしたのではなかつた。しかし彼はアーダを非常に愛し、その情熱のうちに多くの信念や力や幻を浪費したので、今は新しい情熱にたいしてそれらが十分残つていなかった。他の炎が燃えたつ前に、彼は心の中に他の薪を用意しなければいけなかつた。まずそれまでは、偶然に燃え出す一時の火、火災の余炎があるばかりで、それはただ輝いた暫時ざんじの光を発しては、そのまま燃料がなくて消えてゆくのだつた。六か月も後だつたらおそらく、彼は盲目的にユードイツトを愛したろう。が今では、彼は彼女のうちに友だち

以上の何物をも認めなかつた——確かにやや不安な友だちではあつたが。——しかし彼はその不安を払いのけようとつとめた。その不安は彼にアーダのことを思い起こさせた。それは魅力のない思い出だつた。ユーディットに彼がひきつけられたのは、彼女が他の女と異なつたものをもつてゐるからであつて、他の女と共通なものをもつてゐるからではなかつた。彼女は彼が出会つた最初の理知的な女であつた。彼女は頭から足先まで理知的であつた。彼女の容色さえも——その身振り、動作、顔立ち、唇の皺、眼、手、上品な痩せ方、——皆理知の反映であつた。身体は理知によつて形付けられていた。理知がなかつたら、彼女は醜いと見えるかもしれないなかつた。そしてこの理知が、クリストフの心を歓ばせた。彼女は彼女を實際以上に広濶自由であると思つた。彼女のうちに案外なものがあるのを知らなかつた。彼は彼女に心をうち明け、自分の考えを彼女に分かちたいという、熱烈な欲求を感じた。彼はまだかつて、自分のことを本氣に聞いてくれる者を見出さなかつた。そして今、一人の女友だちに出会うのはなんたる喜びだつたらう！ 姉妹がないことは、幼年時代の遺憾の一つだつた。姉妹が一人あつたら、兄弟よりもずっとよく自分を理解してくれるだろうと、彼には思われた。ユーディットに会つた後彼は、親愛なる友情にたいするそのむなししい希望がよみがえつてくるのを感じた。彼は恋愛のことは考えなかつた。恋して

いなかったので、恋愛は友情に比べるとつまらないもののように思われた。

ユーディットは間もなく、右の微妙な点を感じた。そしてそれに気を悪くした。彼女はクリストフを恋しはしなかったし、また、町の富裕で上流に位する青年らを幾人も夢中にならしていたので、クリストフが自分を恋していると知っても、おそらく大なる満足は感じなかったであろう。しかし、彼が自分を恋していないと知っては、多少の憤懣ふんまんを禁じ得なかつた。彼に理性的な影響しか与え得ないのを見るのは、やや屈辱的なことだつた。

（没理性的な影響は、女の魂にとつては特別な価値をもつてゐるものである。）しかも彼女は、その理性的な影響さえもほんとうに与えてゐるのではなかつた。クリストフは自分の頭でそれを作り出しているのみだつた。ユーディットは専横な精神をもつてゐた。知り合ひの青年らのかなり柔軟な思想を、随意に捏ねかえすことに慣れてゐた。そしてその青年らを凡庸ぼんようだと判断してゐたので、彼らを統御するのにあまり多くの喜びを見出さなかつた。ところがクリストフに対すると、統御の困難が多いだけに、興味もいっそう多かつた。彼の抱負には無関心だつたが、しかしその新しい思想を、その乱雑な力を指導して、その価値を發揮させる——もちろん自己流にであつて、彼女が別段理解しようとも思わないクリストフ流にはなかつたが——価値を發揮させることは、彼女には愉快なことだつたに違

いない。が彼女はただちに、それは争鬪なしにはできないということを見て取った。彼女はクリストフの中にあるあらゆる種類の既成定見を不条理で幼稚だと思われるあらゆる觀念を、一々調べ上げた。それらのものは雑草だった。彼女はそれらを引き抜こうと努めた。しかし一つも引き抜けなかった。彼女は自尊心の最も小さな満足をも得ることができなかった。クリストフには手のつけようがなかった。彼は彼女に心を奪われていなかった。彼女のために自分の思想をまげる理由を少しももたなかった。

彼女は執拗しつようになつていった。そしてしばらくの間、彼を征服しようと試みた。クリストフは当時、精神の明晰めいせきさをもつてはいたけれど、も少しでふたたび虜とりこになるところだった。人はおのれの高慢心と欲望とに媚こびるものから欺かれやすい。そして芸術家は他の人よりもいつそう多くの想像力をもっているから、さらに二倍も欺かれやすい。クリストフを危険な親昵しんじつに引き込むのは、ユーディットのやり方一つだった。その親昵は彼の精神をも一度うちくじき、おそらくは前回よりもさらに完全にうちくじいたかもしれないなかつた。しかし例によつて彼女はすぐに飽いてきた。彼女はその征服を旁に働かないものだと思つた。クリストフはすでに彼女を退屈たいくつがらせていた。彼女はもはや彼を理解していなかつた。

彼女はもはや、ある限界を越えると彼を理解していなかった。その限界以内では、すべてを理解していた。それ以上を理解するには、彼女のりっぱな理知だけではもう足りなかった。心が必要であつたろう。もしくは、心がないならば、一時その幻影を与えるところのものが、愛が、必要であつたろう。彼女はよく、人物や事物にたいするクリストフの批評を理解した。彼女はそれを面白く思い、かなりほんとうだと思った。自分でもそういう意見をいだかないでもなかつた。しかし彼女の理解しなかつたことは、それらの思想が彼の実生活上にある影響を有し得る、しかもその適用が危険で邪魔である時にもそうであるということだった。クリストフが万人にたいしまた万物にたいして取つていた反抗的な態度は、なんらの効果にも達しないものであつた。世界を改造するつもりだとは、いかに彼でも想像してはいなかつたろう。……では？……いたずらに頭を壁にぶつつけてるばかりではなかつたか。知力のすぐれた者は、他人を批判し、ひそかに他人を嘲笑い、多少他人を軽蔑しはする。しかし彼も、他人と同様なことを行なつて、ただ少しよく行なつてるのみである。そういうのが、おのれの他人の上に立たせる唯一の方法である。思想は一個の世界であり、行為は別個の世界である。おのれを思想の犠牲となる必要がどこにあるか？ 真正に考える、それはむろんのことだ。しかし真正に口をきく、それがなんの役にた

とう？ 人間はかなり愚かなもので、真実を堪えることができないからといって、彼らに真実を強^しいる必要があるか。彼らの弱点を容認し、それに折れ従うようなふうを装^{よそお}い、人を軽蔑する自分の心の中でわが身の自由を感じること、そこにこそひそかな享樂がないであろうか。それは伶俐^{れいり}な奴隸^{どれい}の享樂だと、言わば言うがいい。しかし世の中では結局奴隸となるのほかはない以上、同じ奴隸となるならば、自分の意志で奴隸となつて、滑稽^{こっけい}無益な争鬪を避けた方がよい。奴隸のうちで最もいけないのは、おのれの思想の奴隸となつて、それにすべてをささげることである。自己を妄^{もうしん}信してはいけない。——彼女は、クリストフがどうもそう決心しているらしく思われるとおりに実際においても、ドイツ芸術とドイツ精神との偏見にたいして一徹な攻撃的の道を固執するならば、彼はすべての人を敵に回し、保護者をも敵に回すようになるだろうということ、明らかに見て取つていた。彼は必ずや敗亡に終わるに違^まい^ねなかつた。何故に彼が自分自身にたいして奮激し、好んで身を破滅させるような真似^{まね}をするかを、彼女は了解できなかつた。

彼を理解せんがためには、成功は彼の目的ではなく、彼の目的はその信念であるということをもまた、彼女は理解しなければならなかつたろう。彼は芸術を信じ、おのれの芸術を信じ、おのれ自身を信じ、しかも、あらゆる利害問題のみならずおのれの生命よりもさ

らにすぐれた現実に対するように、それを信じていた。彼が彼女の意見に多少いらだつて、率直に語気を強めながら右のことを言い出す時、彼女はまず肩をそびやかした。彼女は彼の言葉を真面目まじめに取りなかつた。そしてそこに、兄の口から聞き慣れたのと同じような大言壮語があると思つた。彼女の兄は時々、途方もない莊嚴な決心を言明しながら、それを実行しないようによく用心していたのである。ところが次に、クリストフがほんとうにそれらの言葉を妄信もうしんしていることを見て取ると、彼女は彼を狂者だと判断して、もはや、彼に興味を覚えなかつた。

それ以来彼女はもはや、彼によく思われるように見せかけようとは努めなかつた。ありのままの自分をさらけ出した。そして彼女は、最初の様子にも似ず、またおそらく彼女が自分で思つてるよりも、ずっとドイツ的であり、しかも平凡なドイツ女であつた。——イスラエル民族に非難するのに、彼らがいかなる国民にも属さないで、種々の民衆のうちに居を定めても少しもその影響を被こわむらず、特殊な同一性質を有する一民衆を、ヨーロッパにまたがつて形成してるといふことをもつてするのは、まさしく不当である。實際、通過する国々の痕跡こんせきを、イスラエル民族ほど容易に受けやすい民族は他にない。フランスのイスラエル人とドイツのイスラエル人との間には、多くの共通な性格がありはするけれども、

なおいつそう多くの異なった性格がある。それは彼らの新しい祖国に起因するのである。彼らは驚くほど速やかに、新しい祖国の精神的習慣を、実を言えば精神よりも多くその習慣を、取り入れてしまう。ところが習慣というものは、あらゆる人間にあつては第二の性質であるが、大多数の人間にあつては唯一無二の性質となるから、その結果、一つの国に土着せる公民の多数が、深い正当な国民的精神をみずからは少しももたないでいて、イスラエル人にそれが欠けていると非難するのは、きわめて不都合なことと言わなければならぬ。

女は常に、外的影響に、より敏感であり、生活条件に順応しそれに従つて変化するのが、より迅速じんそくではあるが——イスラエルの女は、全ヨーロッパを通じて、住んでる国土の肉体的および精神的の風潮を、しばしば大袈裟おおげさに採用するが——それでもなお、民族固有の面影を、その濁つた重々しい執拗しつような風味を、失うものではない。クリストフはそれに驚かされた。彼はマンハイム家で、ユーディットの伯母おばたちや従姉妹いとこたちや友だちらに出会つた。彼女らのうちのある顔は、鼻に近い鋭い眼や、口に近い鼻や、きつい顔立ちや、褐色の厚い皮膚の下の赤い血などをもつてして、いかにもドイツ離れがしていて、いかにもドイツの女らしくは見えないようにできていたけれど——しかし彼女らは皆、奇体にドイ

ツ婦人となっていた。話し振りから着物の着方までそっくりで、時としてはあまり似通い過ぎていた。ユー・ドイツトはだれよりもまさっていた。そして他の女たちと比較してみると、彼女の理知のうちには特殊な点が見え、彼女の一身のうちには人工になった点が見えていた。それでも彼女はやはり、他の女たちの欠点の多くをそなえていた。精神的にははるかに自由——ほとんど絶対に自由——であったが、社会的には、より自由ではなかった。もしくは少なくとも、社会的の問題になると、彼女の実利的觀念がその自由な理性と交替するのだった。彼女は世間や階級や偏見に結局は自分の利益を見出したので、それらを信じていた。いかにドイツ精神を嘲つても、やはりドイツの風潮に執着していた。著名な某芸術家の凡庸さを賢くも感ずるとしても、なお彼を尊敬しないではおかなかつた。なぜなら彼は著名であつたから。そしてもし個人的に彼と交際がある場合には、彼を賞賛するのだった。なぜならそれは彼女の虚栄心を喜ばせることだったから。彼女はブラームスの作品をあまり好まなかつた。そしてひそかに、第二流の作家ではないかと疑っていた。しかし彼の光榮に彼女は威圧された。そして彼から五、六通の書信をもらつたことがあるので、その結果彼女にとっては、彼は明らかに当時の最も偉大な音楽家だということになつた。彼女はクリストフの真価については、またデトレフ・フォン・フライシエル首席中尉

の愚劣さについては、なんらの疑いをもいだいてはいなかった。しかしクリストフの友情よりも、フライシエルが彼女の巨万の富にたいしてなしてくれる追従の方を、いっそう歎んでいた。なぜなら、馬鹿な将校もやはり自分と別な一階級の一人であつたから。そしてこの階級にはいることは、ドイツのユダヤ婦人にとっては他の婦人よりもいっそう困難なことだつた。彼女は愚かな封建的思想に欺かれてはしなかつたけれど、また、もしデトレフ・フォン・フライシエル首席中尉と結婚するとしたら、かえつて向こうに大なる光榮を与えてやることになるのだとよく承知してはいたけれど、それでもなお彼を征服しようと努めていた。彼女はその馬鹿者にやさしい目つきを見せながら、また自分の自尊心に媚びながら、みずから身を卑しくしていた。傲慢ごうまんでありまた種々の理由から傲慢であり得るこのユダヤ女、銀行家マンハイムの、知力すぐれ人を軽蔑けいべつしがちなこの娘は、身を墮おとしたがつていたし、自分が軽蔑けいべつしてゐるドイツの小中流婦人らのいづれもと、同じようなことをしたがつていた。

経験は短かかつた。クリストフはユードイットに幻をかけたのほとんど同じくらいに早く、その幻を失つてしまつた。それにはユードイットの方でも、彼に幻を持続させるた

めの労を少しも取らなかつた、ということ認めなければならぬ。かかる氣質の女が、相手を判断し相手から離れてしまうと、もはやその日から彼女にとつては、その相手の男は存在しないも同じである。彼女はもはやその相手を眼に留めない。そして自分の犬や猫の前で赤裸になるのをはばからないと同じように、その相手の前で平然たる厚かましきをもつておのれの魂を赤裸にしてはばからぬ。クリストフはユーディットの利己心を、その冷血を、その凡庸な性格を、見て取つた。彼はすっかり虜とりこになつてしまふ隙ひまがなかつた。それでも、彼を苦しめるには、彼に一種の苦熱を与えるには、それでもう十分だつた。彼はユーディットを愛しないで、こうであり得るかもしれないという彼女を——こうであるに違いないという彼女を、愛してゐた。彼女の美しい眼は、悩ましい幻惑を彼に及ぼしてゐた。彼はその眼を忘れることができなかつた。その奥底に眠つてる沈鬱ちんうつな魂を今や知りながらも、彼はなお見たいと思つておりに、最初見たとおりに、その眼を見つづけてゐた。それは、恋なき恋の幻覚の一つであつた。そういう幻覚は、作品にまったく没頭してはいないおりの芸術家らの心の中で、大なる地位を占むるものである。通りすがりの一つの顔も、彼らにこの幻覚を与えるに足りる。彼らはその女のうちに、彼女のうちにあつて彼女みずから知りもせず気にもかけていないあらゆる美を、見て取るのである。そして彼

女がその美を念頭においていないことを知っては、彼らはなおいつそうそれを愛する。だれにも価値を知られずに、そのまま死んでゆこうとする美しいもののように、彼らはそれに愛着する。

おそらくクリストフは誤っていたろう。ユードイット・マンハイムは、実際の彼女より以上のものではあり得なかつたろう。しかしクリストフは、しばらく彼女に望みをかけていた。そして魅力はつづいた。彼は彼女を公平に判断することはできなかつた。彼女の有する美点はすべて、彼女にのみ属するもののように、彼女の全体であるように、彼には思われた。彼女の有する卑俗な点はすべて、彼女のユダヤとドイツとの二重な民族に、彼は帰せしめていた。そしておそらく彼は、ユダヤ民族よりもドイツ民族の方にいつそう多く、その恨みをいだいていたに違いない。なぜならドイツ民族にたいしていつそう多くそれを苦しまねばならなかつたから。彼はまだ他のいかなる国民をも知らなかつたので、ドイツ精神は彼にとつて一種の替罪羊みがわりひつじであつた。彼はそれに世界のあらゆる罪を負わしていた。ユードイットが彼に与えた失望の念は、彼にとつては、ますますドイツ精神を攻撃する理由となつた。かかるりつぱな魂の自由な勢いをくじいたことを、彼はドイツ精神に許せなかつた。

そういうのが、イスラエル民族と彼との最初の邂逅かいこうであった。他の民族と乖離かいりしてるこの強健な民族のうちに、彼はおのれの戦いの味方を見出し得ることと想っていた。ところがその望みを彼は失った。この民族は人から聞いたところよりずっと弱いものであり、外部の影響にずっと染みやすい——あまりに染みやすい——ものであるということをし、いつも極端から極端へ彼を走らせる熱烈な直覚力の変易性によって、すぐに思い込んでしまった。この民族は本来の弱さと、その途上に積もっていた世界のあらゆる弱さとを、皆になつてゐるのだつた。クリストフがおのれの芸術の槓桿こうかんをすえるべき支点を見出し得るのは、まだここではなかつた。否彼はこの民族とともに、砂漠さばくの砂の中に埋没しかつたのである。

彼はその危険を見て取り、またその危険を冒すだけの自信を感じなかつたので、マンハイム家を訪れるのをにわかにやめた。幾度も招かれたが、理由も述べずに断つた。彼はその時までいつも熱心に來たがつてばかりいたので、かく急激な変化は人目についた。人々はそれを彼の「風変わりな性質」のゆえだとした。しかしマンハイム家の三人は一人として、ユーディットの美しい眼がそれに関係あることを疑わなかつた。そしてこのことは、食卓でロターールとフランツとの擲揄からかいの種となつた。ユーディットは肩をそびやかしながら、

見事な征服でしようと言った。そして冷やかに兄へ向かって、「冗談もいい加減にしてください」と頼んだ。しかし彼女はクリストフがまたやって来るようにと種々仕向けた。だれに聞いてもわからないある音楽上の質疑を解いてくれという口実で、彼に手紙を書いた。そして手紙の終わりに、彼があまりやって来ないことや彼に会うのを楽しみとすることなどを、親しげにそれとなく匂わした。クリストフは返事を書き、質疑に答え、多忙なことを告げ、そして姿を見せなかった。二人は時々芝居で出会うことがあった。クリストフは執拗に、マンハイム家の棧敷から眼をそらした。そして最もあでやかな笑顔を彼に見せようとしてるユーディットに、気づかないふうを装った。彼女は固執しなかった。そして彼に愛着してはいなかった。この少壮芸術家からまったく無駄な骨折りをさせられたことを、不都合だと考えた。彼はまた来たくなったら来るだろう。来たくなかったら――なあに、そんな者は来なくても構わない……。

彼が来なくてもよかった。実際彼がいなくても、マンハイム家の夜会には大きな穴があかなかつた。しかしユーディットは、心にもなくクリストフに恨みをいだいた。彼がそばにいる時には、彼女は彼を気になげなくてもそれを当然だと思っていた。そして彼がそれを不快に思ってる様子を示しても、許してやっていた。しかしその不快の念があらゆる関

係を破るまでに進んだことは、馬鹿げた傲慢心ごうまんと恋心こいしんよりもいっそう利己的な心とのゆえだと、彼女には思われた。——ユー・ドイツトは自分と同じ欠点を他人がもっている場合には、その欠点を許容しなかった。

それでも彼女は、クリストフがなすことや書くものをいっそうの注意で見守みまもった。様子にはそれと見せずに、好んで兄にその話をさした。クリストフとともに過ごした一日じゅうの会話を、兄に語らした。その話の合い間に、皮肉な意見をはさんで、一つの滑稽こっけいな点をも容赦せずに取り上げ、かくて次第に、クリストフにたいするフランツの感激をさまざまにいった。フランツはそれに気づかなかつた。

最初の間、雑誌では万事うまくいった。クリストフはまだ、同人らの凡庸さを洞見どうけんしていなかった。そして彼らの方は、クリストフが仲間であるから、その天才を認めていた。彼を見出したマンハイムは、彼の書いたものを何一つ読んだこともないのに、どこへ行つても、クリストフは立派な批評家で、これまではおのれの天職を思い誤あやっていたが、自分マンハイムが彼に真の天職を示してやったのだと、いつもくり返し吹聴ふいちようした。一同は彼の書く物を、好奇心をそそるような奇体な言葉で予告した。そして彼の最初の論説は実

際、この小さな町の無気力な雰囲気ふんいきの中では、家鴨あひるの沼の中に落ちた一個の石のごときも
 のだった。それは音楽の過剰と題されていた。

「音楽が多すぎる、飲み物が多すぎる、食べ物が多すぎる！」とクリストフは書いていた。
 「人は腹もすかず、喉のどもかわかず、必要も感ぜずに、ただ貪どんらん婪な習慣から、食ったり飲
 んだり聞いたりしている。そういうのが、ストラスブルグの馬鹿な摂生法だ。この人民ら
 は貪どんしよく食症にかかっている。与えられるものならなんでも構わない。トリスタンでもゼ
 ツキンゲンのラツパ手でも、ベートーヴェンでもマスカーニでも、遁走曲とんそうでも、速歩舞
 踏曲でも、また、アダム、バツハ、プツチーニ、モーツアルト、マルシユネル、なんでも
 構わない。彼らは何を食つてるのか自分でも知らない。大事なのはただ食うということだ。
 そして食うことにも、もはや楽しみを覚えなくなっている。音楽会での彼らを見るがいい。
 ドイツの快活と世に言われているが、彼らは快活のなんたるやをも知らないのだ。彼らは
 常に快活にしている。彼らの快活は、彼らの悲哀と同じく、雨のように広がっている。それ
 は塵埃じんあいの喜びであり、弛緩しかんしきつて無力である。彼らはほんやり微笑ほほえみながら、音響に
 音響に音響を聞きふけて、幾時間もじつとしている。何にも考えてはいない。何にも感
 じてはいない。まるで海綿だ。しかし、真の喜びや真の悲しみ——力——は、一樽たるのビー

ルのように、幾時間にも分け広げられるものではない。それは人の喉元のどをとらえ、人を打ち倒す。そのあとではもはや、なお何かを飲み下したい欲求は感ぜられない。それだけで十分なのだ！……

「音楽が多すぎる！ 諸君はみずから身を殺し、また音楽を殺している。みずから身を殺すのは、それは諸君の勝手である。しかし音楽については——いい加減によしてもらいたい。神聖なものと醜劣なものとを同じ籠かごの中に投じながら、すなわち諸君がいつもなしているように、連隊の娘を材料にした幻想曲ファンタジアとサキソフオーンの四重奏曲カルテットとの間にパルシフアルの前奏曲をはさみ、あるいは黒人舞踏クークウオークの一節ひとふしとレオンカヴァアロの愚作とをベートーヴェンのアダジオの両側に並べたりして、世にある美しいものを汚すのは、許しがたいことだ。諸君は音楽的の大国民だと誇っている。諸君は音楽を愛すると自称している。だがいったい、どういう音楽を愛するのか！ よい音楽をなのか、または悪い音楽をなのか？ 諸君は皆一様にそれらを喝かつさい采するではないか。とにかく選択してみたまえ！ ほんとうに諸君が欲するのはなんだ？ それを諸君はみずから知っていない。知ろうとも思っていない。一方を選ぶことを、誤りをしやすまいかを、あまりに恐れているのだ。……そんな用心なんか、悪魔にでもいつちまえた！——俺おれは各派を超越してる、と諸君は言う

だろう。——超越、それは以下という意味だ……。」

そしてクリストフはチューリッヒの剛健な市民ゴットフリート・ケルレル老人——峻^{しゅん}巖^{げん}な誠実さと郷土的な強い風味とによつて彼には最もなつかしい作家の一人——の詩句を引用していた。

流派を超越せりと好みて傲岸^{ごうがん}を装う者、

寧ろ遙^{むし}か下位に属する者なるべし。

「真実たるの勇氣をもちたまえ。」と彼はつづけていた。「醜きままたるの勇氣をもちたまえ。もし諸君が悪い音楽を好むならば、それときっぱり言うがいい。ありのままのおのれを示すがいい。あらゆる曖昧^{あいまい}さの嫌悪^{けんお}すべき粉飾を、魂から洗い落すがいい。満々たる水で魂から洗うがいい。どれくらい長い間、諸君は自分の顔を鏡に映して見たことがないというのか？ これから僕がそれを見せてやろう。作曲家、演奏家、管絃楽長、歌手、それから汝親愛^{なんじ}なる聴衆、君らに一度は自己の姿を知らしてやろう。……君らはなんであろうと勝手だ。しかしぜひとも真実でありたまえ！ たとい芸術家らがまた芸術が、それ

を苦しむようになろうとも、真実でありたまえ！もし芸術と真実とがいつしよに生き得ないならば、芸術は死滅するがいい。真実、それが生命だ。死、それは虚偽だ。」

年少気鋭で過激でかなり悪趣味なこの宣言は、もとより読者を絶叫せしめた。けれども、万人がその目標とされていながら、だれ一人として明らかに名ざされていしなかつたので、自分のことだと見なすものはなかつた。各人が真実の最良の友であり、そう信じており、あるいはそう考えていた。それでこの論説の結論は、だれからも攻撃されるの恐れがなかつた。人々はただ全体の調子を不快に思った。そしてそれがあまり妥当なものではなく、ことに半官的な芸術家の言としてはそうであるというのが、一般の意見であつた。数人の音楽家らは活動しだして、鋭い反抗の態度を取つた。彼らはクリストフがそのままにとどまりはすまいと予見していた。またある音楽家らは巧みな態度を取るつもりで、クリストフにその勇敢な行ないを称揚した。でも彼らはやはり、次回の論説には不安をいだいていた。

そういう二様の策略は、共に同じ結果をしか得なかつた。クリストフはもう飛び出していた。何物も彼を引止めることができなかつた。そして彼があらかじめ言ったとおりに、作者も演奏者も皆引き出された。

まつ先に血祭に上げられたのは音楽長らであった。管弦楽統率術にたいする一般の意見を、クリストフは少しも眼中におかなかつた。彼はその町の同僚や近隣の町の同僚を、一々それと名ざした。名ざさない場合には、だれにも一見して明らかであるような諷刺ふうしを用いた。宮廷管絃楽長アロイス・フォン・ヴェルネルの無気力が述べられていることは、だれにでもわかつた。これは種々の名誉な肩書になつて用心深い老人で、万事を氣づかい、万事を慎み、部下の音楽家らに一言の注意を与えるのも恐れて、彼らのなすままを従順にながめ、また演奏の番組のうちには、幾年もの引きつづいた成功によつて箔はくをつけられたものか、あるいは少なくとも、何か官僚的權威の公然の印をおされたものかでなければ、何一つ思い切つて加えることもできなかつた。クリストフは反語的に、彼の大胆なやり方を称賛した。ガーデやドヴォルザークやチャイコフスキーを見出したのを祝した。彼の指揮する管絃楽の、確固たる正確さ、メトロノームきんせい的な均せい齊せいさ、常に美妙な色合いを失わない演奏法を、激称した。次の音楽会には、チエルニーの急速なる練習曲を演奏するがいと提議した。そして、あまり身体を疲らせないように、あまり憤激しないように、貴重な健康をいたわるようにと頼んだ。——あるいはまた、彼がベートーヴェンのエロイカを指揮した方法にたいし、憤怒ふんぬの叫びをあげた。「大砲だ、大砲だ！　こういう奴らを

掃蕩そうとうしてくれ！……君らはいつたい、戦いとはいかなるものであるか、人間の愚昧ぐまいと癡どとにたいする争闘うもとはいかなるものであるか——歓喜の笑いを浮かべてそれらを蹂躪じゅうりつする力とはいかなるものであるか、それを少しも知らないのだ……。それがどうして諸君にわかるう？ 力が戦うのは諸君にたいしてである！ ベートーヴェンのエロイカを聞いたり演奏したりしながら、欠伸あくびを我慢することに——（なぜならこの曲は諸君を退屈たいくつがらせるからだ。……退屈だと、退屈でたまらないと、告白したまえ！）——あるいは、貴顕な人々の通過のさいに、帽をぬぎ背をかがめて風を物ともしないことに、諸君はおのれのうちの勇壯をことごとく浪費してゐるのだ。」

過去の偉人らの作を「古クラシック典クラシック」として演奏してゐる音楽学校の重鎮じゆうしんらにたいしては、彼はいかに譏刺きしを事としてもまだ足りなかつた。

「古クラシック典クラシック！ この言葉にはあらゆるものが含まれている。自由な情熱が、学校で使えるように整理し加減されてゐるのだ！ 風に吹かれてゐる広野たる人生が、運動場の四壁のうちおののに閉じこめられてゐるのだ！ 戦おののく心の粗野な誇らかな律動リズムも、高拍子の撞しゅもくづえ木杖しゅもくづえによりかかり跛を引きながら、お人よしのくだらぬ道を安心して進んでゆく、四拍子一節の時計の音になされてゐるのだ！……大洋を享樂せんがためには、諸君はそれを金魚といっしよにガ

ラス瓶びんの中に入れたがるに違いない。諸君は人生を殺してしまった時に、初めて人生を解するのだ。」

クリストフは、彼が「剥製はくせい者」と名づけた人々にたいして温和ではなかったが、「曲馬師」ら、腕の丸みと粉飾した手とを称賛さしに押し出してくる名高い音楽長らにたいしても、やはり温和ではなかった。彼らは、大楽匠を踏み台にしておのれの腕前うでまへを揮い、広く世に知られてる作品を形かたなしにしようとしてつとめ、ハ短調交響曲の籥たがの飛びぬけをやつてゐるのだつた。クリストフは彼らを、めかし婆ばば、ジプシー、綱渡り、などと呼んでゐた。

妙技を有する音楽家らが、豊富な材料を供給してくれた。彼は彼らの奇術的興行を批判することを回避した。彼の言葉に従えば、そういう機械仕掛からくりの技芸は、工芸学校に属する手法であつて、それらの仕事の価値を評価し得るものは、時間と音数と消費された精力とを記載する図表ばかりであつた。時とすると、二時間もの音楽会で、唇くちびるに微笑を浮かべ、眼を輝かして、最もひどい困難に——モーツアルトの幼稚なアンダンテをひくという困難に、首尾よく打ち勝つた高名なピアノの名手を、彼は蔑視べつしすることもあつた。——もとより、彼は困難に打ち克かつた快樂を否認するものではなかつた。彼もまたその快樂を味わつたことがあつた。それは彼にとって生の歓びの一つであつた。しかしながら、その最も物

質的な方面のみ見て、芸術上の勇壯心をことごとくそこに限ってしまふことは、彼には滑こ稽つげいな墮落的なことに思われた。彼は「ピアノの獅子しし」や「ピアノの豹ひょう」を許容することのできなかつた。——また彼は、ドイツで名高いりっぱな術げんかく学者にたいしても、あまり寛大ではなかつた。彼らは、楽匠らの原作の調子を少しも変えまいと正當に注意し、思想の余勢を細心に抑圧し、あたかもハンス・フォン・ブーローウのように、熱烈な奏鳴曲ソナタを演ずる時にも、語法の教えでも授けてるような調子であつた。

歌手らの順番もまわつてきた。彼らの粗野な重々しさと田舎風いなかの強い語勢について、クリストフはたくさん言うべきことをもっていた。新しい女たる女歌手との最近の葛藤かつとうが頭にあるからばかりではなく、自分にとつて苦痛だつた多くの公演にたいする怨恨えんこんがあつた。そこでは耳と眼とどちらが多く苦しめられるのかわからなかつた。醜い舞台装置や不体裁な衣装やけばけばしい色彩などを批評するのに、クリストフは比較の言葉も十分に見出しかねた。人物や身振りや態度の卑俗さ、不自然きわまる演技、他人の魂を装よそおうことにおける俳優らの無能さ、やや同じような声の調子で書かれてさえいれば、一つの役から他の役へと彼らが移つてゆく驚くべき無関心さ、それらのことに彼は胸を悪くした。肥満しきつた快活豪奢ごうしゃな婦人らが、代わる代わるイソルデやカルメンに扮装ふんそうして現われた。

アンフォルタスがフィガロを演じた。しかしクリストフがおのずから最もよく感じたことは、歌の醜いことであつて、ことに、旋律の美が本質的要素たる古典的作品における、歌の醜いことであつた。もはやドイツではだれも、十八世紀末の完全な音楽を歌うことができなかつた。歌おうとつとめる者がなかつた。ゲーテの文体のようにイタリー的な光明に浴してゐるごとく思われる、グルツクやモーツアルトの明確素粋な様式——すでに変化し始め、ウエーバーとともに震え揺めき始めた、その様式——クロシアトの作者の鈍重な漫画によつて滑稽化された、その様式——それはワグナーの勝利によつて滅ぼされてしまつていた。鋭い叫びを上げるワルプルギスの荒々しい羽音は、ギリシヤの空を覆うていた。オデインの密雲は光を消滅さしていた。今はもはやだれも、音楽を歌おうと思ふ者がなかつた。人は詩を歌つていた。細部の閑却や醜いものや誤れる音さえも、大目に見のがされていた、ただ作品全体のみが、思想のみが、重要であるという口実のもとに……。

「思想！ それについて一言してみよう。なるほど諸君は思想を理解するような顔つきをしている。……しかしながら、諸君が思想を解しようと思ふまいと、どうか、その思想が選んだ形式を尊敬してもらいたい。何よりもまず、音楽は音楽であつてほしい、音楽のままであつてほしい。」

その上、ドイツの芸術家らが表現と深い思想とにたいして払ったと自称する、この大なる注意は、クリストフの意見によれば、おかしな冗談にすぎなかった。表現だと？ 思想だと？ そうだ、彼らはそれを至る所に——至る所に様に配置していた。毛織の舞踏靴ぶとうくつの中にも、ミケランジェロの彫刻の中と同じく——多くも少なくもなく同等に——思想を見出すのであった。だれの作をも、いかなる作をも、同じ力で演奏していた。要するに、多数の人々の考えでは、音楽の本質は——とクリストフは断言した——音量であり音楽的騒音であった。ドイツでかくも強く感ぜられてる歌唱の快楽は、声音的体操の愉悅にすぎなかった。空気で胸をふくらまし、それを元気に力強く長く調子をつけて吹き出すことが、その主眼であった。——そしてクリストフは、贅辞の代わりに健康の保証を、あるすぐれた女歌手にささげた。

クリストフは芸術家らを非難するばかりでは満足しなかった。彼は舞台から飛び出して、ぼうぜん 呆然と口を開きながらそれらの演奏に臨んでる聴衆をもなぐりつけた。聴衆は惘然とぼうぜんして、笑つていいか怒つていいかもわからなかった。彼らはその非道な仕打ちにたいして怒号してもよかった。元来彼らは芸術上の戦いにはいっさい加わるまいと注意していた。あらゆる紛議の外に用心深く身を置いていた。そして間違いをしやすまいかと気づかかって、

すべてのものを喝采^{かつさい}していた。ところが今クリストフは、彼らの喝采^{かつさい}を罪悪^{つみ}とした。……悪作^{あくさく}を喝采^{かつさい}するというのか！ それだけでもたまらないことだ！ がクリストフはなお極端^{はげ}に奔^はつた。彼が彼らに最も非難^{ひなん}したのは、偉大な作品を喝采^{かつさい}することであつた。

「道化者^{だわしや}めが、」と彼は彼らに言った、「諸君はそんなに多くの感激^{かんじき}を持ち合わせてると人から思われたいのか。……ところが、諸君はちやうど反対^{はんたい}のことを証明^{しやうめい}してるのだ。喝采^{かつさい}したいなら、喝采^{かつさい}に相当^{さうたう}する作品^{さくひん}か楽節^{がくせつ}かを喝采^{かつさい}したまえ。モーツアルトが言ったように、『長い耳^{みみ}のために』作^{つく}られた騒々^{さわさわ}しい結末^{けつまつ}を、喝采^{かつさい}したまえ。そこでは有頂天^{うじやうてん}に拍手^{はつしやう}したまえ。驢馬^{ろば}の鳴き声^{なきこゑ}が初めから予想^{よそが}されてるんだ。それが音楽会^{おんがくかい}の一部^{いちぶ}となっているんだ。——しかしながら、ベートーヴェンの莊嚴^{じやうげん}ミサ曲^{みさく}のあとには！……不幸^{ふこう}なるかなだ！……これは最後の審判^{しんぱん}である。あたかも大洋上^{たいうやうじやう}の暴風^{ぼうふう}のように、狂^{くる}いだつ榮光^{えいこう}が展開^{かくげん}するのを、諸君は見たのだ。強力^{きやうりき}暴^{ぼう}戻^もなる意力^{いりき}の竜巻^{たつまき}が過ぎるのを、諸君は見たのだ。それは進行^{しんこう}を止めて雲^{うみ}につかまりながら、両^{りやう}の拳^{こぶし}で深淵^{しんえん}の上方^{じやうほう}にしがみつき、そしてまた全速力^{ぜんそくりき}で空間^{くわんかん}中に突進^{とつしん}する。風^{かぜ}は怒号^{どごう}する。その暴風^{ぼうふう}の最も強烈^{きやうりやう}な最中^{さいちゆう}に、にわか^{にわか}の転調^{てんてう}が、音^ねの反射^{はんしや}が、空^{そら}の暗黒^{あんこく}をうがって、蒼白^{そうはく}な海^{うみ}の上に、光^{ひかり}の延板^{えんばん}のように落ちてくる。それが終わりである。殺戮^{さつりく}の天使^{てんし}の猛然^{まげん}たる飛翔^{ひしやう}は、三度^{さんど}の稲妻^{いなづま}に翼^{よく}を縛^{ばく}

られて、ぴたりと止まる。周囲ではまだすべてが戦おのっている。酔える眼は眩くらんでいる。心臓は鼓動し、呼吸は止まり、四肢は痲痺まひしている……。そして最後の音が響き終わらないうちに、諸君はすでに快活に愉快になり、叫び、笑い、批評し、喝采する。……実に諸君は、何も見ず、何も聞かず、何も感ぜず、何も理解しなかったのだ、絶対に何物も！ 芸術家の苦惱も、諸君にとっては一場の見物となるのだ。一ベートーヴェンの苦悶くもんの涙を、諸君はみごとに描かれてると判断する。諸君は主の磔はりつけ刑にたいして『も一度！』と叫ぶかもしれない。諸君の好奇心を一時間の間樂しませるためには、偉大なる魂が一生の間苦悶のうちにもがくのだ！……」

かくてクリストフは、ゲートの偉大な言葉を、まだその尊大なる清朗さには到達していなかったけれども、みずから知らずして注釈したのであった。

民衆は崇高なるものをもてあそぶ。されどもしその真相を知らば、あえてながめ得るの力を有せざるべし。

クリストフはそこで止まればよかった。——しかし彼は勢いに駆られて、聴衆を通り越

し、あたかも砲弾のように、聖堂の中に、神殿の中に、凡庸者の犯すべからざる避難所の中に——批評界に、落ち込んでいった。彼は同輩らを砲撃した。彼らのうちの一人は、現存の作曲家中最も天分に富んだ者、新進派の最も進んだ代表者、すなわち、実を言えばかなり奇怪ではあるがしかし天才の閃きに満ちた標題交響曲シンフォニーの作者ハスレルを、あえて攻撃していた。子供のおりハスレルに紹介されたことのあるクリストフは、その昔受けた感激の感謝として、いつも彼にひそかな愛情をいだいていた。ところが今、明らかに無知な馬鹿批評家が、かかる人にたいして訓言を与え、秩序と規範との警告をなすのを見ると、彼は我れを忘れて憤った。

「秩序だと！ 秩序だと！」と彼は叫んだ、「君らは警察の秩序よりほかに秩序を知らないんだ。天才は踏み固められた道を進むものではない。天才は秩序を創り出し、おのれの意志を規範にまで高めるのだ。」

こういう傲慢な宣言の後に、クリストフはその不運な批評家をとらえて、彼が近ごろ書いた愚劣な事柄をことごとく取り上げ、厳格な是正を施してやった。

批評界全部が侮辱を感じた。それまで批評界は戦いから遠ざかっていた。彼らは側杖そばづえを食うようなことをしたくなかった。彼らはクリストフの人物を知っていた。彼の能力や

彼の短気なことを知っていた。それでただ数人の者が、彼のように天分のある作曲家が天職でもない方面に迷い込むのは遺憾だという旨を、控え目に発表したにすぎなかった。いかなる意見をいだいていたにせよ（彼らが一つの意見をもったとして、）彼らはクリストフにも、自分を批評されることなしにすべてを批評し得るといふ批評家の特権を、尊重していたのである。しかしクリストフが、批評家をつないでいる暗黙の因襲を乱暴にも破るのを見た時、彼らはただちにクリストフをもつて、一般秩序の敵であると見なした。一青年が国民的光榮になつてゐる人々にたいしてあえて敬意を失することは、だれにも皆いまいましいことに思われた。そして彼らはクリストフにたいして、猛烈な戦いを始めた。それは長い論説や引きつづいた論争ではなかつた。——（自分より武装の優まさつてゐる敵にたいすると、彼らはみずから進んでそういう陣地で戦おうとはしない。新聞記者というものは、敵の理論を眼中に置かず、またそれを読みもしないで、議論を戦わし得るといふ特殊な才能をもつてゐるものではあるが。）——彼らは長い経験から教えられていた、一新聞の読者は常にその新聞と同意見であるから、論争するようなふうを見せることだけでも、すでに読者の信用を弱めることになる。それゆゑ断定しなければならなかつた、あるいはさらに上策としては、否定しなければならなかつた。（否定は断定の二倍の力をもつてゐる。

それは重力の法則の直接的結果である。石を空中に投げ上げるよりも、それを落下させる方がはるかに容易である。）で彼らは好んで、不誠実な皮肉な侮辱的な小文の方法に頼つて、それを毎日倦むことなき執拗さをもつて、適当な場所にくり返し掲載した。いつもそれと名ざされてはいなかったが、しかし明らかにわかるようなやり方で、横柄なクリストフが嘲笑されていた。クリストフの言は変化されて、馬鹿げたものになされていた。報ぜられてるクリストフの逸話は、時とすると端緒だけがほんとうのこともあつたが、しかしその他はすべてこしらえ物で、全市の人々との間を不和になすために、またさらに宮廷との間を不和になすために、巧みに細工されたものであつた。また人身攻撃にまでわたつて、彼の顔立ちや服装などが悪口され、その漫画が一つ作られていたが、幾度もくり返し掲載されたために、ついには彼に似てると一般に思われるようになった。

それらのことはクリストフの友人らにとつては、もし彼らの雑誌が戦いの飛沫を受けさえしなかつたならば、別になんでもないことだつたらう。実際のところ、それは雑誌の広告だつた。同人らは雑誌を争論の渦中に投げ出そうとはせず、むしろ雑誌をクリストフから引き離そうと思つた。彼らは雑誌の評判が傷つけられるのに驚いた。そしてもし注

意しなければ、少なくとも編集の方において、遺憾ながら同等の責任を帯ぶるの余儀なきにいたるだろうということが、次第にわかつてきた。アドルフ・マイとマンハイムにたいするまだかなり手緩い攻撃が始められただけで、蜂の巣をつついたような騒ぎになった。マンハイムは面白がった。このことは、父や叔父たちや従兄弟たちや数多の親戚など、彼がなすことをすべて監視しそれをいまいまく思うのを自分の権利だとしてる連中を、たぶんは立腹させるかもしれないと思つた。しかしアドルフ・マイは本気に考えて、雑誌の評判を悪くすることをクリストフに非難した。クリストフは手きびしく撃退した。他の同人らは、害を被らなかつたので、いつも皆にたいして首領らしい振舞いをしていたマイが皆の代わりに一本やられたことを、かえつておかしがった。ワルトハウスはひそかに愉快がった。喧嘩があればかならず頭を割られる者も出て来る、と彼は言つた。もとよりそれは自分の頭を除外した意味でだつた。家柄から言つても交友から言つても、自分は打撃を受けないですむと思つていた。そして同人のユダヤ人らが多少いじめられても、別に不都合はないと考へていた。エーレンフェルトとゴールデンリンクとは、まだ害は被らなかつたが、多少の攻撃に狼狽するような者ではなかつた。彼らは答え返すことができるのだつた。彼らにとつてそれよりはるかに手痛いことは、クリストフが頑固に議論をつづけ

るために、友人らことに女の友人らとの仲が、妙に不和になることであつた。彼らは最初の論説を見ると、ごく愉快になつて面白い狂言だと思つた。クリストフの破竹の勢いを感じ、嘆息した。そしてただ一言忠告さえすれば、彼の争鬪的な熱気を和らげることができ、あるいは少なくとも、自分らが名ざす男や女からは彼の攻撃を転ぜしむることができると思ひ込んでいた。——ところがそうはいかない。クリストフは何物にも耳を貸さなかつた。なんらの勧告をも顧慮しなかつた。そして猛り狂つたように攻撃をつづけた。もしそのまま放つておいたら、もはやこの地方では生き得られなくなるかもしれない。すでに彼らのかわいい女の友だちらは、涙を流して口惜しがりながら、雑誌社へやつて来て苦情をもち込んだ。彼らはあらゆる手段をつくして、クリストフにせめてある批評だけなりと和らげさせようとした。しかしクリストフは少しも調子を変えなかつた。彼らは憤つた。クリストフも憤つた。しかし彼は少しもあらためなかつた。ワルトハウスは、自分になんら影響のない友人らの憤激を面白がり、彼らをますます怒らせるためにクリストフの味方をした。万人に向かつて頭からぶつかつてゆき、なんら退却の道を講ぜず、未来のために隠れ家を取つておこうとしない、クリストフの勇敢な無法さを、おそらく彼は彼らよりもよく評価し得たのであろう。次にマンハイムは、なんらの私心なしにその騒動を愉快がついて

た。几帳面きちょうめんな同人どもの中にこの狂人を引き入れたのは、面白い狂言のように思われた。そしクリストフが振り回す拳固げんこをも、また自分にふりかかってくる攻撃をも、斉ひとしく腹をかかえて笑っていた。妹の感化を受けて、クリストフにはまさしく足りないところが多少あると信じ始めてはいたものの、そのためにますますクリストフが好ましくなるばかりだった。——（彼は自分が同感をもち得る人々のことを多少滑稽こっけいだと思いたがっていた。）——それで彼はワルトハウスとともに、他人に反対してクリストフを支持しつづけた。

彼はいつもつとめて自分には實際的才能がないと思いたがってはいしたが、それでもなお實際的才能が乏しくはなかつたので、ちょうどおりよくも、この地方で最も進んだ音楽上の一派の主旨と友の主旨とを結びつけた方が、ずっと有利だろうということを思いついた。ドイツのたいいていの都市にあるように、この町にも一つのワグナー協会があつて、保守派に、対抗して新思潮を代表していた。——そしてもとより、ワグナーの光榮が至る所で認められ、彼の作品がドイツのあらゆる歌劇場の上演曲目にのぼせられるに及んでは、彼を擁護しても大なる危険を冒すことにはならなかつた。しかし彼の勝利は、自由に承認されたというよりもむしろ、無理強じいに課せられたものであつた。そして多数の者は、心の底では頑固に保守的であつて、この町のように、近代の大潮流からやや遠ざかつて、古代

の評判を誇りとしてゐる小都市では、ことにそうであつた。あらゆる新しきものにたいする、ドイツ民衆に先天的な不信の念、数多の時代によつてまだよく咀嚼そしゃくされていらない何か、
 実な強健なものにたいする、感受性の一種の怠惰さが、他のどこよりもかかる小都市に
 つそうはなはだしかつた。その明らかな例としては、ワグナー的精神に鼓吹せられたあら
 ゆる新しい作品が——もうあえて非議できないワグナーの作品は別として——ことごとく
 冷遇されていた。それゆえワグナー協会がなすべき有益な務めは、芸術の若々しい獨創的
 な力を真面目まじめに擁護することであつた。時々それが實際になされていた。そしてブルクナ
 ーやフリーゴ・ヴォルフは、それらの協会のある物のうちに、自分の最良の味方を見出し
 た。しかしあまりにしばしば、師の利己主義が弟子どもを圧迫していた。バイロイトがた
 だ一人の者を恐ろしく光榮あらしむることにのみ役だったと同じく、バイロイトの分派は
 それぞれ小さな教会堂であつて、そこで人々は永久に、唯一の神をほめてミサを唱えてい
 た。神聖な教義を文字どおりに遵じゆんしゆ守し、顔を塵ちりに埋めてひれ伏し、音楽や詩や劇や形け
 而上いしじょう学などというさまさまの見地から唯一の神体を礼拝してゐる、忠実なる弟子でしらにたい
 して、礼拝堂の側席へはいるのを許すのが、最上のことであつた。

この町のワグナー協会の場合も、まさに同じであつた。——けれどもこの協会は、種々

の行動を取っていた。役にたちそうに思われる有能な青年らを、好んで取り入れようとしていた。そして久しい以前から、クリストフに眼をつけていた。ひそかに彼へ意を伝えたこともあった。が彼はそれを念頭にも置かなかつた。いかなるものとも結合するの要求を別に感じなかつたのである。いかなる必要があつて同国人らが皆、いつも羊のように群れを作り、単独では、歌うことも散歩することも飲むことも、何事もなし得ないかの観があるのを、彼は理解できなかつた。彼はあらゆる組合主義をきらつていた。しかしいづれかと言えば、他のいかなる組合よりもワグナー協会の方に親しみやすかつた。少なくとも、りっぱな音楽会をやるという口実があつた。そしてワグナー派の芸術観にことごとく同感ではなかつたとは言え、他の音楽団体のいづれよりもそれに接近しがちであつた。ブラームスやブラームス派にたいして、自分と同じように不当な態度を示してゐる一派となら、了解の地歩を見出し得られそうだつた。それゆゑ彼は紹介されるままに任した。マンハイムが仲介人であつた。マンハイムは皆と知り合ひだつた。音楽家でもないくせに、ワグナー協会の一員になつていた。——協会の幹事は、クリストフが雑誌上で始めた戦いを一々見落とさなかつた。またクリストフが敵陣の中でなした若干の演奏は、味方にして働かしたら役にたつだろうということを、力強く立証するもののように彼には思われた。クリス

トフはまた神聖なる偶像にたいして、不敬な矢を多少放ったこともあった。しかしそのことについては、眼をつぶっておく方がいいと考えられた。——そしてまたおそらく、まだかなり手緩いものであったそれらの最初の攻撃は、クリストフにその上発言する際すきを与えずに急いで引き入れてしまったということに、だれもそうと承認はしなかったが、無関係ではなかったのである。人々はごく丁重に、協会の今後の音楽会に彼の旋メロデー律を少し演奏するのを、許してもらいたいと申し込んできた。クリストフはおだてに乗って承諾した。彼はワグナー協会へ出かけて行つた。そしてマンハイムから説き勧められて、それに加入してしまつた。

このワグナー協会の首領は当時二人あつたが、一人は著作家として、一人は管弦楽長として、ともにある程度の名声を有していた。二人ともワグナーにたいして、マホメット教徒的の信仰をいだいていた。前者はヨジアス・クリングと云つて、ワグナーに関する一辞典——ワグナー辞典——をこしらへ、全知全能なる師の思想を一瞬間に知り得る方便とした。それが彼の畢生ひっせいの大事業であつた。あたかもフランスの地方の中流人らが、オルレアンの少女の歌をすっかり諳誦あんしようするように、彼はその辞典の綱目をことごとく諳誦し得たかもしれない。彼はまたバイロイト日報に、ワグナーおよびアリアン精神に関する論

説を発表していた。言うまでもなく彼にとつては、ワグナーは純アリアンの典型であり、ドイツ民族は、ラテンのセム精神ことにフランスのセム精神の腐敗的影響から、少しも侵されることのない避難所であった。不純なゴール精神の決定的な敗滅を、彼は宣言していた。それでもやはり、あたかも永遠の敵の脅威を常に感じてゐるかのようによ、毎日激しい戦いをつづけていた。彼はフランスにただ一人の偉人をしか認めなかった。それはゴビノー伯爵であつた。クリングは小さな老人で、きわめて小柄で、きわめていいねいで、処女のようにすぐ顔を赤らめた。——ワグナー協会のも一人の柱石は、エーリツヒ・ラウベルといつて、四十歳まである化学工場の支配人をしてた男だつた。その後彼はすべてをうち捨てて、管絃楽長になつてしまつた。なり得たのは意志の力にもよるし、また富裕だからでもあつた。彼はバイロイトにたいする狂信者だつた。ミュンヘンからバイロイトまで巡礼の草鞋わらじをはいて徒歩で行つたこともあるそうである。おかしなことだがこの男は、非常に読書をし、非常に旅をし、種々の職業をやり、そして至る所で精神的な人物だということを示していたのに、音楽上においては、まったくパニユルジュの羊となつてしまつた。あらゆる独創の才を用いつくしながら、他人より少し愚かな地位だけをようやく保ち得た。音楽上ではあまりに自信が乏しかつたので、自分の感情に頼ることができないで、音楽長

やバイロイトの免許者らがワグナーについて与えてくれる注解を、唯々諾々として傾聴していた。ヴァーンフリートのワグナー官邸の粗野幼稚なる趣味に合致する、舞台装置や多彩な衣裳などのごとく些細な点までも、そのとおりに真似たいと思っていた。世にはミケランジェロの狂信者がいて、師の作を模写する場合に徹までも写し取り、神聖な作品の中にはいつてきてるといふことによつて、その黴をも神聖なものと思ふことがあるが、ラウベルもまたそういう狂信者と同様だった。

クリストフには、これら二人の人物があまり好ましく思えるはずはなかった。しかし彼らは二人とも、かなり教養のある親切げな社交的な男であった。そしてラウベルの会話は、音楽以外の話題になると面白かった。そのうえ彼は変わり者だった。変わり者はクリストフにとつてはあまり不快でなかった。几帳面な人々のたまらない凡俗さから、彼の気分を転じさしてくれるのだった。彼はまだ知らなかった、不条理なでたらめを言うくらいたまらない者はないということ、そして独創性なるものは、しばしば誤つて「独創家」と呼ばれる方の人々には、その他の人々によりもいっそう少ないということ。なぜならそれらの「独創家」なる人々は、思想が時計の運動みたいになつてしまつてゐる単なる奇人にすぎないから。

ヨジラス・クリングとラウベルとは、クリストフを虜とりこにしようと思つて、最初彼に向かつて敬意に満ちた態度を示した。クリングは彼に称賛の論説を奉り、ラウベルは協会の音楽会で自分が指揮する彼の作品について、彼の指図を一々守ろうとつとめた。クリストフは心を動かされた。ところが不幸にも、それらの懇切の結果は、それを示してくれる人々の愚昧ぐまいさによつて害された。自分を称賛してくれるがゆえにこちらからもよく思つてやるという能力を、彼はそなえていなかった。彼は氣むずかしかった。真実の自分とは反対な点を称賛されることを、断固としてしりぞけていた。そして誤つて自分の味方となつた人々を、往々敵と見なしがちだった。それで、クリングからワグナーの弟子と認められたり、音階中のある音以外になんら共通点のない、自分の歌曲の楽句と四部作の楽節との間に、多少の類似を捜されたりしても、彼は少しもありがたくなかった。また自分の作品の一つが、永遠のワグナーの巨大な二作の間に——ワグナー門下生の無価値な模造品と相並んで——そうじゆう挿入されて演奏されるのを聞いても、彼は少しも愉快ではなかった。

彼は間もなく、その小さな礼拝堂が息苦しくなつた。それは一種の音楽学校であつて、各種の古い音楽学校と同様に狭苦しく、また芸術界に新しくできたものだけにさらに偏狭なものだつた。クリストフは、芸術もしくは思想の一形式が有する絶対的価値にたいして、

幻影を失い始めた。これまでは、偉大な観念はどこへいってもそれ自身の光明をもつてゐるものだと思つていた。ところが今では、観念は変化することあつても人は常に同じであることに、氣づいた。そして結局は、すべて人にあるのであつた。観念は人そのままであつた。もし人が凡庸卑屈に生まれついたらとすれば、いかなる天分もその人の魂を通るうちに凡庸となるのだつた。鉄鎖を破壊する英雄らの解放の叫びも、次の時代の人々の隷属契約となるのだつた。——クリストフは自分の感情を言明せずにはおられなかつた。芸術上の拝物教を嘲笑した。もはやいかなる種類の偶像も不用であり、いかなる種類の古典も不用であると公言した。ワグナーの精神の後継者だと自称し得る者はだれかと言えば、それはただ、常に前方をながめて決して後ろをふり返ることなく、ワグナーをも足下に踏みしめて直進し得る者——死ぬべきものを死なしめ、生命との熱烈な交渉を維持する、という勇氣をもつてゐる者、のみであると公言した。クリングの愚かさは彼を攻撃的ならしめていた。彼はワグナーのうちに見出されるあらゆる欠点や滑稽な点を取り上げた。ワグナー崇拜者の方では、自分らの神にたいして彼がおかしな嫉妬を感じてゐるゆえだと、思はずにはいかなかつた。クリストフの方では、ワグナーの死後になつてそれに熱中してゐる連中は、ワグナーの生前にはそれをまつ先に絞め殺そうとしたに違ひないということを、少しも疑

わなかつた。——この点においては、彼は彼らにたいして不正だつた。クリングやラウベルのごとき者にも、やはり光つてた時代があつたのである。二十年ばかり前には、彼らも先頭に立つていた。それから、多くの者と同じように、彼らはそこに停滞したのである。人間の力はいかにも弱いもので、最初の坂を上るともう息を切らして立ち止まる。なおつづけて前進するだけの丈夫な氣息をもつてゐる者は、きわめて少ない。

クリストフの態度は、新しい友人らをすぐに離反さしてしまつた。彼らの同情は一の取り引きであつた。彼らが彼の味方であるためには、彼の方で彼らの味方でなければならなかつた。しかるに、クリストフの方で少しも譲歩しそふにないことは、あまりに明らかだつた。彼は少しも巻き込まれなかつた。人々は彼に冷淡な態度を示してきた。徒党が設定した神々や小さな神々にたいして、彼が与えるのを拒んだ賛辞は、彼にもまた拒まれた。人々は彼の作品を遇するに、以前ほどの熱心を示さなかつた。そしてある者らは、彼の名前があまりしばしば番組に出るのを抗議し始めた。人々は彼を背後から嘲り、悪評が盛んになつてきた。クリングとラウベルとは、それらの言を打ち捨てておいたが、それに同意してゐらなかつた。けれども人々は、クリストフと葛藤かつとうを結ぶまいと用心していた。第一には、ライン地方の人々の頭は、中間の解決を好み、決して真の解決ではなくて、曖あいま

味いな状態をいつまでも長引かせる特権を含む解決を、好むからであった。次には、説得によらずとも少なくとも倦けんたい怠たいによつて、彼を思うとおりにしてしまいたいと、人々はやはり望んでいたからである。

クリストフはその余裕を彼らに与えなかった。彼は、一人の男が自分に反感をいだきながらそうだと自認するのを欲しないで、自分となお交誼こうぎをつづけるために幻をかけたようにとめてるのを、はつきり感ずるように思う時には、自分はその男の敵であるということをりっぱに証明してやるまでは、決してやめないものであった。ワグナー協会のある晩餐会で、偽善に包まれた敵意の壁にぶつかつた後、彼は理由なしの退会届をラウベルのもとに送つた。ラウベルには合点がゆかなかつた。マンハイムはクリストフのもとに駆け込み、万事を調停しようと試みた。クリストフは最初の一言をきくや否や、怒鳴りだした。「いや、いや、断じていやだ。もうあいつらのことを言つてくれるな。僕はあいつらをもう見たくないんだ。……もう我慢できない、まったくできない。……僕は人間が厭いやでたまらないんだ。人間の顔を見るのが堪えられないんだ。」

マンハイムは心から大笑いをしていた。クリストフの激昂げっこうを鎮しずめようと考えるよりも、むしろその激昂を面白がつていた。

「あいつらがりつぱな者でないことくらいは僕もよく知ってるよ。」と彼は言った。「だがそれは何も今日に始まったことじゃない。で、何か新しいことでも起こったのか。」

「何にも。僕の方でたまらなくなつたんだ。……そうだ、笑いたまえ、僕を嘲りたまえ。

もちろん、僕は狂^{きやうがい}人^{ひと}さ。慎重な奴^{やつ}らは、健全な理性の法則に従つて行動する。だが僕はそうじゃない。衝動によつてのみ動く人間なんだ。僕のうちにある電量が蓄積すると、どうしてもそいつが爆発しないではない。もしそれで怪我^{けが}をする者があつたら、お気の毒の次第だ。僕にとつても厄介な話さ。僕は社会に生きるようにできてはいない。今後僕は、もう自分だけの者でいたいんだ。」

「それでもまさか、だれの手もかりないで済まそうというんじゃないだろう？」とマンハイムは言った。「君一人きりでは、君の音楽を演奏させることもできやしない。君にだつて必要だ、男女の歌手や、管絃楽隊や、管絃楽長や、聴衆や、拍手係や……。」

クリストフは叫んでいた。

「いや、いや、いや！」

しかし最後の言葉は彼を躍りたした。

「拍手係だつて、君は恥ずかしくないのか。」

「雇いの言うんじゃないよ。——（実を言えば、雇人拍手係こそ、作品の価値を聴衆に示すために、なお見出された唯一の方法ではあるが。）——しかし、一種の拍手係が、適当に訓練された小さな仲間が、いつでも必要なんだ。どの作家も皆それをもっている。それでこそ友だち甲斐ががあるというものだ。」

「僕は友だちをほしくない。」

「それじゃ君の作は、口笛を吹かれるばかりだ。」

「僕は口笛を吹かれないんだ。」

マンハイムは愉快でたまらなくなつた。

「そんな楽しみも長くはつづかないよ。だれも演奏してくれる者がなくなってしまうだろう。」

「なに構うもんか。それじゃ君は、僕が有名な人間になりたがつてるとでも思つてるのか。……なるほど僕はこれまで、そういう目的に向かつて全力を注いでいた。……まったく無意義だ、狂気沙汰ざただ、阿呆あほうの至りだ。……ちようど、最も凡俗な高慢心の満足は、光栄の代価たるあらゆる種類の犠牲——不愉快、苦痛、不名誉、汚辱、卑劣、賤いやしい讓歩、などを償うものでもあるかのように！　ところでもしそういう焦慮が今もなお僕の頭を悩ま

してるとしたら、僕はむしろ悪魔にでもさらってゆかれない。もうそんなことは少しも思っていないんだ。聴衆だの著名だのということには、少しも関わりたくないんだ。著名ということは、不名譽きわまる賤しいことだ。僕は一人でありたいし、自分自身と愛する人々とのために生きたいんだ……。」

「それはそうだ。」とマンハイムは皮肉な様子で言った。「だが仕事は一つなくっちゃいけない。君はなぜ靴でもこしらえないのか。」

「ああ僕がもし、他に類のないあのザックスのような靴屋だったら！」とクリストフは叫んだ。「どんなにか僕の生活は愉快に整ってゆくだろう！ 一週のうち六日は靴屋をやる

——日曜には、ただ親しい者だけで、自分の楽しみにまた数人の友人の楽しみに、音楽をやる。実にいい生活だろう！……馬鹿者どもの判断に供せられるというみごとな喜びのために、自分の時間と労力をささげてしまうのは、愚の至りではないか。多くの阿呆どもに聞かれたりがやがや言われたり諛われたりするよりは、少数のりっぱな人々に愛せられ理解される方が、はるかにましでりっぱではないか。……傲慢と光榮の欲求との悪魔から、僕はもう引きずり回されはしないぞ。その点は安心したまえ！」

「そうだと。」とマンハイムは言った。

しかし彼はこう考えていた。

「一時間もたつたらこの男は反対のことを言うだろう。」

彼は平然と結論した。

「で僕が、ワグナー協会との間を万事調停してやろうじゃないか。」

クリストフは両腕を上げた。

「そんなことだから、僕は一時間も骨折つて、喉のどをからしながらいけないと叫んでるんじゃないか!……断わっておくが、僕はもう決してあんな所へ足を踏み入れはしない。いつしよに鳴くためにたがいに寄り集まりたがってる、あのワグナー協会の奴らが、あの組合主義の奴らが、あの羊小屋の奴らが、残らず厭でたまらないんだ。あの羊どもに向かつて、僕の代わりに言ってくれたまえ、僕は狼おわかみだと、僕には齒がある、僕は草を食うようにできてる人間じゃないと!」

「よし、よし、言つてやろう。」とマンハイムは言いながら、その昼芝居を面白がつて立ち去つていった。彼はこう考えていた。

「この男は狂人だ、縛つておくべき狂人だ……。」

彼はすぐにその対談を妹に語つた。妹は肩をそびやかして、そして言つた。

「狂人ですって？ あの人は狂人だと思わせたがってるのよ。……お馬鹿さんで、おかしなほど傲慢ごうまんな人ですわ……。」

かかる間にもクリストフは、ワルトハウスの雑誌上で、激しい戦いをつづけていた。それも戦いが面白いからではなかった。批評界全体が彼を非難し、彼の方ではすべてを罵倒ばとうし去ろうとしていた。彼は口をつぐむように仕向けられるのでなお頑張がんばったのであって、讓歩の様子を示したくなかったのである。

ワルトハウスは心配しだした。乱打の最中であつて無難である間は、オリンポスの神のごとき泰然さをもつて激戦をながめていた。しかし数週以前から、どの新聞もいっせいにワルトハウスの侵すべからざる品位を忘れたかのようなうだつた。そして彼の作者としての自尊心を攻撃し始めた。彼がもしいっそう慧敏けいびんであつたなら、それらの攻撃の異常な邪悪さのうちに、友人の爪つまさき先を認め得たはずである。実際それらの攻撃が起こつたのは、エーレンフェルトやゴールデンリンクの陰險な煽動せんどうによるのであつた。クリストフの筆戦をよさせようと彼に決心させるためには、これ以外に策はないと彼らは見て取つたのである。そして彼らの見解は至当だつた。ワルトハウスはただちに、クリストフには困ると公

言し始めた。そしてクリストフを支持することをやめた。それ以来雑誌の同人らは皆、クリストフを黙らせようと工夫した。しかし試みに、餌食えじきを食いかけてる犬に口輪をはめてみるがいい！ 人々が彼に言う言葉は皆、彼をますます刺激するばかりだった。彼は皆を卑怯ひきよう者だとし、すべてを——言わなければならぬことすべてを、言つてのけると断言した。同人らが自分を追い払うつもりなら、それは彼らの自由だ。彼らも他人と同様に卑劣であることが、町じゅうに知れるばかりだ。しかし自分は、決して自分の方から出て行くことはしない。

同人らは困却して顔を見合わせながら、マンハイムがこの狂人を連れて来てとんだ厄介を背負い込ましたことを、苦々しく非難した。マンハイムは相変わらず笑いながら、クリストフを制しようと努めた。次の論説からは、クリストフに手加減をさせてみせると誓った。一同はそれを信じなかった。しかしマンハイムがいたずらに高言を払ったのでないことは、事実が証明してくれた。クリストフの次の論説は、礼讓の模範とは言い得ないしろ、もはやだれにたいしてもなんら無礼な語句を含んではいなかった。マンハイムの手段はきわめて簡単だったのである。一同はなぜもつと早くそれを思い付かなかったかと、あとでみずから驚いたのだった。クリストフは雑誌に書いた自分の文章を、かつて読み返し

たことがなかった。自分の論説の校正を読むのでさえ、大急ぎでいい加減に目を通すだけだった。アドルフ・マイはこのことについて、刺とげを含んだ穏やかな注意を一度ならず与えたことがあった。一字の誤植も雑誌の名誉を傷つけると言っていた。ところがクリストフは、批評をほんとうの芸術だとは見なしでいなかった。悪評を受ける相手は誤植があつても十分論旨を理解するだろうと、いつも答えていた。マンハイムはこの間の事情を利用したのである。彼はクリストフの意見が正当であると言ひ、校正のことは校正係の仕事であると言つて、自分がその役目を引き受けようと言ひ出した。クリストフは感謝のあまり恐縮した。しかし一同は口をそろえて、この処置は雑誌にとって時間をはぶくことになつたので、結局皆のためになるのだと確言した。それでクリストフは校正をマンハイムに任して、よく直してくれと頼んだ。マンハイムはその頼みにそむかなかつた。それは彼にとつて一つの遊戯であつた。最初は用心して、ただある語法を和らげたり、露骨な形容をとつてところ削つたりした。そしてうまくいったのに力を得て、やり方を次第に進めていった。文句や意味を変え始めた。その仕事に彼は真の手腕を示した。文句の大体と独特の筆癖とを保存しながら、クリストフが言おうと思つたところとちやうど反対のことを言わせるのが、その全部の技巧であつた。マンハイムはクリストフの論説を変形させるために、

自分で論説を書く以上に骨折った。彼は一生のうちにこれほど努力したことはなかった。しかし結果はいかにも愉快だった。これまでクリストフから嘲ちやうろう弄ろうされ通しであったあの音楽家らは、彼が次第に穏和になつてついに賛辞を呈するのを見ては、呆あつけ気に取られてしまった。雑誌では大喜びだった。マンハイムは刻苦精励の余りに成つた原稿を皆に読んでかした。一同はどつと笑った。エーレンフェルトやゴールデンリンクは時々マンハイムに言った。

「気をつけたまえ。あまりやりすぎるぜ。」

「なに大丈夫だ。」とマンハイムは答えた。

そして彼はますますやりつづけていた。

クリストフは何にも気づかなかつた。彼は雑誌社へやって来、原稿を渡すと、もう少しも気に止めなかつた。時とすると、マンハイムをわきに呼ぶこともあつた。

「こんどは、あの馬鹿者どもをほんとうにやつつけてやった。少し読んでみたまえ……。」

マンハイムは読んでみた。

「どうだい、君の考えは？」

「猛烈だね。君、余すところはないよ。」

「あいつらはなんと言うだろうかね？」

「そりゃあ大騒ぎだろうよ。」

しかし大騒ぎは少しも起こらなかつた。それどころかクリストフの周囲では、輝いた顔ばかりが見られた。彼がやつつけた人々は、往来で彼に挨拶をした。ある時彼は顔をしめた気懸りな様子で、雑誌社にやつて来た。そしてテーブルの上に一枚の訪問名刺を投げ出しながら尋ねた。

「これはいつたいなんのことだ？」

それは彼が罵倒したばかりの一音楽家の名刺で、「感謝に堪えず候」と書き入れてあつた。

マンハイムは笑いながら答えた。

「皮肉のつもりだね。」

クリストフは安堵した。

「ああ！」と彼は言った、「僕の論説があいつの気に入ったんじゃないかと心配していた」。

「あいつは怒ってるんだよ、」とエーレンフェルトが言った、「しかしその様子を見せた

くないんだ。偉えらそうなふうをして嘲あざけっているんだ。」

「嘲あざけってる？……馬鹿め！」とクリストフはまた激げつこう昂こうして言った。「も一度書いてやる。笑やっってる奴やつが笑われるんだ！」

「いや、そうじゃない。」とワルトハウスは心配そうに言った。「僕はあいつが嘲あざけってるんだとは思わない。それは謙讓けんじやうの心でやったことだ。あいつは善良なキリスト教徒だ。一方ほおの頬ほおを打たれたから、片方の頬ほおをも差し出したんだ。」

「なお結構だ。」とクリストフは言った。「卑ひきよう怯ひきよう者しりめが！ 臀しりをなぐられたけりやなぐってやる。」

ワルトハウスは少しなだめようとした。しかし他の者は皆笑っていた。

「うつつやつとけよ……。」とマンハイムは言った。

「結局のところ……。」とワルトハウスはにわかに心丈夫になって言った、「五十歩百歩だ！……！」

クリストフは帰っていった。同人らは狂気のように笑い踊った。それが少し静まると、ワルトハウスはマンハイムに言った。

「それにしても、危あやないところだった。……ほんとに気をつけてくれよ。君のおかげで皆

がとんだ目に会うかもしれないから。」

「なあに！」とマンハイムは言った。「それにはまだ間があるよ。それにまた、僕はあの男に味方をこしらえてやっってるんだからね。」

二 埋没

ドイツの芸術を改革せんがために、クリストフが右のような経験を積んでる時、一団のフランス俳優がこの町を通りかかった。それはむしろ一群という方が適當であつて、例のとおり、どこから狩り集めて来られたかわからない怪しい者らや、ただ役をふつてさえもらえればどんな待遇をも喜んでゐる無名の青年俳優らなどの、寄り集まりであつた。皆いつしよにかたまつて、一人の名高い老女優の馬車に付随してゐた。この老女優は、ドイツ内を巡業して歩いて、その道すがらこの小都市に立ち寄り、三回の興行を催したのだった。ワルトハウスの雑誌では、そのことで大騒ぎをした。マンハイムとその友人らは、パリ一の文学的および社交的方面に通暁つうぎょうしてゐた、もしくは通暁してゐるふうを見せかけていた。聞きかじつた巷説こうせつやまたは多少了解してゐる事柄を、盛んにくり返してゐた。彼らはドイツ内にてフランス精神を代表してゐた。そのためにクリストフは、なおいっそうフランス精神を知りたくなつた。マンハイムはうるさいほど、パリーの賛辞を彼に述べたて

た。マンハイムは幾度もパリールに行ったことがあった。そこには血縁の者もいた——ヨーロッパの各国に血縁の者がいた。そして至る所で彼らは、その国の国民性と品位とを獲得していた。このアブラハムの民族のうちには、イギリスの従男爵、ベルギーの上院議員、フランスの内閣員、ドイツ帝国議会の代議士、法王付属の伯爵などがあった。そして皆よく団結して、自分らが出て来た共通の始祖にたいして尊敬深くはあったが、それでも心から、イギリス人であり、ベルギー人であり、フランス人であり、ドイツ人であり、または法王党であった。なぜなら、彼らは驕きょうまん慢な心から、自分の順応した国が世界第一の国であることを疑わなかったから。ところがマンハイムのみは、それと反対であって、自分の属しない他の国々の方がいいと言つて面白がついていた。かくて彼はしばしばパリールのことを話し、しかも心酔の調子で話した。しかし彼はパリール人を称賛するのに、狂気じみた放逸な騒々しい人間であると言ひ、遊樂や革命にばかり時間をつぶして、決して真面目まじめになることがないと言つた。それでクリストフは、「ヴォージュ山の彼方かなたのビザンチン式な頽廢テカダン的な共和国」にあまり心をひかれなかった。彼がすなおにも想像していたパリールは、ドイツ芸術に関する叢書の一冊として最近世に出た書物の巻頭で見た、ある素朴そぼくな版画の示しているパリールと、大差ないものであった。その第一図に、都会の家並みの上にうづく

まつてるノートル・ダーム寺院の鬼像があつて、次の銘がついていた。

飽くなき吸血鬼、永遠の豪奢は、

大都市の上にてその餌食を貪る。

善良なドイツ人として彼は、遊蕩な異国人とその文学とを軽蔑していた。その文学について知つてるところはただ、仔鷲や気儘夫人などの放逸な滑稽劇と酒亭の小唄とにすぎなかつた。だから、芸術になんらの感興をも見出し得そうにない人々が、騒々しく場席係りへ行つて急いで名前を記入するような、この小都市の流行好みの風潮を見ると、彼はその名高い旅役者にたいして、軽蔑的な無関心さを装わずにはいられなかつた。それを聞くために一歩も踏み出すものかと言ひ張つた。そして座席が非常に高価で、それだけの金を払う手段がなかつただけに、彼には自分の言葉を守るのがいつそうたやすかつた。フランス俳優一団がドイツへもつてきた番組のうちには、二、三の古典劇がはいつていた。しかしその大部分は、とくに輸出向きのパリー物たる馬鹿げた種類だった。なぜなら、凡庸くらい万国的なものはないから。クリストフは、その旅回りの女優の第一の出し物

となつてゐるトスカを知つていた。彼は前に翻訳のトスカを聞いたことがあつた。その時には、ライン地方の小劇団がフランスの作品にたいしてなし得るかぎりの、軽快な優美さで飾つてあつた。そして彼は今、友人らが劇場へ出かけてゆくのを見ながら、嘲り^{あざけ}気味の笑いを浮かべて、それを二度聞きに行くには及ばないと気楽に考えていた。それでも翌日になると、友人らが昨晚のことを感激的に話すのに、注意深く耳傾けざるを得なかつた。今皆が話してゐる劇の見物を拒みながら、皆の意見に抗弁する権利までも失つたことを、一人憤慨してゐた。

予告の第二の出し物は、ハムレットのフランス訳ということになつてゐた。クリストフはかつてシエイクスピアの作を見る機会を逃がしたことがなかつた。シエイクスピアは彼にとつてはベートーヴェンと同等で尽くることなき生命の泉であつた、彼がちやうど通つて来た雑然たる不安疑惑の時期においては、ハムレットはことになつかしいものとなつてゐた。その魔法的な鏡の中に自分の姿をふたたび見出しはすまいかと氣づかいながらも、それから魅せられてゐた。座席を取りに行きたくてたまらないことをみずから打ち消しながら、芝居の^{びら}まわりの歩き回つた。しかし彼はきわめて強情だったので、いったん友人らに言明した以上は、それを取り消したくなかつた。そしてその晩も前晩と同じく、

自分の家に留まつてゐるつもりで帰りかけたが、ちやうどその時偶然にも、マンハイムとばつたり出会つた。

マンハイムは彼の腕をとらえた。そして、父の妹に当たる老いぼれ婆ばあさんが、おおぜいの家族を連れて不意にやつて来たことや、それを迎えるために皆家にいなければならなかつたことなどを、腹だたいしい様子でしかも嘲あざけりの調子を失わないで語つてきかした。彼は逃げ出そうとしたのだつた。しかし父は、家庭上の礼儀と年長者に払うべき尊敬との問題については、嘲ちやうろう弄うを許さなかつた。それにちやうど彼は、父をうまく取りなして金を引き出す必要があつたので、讓歩して芝居をあきらめない訳にはゆかなかつた。

「君たちは切符をもつてたのかい。」とクリストフは尋ねた。

「そうさ、上等の棧敷ホックスだ。おまけに、僕はそれを他ほかへ届けなけりやならないんだ——（このまますぐに行くところだ）——親父おやじの仲間仲間でグリューネバウムという奴やつにさ。妻君と馬鹿娘とを連れて行つていただきたいというんでね。愉快な話さ。……僕はせめて奴らに何か面白くないことを言つてやりたいと思つてるんだ。だがそんなことには奴らは平気だ、切符さえもつて来てもらえれば——切符が紙幣きせつならなお喜ぶだろうがね。」

彼はクリストフをながめながら、口を開いたままにわかになにやめた。

「ああ……そうだ……ちようどいい！」

彼は低く言った。

「クリストフ、君は芝居へ行くのかい。」

「いや。」

「^{うん}諾と言えよ。芝居へ行つてくれ。僕の頼みだ。厭^{いや}とは言えまい。」

クリストフは訳がわからなかった。

「だが切符がないんだ。」

「ここにある！」とマンハイムは勢いよく言いながら、彼の手に切符を無理に握らしてしまった。

「君はめちやだ。」とクリストフは言った。「そしてお父^{とう}さんの言いつけは？」

マンハイムは笑いこけた。

「怒^{おこ}るだろうよ。」と彼は言った。

彼は笑い涙を拭^ふいて、そして結論した。

「明日^{あした}の朝起きぬけに、まだ何にも知らないうちに、僕からもち出してやるんだ。」

「僕は承知できない、」とクリストフは言った、「君のお父さんに不愉快なことだと知っ

ては。」

「君が知る必要はない、君の知ったことじゃない、君に関係あることじゃないんだ。」

クリストフは切符を開いた。

「そして四人分の^{ボックス}積敷をどうするんだい。」

「いいようにするさ。よかつたらその奥で眠つても踊つても構わない。女を連れてゆくさ。幾人かあるだろう。入用なら貸してやつてもいいよ。」

クリストフは切符をマンハイムに差し出した。

「いや、どうしてもいやだ。取ってくれ。」

「取るもんか。」とマンハイムは数歩^{さが}退りながら言った。「厭なら無理に行ってくれとは言わない。だがもうそれは受け取らないよ。火にくべようと、または^{りちぎ}律義者の^{まね}真似をしてグリユーネバウムの家へ届けようと、それは君の勝手だ。もう僕に関係したことじゃない。さよなら。」

彼は手に切符をもつてクリストフを往来のまん中に置きざりにして、逃げて行ってしまった。

クリストフは困った。グリユーネバウムの家へ切符をもつてゆくのが至当であると、は

つきり思つてもみた。しかしその考えにはあまり気乗りがしなかつた。心を定めかねて家へ歸つた。気がついて時計をながめてみると、もう芝居へ行くために着替えるだけの時間しかなかつた。いずれにしても切符を無駄むだにするのはあまり馬鹿ばかげていた。母へいっしょに行こうと勧めてみた。しかしルイザは、これから寝る方がいいと言つた。彼は出かけた。心の底には子供らしい楽しみがあつた。ただ一つ不満なのは、その楽しみを一人きりで味わうことだつた。棧敷を取り上げてやつたグリユーネバウム一家や、マンハイムの父にたいしては、なんらの苛責かしゃくをも感じなかつたけれど、自分と棧敷を共にし得るかもしれない人々にたいして、一種の苛責を感じた。自分のような若い者にとっては、それがどんなに喜ばしいことであるかを考えると、その喜びを分かつたないのがつらかつた。頭の中であれこれと物色してみたが、切符をやるような相手が見つからなかつた。そのうえもう遅おそくなつていて、急がなければならなかつた。

劇場へはいる時に、彼は閉め切られてる札売場のそばを通つた。座席係りの方にはもう一席も残つていないことが、掲示に示してあつた。残念そうに歸つてゆく人々のうちに、彼は一人の若い女を認めた。彼女はまだ思い切つて出て行くことができないうで、はいつて行く人々をうらやましそうにながめていた。ごく簡素な黒服をまとい、さほど背が高くも

なく、細そりした顔立ちで、しとやかな様子だった。きれいであるか醜いかは気づく隙ひまがなかった。彼は彼女の前を通り越した。がちよつと立ち止まり、ふり向いて、考える間もなく、ぶしつけに尋ねた。

「あなたは、席がありませんか。」

彼女は顔を赤らめ、外国人らしい口調で言った。

「はい、ありませんの。」

「僕はボックスを一つもつてますが、始末に困つてるところです。いっしょにそれを使つてくださいませんか。」

彼女はなおひどく顔を赤らめ、承諾できない断わりを言いながら感謝した。クリストフは断わられたのに当惑して、自分の方から詫わびを言い、なお頼んでみた。しかし、彼女が承諾したがつてゐることは明らかでありながら、彼はうまく説き伏せることができなかった。彼はたいへん困った。そしてにわかに関心した。

「ねえ、すっかりうまくゆく方法があります。」と彼は言った。「切符を上げましょう。僕はもうだつていいんです。前に見たことがあるんですから。——（彼は自慢していた。）

——僕よりあなたの楽しみのの方が大きいでしょう。さあどうか、この切符をおもちなさい

「
年若な女は、その申し出とその親切な申し出方とにいたく心を動かされて、ほとんど眼に涙を浮かべようとした。そして、彼から切符を取り上げるようなことはしたくないと、感謝しながらつぶやいた。

「では、いっしょにいらつしやい。」と彼は微笑ほほえんで言った。

彼の様子がいかにも温良で磊落らいらくだったので、彼女は断わつたのをきまり悪く感じた。そして少しまごつきながら言った。

「まいますわ……ありがとうございます。」

彼らの中にはいった。マンハイムの棧敷ホツクスは正面で、広々と開あけ放してあつて、姿を隠すことはできなかつた。二人がはいって来たことは人目につかざるを得なかつた。クリストフはその若い女を前の席にすわらせ、自分は邪魔にならないように少し後ろに控えた。彼女はまっすぐに身を堅くし、振り向くこともなし得ず、非常に恥はずかしがっていた。承諾しなればよかつたと後悔してゐるらしくもあつた。クリストフは彼女に落ち着ひまく隙を与え、また話の種が見つからなかつたので、わざと他方をながめていた。そしてどこ

へ眼をやつても、棧敷のはなやかな看客のまん中に、見知らぬ女とともに自分がすわつてることが、小さな町の人々の好奇心と批評とを招いてゐることは、容易に見て取られた。彼らはあちこちに激しい視線を投げ返してやつた。こちらから他人へ干渉しないのに、他人が執拗くしつこ自分に干渉してくるのを、憤つていた。その無遠慮な好奇心は、彼よりも連れの人にいつそう向けられており、しかもいつそう厚かましく向けられてることを、彼は考えなかつた。そして、他人がどんなことを言いどんなことを考えようと、まったく平気だという様子を示すために、そばの女の方に身をかがめて、話を始めた。彼女は彼から話しかけられるのを非常に恐れてるらしく、また彼に答えなければならぬのを非常に困つてるらしく、彼の方を見もしないで、「はい」とか「いいえ」とか言うのもようやくのことだったので、彼は彼女の世慣れないのを憐れあわに思い、また自分の片隅かたすみに引き込んでしまった。が幸いにも、芝居が始まつた。

クリストフは番付を読んでいなかつたし、またその名女優がどんな役をするか知りたくも思つていなかつた。彼は役者を見にではなく芝居を見に来るといふ正直者の一人だつた。あの名高い女優がオフェリアになるか女王になるか、そんなことを彼は考えなかつた。もし考えてみたら、両者の年齢から見て、女王になる方を賛成したろう。しかし彼が思いも

つかなかつたことには、女優はハムレットの役をした。彼はハムレットを見た時、その機械人形めいた声音を聞いた時、しばらくはそうだと信じられなかった……。

「だれだろう、いつたいだれだろう？」と彼は半ば口の中でみずから尋ねた。「それでもまさか……。」

そして、「それでも」それがハムレットだと認め得ざるを得なかつた時に、彼は罵声ばせいを口走つた。幸いにもそばの女は外国人だつたからその意味を理解しなかつたが、しかし隣りのホッククスの人数の人たちにはよく意味がわかつたらしい。黙れという怒つた声がすぐに返された。彼は一人で自由にのしるためにホッククスの奥に引つ込んだ。彼の憤りは解けなかつた。もし彼が偏狭でなかつたならば、その六十年代の婦人に青年の服装をして舞台に立たせ、しかもきれいに——少なくとも追従的な眼には——見えさせている、変装の優美さと技巧の芸当に、敬意を表したかもしれない。しかし彼はあらゆる芸当を憎み、自然を破るものを憎んでいた。彼の好むところは、女は女であり男は男であることだつた。（現代ではいつもそうなるとは言えない。）ベートーヴェンのレオノーレの幼稚な多少滑稽こっけいな変装でも、彼には不愉快だつた。しかしハムレットの変装は、滅法に馬鹿げたものだつた。脂肪質で蒼あおざめ、怒りやすく、狡猾こうかつで、理屈つぽく、幻覚にとらわれてる、その強健な

デンマーク人を、女——しかも女でもないのだ、男に扮する女は怪物にすぎない——それになしてしまふとは？ ハムレットを、宦官かんがんになし、もしくは曖昧あいまいな両性人物になすとは！ そういう嫌悪けんおすべきばかばかしさが、ただ一日でも口笛を吹かれずに寛容されるとは、だらけ切った時代というのほかはなく、愚昧ぐまいきわまる批評界というのほかはないのだ。……女優の声はクリストフをすっかり激昂げつこうさしてしまった。彼女は各綴り字つづりを切り離す歌唱的な口調をもっていた。シャンメーレ以来、世に最も詩的でない国民にはいつも貴とごとく思われたらしい、あの単調な朗詠法をもっていた。クリストフはいらだって、四つ匍ぼいに動物の真似まねでもしたほいほいだった。彼は舞台の方に背中を向けて、直立の罰を受けた小学生徒のように、棧敷の壁と鼻をつき合わせながら、憤怒の渋面をしていた。仕合わせなことには、連れの女は彼の方を見かねていた。もし彼女が見たら、彼を狂人だと思つたかもしれない。

にわかにはクリストフの渋面はやんだ。彼は身動きもしないで口をつぐんだ。音楽的な美しい声が、莊重でやさしい若い女声が、聞こえてきたのだった。クリストフは耳をそばだてた。その声が語りつづけるに従つて、彼は心ひかれて、そういう囁さえずりりをもつてゐる小鳥を見んがために、椅子いすの上でふり返つた。見るとオフェリアがいた。もとより彼女はシエイ

クスピヤのオフエリアとは似てもつかなかった。それは背の高い強健なすらりとした美しい娘で、エレクトラかカサンドラみたいなきりシヤの若い女の彫像に似ていた。生命の気があふれていた。自分の持ち役だけにとどまろうと努力しながらも、その肉体や身振りや笑つてる かつしよく 褐色の眼から、青春と喜悦との力が輝き出していた。その美しい肉体の魅力にとらえられてクリストフは、一瞬間前にはハムレットの演出にたいして しゅんげん 峻厳だつたにもかかわらず、オフエリアが自分の描いていた面影とほとんど似てもいないことを、少しも遺憾とは思わなかった。そして想像のオフエリアを犠牲に供しても、なんら後悔を感じなかった。熱情に駆られた者が有する無意識的な もうしん 妄信さで彼は、その貞節な感乱せる処女の心の底に燃えてる若々しい熱気に、一つの深い真実さまでも見出した。そしてその魅力をさらに大ならしむるものは、きよ 淨い温かい滑らかな声の惑わしだった。一語一語が美しい和音のように響いていた。各綴り音のまわりには、つづ 百里香かあるいは野生薄荷の香りのように、リズム 弾力性の律動を有する南欧のあでやかな抑揚が踊っていた。アルル国のオフエリア姫ともいふべき不思議な幻影だった。金色の太陽と狂おしい南風との多少を、彼女は身にそなえていた。

クリストフは隣席の女のことを忘れて、彼女のそばに棧敷の前方へすわった。そして名

も知らないその美しい女優から眼を離さなかった。しかし一般の観客らは、無名の女優を見に来たのではなくて、彼女になんらの注意も払わなかった。そして女のハムレットが語る時にしか喝采かつさいしようとは思っていなかった。それを見て取ったクリストフは、彼らに「馬鹿者ども」と怒鳴りつけてやった——十歩先ばかりまで聞こえる低い声で。

舞台上に間幕あいまくが降りてから彼は初めて、棧敷を共にしてる連れの女の存在を思い出した。そしてやはりおぼろおぼろしてる彼女を見ながら、自分の粗暴な様子は彼女をどんなにか驚かしたに違いないと、微笑ほほえみながら考えてみた。——まさしく彼の考えたとおりであった。偶然にも彼と数時間いっしょにいることとなったその若い女の魂は、ほとんど病的なほど慎重深かった。思い切つてクリストフの招待を承諾したのも、異常な興奮のうちにあつたらだつた。そして承諾するやすぐに、どうかして彼の手をのがれ、口実を見出し、逃げてしまいたかつた。皆の者の好奇心の的となつてることを気づいた時には、なおたまらなかつた。自分の後ろに——（彼女は振り向き得なかつたのである）——連れの男の低いのしり声や不平の声を聞くに従つて、ますますいたたまらなくなるばかりだつた。彼がどんなことをしでかすかわからないような気がした。そして彼が出て来て自分のそばにすわつた時、彼女は恐ろしさにぞつとした。まだ彼はどんなとつぴなことをするかわからない。

彼女は穴にでもはいりたかった。そして知らず知らず身を引いていた。彼にさわるのが恐ろしかった。

しかし、幕間まくあいになつて、おとなしく話しかける彼の声を聞いた時、彼女の恐れはすべて消え去つた。

「僕が隣りにいるとたいへん不愉快でしょうね、ごめんください。」

そこで彼女は彼をながめた。そして、先刻いっしょに来る決心の動機となつたあの善良な微笑をまた彼の顔に見出した。

彼はつづけて言つた。

「僕は思つてゐることを隠すことができないんです。……それにまた、あまりひどすぎたんで……。あの女が、あの婆ばあさんが……。」

彼はふたたび嫌悪けんおのしかめ顔をした。

彼女は微笑ほほえんで、ごく小声で言つた。

「それでも、きれいですわ。」

彼は彼女の語調に気づいて尋ねた。

「あなたは外国かたの方ですか。」

「ええ。」と彼女は言った。

彼は彼女の質素な小さい長衣をながめた。

「先生をしてるんですか。」と彼は言った。

彼女は顔を赤くして答えた。

「ええ。」

「国はどちらです？」

彼女は言った。

「フランス人ですの。」

彼は驚きの身振りをした。

「フランス人ですって？ 僕は思いもつきませんでした。」

「なぜですの。」と彼女はおずおず尋ねた。

「あなたはたいそう……真面目だから。」と彼は言った。

（彼女はそれを、彼の口から出る以上まったくお世辞ではないと考えた。）

「フランスにだって真面目なものもありますわ。」と彼女は当惑して言った。

彼は彼女の正直そうな小さな顔、丸く出てる額ひたい、小さなまつすぐな鼻、細そりした頤あご、

栗色くりの髪に縁取られてる瘦やせた頬ほを、うちながめた。しかし彼の眼に映ってるのは彼女ではなかった。彼はあの美しい女優のことを考えていた。彼はくり返し言った。

「あなたがフランス人だとは実に不思議だ！……ほんとうにあなたはあのオフエリアと同じ国の人ですか。そうだとはいだれにも思えないでしょう。」

彼はちよつと黙つた後につけ加えた。

「あれは実にきれいですね！」

彼は、隣席の女にとつてはあまりありがたくない比較を、彼女とオフエリアとの間に試みてる自分の調子に、みずから気づかなかつた。彼女の方はよくそれを感じた。しかし彼女はクリストフを恨まなかつた。なぜなら、彼女も彼と同じ考えだったから。彼はあの女優に関するいろんなことを、彼女から聞き出そうと試みた。しかし彼女は何にも知らなかつた。明らかに彼女は、芝居のことにはほとんど通じていなかつた。

「フランス語が話されるのを聞くのは、あなたには愉快でしょうね。」と彼は尋ねた。彼は戯れのつもりだったが、しかし凶星をさした。

「ええ、それはもう、」と彼女は彼がびつくりしたほど真実な調子で言った、「どんなにかうれしいことですか。こちらでは、私は息苦しい気がしますの。」

彼はこんどはなおよく彼女をながめた。彼女は軽く両手を震わせ、胸苦しいようなふうだった。しかし彼女はすぐに、今の自分の言葉のうちには、あるいは相手の気色を害するものがあるかもしれないことを、思いついた。

「あら、ごめんください、」と彼女は言った、「自分でもなんだかわからないことを申しまして。」

彼は淡白にうち笑った。

「あやまることがあるものですか。まったくおつしやるとおりです。何もフランス人でないくつても、こちらでは息がつまりそうです。うつふ……。」

彼は空気を吸い込みながら肩をそびやかした。

しかし彼女は、そういうふうを考えをうち明けたのがきまり悪くなって、それきり口をつぐんでしまった。そのうえ彼女は隣り棧敷の人々がこちらの会話をうかがってるのに気づいていた。彼もまたそのことに気づいて腹をたてた。そして二人は話をやめた。彼は幕ま間くあいが終わるのを待ちながら、廊下に出て行った。若い女の言葉はまだ彼の耳に響いていた。しかし彼は他のことに気を奪われていた。オフエリアの面影が彼の心を占めていた。そして次々の幕で彼はすっかりとらえられてしまった。狂乱の場面になると、愛と死との

あの哀^{かな}しい歌のところになると、女優の声は人を感動せしめないではおかないような抑揚^{よう}になり得たので、彼はまったく心転倒してしまった。子牛のように声を挙げて泣き出しそうになつてゐる自分を、彼は感じた。そして、気弱さのしるし——（なぜなら、彼は真の芸術家たるものは決して泣いてはいけなないと信じていたから）——だと思われるそのことにみずから憤り、また人に見られなくなつたので、ふいに棧敷から外に出た。廊下にも休憩室にもだれ一人いなかった。彼は心乱れながら階段を降りていつて、みずから知らないで外に出た。夜の冷たい空気を吸いたかつた。薄暗い寂しい通りを大^{おお}跨^{また}に歩きたかつた。いつしか運河の岸に出で、河岸の胸壁に肱^{ひじ}をついて、黙々たる水をながめた。水の面には街燈の反映が闇^{やみ}の中に踊つていた。彼の魂もそれに似ていた。真^ま暗^{くら}でおののいていた。表面に躍^{おど}りたつてる大喜悅のほかは、何にも見えなかつた。方々の大時計が鳴つた。劇場へもどつて劇の終わりを聞くことは、彼にはできそうにもなかつた。フォルティンプラスの勝利を見にもどれというのか？ いや、彼はそれに心ひかれなかつた。……なるほどみごとな勝利だろうさ！ だれがそんな勝利者をうらやむものか。癡^{どう}猛^{もう}な愚かな生命のあらゆる蛮行に飽きはてた後、勝利者になつて何になろうぞ。作品全部が生命にたいする恐るべき迫害である。しかしながらその中には、生命の異常なる力が沸きたつてい

て、悲哀は喜悦となり、苦惱は人を陶醉せしむるほどになっている……。

クリストフは、あの初対面の若い女のことはもはや気にもかけないで、家に帰っていった。彼は彼女を棧敷の中に置きざりにして、その名前さえも知らなかった。

翌朝、彼は女優に会いに、三流どころの小さな旅館へ出かけた。興行主は彼女を仲間といつしよにそこへ泊まらせ、ただ座頭ざがしらの女優だけを、町一流の旅館に入れていたのである。クリストフは乱雑な小さな客間に案内された。朝食の残り物が、髪の毛の留め針や裂けたきたない楽譜の紙とともに、蓋ふたを開いたピアノの上ののっていた、傍らかたわの室ではオフェリアが、ただ騒ぐのが面白さに、子供のように声を張り上げて歌っていた。訪問者があるのを告げられると、彼女はちよつと歌をやめて、壁の向こうまで聞こえても構わないような、快活な声で尋ねた。

「なんの用だろう？　どういう名前なの？……クリストフ……クリストフそれから？……クリストフ・クラフトだって……おかしな名前なこと！」

（彼女はリヤラの音をひどく口の中でころがしながら、二、三度その名前をくり返した）

「まるで悪口わるくちの言葉のようだわ……。」

(彼女こそ悪口を一つ言ったのだ。)

「若い人、それとも年寄り?……よさそうな人なの?……そんならいいわ、行ってみよう。」

彼女はまた歌いだした。

——吾が恋よりもやさしきものは世にあらじ……

歌いながら、室じゆうをかき回し、散らかった物の中にはいり込んだ鼈甲の留め針を、ののしりちらした。じれったがって、怒鳴りだし、獅子のように猛りたつた。クリストフにはその姿は見えなかつたけれど、壁越しに彼女の身振りを一々想像して、一人で笑っていた。ついに足音が近づいてき、扉がさつと開かれ、そしてオフエリアが現われた。

彼女はちゃんとした服装をしてはいなかつた。化粧着を身体にまきつけ、広い袖の中に腕を露わにし、髪はよく梳つてなく、巻き毛が眼や頬にたれ下がっていた。その美しい褐色の眼は笑い、口も笑い、頬も笑い、かわいらしい小窪が頤のまん中に笑っていた。彼女は莊重な歌うような美しい声で、そんな姿で出て来たことをちよつと詫びてみた。しかし、別に詫びるわけではないことを、かえって感謝されていいことを、よく知っていた。彼女は彼を、訪問にやって来た新聞記者だと思っていた。そして、ただ自分一個の考えで来たの

だと言われ、彼女を賛美してるからだと言われると、失望するどころか、非常に^{よろこ}歓んだ。彼女は^{あいきよう}愛嬌のいい善良な娘で、人に喜ばれるのが大好きで、またそれを隠そうともしなかつた。クリストフの訪問と心酔とに、彼女はうれしくなつた。——（彼女はまだ、世辞追従に毒されてはいなかつた。）——彼女はその動作においても、作法においても、小さな虚栄心においても、また人に好かれる時に感ずる無邪気な喜びにおいても、少しの不自然さもなかつたので、クリストフは一瞬間も窮屈を感じなかつた。二人はすぐに古い友だちのような間になつた。彼は拙い^{ます}フランス語を少し話し、彼女は変なドイツ語をわずか話した。一時間もたつと、どんな内密な話でももち出した。彼女は少しも彼を帰らせようとは思わなかつた。この強健で快活で^{れいり}伶俐で感情を隠さない南欧の女は、愚かな仲間たちにとりまかれ、言葉を知らない他国にあつて、生来の喜びをも覚ゆることなく、退屈でたまらなかつたので、話し相手を見出したのがうれしかった。クリストフの方では、誠実に乏しいいじけた小市民らのまん中で、平民的元氣に満ちた南欧の自由な女に出会つたことは、言い知れぬ幸福であつた。彼はまだ、それら南欧人の不自然な性質を知らなかつた。彼らはドイツ人と違つて、その心の中にもつてるもの全部を相手に示す——またしばしば、もつていないものをも相手に示すことがある。しかしとにかく、この女優は年が若かつた、

澆刺はつらつとしていた、思つてゐることを、腹蔵なく露骨に言つてのけた。清新な見方で、すべ
てを自由に批判した。雲霧を吹き払うあの南風が、彼女のうちにも多少感ぜられた。彼女
は天分が豊かであつた。教養も思慮もなかつたけれど、美しいよい物ならば、それをただ
ちに心から感ずることができて、ほんとうに感動するほどだつた。そしてすぐそのあとで、
にわかには大笑いをした。もとより、彼女は仇あだつぽい女で、瞳ひとみをよく働かせた。よく合わせ
つていない化粧着の下から、裸の喉のどをのぞかしてゐるのも、少しも不愉快ではなかつた。彼
女はクリストフの心を迷わせたかつたかもしれない。しかしそれはまったく本能からであ
つた。なんらの打算もなかつた。笑い、快活に話をし、気兼ねも遠慮もなく、善良なお坊
ちゃんとなりお友だちとなることを、いつそう好んでいた。芝居生活の内幕や、自分のち
よつとしたみじめな事柄や、仲間たちのつまらない猜疑さいぎや、彼女に光らせないようにと注
意してゐるゼザベル——（彼女は座頭の女優をきらつてゼザベルと綽名あだなしてゐた）——の意
地悪なことなどを、彼に話してきかした。彼はドイツ人にたいする不平をうち明けた。彼
女は手をたたいて面白がり、彼に調子を合わした。彼女は元來善良であつて、だれの悪口
をも言うつもりではなかつたが、しかしやはり自然と悪口を言うのだった。だれかを揶揄やゆ
する時には、自分の意地悪さを心ではとがめながらも、やはり南欧人の特色たる、現実的

な滑稽こっけいな觀察の才を失わなかつた。彼女はそれをどうすることもできないで、うがつた批評をくだすのだった。若犬のような齒並みを見せて、蒼あおざめた唇くちびるで面おもて自みづかひに笑つた。化粧のために色褪あせた蒼白あはい顔の中には、隈くまのある眼が輝きらいていた。

二人は突然、もう一時間以上も話をしたことに気づいた。クリストフはコリーヌ——（それが彼女の芸名だった）——へ、市内を案内するために午後誘いひに来ようと申し出た。彼女はその考えにたいへん喜んだ。そして二人は、昼食後すぐに会う約束をした。

約束の時間に、彼はそこへ行つた。コリーヌは旅館の小さな客間にすわつて、書き抜きを手にしながらか声高く読んでいた。彼女は笑えみを含んだ眼で彼を迎え、なおやめないで文句を終わりまで読んだ。それから、安樂いやす椅子いすの自分のそばにすわるように合図をした。

「かけてちようだい、そして口をきいちゃ厭いやよ。」と彼女は言った。「台詞せりふを読み返してるところなの。十五分もかかれば大丈夫よ。」

彼女は急せぎ込んでる小娘せむぎのように、ごく早くやたらに読み散らしながら、爪つめの先で書き抜きをたどつていた。彼は諳あんし諳しやうの手伝いをしてやろうと言いひ出した。彼女は彼に書き抜きを渡し、立ち上つてくり返した。盛んに言いひよどんだり、次の文句へ進んでゆく前に、前の句の終わりを何度もくり返したりした。諳あんし諳しやうしながら始終頭を振つていた。髪かみの留め

針が室の方々に落ち散った。なかなか覚えにくい言葉に出会うと、躰しつげの悪い子供のように焦じれたがった。時とすると、おかしな悪口やかなりひどい言葉——みずから自分に浴びせかけるごくひどい短い言葉——を発することもあった。クリストフは、才能と幼稚さとを共にそなえてる彼女に驚いた。彼女は正当な感動的な台辞回しを見出していった。しかし、全心をこめてるらしい調子の最中に、なんの意味も含まないような言葉を言うことがあった。かわいい鸚鵡おうむのように文句を諷誦して、どういう意味のものであるかは少しも気かけなかった。するともう支離滅裂なおかしなものになってしまった。彼女はいつこう平気だった。自分でも気がつくとき身をねじって笑いこけた。しまいには「ちえッ！」と言いつて、彼の手から書き抜きを奪い取り、室の隅すみに投げやり、そして言った。

「もうおしまい、休みの時間だわ！……散歩に出かけましょう。」

彼は彼女の台辞せりふに多少不安を感じて、懸念けねんのあまり尋ねた。

「覚えたつもりですか。」

彼女は確かな様子で答えた。

「大丈夫よ。それにまた、黒坊くろんぼだつてついてるんだもの。」

彼女は帽子を被かぶりに室へ行った。クリストフは待ちながら、ピアノの前にすわって少し

ばかり和音をひいた。向こうの室から彼女は叫んだ。

「あ、それはなんなの？ もつとひいてちょうだい。ほんとにいいこと！」

彼女は帽子を頭に留めながら駆けて来た。彼はひきつづけた。ひいてしまっても、彼女はもつとつづけるように願った。そして、トリスタンの曲についても一杯のチョコレートについても同様にまき散らす、フランス婦人特有の気のきいた短い感嘆の声をたてながら、彼女はうつりと聞き入っていた。クリストフは笑っていた。ドイツ人の大袈裟な強調した感嘆の言葉から、気を散らされるのであった。でも二つとも、相反した誇張だった。一つは床の間の置き物を山とすることであり、一つは山を床の間の置き物とすることであった。後者も前者に劣らず滑稽こっけいなものだった。しかしその時クリストフには、後者の方が好ましかった。なぜなら、それが出て来る口を彼は愛していたから。——コリーヌは、彼がひいてるのはだれの作だか尋ねた。そして彼自身の作だと知ると、驚きの声をたてた。彼はその午前の会談のうちに、自分は作曲家だとはつきり言っていた。しかし彼女はそれに少しも注意しなかったのである。彼女は彼のそばにすわって、彼の作を残らずひいてくれとせがんだ。散歩は忘れられてしまった。彼女の方にお世辞があるのでなかつた。彼女は音楽を愛していたし、教育の不足を補うに足るりっぱな本能をそなえていた。彼は初

め彼女の言うことを本気にしないで、最もたやすい旋^{メロデー}律をひいてやった。しかし、自分の好きな一節をふとひいてみて、そのことをなんとも言わないのに、彼女もまたそれが好きだということを知った時、彼は喜ばしい驚きを感じた。りっぱな音楽家であるフランス人に出会おうと、ドイツ人はいつも率直な驚きを示すのであるが、彼もやはりそのとおりで、彼女に言った。

「これは不思議だ。あなたは実にりっぱな趣味をもってる。僕はまったく意外でした……」

コリー又は彼の鼻先で嘲笑^{あざわら}った。

その次から彼は面白がつて、ますます理解しにくい作を選び、どこまで彼女がついて来るかを見ようとした。しかし彼女は、どんな大胆な表現にもまごつかないらしくった。そして、ドイツではどうしても人から鑑賞されないので、自分でもついに疑惑を生じかけていた、とくに新しい旋^{メロデー}律を弾くと、コリー又はも一度ひいてくれと頼み、みずから立ち上がって、記憶をたどりながらほとんど間違えずにその曲を歌い出したので、彼は非常に驚かされた。彼は彼女の方へ向き直り、心をこめてその両手を取った。

「あなたは音楽家だ！」と彼は叫んだ。

彼女は笑いだした。そして、初めは田舎いなかの歌劇に歌手として乗り出したのであったが、巡回興行主から詩劇にたいする才能を認められて、その方へ向けられたのだということを、説明してきかした。彼は叫び声をたてた。

「ひどいや！」

「なぜ？」と彼女は言った。「詩もやはり音楽の一つじゃないの。」

彼女は彼の歌曲の意味を説明さした。彼はドイツ語で話した。彼女は彼の口や眼の皺しわでも真似まねて発音しながら、猿さるのようにすばしこくその言葉をくり返した。それから暗誦して歌う時になると、おかしい間違いをした。わからなくなると、自分で言葉を作り出して、喉のどにかかった粗野な音を発するので、二人とも笑いだした。彼女は彼に演奏してもらうのに飽きなかったし、また彼は、彼女に演奏してやり彼女の美しい声を聞くのに飽きなかった。その声には少しも職業的な技巧がなかったし、また小娘のように多少喉にかかる歌い方をしてはいたが、なんとも言えぬはかない感傷的な調子がこもっていた。彼女は思うとおりを腹藏なく言つてのけた。ある物をなぜ好むかあるいは好まないかを、はつきり説明することはできなかつたけれど、その批判のうちにはいつも理由が潜んでいた。不思議なことには、最も古典的でドイツで最も賞美さるる楽節において、彼女は最も退屈がった。

彼女は礼儀上多少の世辭は言ったが、しかし明らかに、そういう曲からはなんの意味をも感じていなかった。音楽愛好家やまたは音楽家でさえも、かつて聞いたものからは一種の喜びを感じるものであつて、またその喜びのために彼らは、古い作品の中にかつて愛したことのある形式や様式を、知らず知らずのうちにしばしば再現し、もしくは新しい作品中にもそれを愛するものであるが、しかし彼女は音楽的教養がなかったので、そういう喜びを知らなかった。また彼女は、感傷的な旋^{メロデー}律^イにたいするドイツ人の嗜好^{しこう}をも、もつてはいなかつた。(もしくは少なくとも、彼女の感傷性は別種なものであつた。そしてクリストフはその欠点をまだ知らなかつた。)ドイツで好まれる多少柔弱な平淡さをもつてる樂節にたいして、彼女は少しも歡^{よろこ}びを示さなかつた。彼の歌曲^{リート}のうちの最も凡^{ほん}庸^{よう}なもの——友人らが少しでも彼に祝し得るのを喜んで、彼にそのことばかりを言うので、彼が破棄してしまいたいと思つたある旋^{メロデー}律^イ、そういうものに彼女は少しも気をひかれなかつた。彼女は劇的な本能から、一定の熱情を忌^{きたん}憚^んなく描いた旋律を好んだ。彼が最も重んじていたのも、やはりそういう旋律だつた。けれども彼女は、クリストフが自然だと思つていたある種の粗暴な和^{ハーモニー}声^ニにたいしては、あまり同感し得ないことを示した。彼女はそれに出会うと、一種の齟^そ齬^ごを感じた。そこにさしかかる前に歌うのをやめて、「ほんとう

にそんなんですか、」と尋ねた。彼がそうだと答えると、ようやく思い切つてその困難にぶつかつていった。しかしそのあとで、彼女はちよつと口のあたりをゆがめた。クリストフはそれを見落さなかつた。またしばしば、彼女はその小節を飛び越したがった。すると彼は、ピアノでくり返した。

「これ嫌いですね。」と彼は尋ねた。

彼女は鼻をしかめた。

「違つてるわ。」と彼女は言った。

「いいえ。」と彼は笑いながら言った。「ほんとうです。意味を考えてごらん下さい。正しいじゃないですか、ここでは。」

(彼は心臓を指した。)

しかし彼女は頭を振つた。

「そうかもしれないわ。でも違つててよ、こちらでは。」

(彼女は耳を引つ張つた。)

彼女はまた、ドイツの朗吟法の大袈裟な高声に、不快を感じてる様子だった。

「どうしてあんな大きい声をするんでしょう？」と彼女は尋ねた。「ただ一人なのに。隣

りの人たちに聞こえても構わないのかしら。ちようど……（ごめんなさい、怒おこつちやいやよ）……ちようど渡し舟でも呼ぶようだわ。」

彼は怒らなかつた。心から笑つていた。そして多少当たつてゐることを認めた。彼はそういう意見を面白がつた。だれからもまだそんなことを言われたことがなかつた。結局、朗吟法は拡大鏡のように自然の言葉そこなを害うことが最も多いというのに、二人は一致した。コリーヌは、ある戯曲の音楽を書いてくれと、クリストフに頼んだ。その芝居で彼女は、時々ある文句を歌いながら管弦樂オーケストラの伴奏に合あわして語りたいたのだつた。彼はその考えに夢中になつた。舞台上の実現は困難であつたが、コリーヌの音楽的な声なら、それに打ち勝ち得るようように考えられた。そして二人は、未来の計画をたてた。

彼らが出かけようと思いついた時には、もう五時近くなつていた。この季節には日の暮れるのが早かつた。もはや散歩どころではなかつた。その晩コリーヌには、劇場で下稽古げいこがあつた。それにはだれも列席することができなかつた。予定の散歩をするため明日の午後誘よいに来ることを、彼女は彼に約束やくそくさせた。

翌日も、も少しで同じ場面がくり返されるところだつた。彼が訪ねてゆくと、コリーヌ

は鏡を前にして、高い腰掛にすわり足をぶらぶらさしていた。鬘かづらをためしてるのだった。衣裳方と一人の床屋とがそばにいた。彼女は巻毛をも少し高くしたいといつて、床屋に種々注文をしていた。そして鏡をのぞいてる時に、自分の背後で微笑ほほえんでるクリストフを鏡の中に見出した。彼女は舌を出してみせた。床屋は鬘をもつて出て行った。彼女は快活にクリストフの方をふり向いた。

「今日は。」と彼女は言った。

彼女は彼に接吻せつぶんさせるため片頬ほおを差し出した。彼はそれほど親密を期待していなかった。しかしその機会を無駄むだにはしなかった。彼女の方では、その恩恵をなんとも思っていないかった。彼女にとつては、ただ普通の「今日は」と同じものだった。

「ああうれしいこと！」と彼女は言った。「今晚はうまくゆくわ。——（彼女は鬘のことを言ってるのだった。）——ほんとうに悲しかったのよ。今朝いらしたら、私は困りきつてるところだったわ。」

彼はその理由を尋ねた。

それは、パリーの床屋が荷造りを間違えて、彼女の役割に適しない鬘を入れて来たからだだった。

「平べったくつて、」と彼女は言った、「おかしな格好に毛がたれ下がってるんだもの。それを見た時私は、ほんとに、涙の限り泣いちゃったわ。ねえ、デジレさん。」

「はいつて来ると、」とデジレは言った、「びっくりしたわ。顔の色がなくなつて、死人のようになつてたんですよ。」

クリストフは笑つた。コリーヌはそれを鏡の中で認めた。

「笑つてるのね、人の気も察しないで。」と彼女は怒つて言った。

が彼女もまた笑いだした。

彼は前夜の稽古の様子を尋ねた。

「すつかりうまくいったわ。」ただ一つ彼女は、他人の台辞はもっと削つてもらいたく、自分の削らないようにしてほしただけだった。……二人は楽しく話し合つて、午後の一部はそれで過ぎてしまった。彼女はゆるゆると着物を着た。自分の服装についてクリストフの意見を聞くのを楽しんだ。クリストフは彼女の容姿をほめ、フランス語とドイツ語と折衷的な言葉を使つて、彼女ほど「淫麗」な人を見たことはない、率直に述べた。――彼女は最初まごついて彼をながめ、それから突然大声に笑いだした。

「私が何か言つたんですか。」と彼は尋ねた。「そう言つちやいけないんですか。」

「いいわ、いいわ。」と彼女は笑いこけながら言った。「ちようどそのとおりよ。」

ついに二人は出かけた。彼女のきらびやかな服装とおかまいなしの言葉とは、人の注意をひいた。彼女はすべての物を嘲笑的なフランス婦人の眼でながめ、そしてその印象を隠そうとしなかった。流行品店や絵葉書店などの前で、彼女はよく放笑した。感傷的な絵、滑稽な露骨な絵、売笑婦の姿、皇族、赤服の皇帝、青服の皇帝、ゲルマン号の舵を取つて天を軽蔑してゐる老水夫服の皇帝、そんなものが雑然と並べてあつた。ワグナーの頑固頭を飾りにした一組の食器の前や、蠟細工の頭が傲然と控えてゐる理髪店の前で、彼女は大笑いをした。プロシアやドイツ連邦やまっ裸の軍神を引き連れて、旅行外套を着け尖つた兜を頂いた老皇帝を現わしてゐる、愛国的記念塔の前でも、彼女は不敬にもおかしがつた。人々の顔つきや歩き方や話し方について、おかしなものは何んでも通りがかりに取り上げた。滑稽な点をうかがつてゐるその意地悪な眼つきに会つて、被害者らも気づかずにはいられなかつた。彼女は猿のような本能に駆られて、みずからなんの考えもなしに、人々の悲喜こもごもなしかめ顔を唇や鼻で真似ることさえあつた。またはふと耳にした切れ切れの文句や言葉のうち、奇妙な音調だと思われれるものがあると、頬をふくらましてそれをくり返した。彼は彼女のそういう無作法を少しも迷惑とせず、快く笑つていた。な

ぜなら、彼も彼女と同じくらい無遠慮に振舞っていたから。幸いにも、もはや彼の評判は失墜しても大して惜しいものではなかった。そういうふうな散歩はすっかり評判を落としてしまうものではあるが。

二人は大会堂を見物に行った。コリーヌは高い踵かかとくつの靴をはきたいへんな長衣を着ていたが、それにもかかわらず鐘樓の頂まで上りたがった。長衣の裾すそは階段に引きずって、その角かどに引っかかった。彼女は平気だった。裂けるのも構わず衣を引っ張り、元気に裾を引きあげて上りつづけた。も少しで鐘を鳴らそうとまでした。塔の上でヴィクトル・ユーゴーの詩を朗吟した。彼にはその意味が少しもわからなかった。彼女はまたフランスの俗謡を一つ歌った。それから回教徒にならって、祈祷時間きとうを告げる真似をした、——薄暮になりかかっていた。二人は会堂の中に降りていった。濃い闇影あんえいが大きな壁にはい上がっていた。壁の上方には窓ガラスの怪しい眸ひとみが光っていた。クリストフがふと見ると、ハムレット見物に栈敷を共にしたあの若い女が、片側の礼拝所にひざまずいていた。彼女は祈祷に我れを忘れて、彼の姿に気づかなかった。悲しい切ない表情をしていた。彼はそれに心打たれた。なんとか言葉をかけたかった。少なくとも挨拶あいさつだけなりとしたかった。しかしコリーヌは彼を急せきたてて引っ張っていった。

二人はやがて別れた。ドイツの習慣として開演の時間が早いので、彼女はその準備をしなければならなかった。彼は家に帰った。するとほとんどすぐに、使の者がコリーヌの手紙をもつて来た。

ありがたい。ゼザベルが病氣。芝居お休み。稽古おやめ。……ねえ、いらっしやい。いつしよに御飯を食べましょう。

親しいコリネットより

それから、音楽をたくさんもつてきてちょうだい！

彼はちよつと意味がわからなかった。ようやくわかると、コリーヌと同様にうれしかった。そしてすぐ旅館へ出かけた。仲間の者が皆いつしよに食事をしてやすまいかと気づかれた。しかしだれの姿も見えなかった。コリーヌまでもいなかった。でもやがて、彼女の騒々しい快活な声が、奥の方に聞こえた。彼は彼女を捜し始めた。料理場でようやく見つけた。彼女は手製の料理を、非常な匂いにおが近所にあふれて石をも眼覚めめざすほどの南歐式な料理を、一皿さらこしらえようと考えたのだった。彼女は旅館のでつぷり太った主婦と

仲がよかつた。そして二人でいつしよに、ドイツ語ともフランス語とも黒人語ともつかない、なんとも言いようのないたいへんな言葉をしやべりちらしていた。たがいに料理の味をみながら大笑いをしていた。クリストフがやって来たので、なお騒ぎが募つた。彼女らは彼を追い出そうとした。しかし彼は逆つて、その有名な料理を味わうことができた。彼はちよつと顔をしかめた。それを見て彼女は、彼を野蛮なチュートン人だとし、彼のために骨折るのはまったく無駄なことだと言つた。

二人はいつしよに小さな客間へ上がつていった。そこには食卓が用意されていた。彼とコリーヌとの食器があるばかりだつた。仲間の人たちはどこへ行つたのかと、彼は尋ねないではいなかつた。コリーヌは平気な身振りをした。

「知らないわ。」

「いつしよに食事をしないんですか。」

「ええちつとも。芝居で顔を合わせるだけでたくさんよ。……ほんとに、食卓でまでいつしよにいなけりやならないとしたら!……」

それはドイツの習慣とはまるで異なつていた。彼は驚くとともに面白く思った。

「あなたたちは、」と彼は言つた、「社交的な国民だと思つていたが。」

「そんなら、」と彼女は言った、「私は社交的でないんでしようか。」

「社交的というのは、社会のうちに生活するということです。こちらでは、たがいに顔を合わせなければなりません。男も女も子供も、生まれた日から死ぬ日まで、それぞれ社会の一部をなしている。すべては社会のうちでなされる。人は社会とともに食ったり歌ったり考えたりする。社会が噓くしゃみをすれば、人もそれとともに噓くしゃみをする。一杯のビールを飲むのにも、社会とともに飲むんです。」

「それは面白いに違いないわ。」と彼女は言った。「同じ杯で飲んだらいいわ。」

「親密でしょう。」

「親密なんてそんな！ 私は好きな人となら兄弟になつてもいいし、そうでない人とはごめんだわ……。おう嫌いやだ、そんなのは、社会じゃなくて、蟻ありの巢ねよ。」

「僕もあなたに同意です。だからこちらで僕がどんな気持かわかるでしょう。」

「では私の国へいらつしやいよ。」

それは彼の望むところだった。彼はパリやフランス人のことについて尋ねた。彼女は種々聞かしてやった。それは完全に正確なものではなかった。南欧婦人の大袈裟おおげさな自慢癖のうえに、相手を幻惑しようという本能的な欲求が加わっていた。彼女の言うところによ

れば、パリイではだれも皆自由だった。そしてパリイでは皆^{れいり}恰憫なので、各人が自由を利用し、一人としてそれを濫用する者がなかった。各自に好きなことをし、勝手に考え信じ愛し、もしくは愛しなかった。だれもそれに言い分はなかった。そこでは、他人の信仰に立ち入る者はいないし、他人の良心を^{たんでい}探偵する者はいないし、他人の思想を抑制する者はいなかった。そこでは、政治家が文芸美術に干渉することがなく、^{じょうぎ}情誼や恩顧で勲章や地位や金錢を分かつことがなかった。そこでは、会の名によつて評判や成功が左右されることなく、新聞雑誌記者が買収されることなく、文学者が勝手に^{うぬぼ}自惚れ返ることはなかった。そこでは、批評界が無名の秀才を^{うぬぼ}圧迫することもなく、知名の士におもねることもなかった。そこでは、成功が、いかに価値ある成功でもが、それを得る手段をすべて正当化することなく、また民衆の崇拜を左右することがなかった。人気は穩和で丁重で親切だった。^{こうぎ}交誼はいかにも^{なめ}滑らかだった。決して人の悪口が聞かれなかった。人はたがいに助け合っていた。いかに新参な者でも価値さえあれば、かならず喜んで迎えられる、平らかな前途が見出されるのだった。美^{うる}わしいものにたいする純なる愛情が、それら^{にんきよう}任侠公平なフランス人の魂に満ちていた。そして彼らの唯一の^{こっけい}滑稽な点は、その理想主義にあるのであつて、そのために彼らは、世に知られた敏才をもつてるにもかかわらず、他の国民

から欺かれることがあるのだった。

クリストフは呆氣あつけに取られて聞いていた。実際、感嘆すべき点が多かった。コリー又自身も、自分の言葉を聞きながら感嘆していた。過去の生活の困難だったのについて前日クリストフに話したことなんかは、すっかり忘れてしまっていた。彼も同様にそんなことは思い出してもいなかった。

けれどもコリー又は、自分の祖国をドイツ人に愛させようと努めてるばかりではなかった。自分自身をも愛させようと望んでいた。親昵しんじつのない一晚は、彼女にとってはおかしくめらしくやや滑稽こっけいに思われたに違いない。彼女はクリストフにふざけないではおかなかった。しかしそれは徒労だった。彼はさらに気づかなかった。彼は親昵のなんたるやを知らなかった。彼は愛するか愛しないかであった。愛しない時には、恋愛のことなんかは頭にも浮かべなかつた。彼はコリー又にたいして、強い友情をいだいていた。彼にとってはいかにも珍しい南欧人の性質、そのやさしい愛あい嬌きょう、その晴れ晴れとした気分、その活発自由な知力に、彼は魅せられていた。そこにはもちろん、愛するためにはあり余るほどの理由があった。しかし「人の心の風は己おのがままに吹く。」彼の心の風はその方へ吹かなかつた。そして、恋愛がないのに恋愛の真似まねをすることは、彼のかつて思いもつかないこと

だった。

コリーヌは彼の冷たい様子を面白がっていた。もって来た種々の楽曲を彼がひいてる間、彼女は彼のそばにピアノの前にすわって、彼の首に裸の腕をまきつけ、音楽をよく聞くために鍵盤キイの方へかがみ込んで、自分の頬をほとんど彼の頬ほおにくつつけるほどにした。彼女は彼女の睫毛まつげが触れるのを感じ、また、その嘲るような眸ひとみの片隅や、愛くるしい鼻つきや、もち上がった唇くちびるの細かい産毛うぶげなどを、自分のすぐそばに見た。その唇は微笑ほほえみながら待っていた——彼女は待った。クリストフにはその誘いがわからなかった。コリーヌは自分の演奏を邪魔してる、というのが彼の考えのすべてだった。機械的に彼は身を引いて、椅子いすを横の方へずらした。そして間もなく、コリーヌの方へ振り向いて話しかけようとすると、彼女の笑いたくてたまらないような様子が眼についた。その頬えくぼの笑えくぼは笑っていた。彼女は唇をきつと結んで、放笑ふきだすまいと一生懸命に我慢してるらしかった。

「どうしたんです？」と彼は驚いて言った。

彼女は彼をながめて、にわかに大笑いを始めた。

彼には何にもわからなかった。

「なぜ笑うんです。」と彼は尋ねた。「僕が何かおかしなことを言いましたか。」

彼がしつこく聞けば聞くほど、彼女はますます笑った。笑いやめようとすると、彼の狼^ろ狽^{ばい}した様子を一目見ただけで、さらに激しく笑いだした。立ち上がって、向こうの隅の安楽椅子へ駆けて行き、その羽^は蒲^ぶ団^{どん}に顔を埋め、思うまま笑った。その身体全体が笑っていた。彼にもその笑いがうつってきた。彼女の方へやって行き、その背中を軽くつついた。彼女は心ゆくばかり笑ってから、顔を上げ、涙のたまった眼を拭^ふき、彼の方へ両手を差し出した。

「あなたはほんとにいい児^こね。」と彼女は言った。

「特別に悪い児でもありません。」

彼女はなお、こみ上げてくる小さな笑いに身を揺られながら、彼の両手を掘ったまま離さなかつた。

「真^ま面^め目^めじやないわね、フランスの女は。」と彼女は言った。

(彼女はフランスの女と発音した。)

「僕をからかっているんですね。」と彼は機^き嫌^{げん}よく言った。

彼女は彼をしみじみとした様子でながめ、強くその両手を振り動かして言った。

「お友だちにね。」

「お友だち！」と彼も手を振り返しながら言った。

「このコリネットがここから発つてしまつても、忘れないでくださるわね。このフランスの女が真面目でなかったつて、それを恨みはなさらないわね。」

「そしてあなたの方でも、この野蛮なチュートン人がいくら馬鹿だつて、それを恨みはしないでしょうね。」

「それだからかえつて好きなのよ。……パリーへも会いに来てくださるわね。」

「ええきつと。……そして私に手紙をくださるでしょうね。」

「誓うわ。……あなたもそれを誓つてちょうだいよ。」

「誓います。」

「いいえ。そうじゃないのよ。手を出さなくちやいけないわ。」

彼女はオレーズの誓いを真似た。また彼女は、自分のために一篇の曲を、メロドラマ挿楽劇を、

書くことを彼に約束させた。彼女はそのフランス訳をパリーで演ずるつもりだった。彼女は仲間とともに翌日出発することになっていた。彼らが一興行するフランクフルトまで、彼は翌々日会いに行く約束した。二人はなおしばらくいっしょにしゃべった。彼女はクリストフに、ほとんど半身裸体の写真を一枚贈った。彼らは兄妹のように抱擁しながら、

快活に別れた。そして実際コリーヌは、クリストフが自分をよく愛してはいるが決して恋してはいないことを、それと見て取つてからは、仲のいい友だちとして恋愛なしに、自分もまた彼を愛しだしたのであつた。

そのために二人の眠りは、どちらも妨げられなかつた。彼は翌日、別れの言葉を告げることができなかつた。彼はその時、ある音楽会の下稽古したげいこにつかまっていたからである。しかしその次の日に、彼は都合をつけて約束どおりフランクフルトへ行つた。汽車で二、三時間ばかりだつた。コリーヌはクリストフの約束をほとんど信じていなかった。しかし彼の方はきわめて真面目まじめだつた。そして、開演の時間に彼はそこへ着いていた。幕間まくあいに彼は行つて、彼女の支度部屋したくの扉とびらをたたいた。彼女は喜ばしい驚きの叫び声をたてて、彼の首に飛びついてきた。彼が来てくれたことを心からありがたがつていた。ただクリストフにとつては不幸にも、彼女はこの町では、彼女の現在の美と将来の成功とを鑑識し得る富裕れいり伶俐なユダヤ人どもから、ずっと多く取り巻かれていた。たえず部屋の入口で人々が雑踏とびらしていた。扉は半開きのままで、眼の鋭い重々しい顔つきの連中が出入りしていた。彼らは激しい調子でくだらないことを言つていた。コリーヌはもとより彼らとふざけていた。そのあとで、わざとらしい唆そそるような調子をそのまま変えないで、クリストフと話を

した。彼はそれにいらだつた。また眼前で化粧にとりかかった彼女の平気な不貞さにも、少しの喜びをも感じなかった。腕や喉や顔に塗られる脂粉に、深い嫌悪を覚えた。芝居がすむとすぐに彼は、彼女に会わずに帰りかけようとした。けれども、閉場後招かれていた夜食の宴に臨むことができないのを詫びながら、彼女に別れを告げると、彼女がいかにも可憐な心残りの様子を示したので、彼は決心を押し通すことができなかった。彼女は汽車の時間表を取り寄せて、まだ十分一時間くらいはいつしよにいられる——いつしよにいなければいけないということを、証明してやった。そう説服されるのはもとより彼の望むところだった。そして彼は夜食の宴に列した。そこでしゃべり散らされてるつまらない事柄にたいする倦怠や、コリーヌが手当たりしだいの人に浴びせかけてる擲擧にたいする憤懣も、彼はあまり多く示さないでいられた。そんなことを彼女に恨むわけにはゆかなかった。彼女はとにかくくしたたかな娘で、道徳心もなく、怠惰で、肉感的で、快樂を好み、くだらない愛嬌をふりまいてばかりいたが、しかし同時に、いかにも公明であり、いかにも善良であつて、そのあらゆる欠点も自然で健やかなために、笑つて済まざるを得ないし、ほとんど愛せざるを得なかつたのである。しゃべりつづけてる彼女の正面にすわつて、クリストフは、イタリー式の微笑——温和さと機敏さと貪食的な重々しきとの

こもった微笑をたたえてる、その元気な顔、輝いてる美しい眼、ふくらみ加減の顎、などをながめていた。彼はかつてそれほどはつきり彼女を見たことがなかった。ある特徴が彼にアーダを思い起こさせた。身振り、眼つき、多少露骨で肉感的な狡猾さ——すなわち永遠の女性的なところが。しかし彼女のうちに彼が愛してるものは、南欧の性質であった。南欧の寛濶な性質は、その天分を少しも惜しむところなく發揮し、客間的な美や書籍上の明知をこしらえることには興味をもたないが、しかし心身ともに日の光に花を開くべきなごやかな人物をこしらえて喜ぶのである。——彼が帰りかけると、彼女は食卓を離れ、他人をぬきにして別れを告げた。二人はまた抱擁し合い、手紙の往復と再会との約束をくり返した。

彼は最終の列車に乗って帰途についた。中間のある駅で、反対の方から来た列車が待っていた。ちょうど自分の正面に止まつてる車室——三等車の中に、クリストフは、ハムレットの芝居でいっしょになったあの若いフランスの女を認めた。彼女の方でもクリストフの姿を見て、見覚えていた。二人ともびっくりした。黙って会釈をしたが、それ以上顔を見合わかねて身動きもしなかった。けれどもクリストフは、彼女が小さな旅行帽子をかぶって古い鞆をそばに置いてるのを、一目で見て取ったのだった。それでも、彼女が国を

去ろうとしてるのだとは思いつかなかつた。ただ数日の旅だろうと考えた。彼は彼女に話しかけてよいかどうかわからなかつた。彼は躊躇した。言いたいことを頭の中で用意した。そして彼女に言葉をかけるために、車室の窓を開けようとする、発車の笛が鳴つた。彼は話すことをあきらめた。列車が動き出すまでに数秒過ぎた。二人はまともに顔を見合わせた。どちらも自分の車室の中で、車窓に顔をくつつけ、あたりに立ちこめてる闇を通して、たがいの眼の中をじつとのぞき込んだ。二つの窓が間を隔てていた。両方から腕を差し出したら、手先は届くかもしれない。すぐそばだった。またごく遠かつた。列車は重々しく動き出した。たがいに別れる今となつては、彼女はもう臆しもしないで、彼をながめつづけた。二人はじつと相手の顔に見入つたまま、最後に挨拶をかわすことさえも考えなかつた。彼女は徐々に遠くなつた。彼の眼から彼女は消えていった。彼女を乗せてる列車は暗夜の中に投じた。二人は二つの彷徨える世界のように、無限の空間の中で一瞬間をそばで過ごした、そしておそらく永遠に、無限の空間の中にたがいに遠ざかつてしまった。

彼女の姿が見えなくなると、彼はその未知の眼差から心の中にうがたれた空虚を感じた。彼にはその理由がわからなかつた。しかし空虚は存していた。半ば眼瞼を閉じ、うと

うとしながら、車室の片隅かたすみによりかかつて、彼は自分の眼の上に彼女の眼の接触を感じていた。そしてそれをなおよく感ずるために、あらゆる他の考えは沈黙してしまった。窓ガラスの外側で羽ばたきしてる 昆虫こんちゆう のように、コリーヌの面影が彼の心の外で飛び回っていたが、彼はそれを心の中にはいらせなかつた。

汽車が向こうに着いて車室から出で、夜のさわやかな空気を吸い寝静まった街路を歩いて、ようやくはつきりした気持になった時、彼はまたコリーヌの面影を見出した。彼女のやさしい様子や卑しい媚こびを思い出すにつれて、喜びといらだちとの交った気持で、その可憐な女優のことを考えては微笑ほほえんだ。

「しようのないフランス人だ！」と彼は低い笑いとともにつぶやきながら、そばに眠っている母が眼を覚さまさないように、そつと着物をぬぎかけた。

すると先夜ボックス 敷さの中ボックスで聞いた一語が、ふと頭に浮かんできた。

「そうでない者もいます。」

彼は初めてフランスに接触してから、その二重性質の謎なぞをかけられた。しかしあらゆるドイツ人と同じく、彼は謎を解こうとも思わなかつた。そして車室の若い女のことを考えながら、平気でくり返した。

「あの女はフランス人らしくない。」

あたかも、いかなるものがフランス的であり、いかなるものがフランス的でないか、それを説明するのはドイツ人の役目でもあるかのように。

フランス人であろうとあるまいと、彼女は彼の心を占めていた。彼は夜中に、切ない気持で眼を覚ました。あの若い女のそばに腰掛に置かれていた鞆かばんを、思い出したのだった。そして突然、彼女はまったく立ち去ってしまったのだという考えが頭に浮かんだ。実を言えば、その考えは最初から彼に起こるべきだったが、彼は思いつかなかったのである。彼はひそかな悲しみを感じた。彼は寢床の中で肩をそびやかした。

「それが俺おれになんの関わりかかがあるう。」と彼は考えた。「俺の知ったことではない。」
彼はまた眠りに入った。

しかし、翌日彼が外に出て最初に出会ったのは、マンハイムだった。マンハイムは彼を「ブリューヘル」と呼び、フランス全体を征服するつもりかと尋ねた。そして彼はこの生きた新聞から、あの棧敷ホックスの一件が大成功で、マンハイムの期待以上だったということを、聞き知った。

「君は実に偉い！」とマンハイムは叫んだ。「僕なんか比べものにもなりやしない。」

「僕がどうしたというんだい！」とクリストフは言った。

「君には感服だ！」とマンハイムは言った。「僕はうらやましいよ。棧敷を奪ってグリューネバウムの奴らやつに鼻をあかしながら、その家のフランス語の家庭教師を代わりに招待するなんて……いや、花輪でもささげたいくらいだ。僕には考えもつかなかった。」

「グリューネバウムの家の家庭教師だったのかい？」とクリストフは茫然ぼうぜんとして言った。「そうだ。知らないふりをするがいいよ、罪のないふうをするがいいよ。僕もそれを勧めるね。……親父おやじはもう心を和らげまい。グリューネバウムたちはたいへん怒ってる。……気長い話じゃないんだ。女を追っ払っちゃったよ。」

「なに、」とクリストフは叫んだ、「追い出したって……僕のために追い出したのかい？」

「君は知らないのか。」とマンハイムは言った。「あの女は君に言わなかったのか。」
クリストフは心が暗くなった。

「気をもむには及ばないよ、君、」とマンハイムは言った、「大したことじゃないからね。それに、どうせそうなるにきまつてるよ、いつかグリューネバウムたちに知られたら……」

。

「何を？」とクリストフは叫んだ、「何を知られるんだい。」

「君の情婦だということをさ。」

「僕はあの女を知りもしないよ。名前さえ知らないんだ。」

マンハイムは微笑した。その意味はこうだった。

「君は僕を間抜けだと思ってるんだね。」

クリストフは腹をたてた。自分の断言することを信じてくれとマンハイムに迫った。マンハイムは言った。

「それではなおさらおかしな話だね。」

クリストフはいきりたつて、グリューネバウムたちに会いに行き、事実を物語り、あの女のあかしをたてる、と言い出した。マンハイムはそれを諫めた。

「ねえ君、」と彼は言った、「君がどんなに説きたてても、反対のことをますます信じさせるばかりじゃないか。それにもう手後れだよ。今時分あの女は遠くに行ってるだろう。」

クリストフは悲痛な気持になって、その若いフランス婦人の行くえを捜そうとつとめた。彼女に手紙を書いて許しを乞こいたかった。しかしだれも彼女のことをまったく知らなかつ

た。グリューネバウム家の人たちに尋ねたが、ただ追い返されてしまった。彼ら自身も彼女がどこへ行ったか知らなかった、そして平気でいた。クリストフは、悪いことをしたという考えに悩まされた。それは絶え間ない苛責かしやくだった。なおそれには、消え去った彼女の眼から彼の上へ静かに輝き渡る神秘的誘惑が、つけ加わっていた。その誘惑と苛責とは、新しい日月と新しい考えとの波に覆おおわれて、消えてゆくようにも思われた。しかし底の方に人知れず残存していた。クリストフは彼女を自分の犠牲と呼んで、少しも忘れなかった。も一度めぐり会おうとみずから誓った。その再会がいかに望み少ないかはよくわかっていた。しかもかならず再会することができると信じていた。

コリーヌの方は、彼が書き送る手紙に少しも返事をくれなかった。しかし三か月後に、彼がもう何にも待つていない時に、四十語の電報が届いた。その中で彼女は、うれしげなつまらないことを言い散らし、彼に親しげなかわいい言葉をかけ、「相変わらず愛し合っているのね」と尋ねていた。それからなんの便りもなく、一年ばかり過ぎた後、子供らしい曲がりくねった大きな字体で、しかも貴婦人らしく見せかけようとつとめながら書きなぐった、一片の手紙——かわいいおどけた数語——が来た。そして、それきりだった。彼女は彼を忘れてはいなかった。しかし彼のことを考える際ひまがなかった。

コリーヌの魅力にまだとらえられており、彼女と話し合った考えで頭がいっぱいになっていて、クリストフは、彼女が若干の歌曲を歌いながら演ずるはずの戯曲のために——一種の詩的挿樂劇メロドラマのために、音楽を書こうと空想した。この種の芸術は、かつてドイツでもてはやされ、モーツアルトから熱心に鑑賞され、ベートーヴェンやウエーバーやメンデルスゾーンやシューマンやまたあらゆる古典的楽匠らによつて、實際試みられたものであるが、劇と音楽の決定的様式を実現したと自称するワグナー派の勝利以来、すっかり廃れすたたのであつた。厚顔な術学げんがく的なワグナー派は、新しい挿樂劇メロドラマをすべて排斥するだけで満足せず、古い挿樂劇メロドラマを飾りたてようとつとめた。彼らは話される對話の痕跡こんせきを歌劇オペラから注意深く消し去つて、モーツアルトやベートーヴェンやウエーバーらの作品のために、自己流の叙唱レシタチーヴを書いた。それらの傑作の上におのれの小さな愚作を恭々うやうやしくつみ重ねながら、巨匠の考えを補つてるのだと思ひ込んでいた。

クリストフはコリーヌの批評を聞いたために、ワグナー派の朗吟法の重苦しきやまた多くの醜さなどに、いっそう敏感となつていたので、言葉と歌とを劇中で併合せレシタチーヴ叙唱レシタチーヴの中に結合させるのは無意味なことで自然に反する手法ではないかと、疑念をもつていた。

それはちようど、馬と鳥とを同じ車につなごうとするようなものであった。言葉と歌とはそれぞれ自分の律動リズムをもっている。作者が両芸術の一方を犠牲にしておのれの好む方に勝利を得させようとするのならば、首肯できる。しかし両芸術間に妥協を求むるのは、両者をともに犠牲にすることだった。言葉がもはや言葉でなく歌がもはや歌でないのを、望むことだった。歌の広い流れが単調な掘割の兩岸の間にはめ込まれるのを望み、言葉の美しい裸の手足が、身振りや歩行を妨げるりっぱな重い衣でまとわれるのを、望むことだった。その自由な運動を、なぜ両者に残してやらないのか？ たとえば、軽快な足取りで小川のほとりをたどって、歩きながら夢想する美しい娘のようにだ。水の囁ささやきは彼女の夢想を揺ゆり、彼女は知らず知らずに、自分の歩みの律動リズムを小川の歌に合わせてゆく。かくて音楽と詩とはともに自由のままに、その夢想をなげなげながら、相並んで進んでゆくだろう。――もちろんかかる結合においては、どの音楽もりっぱだとは言えなかったし、詩もまたそうであった。挿楽劇メロドラマの反対者らは、これまでなされた試みとその実演者たちとの粗笨そほんさにたいして、りっぱに攻撃の理由をもっていた。クリストフも長い間、同じように嫌悪けんおを感じていた。俳優らは、楽器の伴奏につれて物語ることだけを事とし、伴奏には気も配らず、自分の声をそれに合わせようともせず、反対に自分の言葉だけを聞かせようとして

ていて、その愚劣さ加減には、音楽的な耳に反感を起こさせるだけのものがあつた。しかしながら、コリーヌのなごやかな声——流麗で純潔で、水中の一条の光線のように音楽の中に動きゆき、あらゆる旋^{メロデー}律の句調に和合し得て、さらに流動自由な歌のようである声——それをクリストフは味わつて以来、新芸術の美を瞥^{べっけん}見したのであつた。

おそらく彼は至当であつたろう。しかし彼はまだ十分の経験をつんでいなかったもので、この新しい形式を試みるには危険が伴わないわけにはゆかなかつた。この形式こそ、真に芸術的たらんことを欲するならば、最も困難なものである。ことにこの芸術は、一つの本質的な条件を、詩人と音楽家と実演者との結合的努力の完全な調和を、要求するものである。——クリストフはそんなことを気にかけてはいなかつた。彼は自分一人その法則を予感してゐる未知の芸術の中に、無我夢中で飛び込んでいった。

彼の最初の考えはシェイクスピアの夢幻劇かまたはファウスト第二部的一幕かに、音楽の衣を着せることであつた。しかしどの劇場も、そういう試みにあまり気が進まない態度を見せた。非常に費用がかかるしまた馬鹿^{ばか}げたことのように思われた。音楽におけるクリストフの技^ぎ倆^{りょう}はよく認められていた。しかし演劇に種々の野心をいだいてゐることは、人の笑いを招いた。人々は彼の言うことを本気に取らなかつた。音楽の世界と詩の世界とは、

たがいに親しみのないひそかに敵意を含んで二つの国のようだった。詩の国に踏み込むためには、クリストフは詩人の協力を承諾しなければならなかった。そしてその詩人をも、彼には選択の権利がなかった。彼自身もみずから選ぼうとは思わなかった。彼は自分の詩的趣味に自信がなかった。詩は少しもわからないのだと人から説教されていた。そして実際、周囲の人々の称賛してる詩が彼には少しもわからなかった。彼は例の正直さと強情さ
 とで、それらの詩のあるものの美を感じたいとかなり骨折った。けれどその結果はいつも
 なんらの得るところもなく、自分自身が少し恥ずかしくなるばかりだった。いや確かに彼
 は詩人ではなかった。実を言えば、昔のある詩人らを熱愛していたし、それが多少の慰安
 にはなっていた。しかしもとより、彼は正当の愛し方をしてるのではなかった。偉大なる
 詩人は、たとい散文に翻訳されようとも、外国語の散文に翻訳されようとも、やはり偉大
 であるはずだし、また言葉は、それが表現してる魂の価値以外には他に価値をもってるも
 のではないという、おかしな意見を彼はかつて発表したことがあった。友人らは彼を嘲
 笑^らった。マンハイムは彼を俗物だとした。しかし彼は弁解しようとはしなかった。音楽
 のことを語ってる文学者らの実例によって、おのれの専門外の芸術をもあえて批評する芸
 術家らの滑稽^{こっけい}なことを、彼は毎日見ていたので、詩にたいする自分の無能を（心の底で

は多少信じかねながらも）あきらめていた。そして、この方面では自分より教養があると
思われる人々の意見を、眼をつぶって傾聴していた。それだから彼は、雑誌の友人らが説
くところに従つて、一人の協力者を承諾した。それはシュテファン・フォン・ヘルムート
というはいたい廢類派の大詩人であつて、彼のもとへ自作のイフィゲニアをもつて来た。当時は
ちようと、ドイツの詩人らが——（フランスの詩人らと同じく）——ギリシャのあらゆる
悲劇を改作して最中だった。シュテファン・フォン・ヘルムートの作品も、イプセンや
ホメロスやオスカー・ワイルドなどが——もちろん二、三の考古学的小著をも取り入れて
——たがいに混合してるといふ、あの奇体なギリシャ・ドイツ折衷式脚本の一つであつた。
アガ멤ノンは神経衰弱者であり、アキレスは無氣力者だった。彼らは長々と身の上を嘆
いていた。そしてもとより、彼らの苦情はなんの役にもたないものだった。劇の力はす
べてイフィゲニアの役に集中されていた。——神経質でヒステリーでげんかく術学的なイフィゲ
ニアであつて、英雄らに訓戒をしたり、猛烈な勢いでしゃべりたり、ニーチェ流の悲
觀思想を公衆にぶちまけたりしたあげく、死に酔いながら、こうしやう哄笑しつつ自殺するの
であつた。

このギリシャ式の服をまどつてるはいたい廢類した東ゴートのきざ氣障な文学ぐらい、クリストフ

の精神に相反するものはなかった。しかし彼の周囲の者は傑作だと称賛していた。彼は卑ひ怯きようだった。皆の意見に説き伏せられた。しかし実を言えば、彼は音楽で頭がいっぱいになっていて、原文のことよりも音楽のことを多く考えていた。原文は彼にとって、自分の熱情の波をみなぎらすべき川床だった。詩の作品を音楽に翻訳せんとする者が当然もつべき自制と知的無私との状態から、彼はこの上もなく遠ざかっていた。彼は自分のことだけを考えて、作品のことはまったく考えなかった。作品に順応しようともしなかった。そのうえ彼は幻をいだいていた。詩を読んでも、その中にあることはまったく別なことを思っていた。ちやうど少年時代と同じように、眼前の作品とはまったく異なった作品を頭の中にこしらえ上げてしまった。

彼が現実の作品に気づいたのは、下稽古のおりにであった。ある日一つの場面を聞いてみると、それが非常に馬鹿げたものに感ぜられて、役者たちのせいでそうなったのだと思つた。そして、詩人の眼前でその場面を役者たちに説明しようとしたばかりでなく、役者たちを弁護してる詩人にまで説明してきかせようとした。作者たる詩人はそれに抗弁して、自分が何を書いたかは自分で知ってるつもりだと、気を悪くした調子で言った。クリストフはそれでも前言を翻さないで、ヘルムートは何にもわかっていないんだと言い張つた。

ところが、皆がくすくす笑つてるので、初めて自分の滑稽こっけいなことに気づいた。要するにそれらの詩句を書いたのは自分ではないということを知り、口をつぐんでしまった。その時彼は、作品がたまらなくばかばかしいものであることを知った。そして失望落胆した。どうして自分が見間違つたかを怪しんだ。彼はみずから馬鹿者と呼び、髪を掻きむしつた。「お前には何にもわからないんだ、お前の仕事じゃないんだ、お前は自分の音楽にだけ頭を向ければいいんだ、」と彼は自分自身に向かつてくり返しながら、心を落ち着けようとしたが無駄むだだった。——兎戯ていぎに類した点や、わざとらしい感激や、言葉身振り態度の仰々ぎょうぎょうしい虚偽などに、彼はいかにも恥ずかしい気がして、管絃樂を指揮しながらも時々、指揮棒を振り上げる力がなくなるほどだった。黒ん坊の穴へ身を隠したいほどだった。彼はあまりに率直であまりに策略がなかったので、自分の考えを隠し得なかった。友人らも役者らも作者も、皆彼の考えを見て取った。ヘルムートは苦笑を浮かべて彼に言った。

「これは君の気に入らないようですね。」

クリストフは正直に答えた。

「ほんとうのところを言えば、気に入らないんです。僕には意味がわかりません。」

「では作曲するのも読まなかったんですか。」

「読みました。」とクリストフは無邪気に言った。「しかし僕は思い違いしていたんです。他のことを考えていたんです。」

「ではその考えを自分で書くときよかったです。」

「ほんとに、僕が書くことができるんだったら！」とクリストフは言った。

詩人はむつとして、はらひ腹癒せに音楽を批評した。邪魔な音楽で詩句を聞かせる妨げになると不平を並べた。

詩人は音楽家を理解しなかったし、音楽家は詩人を理解しなかったが、役者らの方でもまた音楽家をも詩人をも理解せず、かつそれを少しも気にかけてはいなかった。彼らは自分の持ち役の中であちらこちらに、いつもの効果を与えるような文句をばかり捜していた。朗吟法を調性と音楽的律動リズムとに一致させることなどは、問題ではなかった。あたかもたえず調子はずれの歌い方をしてるがようだった。クリストフは歯ぎしりをして、一生懸命に音符を叫んでやった。が彼らは彼を叫ぶままにさしておいて、彼が自分たちに何を求めるかさえ理解しないで、平然とやりつづけた。

もし下稽古があまり進んでいなかったら、そしてぶんじょう紛擾の起こる恐れで制せられてい

なかつたら、クリストフはすべてを放り出したかもしれない。彼はマンハイムに落胆していることをうち明けると、マンハイムは彼を笑った。

「どうしてだい？」とマンハイムは尋ねた。「万事うまくいつてるじゃないか。君たちはたがいに理解していないんだって？　へえ、それがなんだい。作者以外に作品が理解された例ためしなどあるもんか。自分で自分の作品を理解するだけでも、十分幸運じゃないか。」

クリストフは詩のばかばかしさを苦しんでいた。詩のために自分の音楽が毒されると言つた。マンハイムも、その詩には常識が欠けることや、ヘルムートが「頓馬とんま」であることは、容易に認めていた。しかし彼はヘルムートにたいしてなんらの不安もいだいてはいなかつた。ヘルムートは御馳走ごちそうをふるまっていたし、きれいな女をもっていた。批評界にとつてはそれだけで十分じゃないか。——クリストフは肩をそびやかして、冗談を聞く暇はないと言つた。

「なに冗談なもんか。」とマンハイムは笑いながら言つた。「世間の奴らはおめでたいもんだ。人生において何がたいせつか、そんなことは少しも考えていないんだ。」

そして彼は、ヘルムートのことをそんなに気にしないで、自分のことだけを考えるが、いとクリストフに忠告した。少し自分の広告でもせよと勧めた。クリストフは憤慨して拒

絶した。彼の私生活について面会を求めて来たある探訪記者に、彼は腹をたてて答えた。

「それは君の知ったことじゃない！」

また、ある雑誌に出すのだと言つて写真を求められると、彼は怒つて飛び上がりながら、自分はあるがたいことには通行人に顔をさらすような皇帝なんかではないと、怒鳴り返した。——また、彼を勢力ある社交界に結びつけることもできなかった。彼は招待に応じなかつた。偶然承諾の余儀ない場合になつても、出席することを忘れるか、またはすべての人に不快を与えようとつとめてるかと思われるほど、不機嫌な様子で出席した。

しかし最も悪いことには、彼は公演の二日前に、雑誌の同人らと仲違いをした。

当然起るべきことが起こつた。マンハイムはなおクリストフの論説を校閲しつづけていた。そしてもはや平気で、非難の數行を全部抹殺して賛辞と置き換えていた。

ある日クリストフは、とある客間で、一人の音楽家と顔を合わせた。——容貌自慢のピアニストで、クリストフが酷評をくだした男であつたが、その時、白い歯並みを見せて微笑みながら彼のところへ来て礼を言つた。彼は礼を言われる訳はないと乱暴な返事をした。相手はなお言い張つて、まごつきながら感謝をやめなかつた。クリストフは、あの論

説に満足するかしないかは君の勝手であるが、しかしあれは確かに君を満足させるために書かれたのではない、と言つて相手の言葉をさえぎつた。そして背を向けてしまった。ピアニストは彼を親切な気むずかしやだとして、笑いながら立ち去つた。しかしクリストフは、自分がやつつけてやつた他の音楽家からも感謝の名刺を、せんだつて受け取つたことを思い出して、突然ある疑惑を起こした。彼は外に出て、最近の雑誌を売店で買い、自分の論説を捜し、読んだ……。最初は、自分は気が狂つたのではないかと思つた。次には、事情を了解した。そして激しい憤りのあまりディオニゾスの編集所へ駆け込んだ。

ワルトハウスとマンハイムとがそこにおいて、懇意な一人の女優と話をしていた。彼らはクリストフの来た理由を尋ねるに及ばなかつた。クリストフは、その雑誌をテーブルの上に投げ出しながら、息をつく隙ひまもなく、馬鹿野郎だの下司野郎げすだの偽造者だのと呼びたて、力任せに椅子いすを床にたたきつけ、異常な猛烈さで彼らに詰問した。マンハイムはしいて笑い出した。クリストフはそれを後ろから足蹴あしげにしようとした。マンハイムは腹をかかえて笑いながら、テーブルの後ろに逃げ込んだ。しかしワルトハウスは、きわめて傲然ごうぜんと彼に対抗した。そういう調子で口をきいてもらいたくないこと、やがて思い知らしてやるということ、などをその騒ぎの最中に、堂々と威儀を張つて彼に言い聞かせようとした。そ

して自分の名刺を差し出した。クリストフはその名刺を彼の鼻先に投げ返した。

「手数ばかりかけやがる。……名刺なんかなくなつたつて、君の名前は承知だ。君は狡猾こうかつ野郎で偽造者だ。君と決闘でもすると僕を思つてるのか。……懲罰、それで君にはたくさんなんだ!……」

彼の声は往来までも聞こえていた。人々は立ち止まつて聞いていた。マンハイムは窓を閉めた。訪問の女優は恐れて、逃げ出そうとした。しかしクリストフが扉口とぐちをふさいでいた。ワルトハウスは蒼あおざめて息をつまらしながら、マンハイムは口ごもつて冷笑しながら、ともに答え返そうとつとめた。しかしクリストフは彼らに口をきかせなかつた。最も侮辱的だと思われる事柄を残らず浴びせかけた。そして息が切れ悪口の言葉がなくなつてから、ようやくそこを出て行つた。ワルトハウスとマンハイムとが声を出し得たのは、彼が立ち去つた後だつた。マンハイムはすぐ平静に返つた。水が家鴨あひるの羽の上を滑すべるように、悪口は彼の上から滑り落ちてしまつた。しかしワルトハウスは恨みをいだいた。彼の体面はづかしは辱められた。そして、その侮辱をなお鋭くしたのは、見物人がいたことだつた。彼は決して許し得なかつた。雑誌の同人らも皆彼に一致した。ただマンハイム一人だけが、依然としてクリストフを憎まなかつた。彼は心ゆくまでクリストフを興がつたのであつた。その

面白さは、自分が受けた四、五の悪口を十分償い得るものだと考えた。実に面白い茶番だった。もし自分がその主人公であつても、みずからまつ先に笑い出したくなるほどのものだった。それで彼は、何事も起こらなかつたかのようにクリストフと握手するつもりであつた。しかしクリストフの方はいつそう恨みを含んでいた。そして申し出でをことごとく拒絶した。それでもマンハイムは気になかなかつた。クリストフは一つの玩具がんぐであつて、彼はそれからあらゆる興味をくみつくしたのだった。彼はもう他の人形に心を移し始めていた。翌日から二人の關係はすべて絶えてしまつた。それでもやはりマンハイムは、自分の前でクリストフの噂うわさが出ると、自分ら二人は親友だと言つていた。そしておそらく彼はそう信じていたのであろう。

喧嘩けんかの二日後に、イフィゲニアの初日となつた。全然失敗だつた。ワルトハウスの雑誌は詩だけをほめて、音楽についてはなんとも言わなかつた。他の新聞雑誌では大喜びだつた。笑つたり非難したりした。その一篇は三日きりで引つ込められた。しかし嘲ちやうしやう笑しょうはそう急にはやまなかつた。人々はクリストフを嘲ちやうろう弄ろうする機会を得たのでうれしがつた。そしてイフィゲニアは、数週間の間尽きざる笑い事となつた。クリストフにもう防御の武器がないことは知れわたつていた。人々はそれに乗じていた。ただ一つ、多少皆を控え目

にさしたのは、宮廷における彼の地位であった。大公爵は幾度もくり返して彼に意見を、彼は少しもそれを意に介しなかつたので、両者の関係はかなり冷やかなものになっていたけれども、彼はやはり官邸へ伺候していた。そして一般から見れば、実際以上に大きく見えるのではあるが、とにかく一種の公の保護を受けてるのであった。——がその最後の支持をも、彼はみずから破壊し去ることになった。

彼は悪評に苦しめられた。その悪評はただ彼の音楽にたいしてなされたのみでなく、また新芸術の形式に関する彼の考えにたいしてもなされた。人々はそれを理解しようとつとめなかつた。(それを嘲笑するためには、曲解する方がよりたやすいことだった。)クリストフは、悪意ある非難にたいしてなし得る最上の返答は、なんらの弁駁べんぱくをもなさないで創作しつづけることだと考えるだけの聡明そうめいさを、まだもっていなかった。数か月以来、いかなる不当な攻撃にも答え返さないでは済まさないという、悪い習慣に染んでいた。彼は、敵を少しも容赦しない論説を一つ書いた。そして二つの新聞へもち込んだ。ところが思慮深い新聞社の方では、それを掲載し得ないと皮肉な丁重さで詫わびながら、彼のものとへ返してきた。クリストフは意地を張った。かつて助力を頼んで来たことのある同地の社

会主義新聞を思い出した。その編集者の一人を知っていた。時々いっしょに話をしたこともあった。権力や軍隊や圧迫的な古めかしい偏見などについて、自由な意見を吐く者を見出すと、クリストフはうれしかった。しかし二人の話は深く進み得なかった。なぜなら、社会主義者との談話はかならずカール・マルクスのことに落ちて行くが、マルクスはクリストフにとって絶対に無関係であったから。そのうえクリストフは、自由思想家——彼があまり好まない唯物主義者でもある男——の談話のうちに、一つの銜学的な峻厳さ
げんがく しゅんげん
と思想上の専制主義、力にたいするひそかな崇拜、反対の意味の軍国主義、などを見出したが、それは彼が毎日ドイツで聞いているところのものと、たいして違つた響きはもって
いながつたのである。

しかしながら、他の編集所が自分にたいして扉を閉ざすのを見た時、彼が思いついたのはその男とその新聞とであつた。かかる手段が物議をかもすだろうとは彼もよく考えた。その新聞は激烈で憎悪的で、たえず禁止されていた。しかしクリストフはそれを読んでい
ぞうお
なかつたので、彼にとつては恐るるに当たらない思想の勇敢さを考えついで、彼にとつては嫌悪すべき調子の下劣さを考えつかなかつた。それにまた彼は、彼を窒息させたために
けんお
他の諸新聞が陰險な共謀をめぐらしてのを見て、非常に猛りたつていたので、たとい事

情にもつとよく通じていても、おそらく気になかなかたであろう。そうたやすく駆逐されるものではないことを、人々に示してやりたかった。——それで彼は、社会主義新聞社に論説をもち込んだ。すると双手を挙げて歓迎された。翌日、その論説は現われた。そして新聞は誇張的な言辞で報ずるのに、才幹ある青年楽匠たるクラフト君の協力を得たこと、労働階級の要求にたいする彼の熱烈な同情は世間周知のものであること、などをもつてした。

クリストフはその注解をも自分の論説をも読まなかった。なぜなら、ちょうど日曜であったその朝、彼は野外散歩に払暁から出かけたのだった。実に晴れ晴れとした気持だった。日の出を見ながら彼は、叫び笑い歌い飛び踊った。もはや雑誌もなく、もはや批評の責任もなかった。時は春であった。あらゆる音楽のうちで最も美しい天と地との音楽が復帰していた。息苦しい臭い薄暗い音楽会場も、不愉快な隣席の聴衆も、つまらない音楽家らも消えてなくなつた。ささやきわたる森から靈妙な歌の起こるのが聞こえていた。そして畑地の上には、大地の表皮を破つて生命の芳醇ほうじゆんな気が通り過ぎていた。

彼は光明で鳴りわたる頭をもつて、散歩から帰つてきた。すると、不在中に官邸から届けられた手紙を、母から渡された。だれからともつかない形式で書かれたその手紙の趣旨

は、今朝クラフト氏は官邸へ伺候せられたいとのことだった。——朝はもう過ぎ去っていた。一時に近かった。クリストフはほとんど気にもしなかった。

「もう遅い^{おそ}。」と彼は言った。「明日にしよう。」

しかし母は気をもんだ。

「いえ、いえ、殿下にお目にかかるのを延ばせるものではないよ。すぐに行かなければいけません。大事な御用らしいから。」

クリストフは肩をそびやかした。

「大事な御用ですって、あんな人たちに大事な話なんかあるもんですか。……僕に音楽上の意見でも聞かせたいんだろう。愉快だな……ジューグフリート・マイエル（注—— Siegfried Meyer 馮・ドイツの諷刺家らが [Seine Majestat] 陛下——皇帝——のことを仲間うちで言う時に用いた^{あだな}綽名）と競争しようとの気まぐれを起こして、自分でもエジルの賛歌みたいなものを作って人に示したいんだろう。僕は容赦はしない。こう言つてやろう。政治をなさるがいい、政治では殿下が御主人だ。いつも御道理^{ごもつとも}だ。しかし芸術では、用心なさるがいい。芸術にふみ込んだら、羽飾りも^{かぶと}兜も軍服も金銭も肩書も祖先も憲兵も、殿下についてはしない。……そしたら、どうです、殿下から何が残りますかって。」

善良なルイザは、すべてを本気に取って、天に両腕を差し上げた。

「そんなことを言っではいけません！……お前さんは狂者だ、狂者だ……。」

彼は母の信じやすいのにつけ込んで、心配さして面白がった。けれどしまいには、無法な言葉があまりすぎたので、ルイザはからかわれてることに気づいた。彼女は背を向けた。「ほんとに、しようのない人だ。」

彼は笑いながら母を抱擁した。素敵もない機嫌だった。散歩してるうちに彼は、りっぱな楽旨テーマを見出したのだった。水中の魚のように、その楽旨が自分のうちに踊ってるのを感じていた。食事をしないうちは、官邸へ出かけようとしなかった。餓鬼のように貪り食むさぼった。それからルイザは彼の身ごしらえを監督した。彼がまた彼女をじらし始めたからである。すり切れた服と埃ほこりだらけの靴くつのまままで構わない、と言い出した。それでも彼は鞆つぐみのように口笛を吹いて管絃樂の各樂器を真似まねながら、自分で服を着替え靴をみがいた。それが済むと、母は彼の様子を一通り見調べて、襟飾えりりをきちんと結び直してやった。彼はいっになくゆつくりしていた。なぜなら自分に満足していたから——そしてそれも、滅多にないことだった。出かけながら彼は、アデライド姫を誘拐ゆうかいしに行くのだと言った。それは大公爵の令嬢で、かなりきれいだった。ドイツのある小貴族に嫁しているが、数週間両親

のもとへ帰つて来ていた。昔クリストフが子供であつたおり、彼に多少の同情を示してくれたことがあつた。そして彼は彼女を好んでいた。ルイザは彼が恋してるのだと称していた。そして彼も冗談に、恋をしていた。

彼は早く官邸へ行きつこうともしないで、商店の前をぶらついたり、往来に立ち止まつて馴染みの犬の頭をなでてやつたりした。犬も彼と同様に呑気で、日向にねそべつて欠伸をしていた。彼は官邸の広場をめぐるして無役な鉄柵を飛び越した。——寂しい広い方形の地で、建物にとり囲まれ、水の涸れてる二つの噴水があり、額の皺のような一本の径で分かたれてる、木陰のない同形の二つの花壇があつた。径には砂がかきならされてい、両側には木鉢の橙樹が並んでいた。広場の中央には、四隅に徳をかたどつた飾りのついてる台石の上に、ルイ・フィリップ式の服装をした、無名の大公爵の銅像が立っていた。ベンチの上にはただ一人の散歩者が、新聞を広げたまま居眠っていた。官邸の鉄門のところには、無駄な哨兵らが眠っていた。邸前の高壇の馬鹿な溝の後ろには、眠つて二門の大砲が、眠つてる町の上に欠伸をしていた。クリストフはそれらのものの鼻先で笑つてやつた。

彼は官邸へはいつても、公式の態度を取ろうとはしなかつた。たかだか微吟をやめたば

かりだった。なお楽がく想そうが踊りつづけていた。彼は玄関のテーブルの上に帽子を投げ出しながら、子供の時から知ってる受付の老人を親しげに呼びかけた。——（その好々爺こうこうやは、クリストフが祖父とともに初めて官邸へ伺つて、ハスレルに会ったあの晩から、すでにその地位にいたのである。）——その老人は、クリストフの多少失礼な冗談にもよく答えるのを常としていたが、その時は、横おうへい柄へいな様子を示した。クリストフはそれに気を止めなかつた。それから少し奥へ行つて控室で、彼は文書局の役人に出会つた。いつも彼に親愛の様子を見せながら、盛んにおしやべりをする男だった。ところが、その男が話を避けて急いで通り過ぎたので、彼はびっくりさせられた。が彼はそれらのことにこだわらないで、なお進んでいつて案内を求めた。

彼ははいつていつた。午餐ごちんが終わつたところだった。殿下は客間にいた。暖炉を背にして、客たちと話しながら煙草たばこをふかしていた。客のうちにクリストフは、自分の姫を認めた。彼女も煙草をふかしていた。そして肱掛椅子ひしかけいすにしどけなく身をよせかけて、まわりを取り巻いてる将校らに声高く話していた。会合はにぎやかだった。皆はすこぶる愉快そうだった。そしてクリストフはいつて行きながら、大公爵の幅広い笑い声を聞いた。しかしクリストフの姿が彼の眼にとまると、その笑い声はびたりとやんだ。彼は一つ唸うなり声を

たてて、じかにクリストフめがけて大声に浴びせかけた。

「ああ来たな。どの顔でやって来たのか。お前はこうえ私を馬鹿にするつもりなのか。お前は実に悪者だ。」

クリストフは真正面に受けたその砲弾に茫然として、ちよつとの間一言も発することができなかった。彼は自分の遅参のことばかり考えていた。遅参したとてかかる乱暴な目に会う訳はなかった。彼はつぶやいた。

「殿下、私は何かいたしたのでございますか。」

殿下は耳を貸さなかった。勢い激しく言い進んだ。

「黙れ。私は悪者から侮辱されはしないぞ。」

クリストフは蒼くなりながら、喉がつまって言葉が出ないのをもがいた。彼は一生懸命になって叫んだ。

「殿下は不当です……不当であります、私が何をしたかおっしゃらずに、私を侮辱されるのは。」

大公爵は私書官の方をふり返った。私書官はポケットから一枚の新聞を取り出して、それを大公爵に差し出した。大公爵はひどく激昂していた。例の怒りっぽい性質からと言

うだけでは不十分だった。芳醇な酒気も加わっていた。彼はクリストフの前に来てつつ立ち、闘牛士が外がい套とうを打ち振るのように、広げた皺しわくちやの新聞をクリストフの顔の前に激しく振り動かしながら、叫んだ。

「汚らわしい行ないだ。……こんなものに顔をつつ込むのがお前にはよく似合ってる。」

クリストフはそれが社会主義の新聞であることを知った。

「私は別に悪いとは思いません。」と彼は言った。

「なに、なんだと！」と大公爵は金切声で叫んだ。「不謹慎な！……この恥知らずの新聞めは、毎日私わしを侮辱してんだ、私に下劣な悪口を吐いてるんだ……。」

「殿下、」とクリストフは言った、「私はその新聞を読んだことがございません。」

「嘘うそをつくな！」と大公爵は叫んだ。

「私は嘘をついてると言われたくありません。」とクリストフは言った。「読んだことはございません。私は音楽に關係してるだけであります。それにまた、どういふところへ書こうと、それは私の権利であります。」

「お前にはただ黙る権利しかないんだ。私わしはお前たちに親切すぎた。お前の不品行やお前の父の不品行によつて、もう疾とつくに追い払う理由があつたにもかかわらず、お前たち一家

の者に恩恵を施してやった。私はお前に、私と敵対する新聞につづけて書くことを禁ずる。それからまた、どんなことであろうとも、今後私の許可なくして書くことを一般に禁ずる。お前の音楽上の筆戦にはもうたくさんだ。私の保護を受けてる者が、趣味と心を有する人々にとつて、ほんとうのドイツ人にとつて、貴重であるあらゆるものを攻撃して、時間をつぶすのを私は許さない。お前はりっぱな音楽を書く方がよい。もしそれができなければ、音階や練習に精を出す方がよい。国家的光栄を誹謗ひぼうしたり人々の精神を混乱さしたりして喜ぶ、音楽上のベールを私は欲しない。われわれはありがたくも、何がよいかを知っている。それを知るには、お前から説き聞かされるのを待つ要はない。だからお前はピアノに向かうがよい。そしてわれわれを平和にしておいてもらいたいのだ。」

でつぷり肥ふとつた彼は、クリストフと顔を向き合わせて、侮辱的な眼で相手の顔をうかがっていた。クリストフは色を失つて、口をききたがっていた。その唇くちびるはかすかに動いていた。彼は口ごもりつつ言った。

「私は殿下の奴隷ではありません。言いたいことを言います、書きたいことを書きます……。」

彼は息をつまらしていた。恥辱と憤怒ふんぬとに泣かんばかりになっていた。両足は震えてい

た。片腕ひじを急に動かしながら、傍かたわらの家具に乗つてた器物をひっくり返した。自分の様子がいかにもおかしいのをはつきり感じた。果たして笑い声が聞こえた。客間の奥をながめると、皮肉な憐憫れんぴんの言葉をそばの人たちとかわしながら喧嘩けんかを見守みまもつてる姫の姿が、霧の向こうにあるようにぼんやり眼にはいった。それ以来彼は、何が起こつてるかという正確な意識を失つた。大公爵は叫んでいた。クリストフは何を言つてるのかみずから知らないで、いつそう高く叫んでいた。秘書官とも一人の役人どが彼の方へやって来て、彼を黙らせようとつとめた。彼は二人を押しつけた。背中でもりかかっていた家具の上から、機械的に一つの灰皿はいざらをつかみ取つて、口をききながら振り回した。秘書官の言つてる言葉が耳にはいった。

「さあ、それを放したまえ、それを放したまえ……。」

そして自分が叫んでる取り留めもない言葉や、灰皿でテーブルの縁をたたいてる音などが、耳にはいった。

「出て行け！」と大公爵はひどく猛たけりたつて喚わめいた。「出て行け、出て行け。追い出してやるぞー！」

将校らは大公爵のそばに来て、彼を鎮しずめようと試みていた。卒中症の大公爵は、両眼を

むき出しながら、この無頼漢をつき出せと叫んでいた。クリストフは眼の前が真赤まっかになつた。将まさに大公爵の鼻面はなづらに拳固けんこを食くらわせようとした。しかし種々の矛盾した感情の混乱に圧倒されていた。恥辱、激怒、または、彼のうちにまだ多少残つてる、怯懦きょうだや、ゲルマン的忠義心や、伝統的な尊敬心や、君侯の前における屈從的習慣などであつた。彼は口をききたかつたがそれもできなかつた。なんとかしてやりたかつたがそれもできなかつた。もはや何も眼にはいららず、何も耳にはいらなかつた。押し出されるままになつて、外へ出た。

彼は冷然たる召使らのまん中を通りぬけた。彼らは扉とびらのところまでやって来て、喧嘩けんかの騒ぎを残らず聞き取つていた。控室から外に出るため三十歩行くのが、彼には一生かかるかと思われた。前へ進むに従つて廊下は長くなつた。とうてい出られないような気がした……。向こうにガラス戸から見えてる戸外の光は、彼にとって天の救いであつた……。彼はつまずきながら階段を降りていった。帽子を被かぶつていないことに気づかなかつた。受付の老人は彼を呼びとめて、帽子を注意してやつた。彼はある限りの力を振るい起こしてようやく、官邸を出で、中庭を横ぎり、家へ帰りついた。齒をかち合あわしていた。家の扉とびらを開くと、母は彼の顔つきと身震いとに恐れ驚いた。彼は母を避け、少しも問いに答えな

った。自分の室に上がって行き、扉を閉め切り、そして寝た。非常に身体が震えていて、着物を脱ぐこともできなかつた。息切れがして、手足にまるで力がなかつた。……ああ、もう何も見ず、何も感ぜず、この惨めな身体を維持する要もなく、卑しい人生と闘う要もなく、斃れてしまい、呼吸も思想もなく斃れてしまい、もはやどこにも存在しなかつたら……彼はようやくの思いで着物を脱ぎ去り、そのまま床の上に投げ散らし、寝床に飛び込み、眼までもぐり込んだ。室の中には物音が絶えた。床石の上に震える小さな鉄の寝台の音しか、もはや聞こえなかつた。

ルイザは扉のところで立ち聞いていた。扉をたたいたが無駄だった。静かに呼んでみた。なんの答えもなかつた。ひっそりした様子を気づかつて窺いながら、彼女は待った。それから立ち去った。その日のうちにまた一、二度もどつてきて、耳を澄ました。晩にもまた、寝る前にそうした。昼は過ぎ、夜も過ぎた。家じゅう静まり返っていた。クリストフは熱に震えていた。時々涙を流した。夜中に身を起こして、壁に拳固をさしつけた。午前二時ごろ、にわかに狂暴な気持に駆られて、汗にまみれ半ば裸のまま寝床から出た。大公爵を殺しに行きたかつた。憎悪と恥辱とにさいなまれていた。身心とも燃えたつてもがいていた。——この暴風雨も、外へは少しも聞こえなかつた。一つの言葉も一つの音もし漏れ

なかつた。彼は齒を食いしばって、すべてを自分のうちに閉じこめていた。

翌朝、彼はいつものとおりに降りて来た。ひどくやつれて来た。彼は何にも言わなかつた。母も尋ねかねた。彼女は近所の噂うわさですでに知っていた。終日彼は暖炉の隅の椅子いすにすわり、老人のように背をかがめ、いらだち黙然としていた。そして一人になると、黙って涙を流した。

夕方、社会主義新聞の編集者が会いに来た。もとより彼は事件を知っていて詳細を聞きながっていた。クリストフは彼の訪問に感動して、自分を危地に陥れた人々からの同情と謝罪とをもたらししたものだと率直に解した。自尊心から何にも後悔してないふうをした。そして心にあることをすべてうつかりしやべってしまった。自分と同様に圧迫を憎んでる男にはばからず語るのは、彼にとって一つの慰謝であった。相手は彼をおだてて話させた。新聞にとって好都合な誹謗ひぼう的記事を得る機会を、その事件のうちに見て取っていた。クリストフがみずからその記事を書かないまでも、少なくともその材料を供給するだろうと、彼は期待していた。なぜなら、そういう破裂のあとには、宮廷音楽家たるクリストフは、論客としてのりっぱな手腕と、それよりさらに価値ある宮廷に関する小秘録とを、「主義」

のために役だててくれることと考えていたのである。彼はわざとらしい遠慮を装う男ではなかったから、なんらの技巧も加えず露骨にそのことを申し出た。クリストフは駭然がいぜんとした。彼は何にも書かないと断言し、自分の方からする大公爵にたいする攻撃は、このさいすべて私の復讐ふくしゅう心から発した行為だと解せられやすいこと、また、自由でなく危険を冒してまで考えを発表していた時よりも、自由の身となった今ではいっそう慎むべきであること、などを主張した。記者はそれらの慎重な気持を少しも理解しなかった。彼はクリストフを、やや偏狭で根は僧侶臭い男だと判断した。ことにクリストフが恐れてるのだと考えた。彼は言った。

「では、僕たちにお任せなさい。僕が書きましょう。あなたは何にもしなくてよろしいです。」

クリストフは何にも言わないでおいてほしいと頼んだ。しかしそうさせるだけの方法がなかった。そのうえ記者は、事件はクリストフ一人に関係したことはないと言いつ出した。侮辱は新聞にまで及んでいて、新聞には復讐ふくしゅうの権利があった。それにはクリストフも返答のしようがなかった。クリストフがなし得たすべては、記者としてではなく、友人としてなしたある打ち明け話を、決して濫用しないという言質を求めることだった。記者は

造作なくその言質を与えた。それでもクリストフは安心しかねた。軽率なことをしでかしたのに気づいたが、もう間に合わなかつた。——一人になると、彼は語ったことをすべて思い起こしてみても、身を震わした。考えるまもなくすぐにペンを取って、うち明けた話を他にくり返してくれるなど、懇願の手紙を記者に書いた。——（不幸にも彼は、その話の一部を手紙の中でみずからくり返して述べた。）

翌日彼が、いらだちながら急いでその新聞を開いて、最初に読んだのは、第一ページに長々と出てる彼の話であつた。前日彼が話したことは残らず出ていて、しかも非常に誇張されたものとなり、新聞記者の頭を通ると万事が受ける特殊な変形を受けていた。その記事は下劣な罵詈ばりをもつて大公爵と宮廷とを攻撃していた。その中のある事柄は、あまりにクリストフの一身に近しいことであり、明らかに彼一人のみが知つてることだったので、記事全部が彼の筆に成つたものだと思われても仕方なかつた。

その新たな打撃にクリストフはまいってしまった。読んでゆくに従つて、冷たい汗が顔に流れた。読み終わると、狂わんばかりになつた。彼は新聞社へ駆け込みたかつた。しかし母は彼の乱暴を恐れて引き留めた。母が恐れたのも無理はなかつた。彼自身もそれを恐れていた。もし行つたら馬鹿げたことをしかねない気がしていた。そして彼は家に残つた

——他の馬鹿げたことをするために。彼は記者へ怒った手紙を書き、侮辱的な言葉でその行為を責め、記事を取り消し、その仲間と関係を絶った。取り消しは新聞に出なかった。クリストフは新聞社へ手紙を書き、自分の手紙を発表せよと促した。すると、会見の晩に彼が書いた第一の手紙の写しを、かえって記事の証明となる手紙の写しを、送って来た。それをも発表すべきかと尋ねてきた。クリストフは彼らの手中に陥ったことを感じた。そのうえにまた彼は、あの不謹慎な訪問記者と往来で不幸にも出会った。彼はその記者にたいする軽蔑^{けいべつ}の念を言つてやらずにはおかなかった。翌日になると、新聞は侮辱的な小欄を掲げて、宮廷の奴僕どもは、追い出されてもなお奴僕根性がぬけないものだ、書きたてた。最近の事件にそれとなく説き及ぼしてゐる言葉によつて、それがクリストフに関するものであることは疑いの余地がなかった。

クリストフはもはやなんらの支持ももっていないことが、すべての人に明らかにわかつた時、彼の思いもつかなかつた多数の敵が突然現われてきた。あるいは個人的な非難によつて、あるいはその思想や趣味を攻撃することによつて、彼が直接間接に傷つけた人々はすべて、ただちに攻勢を取りだして、利息をつけて復讐^{ふくしゅう}してきた。クリストフが無感

覺から呼び覺ましてやろうとした一団の大きな公衆は、世論を改革し善人の眠りを妨げんと企てたこの傲慢な青年に処罰が加えられるのを、満足な心でながめた。クリストフは水に陥っていた。人々はそれぞれ力を尽くして、彼の頭を下に押し沈めようとした。

彼らは皆いつしよになって彼へ飛びかかつては来なかった。ある者が最初に陣地を探るため攻撃してきた。クリストフが応戦をしないので、彼はさらに攻撃を重ねた。すると他の者らもついて来た。それから全隊が進んで来た。ある者らは、美しい場所に汚物を残して面白がる若い犬のように、単なる楽しみからその騒ぎに加わっていた。それは無能な新聞記者らから成る別動隊であった。まったく無知であって、それを人に知らせないために、勝者に阿諛し敗者をののしる奴らだった。また他の者らは、おのれの主義主張の重みをもち出し、やたらにがなりたてていた。彼らが通ったあとには何物も残らなかった。偉大な批評——虐殺の批評であった。

クリストフは幸いにも、それらの新聞を読んでいなかった。忠実な四、五の友人は、そのもつとも毒々しいのを注意して送ってくれた。しかし彼はそれをテーブルの上につき重ねたまま、開こうとも思わなかった。がついに彼の眼は、ある記事の周囲に引かれてる太い赤線に止まった。読んでみると、彼の歌曲は野獣の唸り声に似ており、彼の交響曲は

癲^{てん}狂^{きやう}院^{いん}から発する趣きがあり、彼の芸術はヒステリー的であり、彼の瘡^{けい}癩^{れん}的^{てき}な和^わ声^{こゝろ}は心情の乾燥と思想の空粗とをごまかそうとしたものである、などと書いてあった。その著名な批評家は次のように結んでいた。

クラフト氏は近ごろ報道記者として、その文体および趣味に驚くべきものがあることを証明し、音楽界に一大快^{かい}哉^{さい}を叫^{こゝろ}ばしめた。その時彼は親しく、むしろ作曲に没頭するよう勧告せられた。しかし彼の最近の音楽的創作は、この好意的勧告が誤れることを示した。クラフト氏は断然報道記者となるべきであった。

クラフト氏はそれを読んで、朝じゆう仕事ができなかつたが、なおやけに落胆してしまふために、敵意ある他の新聞を捜し始めた。しかしルイザは、「片付ける」という口実のもとに、なんでも散らかつてる物をなくなす癖があつて、それらの新聞を焼いてしまつていた。彼は初めそれを怒つたが、次には安堵^{あんど}した。残つてたその新聞を母に差し出しながら、これも同様に焼いてくれるとよかつたと言つた。

彼はさらに痛切な他の侮辱をも受けた。フランクフルトの名ある音楽団へ、^{カチユール}四重奏曲の

原稿を一つ送っていたが、それが全員一致でしかもなんらの説明もなしにつき返された。ケルンの管絃楽団が演奏するつもりだった序曲は、幾月も待たせた後に、演奏不能のものとして送り返された。また町の管絃楽団からは、さらにひどい目に会わされた。この楽団を指揮していたオイフラート楽長は、かなりりっぱな音楽家であった。しかし多くの管絃楽長と同じく、彼はなんらの精神的好奇心をももってはいなかった。彼はその楽団特有の怠惰さに毒せられていた。——（あるいはむしろ、すてきな健康を得ていた。）——怠惰というのは、すでに著名な作品ならば限りもなくくり返して、真に新しい作品はすべて火のごとく避けることであつた。彼は決して飽きることなく、ベートーヴェンやモーツァルトやシューマンなどの大音楽会を催していた。それらの作品においては、耳なれた律動リズムの音に身を任せるだけでよかつた。それに反して、当代の音楽は彼には堪えがたかつた。けれどもそうだと告白し得ないで、年若い俊才しゅんさいをすべて歓迎すると言つていた。實際のところ、古い模型の上のうち立てた作品——五十年前に新しかった作品の複写めいたもの——をもつてゆくと、彼はそれを非常に優遇した。聴衆に演奏して聞かせることを自慢にさえしていた。それで効果を収める慣例も乱さず、聴衆が感動することになつて慣例をも乱さなかつた。これに反して、その美しい慣例を破り彼に新たな骨折りかけ

恐れのあるものにたいしては、軽侮と憎悪との交った気持を感じた。その改革者が無名の地位から出る機会がない時には、軽侮の方が強かった。改革者に成功の恐れがある時には、憎悪となった——もちろん、彼がすっかり成功してしまうまでの間だった。

クリストフはまだ成功してるとは言えなかった。そこまではまだかなり遠かった。それで彼は、オイフラート氏が彼の作を何か演奏したい意向を持つてるということを間接に提議された時非常に驚いた。楽長はブラームスの親しい友であり、彼が批評のうちで非難した他の数人の音楽家の親友であることを、彼はよく知っていただけになおさら、それを期待できる理由が少なかった。しかし彼は人がいいので、自分のいだけき得る寛大な感情が敵にもあることと思つた。自分が困憊こんぱいしてるのを見て彼らは、卑しい怨恨えんこんを含んでるのではないことを証明したがつてるのだと、彼は想像した。そしてそれに感動した。彼はオイフラートへ交響詩を一つ送つて、真情に満ちた寸簡すんかんを認めた。向こうからは秘書の手に成つた返事が来た。冷淡なしかし丁寧ていねいな手紙であつて、送られたものを正に受け取つたと告げ、交響曲は楽団の規則に従つて、近々管絃楽団に配布され、公の演奏をする前に一度、一般試演にかけてみるはずだと書き添えてあつた。規則は規則だった。クリストフは従わないわけにはゆかなかつた。それにまたこの規則は、単に形式的なものであつて、厄や

介つかいな音楽愛好家らの労作を避けるために使われてるものだった。

二、三週間後に、クリストフは自作の試演が行なわれる由を知った。原則としてはすべて傍聴が禁じられ、作者といえども立ち合うことができなかった。しかし作者が出席することは一般に大目に見られていた。ただ作者たることを示してはいけなかった。だれも皆作者を知りながら知らないふうをするのであった。それで定日になると、クリストフは一人の友人に誘われ、場内に案内されて、あるボックスの奥に席を占めた。ところが、公開を禁じた試演なのに、場内が——少なくとも下の座席が——ほとんど満員なのを見て、彼は非常に驚かされた。音楽通や閑ひましん人や批評家などがたくさん集まって、がやがや騒いでいた。管弦楽団は彼らの臨席を知らないことになっていた。

最初にまず、ゲートの冬のハルツ紀行の一節を取り扱った、次高音アルトと男声合唱と管弦楽とからなるブラームスの狂詩曲ラフソデーが、演奏された。この作のしかつめらしい感傷性をきらっていたクリストフは、ブラームス派の者らがたくらんで、不敬な非難を加えた一曲を自分に無理に聞かして、ごていねいな復讐ふくしゅうをするつもりでいるのだと、みずから考えた。そう考えると笑わずにはいられなかった。狂詩曲ラフソデーが終わってからの、彼が対抗した知名の音楽家らの他の二曲が始まると、彼の愉快的気分はなお募ってきた。彼らの意図が明らか

にわかるような気がした。彼は洗面を押えることができないで、結局これは面白い戦いだ
と考へた。ブラームスとその一派にたいして感激を示して聴衆の喝采かつさいに、彼は皮肉な
喝采を交えまでして面白がった。

ついにクリストフの交響曲シンフォニーの番となつた。彼の棧敷の方へ管弦楽席や平場から幾つか
の視線が向けられたので、彼は自分の出席が知れわたつてゐることを見て取つた。彼は奥に
隠れた。彼は待つた。楽長の指揮棒が上げられ、音楽の河水が沈黙のうちにあふれてきて、
将に堤防を破らんとする瞬間に、どの音楽家も感ずる一種の痛切な心地を、彼も感じた。
彼はまだかつて、自分の作を管絃楽で聞いたことがなかつた。彼が夢想した生物らは、い
かなるふうに生き上るであろうか。彼らの声はどんなであろうか。彼は自分のうちに彼ら
が喚くのを感じていた。そして音響の深淵をのぞき込んで彼は、そこから出て来るものを
震えながら待つていた。

出て来たのは、名もないものであり、奇体な捏り細工ねだつた。殿堂の破風はふをささうべき
堅固な円柱どころか、廢れた泥建築のように、和音は次から次へと崩壊していつた。漆しつ
喰ほこりの埃よりほかには何も認められなかつた。クリストフは自作が演奏されてるのだとは
なかなか信じられなかつた。彼は自分の思想の線を、律動リズムを捜した。もうそれも見分けら

れなかつた。その思想は壁につかまって行く酔漢のように、訳のわからぬことをしゃべりながらよろよろと進んでいった。彼はそういう状態になつてゐる自分の姿を人に見られたかのように、恥ずかしくてたまらなかつた。自分が書いたのはそういうものではないと知つても、なんの役にもたたなかつた。愚劣な通弁者から自分の言葉が改悪される時、人はちよつと疑つてみ、その馬鹿さ加減に自分は責任があるかどうか、驚いてみずから尋ねる。ところが公衆の方は、決して怪しまない。聞きなれた通弁者を、歌手を、管弦楽隊を、あたかも読みつけの新聞を信ずるように信じている。通弁者らに誤りがあるはずはない。彼らがくだらないことを言うのは、その作者がくだらないからである。そしてこの場合において、そう信ずることが愉快であるだけにますます聴衆は怪しまなかつた。——クリストフは、楽長が滅茶な演奏に気づいて、管弦楽をやめさせ、初めからやり直さしてくれらるだろうと、しいて思い込もうとした。もはや各楽器がいつしよに鳴つてはいなかつた。ホルンは吹き出す機をそらして、一小節だけ後れていた。そしてなお数分間吹きつづけたが、次には平気でやめてしまつて、その持ち場に穴を開けた。オーボエのある表現は、すっかり消えてしまつていた。きわめて熟練した耳にとっては、一筋の楽想を見出すことも、また何か楽想があると想像することも、まったく不可能だつた。楽器配列の妙想も

諧 謔

的な機知も、演奏の乱雑なために道化^{どうけ}たものとなった。たまらないほど愚劣なものであった。音楽を知らない痴漢道化者の作品だった。クリストフは髪^{かみ}の毛をかきむしった。彼は演奏をやめさせたがった。しかしいつしよにいた友人は彼を引き止めた。楽長自身で演奏の誤りを見分けて訂正させるだろう——それにまた、クリストフは姿を現わしてはいけなし、何か注意を与えてもしたら最も悪い結果になるだろうと、説き聞かした。そしてむりにクリストフを棧敷^{げんこ}の奥に引つ込ました。クリストフは言われるままに従った。しかし彼はみずから頭を拳固^{げんこ}でなぐっていた。そして奇怪な演奏の仕方を新たに聞くことに、憤りと苦悩とのうめき声をたてた。

「畜生めが！ 畜生めが！……」と彼はうなっていた。そして叫び出すまいとして両手を口に食いしばっていた。

するとこんどは、動揺^{どうぶ}しだした聴衆^{けんしゆ}の喧騒^{けんそう}が誤った楽音とともに彼の方へ響いてきた。初めはちよつとしたざわめきにすぎなかった。しかしやがてクリストフももう疑わなかった。彼らは笑っていた。管弦楽の楽員^{がくゐん}らが示唆^{しそく}を与えたのである。ある楽員^{がくゐん}らはその偷み^{ぬす}笑いを少しも隠さなかった。それ以来聴衆は、笑うべき作品であると確信して大笑いをした。愉快的気分が一般に広がった。コントラバスがおどけたふう^{ふう}に高調したきわめてリズ

ミカルな動機の反復によつて、その気分はさらに倍加した。ただ楽長のみは泰然自若として、支離滅裂な演奏のうちに拍子を取りつづけていた。

ついに終わりに達した。——（最上のものには皆終わりがあつた。）——聴衆の番となつた。聴衆はどつと破裂した。それは愉快の爆発であつて、数分間つづいた。ある者は口笛を吹き、ある者は皮肉な喝采かつさいをした。最も気のきいた連中は「も一度ビース」と叫んだ。一つの低音バスが舞台前の一隅ぐうから響いてきて、道化どうけた主題を真似まねしはじめた。他の茶目連中も負けまいとして、同じくそれを真似た。ある者は「作者！」と叫んだ。——それらの才人は、長くこういふ面白い目に会つたことがなかつたのである。

騒さわぎがやや静まつた後に、平然たる楽長は、聴衆の方へ四分の三ほど顔を向け、しかも聴衆を見ないふうを装よそおいながら——（聴衆はやはりそこにいないものと見なされていた）——管弦楽団へ合図をして、一言述べたい由を示した。人々は「しッ！」と叫んだ。そして皆黙つた。楽長はなおちよつと待つた。それから口を開いた。——（明めい晰せきで冷やかでよく通る声だつた。）

「諸君、楽匠ブラムスにたいしてあえて妄もうひよう評ひょうを加えた人を、一度御覽に入れたい希望がありませんでしたら、私はむろんこういふものを終わりまで演奏させはしなかつたで

しよう。」

彼はそう言った。そして壇上から飛び降りながら、沸きたった場内の喝采かつさいのうちに退場した。人々は彼をも一度呼び出そうとした。歓呼はなお一、二分の間引きつづいた。しかし彼はふたたび姿を見せなかった。管弦楽隊は立ち去りかけていた。聴衆もまた立ち去ることにした。演奏会は終わった。

すてきな一日だった。

クリストフはもう外に出ていた。下劣な楽長がその譜面台から離るのを見るや否や、彼は棧敷ボックスの外に飛び出したのだった。楽長をとらえてその横面よこづらをはりとばしてやるために、二階の階段を駆け降りていった。いっしょにいた友人は、彼を追っかけて行って引き止めようとした。しかしクリストフは、その友人を押しつけて、危うく階段の下へつき飛ばすところだった。——（その男も彼を窵おとしあなに陥れた同類だと信ぜらるる理由があった。）

——オイフラートにとつてもまたクリストフにとつても仕合わせなことには、舞台へ通ずる扉とびらが閉まっていた。クリストフが怒りに任せてうちたたいても、それは開かなかった。そのうちに聴衆は場席から出始めていた。クリストフはそこにじっとしてることができな

かった。彼は逃げ出した。

彼は名状しがたい心地になっていた。狂人のように、両腕を打ち振り、目玉をぎよろつかせ、大声で口をききながら、当てもなく歩いていった。彼は憤怒の叫び声を押え止めていた。街路にはほとんど人影がなかった。その音楽会場は、町はずれの新開地に前年建てられたものだった。クリストフはただ本能的に、田舎いなかの方へ逃げようとして、孤立した小屋や板囲いの建築足場などが立つて荒れ地を横ぎっていった。彼は殺害心を起こしていった。かかる侮辱を自分に加えた男を殺したかった……。がしかし、その男を殺したとて、あれらすべての人々の悪意が少しでも変わるであろうか。彼らの嘲ちやうしょう笑がまだ彼の耳には響いていた。彼らはあまりに多勢で、彼はどうともしようがなかった。彼らは彼を辱めはづかし押しつぶしてやろうと——他の多くのことにはそれぞれ意見を異にしていながら——皆一致していた。まったく訳のわからないことだった。彼らは彼を憎んでいた。いったい彼は彼ら皆に何をしたのであったか。彼は自分のうちに、美しいものを、人のためになり心を愉快ならしむるものをもつていて、それを語りたく思い、それを他人にも楽しませようと思つたのだ。そして彼らも自分と同様に楽しくなるだろうと思つていたので。たとい彼らはそれを味わい得なくとも、少なくとも彼の意向には感謝すべきだった。少なくとも、

彼らは彼の思い違いの点を親しく注意してやり得るはずだった。しかしそうはしないで、彼の思想をいやに曲解して、それを侮辱し踏みにじり、彼を笑殺せんとして、意地悪い喜びにふけるとは、なんとということだろう。彼は激昂のあまり、彼らの憎悪心をおお誇張して考えていた。それらの凡庸な奴らがいだき得ない本気さをも、彼はそこに想像して
いた。

「俺は彼らに何をしたか、」と彼はすすり泣いていた。子供のおり、初めて人間の悪意を知ったあの時のように、彼は息づまる心地がし、もう万事駄目だという気がしていた。

そしてふとあたりをながめ、足下を見ると、水車屋の小川の縁に出て、数年前父がおぼれた場所に来てることを、彼は気づいた。そして自分もおぼれて死にたいという考えがやにわに起こった。彼はすぐさま飛び込もうとした。

しかし、水の静かな瞳に惑わされてのぞき込んだ時、ごく小さな一匹の小鳥が、そばの木の上で歌いだした——やたらに歌いだした。彼は黙然として耳を澄ました。水がささやいていた。柔らかな風になでられて起伏する、花時の小麦の戦ぎが聞こえていた。白楊樹が揺いでいた。路傍の籬の向こうには、眼には見えなかったがある庭に蜜蜂の巣があつて、その香ばしい音楽を空气中にみなぎらしていた。小川の向こう側には、瑪瑙色に

縁取った美しい眼の牝牛が、うつとりと夢みていた。一人の金髪の少女が壁の縁に腰掛け、翼をそなえた小さな天使のように目荒な軽い背負い籠を肩にして、裸の足をぶらつかせ意味のない唄を歌いながら、やはりうつとりと夢みていた。遠く牧場の中には、一匹の白犬が大きな円を描いて飛び回っていた……。

クリストフは樹によりかかって、春めいた大地をながめかつ聞いていた。それらのものの平和と喜悦にとらえられた。忘れていたのだ、忘れていたのだ……。にわかには、頬をつけていた美しい樹を両腕に抱きしめた。地面に身を投げ出した。草の中に頭を埋めた。彼は激しく笑っていた、幸福に笑っていた。生命のあらゆる美が恵みが魅力が、彼を包み込み浸し込んだ。彼は考えた。「どうして、お前はこんなに美しいのか、そして彼ら——人間——はあんなに醜いのか？」

それはどうでもいいのだ！ 彼は生命を愛していた、愛していたのだ。常に生命を愛するだろうということを、何物からも生命を奪われ得ないだろうということを、彼は感じた。彼は夢中になって大地を抱擁した。彼は生命を抱擁していた。

「僕はお前をもっている。お前は僕のものだ。彼らも僕からお前を奪うことはできない。なんとでもするがいい。僕を苦しませるがいい……。苦しむこと、それもやはり生きるこ

とだ！」

クリストフはまた勇ましく働きだした。「文士」などとよくも名づけられた奴ども、文飾家、無益な饒舌家、新聞雑誌記者、批評家、芸術上の山師や商売人、それらとはもはやなんらの関係もつけなくなかった。また音楽家らの偏見や嫉妬を攻撃して時間をつぶすことは、なおさらしたくなかった。彼らは彼を欲しなかったというのか。——よろしい、もう彼の方でも彼らを欲しなかった。彼はなすべき仕事をもっていた。それをなすことだ。宮廷は彼を解放した。彼はそれを感謝していた。彼は人々の敵意を感謝していた。これから一人静かに働き得るのだった。

ルイザは心から彼に賛成した。彼女はなんらの野心をももっていないなかった。クラフト家の気質ではなかった。クリストフの父にも祖父にも似ていなかった。息子のために名誉をも世評をも希望してはいなかった。彼が富裕になり有名になったら、確かに彼女も喜ぶには違いなかった。しかしそれらの利得があまりに不愉快な価を払って得らるべきものであるとしたら、彼がそんなものに係わり合わない方が彼女にはずっと好ましかった。彼女はクリストフが宮廷と仲違いしたことについて、事件そのものよりも彼の苦しみの方をより多く心配した。そして心の底では、彼が雑誌や新聞の連中と喧嘩したことを喜んでいた。

彼女は不徳な新聞雑誌にたいして、田舎者らしい不信をいいていた。それらに關係することは、ただ時間を浪費し人の嫌悪けんおを招くのに役だつばかりだった。彼女は時々、雑誌の同人たる青二才どもがクリストフと話してるところを聞いた。そして彼らの人の悪おさに怖おそれを感じた。彼らは何事も痛烈に非難し、何事についてもひどいことを言っていた。ひどいことを言えば言うほど満足していた。彼女には彼らを愛せられなかった。彼らは確かにきわめて怜悧れいりで学者ではあつた。しかしいい人ではなかった。で彼女は今や、クリストフがもう彼らと会わないことを喜んだ。彼らに用があるもんか、というクリストフの意見に彼女は同意だった。

「彼らは僕について、勝手なことを言つたり書いたり考えたりするがいい。」とクリストフは言っていた。「彼らは僕が僕自身たることを妨げ得はしない。彼らの芸術、彼らの思想、それが僕に何になるものか。僕はそれを否定してやる！」

世間を否定するのはきわめて痛快なことである。しかし世間は青年の放言壯語によつてたやすく否定されるものではない。クリストフは眞面目まじめだった。しかし彼は自惚うぬぼれていて、自分をよく知らなかった。彼は僧侶ではなかった。世間を見捨てる気性ではなかった。こ

とにそれだけの年齢に達していなかった。彼は最初のうちはあまり苦しまなかった。作曲に没頭していた。そしてその仕事がつづいてる間、なんらの不足も感じなかった。しかし、一つの作品が完成してから他の新しい作品が精神を奪うまでの間うちつづく、しやうちん 悄沈しやうちんの時期にはいった時、彼は周囲を見回して自分の孤独に慄然りつぜんとした。なんのために書いたかを彼は怪しんだ。書いてる間はそういう疑問は起こるものではない。ただ書かなければならない。それは議論のほかである。ところが次に、生まれた作品と顔を合わせる。作品を臟腑ぞうふから迸り出させた強い本能は沈黙してしまっている。なんのために作品が生まれたのかもわからない。作品のうちに自分の姿を認めることもなかなかできない。それはほとんど見知らぬ者である。できるならば忘れてしまいたくなる。しかも、作品が発表されるか演奏されるかしないうちは、世の中の独自の生活を得ないうちは、忘れることは不可能である。そうなるまでは、作品は母体に結びつけられてる赤児あかごであり、生きた肉体に鋳びよう付けされてる生けるものである。生きんがためには、それを切断しなければいけない。クリストフが多く作曲すればするほど、彼から生まれ出て生きること死ぬこともできないでいるそれら生物の圧迫が、彼のうちに増大していった。だれがこの圧迫から彼を解放してくれるであろうか。一つの人知れぬ力が、それらの彼の思想の児ら突き動かしていた。

風に運ばれて宇宙に広がる根強い種子のように、それらは彼から離れて他の魂の中に広がるうと、むりやりに切望していた。クリストフは無生産のうちに閉じこもっていなければならぬのであろうか？ そんなことだったら彼は憤激するに違いない。

あらゆる出口は——芝居も音楽会も——彼にたいして閉ざされていたし、また彼は、一度拒絶された支配人らに新たな申し込みをするほど、どんなことがあっても身を屈したくなかつたので、今はもはや、書いたものを出版するだけの方法しか残っていなかつた。しかしながら彼は、自作を演奏してくれる管弦楽団よりも、自作を出版してくれる本屋の方が見出しやすいとは、自惚れることができなかつた。いかにも拙劣な二、三の運動を試みたが、それだけでもう明瞭だつた。彼は新たな拒絶に出会つたり、あるいはそれらの商売人と議論し彼らの保護者的な態度を我慢するよりは、むしろ自費出版の方法を取つた。それは狂気の沙汰だつた。彼は宮廷の給料や音楽会などから得た少しの貯蓄をもつていた。しかし今はそれらの財源がすべて涸れていて、他の財源を見出すまでには長くかかるかもしれなかつた。十分慎重な態度を取つて、当面の困難な時期を過ごす助けとなるべきその小貯蓄は、節約しておかなければいけなかつた。ところが、彼はそうしなかつたばかりではなく、その貯蓄では出版費用に足りなかつたので、平気で借金をした。ルイザはなんと

も言い兼ねた。彼女は彼を無鉄砲だと思い、また、書物の上に自分の名前を見るために金を費やす理由がよくわからなかった。しかしそれは、彼の気を落ち着けさせ彼を手もとに引き留める一つの方法だったので、彼女は彼が満足しさえすればそれで非常に幸福だった。

クリストフは、よく知られた種類の安心できる曲を、世に発表することをしないで、非常に愛着して行く個性的な一連の作品を、原稿の中から選んだ。それはピアノの曲であつて、ごく短い大衆的なものやごく込み入ったほとんど劇的なものなど、種々の歌曲が入り交つていた。全体が時には楽しい時には悲しい一連の印象を形造つていて、それらの印象はごく自然に相連続し、順次にピアノ独奏と単独もしくは伴奏付の独唱とで演奏さるべきものとなつていた。「なぜなら、」とクリストフは言つていた、「私は夢想する時、常に自分の感じてることだけを表白しはしない。私は言葉にそれと言わないで、苦しんだり喜んだりする。しかし、それを言わないではおられない瞬間も、別になんの考えもなく歌わないではおられない瞬間も、やつてくる。時としては、ぼんやりした言葉、取り留めもない文句、にすぎないこともある。時としては、まとまった詩のこともある。それからまた、私は夢想を始める。そういうふうにして一日は過ぎ去る。そして実際、私が表現しようと思つたのは、一日をである。何故に、歌あるいは前奏曲ばかりを集めるのか？ それ

ほど不自然で不調和なものはない。魂の自由な動作を伝えようとつとめなければいけない。——それで彼は、その一連の集を一日と名づけた。その各部分には、内心の夢想の連続を簡単に示す小題がついていた。クリストフはそこに、ひそかな捧呈文や頭字や日付などを書いておいた。それは彼一人にしかわからないものであつて、彼に過去の詩的な時を思い起こさせるものであり、あるいは、にこやかなコリーヌ、弱々しいザビーネ、名を知らぬ若いフランスの女など、愛する人々の面影を思い起こさせるものであつた。

右の作品以外に、^{リード}歌曲の中から——彼には最も気に入らぬものの中から、三十曲ばかりを彼は選んだ。最も「旋律的」な^{メロデー}旋律を選ばないように用心して、最も独自性あるものを選んだ。——（人の知るとおり、世人は「独自性ある」ものをいつも非常に恐れる。性格のないものの方が彼らにはよく似てるのである。）

それらの^{リード}歌曲は、十七世紀の古いシレジアの詩人らの句にもとづいて書かれたものであつた。それをクリストフは通俗叢書^{そうしよ}の中で読んだことがあつて、その誠直さを愛してゐたのだつた。ことに二人の詩人は、兄弟のように親しく思われた。二人とも天分が豊かであつたが、ともに三十歳で死んでゐた。一人はパウル・フレミンクという愉快な詩人で、コーカサスやイスパハンへ自由な旅を試み、戦争の野蛮や生活の悲哀や時代の腐敗などの中

にあつて、純潔な愛情深い清朗な魂を失わなかつた人である。も一人はヨハン・クリスチアン・ギウンテルという放肆ほうしな天才で、風のままに放浪しながら、暴飲と絶望とに身を焦がした人である。クリストフはギウンテルから、彼を圧倒する敵なる神にたいする挑戦のろと復讐ふくしゅう的的反語との叫びを、打倒されながら天に雷電を投げ返すタイタンの恐ろしい呪いを、くみ出したのであつた。そしてフレミンクからは、アネモネやバジレネへ寄する花のように香ばしくやさしい恋の歌、——また澄み切つた楽しい心の舞踏タンツリード歌たる星のロンド、——またクリストフが朝の祈禱きとうのように諳誦あんしゅうしていた自身へという悲壯な落ち着いた短詩ソクネット、などを取つて来たのであつた。

敬虔けいけんなパウエル・ゲルハルトのやさしい樂觀主義もまた、クリストフを魅していた。それは彼にとつて、悲しみから脱したおりの休息だつた。神のうちにある自然のその清浄な幻像を、彼は愛していた。砂の上を歌い流れる小川のほとり、白いチューリップや水仙すいせんの中を、鶺鴒こうの鳥が堂々と歩を運んでる新鮮な牧場、大きな翼の燕つばめや鳩はとの群れが飛んでる澄みわたつた空気、雨間を貫く日光の楽しさ、雲間に笑う輝いた空、夕の巖いわかな清朗さ、森や家畜や町や野の休らい、などを彼は愛していた。今もなお新教の教会で歌われてるそれから聖歌の多くを、彼は無遠慮にも音楽に直した。そしてその賛美歌的性質を残すまいと用

心した。否残さないだけではなかった。ひどい性質に変えてしまった。それらに自由な生き生きとした表情を与えた。定めし老ゲルハルトは、自分のキリスト教徒の旅人の歌のある節から今発している悪魔的な傲慢心ごうまんや、自分の夏の歌の平和な流れを急湍きゅうたんのようにみなぎらしてゐる異教的悦楽の情に、身震いをしたことであろう。

ついに出版はなされた。もとより常識を逸した出版だった。クリストフが歌曲の自費出版をさせその書物を預けた本屋は、ただ隣人だというので彼から選ばれたのだった。そういう大事な仕事には手はずが整つていなかった。印刷は数か月もかかった。誤植が多く、校正にも費用がかかった。クリストフはまったく不案内だったから、すべてに三分の一ほども余計に金を取られた。入費ははるかに予想を超過した。次にそれが済むと、クリストフはおびただしい部数を腕にかかえて、どうしていいかわからなかった。その本屋には得意がなかった。書物を広めるための策を少しも講じなかった。その無頓着むとんじやくはまたクリストフの態度とよく合つていた。気が済むように広告でも二、三行書いてくれと彼が頼むと、クリストフは答えた。「広告はいやだ。音楽さえよければ、それで広告になるはずだ。」本屋はクリストフの意志を恭うやうや々しく尊重した。そして店の奥に書物をしまい込んだ。それはりっぱに保存されていた。というのは、半年のうちに一冊も売れなかったから。

クリストフは、公衆の方からやつて来るのを待ちながら、自分のわずかな財産に明けた穴を埋めるために、何かの方法を講じなければならなかった。そして気むずかしいことを言つてはおれなかった。生活をするとともに負債を払わなければならなかったから。ただに負債が予想以上に大きかったばかりでなく、当てにしていた貯蓄が予算以上に少ないことがわかった。知らず知らずのうちに金を使ったのか、もしくは——この方がずっとほんとうらしかつたが——計算を間違えたのであつたらうか？（かつて彼は正確な加算をすることができなかつた。）がとにかく、金の不足した理由はどうでもよい。金が足りない、そのことだけは確かだつた。ルイザは息子むすこを助けるために血の汗をしほらなければならなかつた。彼は痛切な苛責かしやくを感じて、どんなことをしてもできるだけ早く負債を済ませようとした。彼は稽古けいこの口を捜し始めた。申し込んでは往々断ことわりられるのは、いかにもつらいことではあつた。彼の評判は地に落ちていた。数人の弟子でしを見つけるにもたいへん骨が折れた。それで、ある学校に就職口があることを聞くと、大喜びでそれを引き受けた。

それは半宗教的な学校であつた。校長は機敏な人で、音楽家ではなかつたが、クリストフの現状をもつてしては、ごく安い金で役だたせることができると思つたのだつた。彼

は愛想はよかつたが金払いはけちだつた。クリストフがおずおず異議をもち出すと、校長は親切そうな微笑を浮かべて、クリストフにはもはや公の肩書がないから、これ以上を要求することはできないものだと言ひ聞かした。

なさない仕事だつた。生徒らに音楽を教えることよりもむしろ、彼ら自身や両親に彼らが音楽を知つてるとの空想をいだかせることだつた。最も大事な事柄は、一般公衆の列席が許される儀式のために、彼らを歌えるように仕込むことだつた。方法などはどうでもよかつた。クリストフは厭いやになつてしまつた。職務を尽くしながら、有益な仕事をしてると考ふる慰謝さえも得られなかつた。本心では偽善として自責の念を覚えた。彼は子供らにもつと確実な教育を授け、彼らに真面目まじめな音楽を知らせ愛させようと試みた。しかし生徒らはそんなことを気にもかけなかつた。クリストフは自分の考えをよく聞かせることができなかつた。彼には権威が欠けていた。そして実際、彼は子供らを教育するような性格ではなかつた。彼らが渋滞するのに同情を寄せなかつた。ただちに音楽の理論を説明してやろうとした。ピアノの稽古けいこを授ける時には、ベートーヴェンの交響曲シンフォニーを生徒に課して、それを生徒といつしよに連弾した。もとよりそんなことがやれるはずはなかつた。彼は腹をたてて、生徒をピアノから追ひのけ、その代わりに一人で長々とひいた。——学校以外

の個人の弟子にたいしても、同様であった。彼には少しの我慢もなかった。たとえば、貴族たることを自負しているかわいひ令嬢に向かつて、女中のようなひき方をすると云ったり、あるいはまた、母親へ手紙を書いて、もう教えるのはごめんだと言ひ、こういう無能な者にこのうえ関り合つていなければならぬとしたら、寿命が縮まるばかりだと言つた。——そんなふうなのでうまくゆかなかつた。わずかな弟子も離れていった。一人の弟子を二か月以上も引き止めることはできなかつた。母は彼に意見を加えた。就職した学校とだけはせめて喧嘩けんかをしないと、彼に約束させた。なぜなら、もしその地位を失うようなことがあつたら、もはや生活の道がわからなくなるからだつた。それで彼は厭々いやながら辛抱した。模範的によく時間を守つた。しかし、頓馬とんまな生徒が二度も一つところを間違えたり、あるいは次の音楽会のために、無趣味な合唱を自分の級に教え込まなければならぬ場合には、自分の考えを隠す術すべがなかつた。(彼は曲目を選ぶことさえ任せられなかつた。彼の趣味は疑われていた。)彼はあまり熱心には教えていないと思われていた。けれども彼は、黙つて脹れ顔ふくれをしながら意地を張つていて、生徒をびつくりさせるほどテールブルの上を打ちたたきただけで、内心の憤りを押えていた。しかし時とすると、あまりに苦々にがにがしいことがあつた。彼はもう辛抱できなかつた。楽曲の最中に彼は歌をやめさせた。

「ああ、それはよすががいい、よすががいい。いつそワグナーを僕がひいてやろう。」

生徒らは望むところだった。彼らは彼の後ろでカルタを弄もてあそんだ。するといつも、それを校長に言いつける生徒があつた。そしてクリストフは、彼が学校に出てるのは生徒らに音楽を好ませるためではなく、彼らに音楽を歌わせるためであることを、言い聞かせられた。彼は震えながら譴責けんせきを受けた。しかしそれを甘受していた。喧嘩をしたくなかつたのである。——彼がなんらかの価値あるものになり始めると、かかる屈辱を受ける破目に陥るだろうということを、数年以前、彼の前途が輝かしく有望であることを示していた時（その時彼は何にもしてはいなかつたが）、その時に、だれが想像し得たであろうか。

学校における職務上、彼は自尊心を傷つけられる苦しみを多く嘗なめたが、そのうちで、義務的に同僚を訪問することも、彼にとつてはやはりつらい仕事だった。彼はでたらめに二人を訪問してみた。そして非常に厭になつて、訪問をつづけるだけの勇気が出なかつた。とくに訪問を受けた二人は、別にありがたいと思わなかつたが、他の人々は、個人的に侮辱されたと考えた。皆の者はクリストフを、地位から言つても能力から言つても自分の目下に見ていた。そして彼にたいして保護者的な態度を取つていた。そして彼にたいする意見と自分自身とにいかにも確信ある様子をしていたので、彼にもその考えが感染してき

た。彼は彼らのそばにいと自分が馬鹿になったような気がした。彼らに言つてやるべきことは何にも見当たらなかつたではないか。彼らはおのれの職務でいっばいになつていて、それ以外のことは何にも見ていなかつた。彼らは人間ではなかつた。せめて書物ならまだよかつた。しかし彼らは書物の注解であり、言葉の注釈者だつた。

クリストフは彼らといつしよになる機会を避けた。しかし時々それをのがれることができなかつた。校長は月に一回午後には訪問を受けていた。そして仲間全部が集まることを望んでいた。クリストフは、欠席してもわかるまいといい加減に考へて、断わりもしないでひそかに最初の招待に欠けたが、翌日になると、厭味な小言を食わされた。次回には、母からしかられて、行くことに心をきめた。そして葬式にでも行くように洩々出かけた。

はいつて行くと、自分の学校や町の他の学校の教師たちが、細君や娘を連れて集まつていた。彼らは狭すぎる客間に押し込まれて、階級ごとに一群をなしていたが、彼にはなんらの注意をも払わなかつた。彼のそばにいる一団は、児童教育や料理のことを話していた。教師の細君たちは皆、多少の料理法を心得ていて、頑強がんきょうに学者ぶつてしゃべりたてていた。男たちの方もその問題には同じく趣味を覚えていて、ほとんど劣らないくらいに脳力を示していた。また彼らは自分の細君の家政的手腕を誇り、細君らは自分の良人おとこの知識

を誇っていた。クリストフは、窓ぎわの壁によりかかってたたずみ、どういふ様子をしていいかわからず、あるいはぼんやり笑顔をしようとつとめたり、あるいは眼をすえ顔を引きしめて陰鬱いんうつになつたりしながら、退屈でたまらなかつた。数歩向こうに一人の若い女が窓口に腰掛けて、だれからも話しかけられず、彼と同様に退屈しきっていた。二人とも広間の中をながめていて、たがいに認めなかつた。しばらくたつてから、どちらもたまらなくなつて欠伸あくびをしようと向き返つた時に、初めて気づいた。ちようどその時、二人の眼は出会つた。二人は親しい目配せをし合つた。彼は彼女の方へ一歩近寄つた。彼女は小声で彼に言つた。

「面白うございますか。」

彼は広間の方へ背中を向け、窓を見ながら、舌を出してみせた。彼女は放笑ふきだした。そしてすぐに気がついて、そばに腰をおろすようにと合図をした。二人は近づきになつた。彼女は学校で博物の講義を受け持つてるラインハルト教師の細君だつた。夫妻はこの町に最近来たばかりで、まだだれも知り合いがなかつた。彼女はとうてい美しいとは言えなかつた。鼻は太く、齒並みや賤いやしく、清楚せいそなところが少なく、ただ眼だけは生き生きとしてかなり敏捷びんしょうで、また仇気あどけない微笑をもつていた。彼女は鵲かさぎのようによくしゃべつた。彼

も快活に答えをした。彼女は面白いほど率直で、おかしな頓智とんちに富んでいた。二人はあたる人々にお構いなしで、笑いながら声高く感想を語り合つた。近くの人々は、二人を孤立から助け出してやるのが慈悲の仕業である間は、二人の存在を気にも止めなかつたが、二人がしやべり出したとなると、不満そうな眼つきを投げはじめた。そんなにはしやぐのは、よからぬ趣味となるのであつた……。しかし、人の思惑なんかは、二人の饒舌じょうぜつ家には無関心なことだつた。二人は先刻の意趣晴らしをしていたのである。

最後に、ラインハルト夫人はクリストフに良人おとこを紹介した。彼はひどい醜男ぶおとこだつた。顔は蒼ざめ、髭ひげがなく、痘痕あはたがあり、隣あわれつぽかつた。しかしたいへん善良な様子だつた。喉のどの奥から声を出し、音綴おんてつの間々で休みながら、もつたいらしいたどどしい仕方と言葉を発音した。

彼ら二人は、数か月以前に結婚したのだつた。そしてこの二人の醜男醜女は、たがいに惚ほれ合つていた。おおぜいの人中でも、見合わしたり話したり手を取り合つたりするのに、一種の情愛をこめていた——それは滑稽こっけいでかつ切実だつた。一人が好むことは、も一人も好んだ。すぐに彼らは、この招待の帰りには宅へ寄つて夜食を取つてくれと、クリストフに申し出た。クリストフは冗談を言いながら用心し始めた。今晚は早く帰つて寝る

のがいちばんいいと言った。十里も歩かせられたようにがっかりしていると云った。しかしラインハルト夫人は、だからここのままではいけないと答え返し、こんな厭な気持のまま夜を過ごすのは危険だと言った。クリストフは我を折った。彼は孤独だったので、あまり上品ではないがしかし単純で心厚いこの善人たちに出会ったのを、実はうれしく感じていた。

ラインハルト家のこじんまりした内部は、彼らと同様に心厚いものだった。それは多少饒舌な心であり、種々の辞令をもつてゐる心であつた。家具も道具も皿も口をきき、「親愛なる客」を迎える喜びをあかずくり返し、健康を尋ね、懇篤で道義的な忠告を与えていた。安樂椅子——それもごく堅いものだったが——の上には、小さな羽蒲団が敷かれていて、その羽蒲団は親しげにささやいていた。

「どうか十五分間ばかりでも！」

クリストフに出されたコーヒー茶碗は、も一杯飲むように勧めていた。

「も一口どうぞ！」

御馳走皿は、もとよりりっぱな料理に道德を加味していた。一つの皿は言っていた。

「万事をお考えなさい。そうでないと何にもいいことが起こりません。」「
も一つの皿は言っていた。」

「愛情と感謝とは人を喜ばせます。忘恩はだれでもきらいます。」

クリストフは少しも煙草たばこを吸わなかったが、暖炉の上の灰皿は彼の方へ進んで来ないで
はいなかった。

「火のついた煙草の小さな休み場所。」

彼は手を洗おうとした。すると化粧台の上のせっけんは言った。

「われわれの親愛なる客人のために。」

そして謹直な手ぬぐいは、何にも言うことがないのにやはり何か言わなければいけない
と思つて、ごく丁寧な人のように、ごく良識的ではあるがしかしあまり適宜でない考えを、
「朝を楽しむために早く起きなければいけない」ということを、彼に注意した。

「朝の時間は口に黄金を含んでいます。」

クリストフは椅子いすに掛けたまま、室の隅々すみずみから響いてくる他の種々の声に呼びかけら
れるのを聞くことを恐れて、ついにはもう振り返ることもできなくなった、彼は其奴らそいつに
言つてやりたかった。

「黙らないか、畜生め！ お前たちの言うことはさっぱりわからない。」

すると彼は突然大笑いに駆られた。そして主人夫妻に、先刻の学校の集まりを思い出したからだど、苦しい説明をした。どんなことがあつても彼らの気分を害したくなかつた。そのうえ、彼は滑稽こっけいなことにあまり敏感ではなかつた。彼は間もなく、それらの物品や人たちの饒舌な懇篤なさに馴なれてしまった。彼らに向かつて何を恕じよしがたいことがあつたらう。いかにも善良な人たちだつた。嫌いやな人物ではなかつた。趣味は欠けていたにしても、知力は欠けていなかつた。

彼らはやつて来たばかりのこの土地でいささか途方にくれていた。田舎いなかの小都市の堪えがたい猜疑さいぎ心は、その一員となるの名譽を正式に懇願しないと、他人が勝手にはいることを許さなかつた。ラインハルト夫妻は、小都市において前任者にたいする新来者の義務を規定する田舎の慣例を、十分念頭においていなかつた。厳密に言えば、ラインハルト氏の方はまあ機械的に服従した。しかし夫人の方は、そういう役目を厭いと窮屈いを厭いやがって、それを一日一日と延ばした。訪問すべき人名表のうちから最も気楽そうなのを選んで、それを最初に済ました。他の訪問は際限なく延ばしておいた。この後者の部類に入れられた知名の人々は、かかる無礼を憤つた。アンゲリカ・ラインハルト——（良人おとこから親しげに

ーリと呼ばれていた)——は、やや自由な態度の女だった。儀式ばった調子を取ることができなかつた。上の地位の人々をも馴れ馴れしく呼びかけた。すると彼らは怒って真赤まっかになつた。彼女は場合によつては、彼らの言葉に逆らうことをも恐れなかつた。彼女はきわめて口数が多くて、頭に浮かんだことはなんでも言いたがつた。時とするとあまりにばかばかしいことを言つて、背後から人に笑われることもあつた。また肺腑はいふを刺す露骨な皮肉を言つて、深い恨みを買うこともあつた。そういう意地悪い言葉を言いたくなる時には、舌を嚙かんで口に出すまいとした。しかし間に合わなかつた。きわめて温良で敬意深い良人は、このことに関して彼女へ控え目な注意をよく与えた。すると彼女は彼を抱擁して、自分分は馬鹿でお言葉はもつともだと言つた。しかしすぐあとで、彼女はまたくり返すのだった。ことにある種のことは最も言つてならない場合や場所において、彼女はすぐにそれを口へのぼした。もしそれを言い出さなかつたら身体が張り裂けるかもしれない。——
 彼女はクリストフと気が合うようにできていた。

言つてならないから従つて言いたくなる多くの変な事柄のうちでも、ドイツで行なわれることとフランスで行なわれることとの不穏当な比較を、彼女は何につけてもくり返した。彼女はドイツの生まれであつた——(彼女ぐらいドイツ式な者はいなかつた)——

けれど、アルザスで育ち、アルザスのフランス人と交わったので、ラテン文明にひきつけられたのだった。多くのドイツ人やまた最も頑固がんこそうに見える人々も、フランスから併合した地方においては、ラテン文明の魅力に抗することができないものである。なおありていに言えば、アンゲリカは北方のドイツ人と結婚し、純粹にゲルマン式な環境にはいつて以来、その魅力は彼女にとって、反発心のためいつそう強くなったのであろう。

クリストフに会った最初の晩から、彼女はいつもの持論をもち出した。彼女はフランス人の会話の愛すべき自由さをほめた。クリストフも相槌あいつちをうった。彼にとっては、フランスはコリーヌであった。美しい輝いた眼、にこやかな若々しい口、腹藏ない自由な態度、いかにも調子のいい声。彼はそれについてもっと知りたくてたまらなかった。

リーリ・ラインハルトは、クリストフと非常によく意見が合うので、手を打って喜んだ。「残念ですわ、」と彼女は言った、「フランス人の若いお友だちがもうここにいないのも仕方がなかったんです。よそへ行ってしまいました。」

コリーヌの面影はすぐに消えてしまった。あたかも花火の輝きが消えて、暗い空の中に突然、星のやさしい深い光が現われるように、他の面影が、他の眼が、現われてきた。

「だれですか。」とクリストフはぎくりとして尋ねた。「若い家庭教師ではありませんか

「え！」とラインハルト夫人は言った、「あなたも御存じですか。」

二人はその女の様子を述べた。どちらも同じ姿だった。

「あなたはその女を御存じですね。」とクリストフはくり返した。「どうか知ってるだけのことを私に聞かしてください。」

ラインハルト夫人は、自分たちは親友で万事をうち明け合った間柄だということから、まず話しだした。しかしその詳細に立ち入ると、彼女のいわゆる万事はごくつまらないことになってしまった。二人は初め他人の家で出会った。ラインハルト夫人の方からその若い女に交際を求めた。そして例の懇篤さで、話しに来てくれと招いた。若い女は二、三度やって来た。そして二人は話をした。けれども、好奇心リーリがその若いフランス婦人の生活を多少知るのも、そう容易なことではなかった。向こうは非常に慎み深かった。わずかずつ身の上話を引き出さなければならなかった。ラインハルト夫人は、彼女がアントアネット・ジャンナンという名前であることをまさしく知った。彼女には財産はなかった。家族としては、パリーに残ってる若い弟があるきりで、彼女は献身的にその弟を助けていた。たえずその弟のことを話していた。彼女が多少感情を吐露するのは、その話にばかり

だった。そしてリーリ・ラインハルトは、両親もなく友だちもなく一人パリーに残って、ある中学校の寄宿舎にはいつてるその若者にたいして、あわ憐れみ深い同情の念を示しながら、アントアネットの信頼を得てしまった。アントアネットが外国での就職を甘受したのも、半ばは弟の教育費を補助するためであった。しかし二人の憐れな若者は、たがいに離れて暮らすことができなかった。毎日手紙を書き合った。待つてる手紙が少し遅れても、どちらも病的な心配に駆られた、アントアネットはたえず弟のために心を痛めていた。弟は孤独の悲しさをいつも姉に隠すだけの勇気がなかった。彼の愁訴はいちいちアントアネットの心に、胸が裂かれるような強さで響いた。彼女は弟が苦しんでると考えては心痛し、病気であるがそれを隠してるのだとしばしば想像した。善良なラインハルト夫人は、それらの理由もない危惧きぐについて、幾度も親切に彼女をたしなめてやらなければならなかった。そしてしばらくは彼女を安心させることができた。——アントアネットの家庭や身分やまた心底については、夫人は何にも知ることができなかった。ちよつと問いかけられても、その若い女はひどく内気な様子で口をつぐんだ。彼女は教養があつた。年齢よりませた経験をもつてるらしかつた。彼女は素朴そぼくであるとともにまた悟つてるらしく、けいけん敬虔であるとともにまた非空想的らしかつた。この土地の機宜も温情もない家庭にはいつては、幸福

でなかった。——どうして彼女がこの地を去ったかを、ラインハルト夫人はよく知っていた。人の噂うわさによると不品行をしたそうだった。アンゲリカはそれを少しも信じなかった。それはこの愚かな邪悪な町にふさわしい忌むべき中傷であると、堅く信じ切っていた。しかしいろんな話はあった。だがそんな話なんかはどうでもいいではないか。

「そうですとも。」と首たれてクリストフは言った。

「でもどうとう行つてしまいました。」

「そしてたつ時になんと言いましたか。」

「ああ、その機会がありませんでしたの。」とリーリ・ラインハルトは言った。「ちょうど私はケルンへ二日間行つていました、帰つて来ると、……もう遅い！……」と彼女は言葉を途切らしながら、お茶へ入れるシトロンをあまり遅くもって来た女中にあてつけた。

そして、生きつすい粹すいのドイツ人らが家常茶飯事にまで示す生来の厳格さをもって、彼女は厳いめしく言い添そえた。

「世の中のことはいそいでいそうですが、もう遅い！」

(それはシトロンのことなのか途切れた話のことなのかわからなかった。)

彼女は言いつづけた。

「帰って来ますと、短い手紙が来ていました。私がしてやった種々なことのお礼を言い、パリーへ帰るということでした。住所は書き残してゆきませんでした。」

「それきり手紙をよこしませんか。」

「ええ何にも。」

クリストフは、あの悲しげな顔が夜の中に消えてゆくところを、ふたたびありありと思ひ浮かべた。列車の窓越しにこちらをながめている最後に見たとおりの眼が、一瞬間彼の前に現われた。

フランスの謎なぞがいつそう執拗しつようにふたたび提出された。クリストフはフランスを知つてると自称してゐるラインハルト夫人に尋ねて飽きなかった。そしてラインハルト夫人はかつてフランスに行ったこともないのに、彼になんでも教えてやった。ラインハルト氏はりっぱな愛国者で、夫人以上によくはフランスを知らず、フランスにたいする偏見でいっぱいになっていて、夫人の感激があまりひどくなると、時として控え目な態度を破ることもあったが、しかし夫人はさらに激しく主張しつづけた。そしてクリストフは何にも知らない

くせに、信頼の心からそれにいつしよになつていた。

彼にとつては、リーリ・ラインハルトの記憶よりもなお貴いとうとものは、彼女の書物だった。彼女はフランスの書物で小さな文庫をこしらえていた。手当たり次第に買われた、学校の教科書や小説や脚本などがあつた。フランスのことを知りたがつていながら何にも知つていないクリストフにとつては、ラインハルトが親切にも彼の勝手に任してくれる時には、それらの書物が宝のように思われた。

彼はまず、学校用の古い編纂へんさん書から、抜粋文集から、読み始めた。それはリーリ・ラインハルトやその良人にとつて、学生時代に役だったものであつた。まったく何も知らないフランス文学のうちに分け入ろうとするならば、まずそれから始めなければいけないと、ラインハルトは彼に確言した。クリストフはフランス文学を自分よりよく知つてる人たちをごく尊敬して、その言葉どおり正直に従つた。そしてその晩から読み始めた。彼はまず、自分のもつてる宝の概略を調べ上げようとつとめた。

彼は次のようなフランスの作家を知つた。テオドール・アンリ・バロー、フランソア・ペティ・ド・ラ・クロア、フレデリック・ボードリー、エミール・ドウレロー、シャール・オーギュスト・デジレ・フィロン、サムユエル・デコンバ、プロスペル・ポール。彼は

次の人々の詩を読んだ。ジョゼフ・レール師、ピエール・ラシャンボーデー、ニヴェルノア公爵、アンドレ・ヴァン・アセル、アンドリユ、コレー夫人、サルム・ディック侯夫人コンスタンス・マリ、アンリエット・オラル、ガブリエル・ジャン・バティスト・エルネスト・ウルフリード・ルグーヴェ、イポリット・ヴィオロー、ジャン・ルブール、ジャン・ラシーヌ、ジャン・ド・ベランゼ、フレデリック・ベシヤール、ギユスターヴ・ナドー、エドゥアール・プルーヴィエ、ウーゼーヌ・マニユエル、ユーゴー、ミルヴオア、シエーヌドレ、ゼームス・ラクール・ドラートル、フェリックス・シャヴァンヌ、フランシス・エドゥアール・ジョアサンすなわちフランソア・コペー、ルイ・ベルモンテ。クリストフはそれらの詩の汎濫はんらん中に迷い込みおぼれ沈んでしまつて、散文の方に移つていった。そこには次のような人たちがいた。ギユスターヴ・ド・モリナリ、フレシエ、フェルディナン・エドゥアール・ブイソン、メリメ、マルー・ブラン、ヴォルテール、ラメ・フルーリー、父デューマ、ジャン・ジャック・ルソー、メジエール、ミラボー、ド・マザード、クラルティ、コルタンベール、フレデリック二世、および、ヴォギューエ氏。また最もしばしば引用されてるフランスの歴史家は、マクシミリアン・サンソン・フレデリック・シエールであつた。クリストフはそういうフランスの名家抄の中に、新ドイツ帝

国の宣告を見出した。そしてフレデリック・コンスタン・ド・ルージュモンの書いたドイツ人に関する記述を読んで、次のことを教えられた。

ドイツ人は魂の世界に生きるように生まれている。彼らはフランス人のごとき喧騒けんそ浮薄な快活さを有しない。彼らは魂を多分にもち、その愛情はやさしくかつ深い。働いて倦まず、企画して撓たわまない。最も道徳的な人民であり、最も生活期間の長い人民である。ドイツは非常に多くの作家を有し、また美術の天才を有している。他国の人民らが、フランス人たりイギリス人たりスペイン人たることを光榮としているのに反して、ドイツ人はその公平無私なる愛のうちに、全人類を擁護する。またドイツ国民は、ヨーロッパの中央に位することによって、人類の心であるとともに最高の理性であるように思われる。

クリストフは疲れまた驚いて、書物を閉じて考えた。

「フランス人は善良なお坊ちゃんばかりだ。あまり銳利ではない。」

彼は他の書物を取り上げた。それはもう少し程度の高いもので、高等な学校の用に供する

ものだった。ミュッセーが三ページを占め、ヴィクトル・デュリュイが三十ページを占めていた。ラマルティエーヌは七ページ、ティエールは四十ページ近かった。ル・シッドは全部——ほとんど全部のついていた。(ただドン・デイエーグの独白とロドリグの独白はあまり長いので削つてあつた。)——ランフレはナポレオン一世にたいするプロシアの反感をおだてていた。それで彼にたいしてはページの制限がなかった。彼一人で十八世紀のクラシックの大家全体以上のページを取つていた。千八百七十年のフランスの敗北に関するたくさんの物語は、ゾラの瓦解から取つて来られたものだった。そして、モンテーニュ、ラ・ロシュフコー、ラ・ブリユイエル、デイドロー、スタンダール、バルザック、フローベル、などは出ていなかった。その代わり、前の書物に出ていないパスカルが、珍しい人としてこの書物に出ていた。そしてクリストフは、この狂信家が「パリイ付近の女学校ポール・ロアイヤルの神父の一人だった」ことをついでに知つた……。 (注——ジャン・クリストフが友人ラインハルト家の蔵書から借り出したフランス文学名家抄は、次のようなものだった。一、ストラスブルグの聖ヨハネ学習院長哲学博士フーベルト・ウインゲラート著、中学校用フランス文粹、中級第二部、一九〇二年七版、デュモン・シヨール出版。二、ハンブルグのヨハネ派学習院中学校長テンディング改訂、ヘルリツヒおよ

びブルグイ共著、フランス文学、一九〇四年ブルンスウィック版。）

クリストフは何もかも投げ捨てようとした。頭がくらくらしていた。もう何にもわからなかった。「いつまでも堂々めぐりだ、」と彼は思った。なんらの意見をもまとめ上げることができなかつた。先途がわからずに幾時間もめちやくちやにページをくつていた。彼にはフランス語が自由に読めなかつた。非常に骨折つてある一節を理解すると、それはたいてい無意味な壮語であつた。

そのうちに、かかる渾^{こんとん}沌の中から、劍^{けんげき}戟、鋭利な言葉、勇ましい笑声など、数条の光線^{ほとぼし}が迸り出てきた。次第にその初歩の読書から、おそらく編纂の傾向的意図によってであらうが、一つの印象が浮かび上がってきた。ドイツの出版者らは、フランス人の欠点とドイツ人の優秀さとを、フランス人自身の証明によって確定し得るようなものを、その文中に選び入れていた。しかしながら彼らは、クリストフのような独立的精神の者がそれから明らかに見て取ることは、自分らのすべてを非難して敵をほめるそれらフランス人らの驚くべき自由さであろうとは、夢にも思つてはしなかつたのである。ミシュレーはフレデリック二世を、ノンフレールはトラファルガーにおけるイギリス人らを、シャラーズは千八百十三年のプロシアを、それぞれ称揚していた。ナポレオンの敵のうち一人として、ナ

ポレオンのことをかくまで手きびしく語り得てる者はなかった。最も尊敬されてる事柄も、彼らの誹謗ひぼう的な精神からのがれてはいなかった。ルイ大王当時にあつても、鬢かつらの詩人らは思うままのことを語っていた。モリエールは何一つ見のがさなかった。ラ・フォンテーヌはすべてを嘲ちやうしやう笑しやうしていた。ボアローは貴族を非難していた。ヴォルテールは戦争を軽侮し、宗教を攻撃し、祖国を擲や擄ゆしていた。人生批評家、諷刺家ふうし、論客、滑稽こっけい作家、皆それぞれ快活なあるいは陰鬱いんうつな大胆さを競っていた。それは一般に尊敬心の欠如だった。ドイツの正直な出版者らはそれに時々狼狽ろうばいした。彼らは自分の良心を安心させる必要を感じて、料理人も人夫も兵士も従卒も同じ袋に投げ入れた。パスカルを、弁解しようとしてめた。パスカルがもし近代の高尚な軍隊を知っていたらかかる言をなさなかったに違いないと、注をつけて抗論した。また、仕合わせにもレッシングがラ・フォンテーヌの物語を訂正し、ジュネーヴ生まれのルソーの意見に従つて、烏先生のチーズを毒に浸した一片の肉に変え、そのために卑劣な狐を死なせて、「悪むべき阿諛者おべつかもの、お前が得るのは毒ばかりだ、」としているのを、彼らはもち出さずにはいなかった。

彼らは赤裸々な真実の前に眼を瞬またたいた。しかしクリストフは喜んだ。彼は光明を愛していたのである。けれど彼もやはり、あちらこちらで小さな不安を覚えた。彼はそういう放ほ

肆^{うし}な独立に慣れていなかった。最も自由であつてもやはり規律に慣れてるドイツ人にとつては、それは無政府らしく思われた。そのうえクリストフは、フランス人の皮肉さに迷わされた。彼はある事柄をあまり真面目^{まじめ}に取りすぎた。また断然たる否定であるある事柄が、彼には反対に冗談的逆説と思われた。だがそれはとにかく、彼はびっくりしたり不快を覚えたりしながらも、少しずつひきつけられていった。彼は種々の印象を分類することはやめた。一つの感情から他の感情へと移つていった。生きていた。フランスの物語——シャノンフォールやセギュールや父デューマやメリメなどが乱雑につき重ねられてる物語——の快活さが、彼の精神を暢^{のうのう}々とさしてくれた。そして時々あるページからは、もろもろの革命の強く荒い匂^{にお}いがむくむくと立ち上つていた。

明け方近くになつて、隣室に眠つていたルイザが眼を覚^さますと、クリストフの室の扉^{とびら}の隙間^{すきま}から、光の漏れるのが見えた。彼女は壁をたたいて、病気ではないかと彼に尋ねた。椅子^{いす}が床の上にきしつた。扉^あが開いた。そしてクリストフがシャツだけで、一本の蠟燭^{ろうそく}と一冊の書物とを手にし、厳肅で滑稽^{こっけい}な妙な様子をして現われた。ルイザははつとして、気が狂つたのだと思ひながら寢床の上に身を起こした。彼は笑いだして、蠟燭を振りながらモリエールの一節を朗読した。ある文句のまん中で放笑^{ふきだ}した。息をつくために母の寢台

の足下にすわった。光は彼の手の中で震えていた。ルイザはほっとしてやさしくしかった。「どうしたの、どうしたのさ！ 行ってお寝みよ。……まあ、ほんとうに馬鹿になったんだね。」

しかし彼はますます機嫌よく言い出した。

「これを聞くんですよ。」

そして彼は枕頭に腰をすえて、その脚本を初めから読み直してきかせた。彼はコリーヌを見るような気がした。彼女の大袈裟な音調を聞くような気がした。ルイザは言い逆らった。

「あっちへおいでよ、おいでつたら！ 風邪をひくじゃないか。厭だね、眠らしておくれよ。」

彼は頑として読みつづけた。声を張り上げ、両腕を動かし、また息を切って笑った。すてきではないかと母に尋ねた。ルイザは彼に背中を向け、夜具の中にもぐり込み、耳をふさいで言っていた。

「私に構わないでおくれよ……。」

しかし彼女は、彼の笑いを聞いて低く笑っていた。ついに彼女は逆らうのをやめた。ク

リストフは一幕を読み終えて、面白いでしょうと尋ねたが返辞がなかったので、彼女の上にかがみ込んでのぞいてみると、彼女はもう眠っていた。それで彼は微笑をもらし、彼女の髪にそつと唇くちびるをつけて、音をたてずに自分の室へもどった。

彼はラインハルトの蔵書を引き出しに出かけた。あらゆる書物が順序もなく相次いで借り出された。クリストフはすべてを鵜呑みうのみのにした。彼はコリーヌとあの若い婦人との国を非常に愛したがっており、使いはたすべき多くの感激をもっていて、それを利用した。第二流の作品のうちにおいてさえ、あるページある言葉は一陣の自由な空気のように思われた。彼はそれをみずから誇張して考え、ことにラインハルト夫人に話す時はそうであった。すると夫人はいつもさらに夢中になった。彼女は何にもよくわかつてはしなかったけれど、好んでフランス文化とドイツ文化とを対照させ、前者を揚げて後者をけなし、そしては良お人を怒らしたり、またこの小都市で受くる厭な事柄はらひの腹癒せはらひをしていた。

ラインハルト氏は憤慨していた。彼は専門の学問以外のことにわたると、学校で教えられた観念から一步も出ていなかった。彼に言わせると、フランス人は利口で、実際の事柄に伶俐れいりで、愛嬌あいぎょうがあり、談話術を心得ているが、しかし軽薄で、短気で、自尊心強

く、本気になることができず、強い感情をいだし得ず、なんらの誠実もない者ども——音楽もなく、哲学もなく、詩もない（作詩法一冊とベランゼーとフランソア・コペーとを除いては）国民——感慨と大袈裟おおげさな身振りおぼとうと誇張した言葉と猥褻わいせつ書との国民であつた。ラインハルトはラテン人種の不道徳を罵倒するに足るだけの、十分な言葉をもっていなかつた。そしてよい言葉が見当たらないので、いつも軽佻という言葉をくり返していた。それは彼の口になると、同国人の多くの者の口の上る時と同じく、特別にありがたくない意味を帯びるのであつた。それから終わりにはきつと、高尚なるドイツ国民をほめ上げるきまり文句がやって来た——道徳的国民（この点においてドイツ国民は他のあらゆる国民より秀でているとヘルデルが言つた）——忠実なる国民（この忠実とは、真面目、忠実、公平、せいちよく正直、などのあらゆる意味をもつていた）——フィヒテが言つたように、優秀なる国民——あらゆる正理と真理との象徴たる、ドイツの力——ドイツの思想——ドイツ魂ゲムユート——ドイツ民族それ自身と同じく、唯一の独特なる言葉であり純粋なまま保存されてる唯一の言葉である。ドイツ語——ドイツの婦人、ドイツの酒、ドイツの歌……「ドイツ、世界においてすべてより卓越せるドイツ！」

クリストフは抗弁した。ラインハルト夫人は叫び出した。三人とも声高く言い合つた。

しかしよく理解し合っていた。自分らは善良なドイツ人であることを、三人ともよく知っていた。

クリストフはしばしばやって来て、この新しい友人らとともに話をし食事をし散歩をした。リーリ・ラインハルトは彼をひいきにして、滋味ある御馳走ごちそうをふるまってやった。彼女は自分自身の健康けんたんを満足させるために、かかる口実を見出したことを喜んでいた。彼女は感情上のまた料理上の種々な注意を凝らしていた。クリストフの誕生日には、大きな蒸し菓子をこしらえ、その上にたくさんの蠟燭ろうそくを立て、まん中にはギリシャ風の服装をした小さな砂糖人形をすえた。この人形はイフィゲニアを現わしたつもりで、花輪を一つもっていた。クリストフはドイツ人たることをきらいながら根本からドイツ人だったので、真の情愛を示すあまり上品でないそういう仕方にも、たいへん心を打たれた。

気質きだてのよいラインハルト夫妻は、自分らの積極的な友情を示すために、もっと微妙な方法を見出すことができた。楽譜をほとんど読んだことのないラインハルトは、細君に説き勧められて、クリストフの歌曲集を二十部ばかり買った。——（発行書店から買い出されたのはそれが最初のものだった。）——ラインハルトはそれを諸方の大学関係の知人に送って、ドイツじゅうにふりまいた。自著の教科書のことと関係があるライプチヒやベルリ

ン書肆^{しよし}へも、ある部数を送った。クリストフは少しも知らなかったが、かかる感心なまた拙劣なやり方は、少なくとも当座のうち、なんらの反響ももたらさなかった。方々へ送られた歌曲集は、なかなか^{まじ}的に達しないらしかつた。だれもそれについてなんとも言わなかつた。そしてラインハルト夫妻は、そういう無反響にがっかりして、自分たちの尽力をクリストフに隠しておいたことを喜んだ。なぜなら、彼がもしそのことを知ったら、発奮するよりもさらに多く悲嘆したろうから。——しかし実際においては、世間に毎度見られるとおり、何事も無駄^{むだ}にはならない。いかなる努力も空には終わらない。数年間は結果が少しもわからない。ところがいつかは、意図の貫かれたことが現われてくる。クリストフの歌曲集も、田舎^{いなか}に埋もれてる数人の善良な人々の心に、それと言ってよこすにはあまりに臆^{おく}病^{びょう}なあまりに倦^{けん}怠^{たい}してる人々の心に、徐々に達したのであつた。

ただ一人、彼に手紙をよこした者があつた。ラインハルトが書物を送つてから二、三か月後、一通の手紙がクリストフのもとに届いた。感動し儀式ばり心酔した古めかしい形式の手紙で、チューリングンという小さな町から来、「大学音楽会長、教授、博士ペーテル・シユルツ」と署名してあつた。

クリストフはそれをポケットに入れたまま二日も忘れていたが、ついにラインハルト家

でそれを聞くと、彼はたいへん喜んだ。ラインハルト夫妻にとってはなおさらうれしかった。三人はいつしよにそれを読んだ。ラインハルトは細君と意味ありげな合図をかわしたが、クリストフは気づかなかつた。クリストフは晴れやかな気持になつてゐるらしかつた。ところがにわかになつて、読んでいる最中に彼の顔が曇りぴたりと読みやめたのを、ラインハルトは見て取つた。

「え、なぜやめたんだい？」と彼は尋ねた。（二人はすでに隔てない言葉づきになつていた。）

クリストフは怒つてテーブルの上に手紙を投げ出した。

「いや、これはあんまりだ。」と彼は言つた。

「何が？」

「読んでみたまえ。」

彼はテーブルに背中を向けて、片隅へ行つて脹れ顔ふくれをした。

ラインハルトは細君といつしよに読んだ、最も熱烈な賞賛の文句しか見出さなかつた。

「わからない。」と彼は不思議に思つて言つた。

「君にはわからないのか、わからないのか……。」とクリストフは叫びながら、手紙を取

り上げて、それを彼の眼の前につきつけた。「では君には読み取れないのか。これもやはりブラームス派だというのがわからないのか。」

その時ようやくラインハルトは、その大学音楽会長が手紙の一行中に、クリストフの歌曲をブラームスのそれと比較してことに気づいた……。クリストフは慨嘆した。

「一人の味方、ついに一人の味方を見出したのだ。……しかもそれを得たかと思うと、もう失ってしまったのだ！……」

彼はその比較に憤つてた。もしそのままに放つておいたら、彼はすぐに馬鹿な返事を出したかもしれない。もしくは、少し考えてみたら、まったくなんとも答えない方が賢くて雅量があると思つたであろう。が幸いにもラインハルト夫妻は、彼の不機嫌ふきげんを面白がりながらも、このうえ馬鹿な真似まねをしないようにさした。そして感謝の一言を書かせてしまった。しかし顔をしかめながら書かれたその一言は、冷淡なよそよそしいものであった。それでもペーテル・シエルツの心酔は揺がなかった。彼は情愛のあふれた手紙をなお二、三通よこした。クリストフは手紙が上じょうず手でなかった。その未知の友の文中に感ぜられる誠実の調子によって、多少心が和らぎはしたけれど、音信をやめてしまった。シユルツも沈黙してしまった。クリストフはもうそのことを考えなかった。

今では、彼は毎日ラインハルト夫妻に会い、また日に数回会うこともしばしばだった。たいてい晩はいつしよに過ごした。一人で考え込みながら一日を過ごす、彼は口をききたい肉体的欲求を感じた。たとい理解されなくとも頭にあることを言い、理由のあるなしにかかわらず笑い、心のうちを吐露し、屈託を晴らしたかった。

彼は二人に音楽をきかしてやった。他に感謝の意を表する方法がなかったので、ピアノについて幾時間もひいてやった。ラインハルト夫人はまったく音楽を解せず、あくび欠伸をすまいと非常に骨折った。しかし彼女はクリストフに同情をもっていて、彼がひくものに興味を覚えてるらしいふうを装よそおった。良人おとこの方も、彼女以上に音楽を理解するとは言えなかったが、ある曲節には非精神的な感動を受けた。そういう時彼はひどく心をそそられて、自分ながらばかばかしく思えるにもかかわらず涙を浮かべた。その他の時は何のこともなく、彼にとつてはただ音響だけにすぎなかった。そのうえ一般的に言えば、作品のうちによくない部分——まったく無意義な楽節——にばかり感動していた。——彼らは夫妻とも、クリストフを理解してると思い込んでいた。そしてクリストフも、理解されてると思い込みたかった。けれど時々二人をからかつてやろうという意地悪い欲望が起こった。

彼は罫^{わな}を張つて、なんらの意味もないものを、くだらぬ曲を、ひいてきかせながら、それは自分の作だと彼らに思わせておいた。それから彼らが非常に感心すると、ありていに白状した。それで彼らは用心した。次にクリストフが様子ありげに一曲をひくと、彼らはまただまされるのだと想像した。そしてそれを悪口言った。クリストフは彼らに悪口を言わせ、自分もそれに言葉を合わせ、その曲は一文の価値もないと承認し、それからにわかにお口を切つた。

「ひどい人たちだ。ごもつともですよ。……これは僕のだから。」

彼は二人をうまくだまかすと、王様にでもなつたように喜んだ。ラインハルト夫人は少々当惑して彼のところへ来て軽く打つた。しかし彼がいかに心よく笑つてるので、彼らもまたいつしよに笑つた。彼らは間違いない意見をいでき得るとは自信していなかつた。そしていかなる立脚地に立つていいかわからなくなつたので、リーリ・ラインハルトはすべてを非難しようときめ、良人^{おっと}はすべてをほめようときめた。そうすれば、二人のうち一人はいつもクリストフと同意見になることが確かだつた。

それにまた、二人をクリストフにひきつけたのは、彼が音楽家であるからというよりもむしろ、やや常軌を逸したきわめて親しみ深い活発なお人よしだったからである。彼の悪

い噂うわさを聞いても、彼らはそのためにかえって好意をいだいた。彼と同じく彼らもまた、この小都市の雰囲ふんいき気に圧迫おさされていた。彼と同じく彼らもまた率直であつて、自分だけの考考えで物を判断は断断していた。そして、処世術へたが下手で自分の率直さの犠牲となつてゐる大きな坊ちゃんだと、彼らは彼を見なしていた。

クリストフはその新しい友人たちを、たいして買いかぶつてはいなかつた。彼らから自分の奥底は理解りされていないし、決して理解されることはあるまいと思つと、多少憂鬱ゆううつになつた。しかし彼は非常に友情を得ることが少なかつたし、しかも非常に友情をほしがつていたので、彼らからいくらか愛してもらえることを限りなく感謝かんしていた。彼は最近一年間の経験から教おえられていた。氣きむずかしくする権利が自分にないことを認めていた。一、二年以前だつたら、彼はそれほど我慢強まくはなかつたろう。善良な退屈たいなオイレル一家の人たちにたいして手てきびしい振舞まいをしたことを、彼は思おもい出だしながらくすぐつたいような苛責かしやくを感じた。ああ、いかに賢明けんめいになつたことだろう！……彼はそれをやや嘆息たんした。ひそかな声こゑが彼にささやいた。

「そうだ、しかしいつまでそれがつづくかしら。」

それで彼は微笑ほ笑せうをもららした。そして心こゝろが慰なぐさめられた。

一人の友を得るならば、自分を理解し自分の魂を分かちもつ一人の友を得るならば、彼は何物をなげうつても惜しくは思わなかつたろう。——しかし、彼はまだごく若かつたけれど、十分世間の経験を積んでいたので、自分の希望は人生において最も実現困難なものであること、自分以前の真の芸術家らの多数よりもさらに幸福たらんと望み得られるものではないことを、よく知っていた。彼らのうちの数名の伝記を、彼はやや知り得ていた。ラインハルト家の蔵書から借り出したある種の書物は、十七世紀のドイツの音楽家らが通つた恐るべき艱難かんなんな道と、それらの偉大な魂のある者——最も偉大なる魂、勇壮なるシユツツ——が示した泰然たる堅忍さとを、彼に知らしてくれられた。焼かれたる都市、疾病に荒らされた田舎いなか、全ヨーロッパの軍勢に侵入され蹂躪じゅうりんされた祖国、しかも——最も悪いことには——災禍にひしがれ困憊こんばいし墮落して、もう戦おうともせず、万事に無関心となり、ひたすら休息をのみ望んでいる祖国、そういうもののまん中であつて、おのれの道を撓たわまずたどつていったのである。クリストフは考えた。「かかる実例を前にして、だれが不平を唱える権利をもつていよう？ 彼らには聴衆がなかつた、未来がなかつた。彼らはただ自分自身のためと神のためとに書いていた。今日書くものは明日のために滅ぼされるかもしれない。それでも彼らは書きつづけた。そして少しも悲しんでいなかった。

何物も彼らからその勇敢な純朴^{じゆんぼく}さを失わせ得なかつた。彼らは自己の歌をもつて満足していた。そして彼らが人生に求むるところのものはただ、生きること、ただパンだけを得ること、自分の思想を芸術の中に吐露すること、芸術家ならぬ単純真実なる二、三の善良な人々、もちろん彼らを理解はしないがしかし彼らを率直に愛する人々、それを見出すことばかりであつた。——どうして彼ら以上に要求深くあり得られようか。人の求め得る幸福には限度がある。それ以上にたいしてはだれも要求の権利を有しない。過大の要求をなすことが許されるのは、自分自身にたいしてであつて、他人にたいしてではない。」

そういう考えが彼の心を朗らかにしていた。そして彼は善良なる友ラインハルト夫妻をますます愛していた。この最後の情愛をも人々が争いに来ようとは、彼は思つてもいなくなつた。

彼は小都市の邪悪さを勘定に入れていなかった。しかし小都市の怨恨^{えんこん}は執拗^{しつよう}なものである——なんらの目的もないだけになおさら執拗である。おのれの欲するところを知つて正しい恨みは、目的を達すれば鎮^{しず}まつてしまう。しかし倦怠^{けんたい}のために悪を行なう者らは、決して武器を放さない。常に退屈しているからである。クリストフは彼らの無為閑

散なところへ差し出された一つの餌食えじきであった。もちろん彼はもう打ち負かされていた。しかし彼はまいった様子を見せないだけの大胆さをそなえていた。彼はもはや何人なんびとをも気にかけてなかった。何物をも要求しなかった。人々は彼にたいしていかんともなし得なかつた。彼は新しい友人らといっしよになつて幸福だつた。人々の噂うわさや考えにはすべて無關心だつた。それを彼らは許せなかつた。——ラインハルト夫人はなおいっそう彼らをいらだたせた。彼女が全市に対抗してクリストフに公然と示してる友情は、彼の態度と同様に、世論にたいする挑戦の観があつた。しかし善良なりーリ・ラインハルトは、何物にもまただれにも挑戦してはいなかつた。他人に挑いどみかかろうとは思つていなかった。ただ他人の意見を求めないで、自分がよいと思つたことをなしてゐるのだつた。ところが、それこそ最も悪い挑発であつた。

人々は彼らの挙動をうかがつていた。彼らはうっかりしてゐた。一人は非常識であり、一人は迂濶うかつだつたので、いっしよに外出する時や、あるいは家で、夕方露台に肱ひじをかけて談笑する時でさえ、慎重さを欠いてゐた。中傷の材料になるような馴なれ馴なれしい素振りを、知らず知らずやつていた。

ある朝、クリストフは無名の手紙を受取つた。それには、下劣きわまる侮辱的な言葉で、

彼をラインハルト夫人の情人であると誹謗してあつた。彼は呆然とした。彼は彼女にたいして、ふぎけた考えさえかつて起こしたことがなかつた。彼はあまりに貞節であつて、有夫姦については清教徒的な恐怖の念をいだいていた。その不潔な共有を考えてみるだけでも、一種の嫌悪を覚えた。友人の妻を奪うことは、犯罪のように思われたのである。そしてリーリ・ラインハルトは、彼にその罪を犯す気を起こさせるような女には、最も縁遠かつたはずである。気の毒にも、彼女は少しも美しくはなかつた。彼は情熱の口実さえもつていながつたはずである。

彼は恥ずかしい困つた様子で、友人夫妻の家へ行つた。そして同じ困惑の様子を見出した。彼らはおのおの、同様な手紙を受け取つたのであつた。しかしたがいにとそれと申し出しかねた。三人ともたがいに探り合ひまた自分の心を探りながら、もう動くことも口をきくこともできないで、馬鹿な真似ばかりしていた。リーリ・ラインハルトの生来の無頓着さがのさばつて、ふと笑い出したり無法なことを言い出したりすると、にわかに良人の眼つきかクリストフの眼つきかが彼女を狼狽させた。手紙のことが彼女の頭にひらめいた。彼女はまごついた。クリストフもラインハルトもまごついた。そして各自に考えた。

「二人は知らないのかしら。」

けれども彼らは何にも言わないで、前と同じようにしてゆこうとつとめた。

しかし無名の手紙はなおつづいて来て、ますます侮辱的に卑猥ひわいになっていった。そのために彼らはいらだちと堪えがたい恥ずかしさとに陥った。手紙を受け取ってもたがい隠していたが、また読まないで焼き捨てる力もなかった。彼らは震える手で封を切った。中の紙を開きながら絶望した。同じ問題にいくらか新しい変化を添えてる読むに恐ろしい事柄——害毒しようつとむる精神が作り出した巧みな汚らわしい事柄——を読み取るとひそかに泣いた。執拗しつようにつきまといつてくるこの悪者はいったい何奴だろうかと、彼らは捜しあぐんだ。

ある日、ラインハルト夫人は力もつきはてて、迫害を受けてることを良人にうち明けた。彼は眼に涙を浮かべて、自分もそうだとうち明けた。それをクリストフに言ったものだろうか？ 彼らは言い出しかねた。けれども、彼に用心させるために知らせなければいけなかった。——ラインハルト夫人は、顔を赤らめながら一言切り出してみると、クリストフもまた手紙をもらつてることを知つてびっくりした。悪意がかくまで熱烈なのに彼らは驚き愕ようがくした。もはやラインハルト夫人は、町じゅうの者に知れわたつてることを疑わなかった。三人はたがいに力をつけ合うどころか、がっかりしてしまった。どうしていいかわ

からなかった。クリストフはそいつの頭を打ち割ってやると言った。——しかしだれの頭を？ それにまた、そんなことをしたら中傷はなお盛んになるだろう。……警察に手紙のことを告げようか？——それは陰口を明るみにさらすこととなるだろう。……知らないふうをしていようか？ もはやそれもできなかった。彼らの友誼ゆうぎはもう攪乱かくらんされていた。ラインハルトは妻とクリストフとの公明さを絶対に信じていたが、それはなんの役にもたたなかった。二人を疑うまいとしてもできなかった。彼は自分の疑念の恥ずかしいばかりかしきを感じた。クリストフと妻とを二人きりになすようにつとめた。しかし彼は苦しんでいた。そして細君にはそれがよくわかった。

彼女の方はさらにいけなかった。クリストフが彼女に心を向けようと思わなかったごとく、彼女もかつてそんなことを思ったことはなかった。ところが中傷のために彼女は、クリストフがとにかく自分に恋愛的感情をいだいてるかもしれないという滑稽こっけいな考えを、いつのまにかいやくようになった。そして彼がそんな様子を露ほども示したことはなかったにかかわらず、彼女は一応断わっておく方がよいと思った。彼女は直接にあてつけはしない、へまな用心深い仕方をういた。クリストフは最初わからなかったが、ようやくそれとわかると、茫然ぼうぜんとしてしまった。泣きだしたくなるほど馬鹿げていた。親切だが醜

いありふれたこの中流婦人に、彼が恋するとは！……そして彼女がそう信じようとは！……そしてその良人おっとに彼は弁解することもできないとは！

「さあ、御安心なさい。危険はありません！……」ともまさか言えなかった。

否々、彼はそれらのいい人たちを侮辱することはできなかった。そのうえ、もし彼女が彼から愛されまいと用心するならば、それは彼女がひそかに彼を愛し始めたからであることとを、彼は考え及んだ。無名の手紙はそういう愚かな空想的な考えを彼女に吹き込むほど、好結果をもたらしたのであった。

状況はきわめて困難になるとともに馬鹿げてきて、もうそのままつづくことができなくなった。そのうえまた、リーリ・ラインハルトは口先の大言にもかかわらず、なんら性格の強みをもっていないくて、小都市の暗黙な敵意の前に惑乱してしまった。彼ら夫妻は恥づかしい口実を設けてもう会うまいとした。

——ラインハルト夫人は加減が悪かった……。ラインハルトは忙しかった……。二人は数日間不在だった……。

下手な嘘へたばかりだった。偶然が意地悪くも面白がって面皮をはいでくれるような嘘うそだった。

クリストフはもつと率直に言った。

「^{あわ}憐れな友だちよ、私たちは別れましょう。私たちには力がないのです。」

ラインハルト夫妻は泣いた。——しかし絶交してしまうと、彼らはほつと^{あんど}安堵した。

この小都市は勝利を得ることができた。こんどこそクリストフはただ一人となった。彼は最後の一息たる愛情までも奪われてしまった。——愛情、それがいかにちつぽけなものであろうとも、それなしにはだれの心も生きられるものではない。

三 解放

彼にはもはや一人の味方もなかった。友は皆散り失せてしまった。彼が困つてゐる時にはいつも助けに来てくれる、また彼が今や最も必要としている、あのなつかしいゴットフリートも、長い前にどこかへ行つてしまつて、こんどはもう永久に帰つて来なかつた。この前の夏のある晩、遠い村の名がしるしてある太い字体の手紙が来て、ルイザに兄の死んだことを知らした。この小行商人は、健康が悪いにもかかわらず頑固がんこに放浪の行商をつづけていて、旅先で死んだのである。彼は遠いその地の墓地に葬られた。かくて、クリストフを支持してやり得たかもしれない男らしい朗らかな最後の友情は、深淵しんえんの中に没してしまつたのだつた。彼は今や、年老いて彼の思想には無関心な母親——彼を愛してばかりいて理解してはいない母親と、ただ二人きりであつた。彼の周囲は、広漠こうぼくたるドイツの平野、陰鬱いんうつなる大洋であつた。それから出ようと努力することに、ますます深く沈んでゆくばかりだつた。彼の敵たるこの小都市は、彼がおぼれるのをながめていた……。

そして彼がもがいてる時、暗夜のさなかに一つの電光がひらめいて、ハスレルの面影が照らし出された。子供のおり彼があれほど愛した大音楽家であつて、今やその榮譽はドイツ全土に光被っていた。彼はハスレルが昔なしてくれた約束を思い出した。そして絶望的な力をこめてその残りの一事にすがりついた。ハスレルは彼を救ってくれるかもしれない。救つてくれるはずだった。彼が求めるのはなんであつたか。助力でもなく、金銭でもなく、いかなる物質的援助でもなかつた。何物でもなく、ただ理解してもらふことだけだった。ハスレルも彼と同様に迫害されたことがあつた。ハスレルは自由の人であつた。ドイツの凡庸ほんようさから恨み深く追求されて押しつぶされそうになつてゐる一人の自由の人を、理解してくれるはずだった。二人は同一の戦いを戦つてゐるのだつた。

彼はその考えをいやくや否や、すぐに実行した。彼は母へ一週間不在になることを告げた。そして、ハスレルが音楽長の地位についてゐる北ドイツの大都会へ向かつて、その晩汽車に乗つた。待つことができなかつたのである。それは呼吸せんがための最後の努力であつた。

ハスレルは有名になつてゐた。敵はなお武器を捨ててゐなかつたが、しかし味方の者ら

は、彼こそ現在過去未来を通じての最大の音楽家だと唱えていた。彼は愚蒙な追従者らにとりまかれ、また、同じく愚蒙な誹謗者らにとりまかれていた。彼は強い性格でなかったから、誹謗者らのためにいらだちやすくなされ、味方のために柔情になされていた。彼はありたけの気力を使つて、非難者らを不快がらせ叫ばせようとした。彼は悪戯を事とする不良児に似ていた。そしてその悪戯も、最も厭味なものであることが多かった。彼はただに、正統派らを激怒せしむるような奇異な作曲に、その妙才を用いたばかりではなく、また、風変わりな歌詞にたいして、奇怪な主題にたいして、あるいはしばしば曖昧卑猥な情景にたいして、すなわち一言にしていえば、すべて普通の良識と謹直とを傷つけるようなものにたいして、意地悪い嗜好を示していた。中流人士らが喚くと彼は満足していた。そして中流人士らは欠かさず喚いていた。成り上がり者や王侯に見るような横柄な傲慢さで、芸術にまで関与していた皇帝は、ハスレルの名声を世間の醜怪事と見なして、機会あるごとにはかならず、彼の厚顔な作品にたいして軽侮的な冷淡さを示していた。かかる公辺の反対は、ドイツ芸術の尖端派にとつてはほとんど一つの世間的確認となるものだったが、ハスレルはそれを憤りまた愉快がつて、ますます乱暴なやり方をつづけていた。新たに悪戯をすることに、味方の者らは歓喜して天才だと呼号していた。

ハスレルの徒党は、廢頹派はいたいはの文学者や画家や批評家からおもに成り立っていた。彼らはたしかに、敬虔主義的精神と国家的道德心の復興——北ドイツにおいては常に威嚇いかく的なものとなる復興——にたいする反抗派を代表するに足るのであった。しかし彼らの独立心は、鬪争においては知らず知らずのうちに、滑稽こっけいなものとなるほど激昂げっこうしていた。なぜなら、彼らの多くはかなり辛辣しんらつな才能に欠けてはいなかったとしても、知力を有すること少なく、趣味を有することはさらに少なかったからである。彼らはみずからこしらえ出した人為的な雰圍気ふんいきから、もはや脱することができなかつた。そしてあらゆる流派に見らるるとおり、ついに実人生の知覚をまったく失つてしまつていた。彼らの評論を読み、彼らが好んで宣言するものを鵜呑みうのにする、多くの愚人らにたいして、また自分自身にたいして、彼らは法則をたれていた。彼らの阿諛あゆはハスレルに有害であつて、彼をあまりに自惚うぬぼれさしていた。彼は頭に浮かぶ楽想を、少しも検しらべないでことごとく取り上げた。そして自分の真価より劣つたものを書くことはあるかもしれないが、それでも他の音楽家のものより常に優まさつていて、ひそかに信じていた。ところがこの考えは、不幸にも多くの場合あまりに真実だつたけれど、そのために、きわめて健全な考えであつて偉大な作品を生み出すに適したものである、ということにはならなかつた。ハスレルは心の底に、敵味

方を問わず万人にたいして、全然の蔑視べっしをいだいていた。そしてこの苦々にがしい嘲弄ちやうろう的な蔑視は、彼自身と全人生とにまで広がっていた。彼は高潔な無邪気な多くのことを昔信じていただけに、ますます深くその皮肉な懷疑主義の中に沈んでいった。高潔な無邪気な事柄を時日の徐々たる破壊から防ぐだけの力もなく、もはや信じていないものをなお信じていると思ひ込むだけの虚偽もなし得ないで、彼は憤然と昔の記憶を嘲笑し去らんとつとめた。彼は南ドイツの性質をもつていた。怠惰柔弱で、過度の幸運や寒気や暑気に抵抗しがたく、自分の平衡を維持するためには、適度な気温を必要とする性質だった。彼はみづから知らないまにいつしか、人生の怠惰な享樂を事とするようになってしまった。みづことな珍味や、重々しい飲料や、無為の遊樂や、柔弱な思想などを好んでいた。彼は天分に豊かであつて、時流に投じた放漫な音楽中にもなお天才の火花がひらめいてはいたけれど、彼の全芸術には右のことが仄見ほのえていた。自分の頹廢たいはいを彼はだれよりもよく感じていた。実を言えば、彼一人だけがそれを感じていた——しかも感ずるのは時々のことであつて、もとより彼はそういう瞬間を避けたがつていた。そして一度そう感じた時には、暗黒な気分、利己的な配慮、健康の心配、などに浸り込んで人間ぎらいになった——昔自分の感激ぞうおや憎悪を刺激したような事柄にたいしてはことごとく無関心になつて。

そういう人のそばに、クリストフは慰安を求めに行ったのだった。雨の降る寒い朝、彼はいかばかりの希望をもって、その都会に到着したことだろう。彼の目には芸術における独立的精神の象徴たる人が、そこに住んでいたのだ。彼はその人から、友愛と勇気とに満ちた言葉を期待していた。彼がそういう言葉を必要としていたのは、不利なしかも必然な戦いをつづけてゆかんがためにであった。真の芸術家は、最後の一息まで、一日といえども武装を解かずに世間と戦いを交えなければならない。なぜなら、シルレルが言ったように、「公衆を相手にしての決して後悔なき唯一の関係——それは戦いである。」

クリストフは非常に気が急^せいでいて、停車場のとある旅館へ手荷物を預けるか預けないうちに、すぐ劇場へかけつけて、ハスレルの住所を尋ねた。ハスレルは市の中央からかなり遠い郊外に住んでいた。クリストフはパンをがつかつかじりながら、電車に乗った。目的地に近づくに従って、胸が動悸^{どつき}してきた。

ハスレルが住居を選んだ一郭の地は、逸品を得ようとする困難な努力にあくせくしてる博学な蛮勇を若いドイツが傾けつくしている、奇異な新しい建築法によって、ほとんど全部が建てられていた。卑俗な町のまん中に、なんらの特色もないまっすぐな街路に、いろ

んなものが突然そびえていた、エジプトの大墓窟ぼくつ、ノールウエーの農家、修道院、城楼、万国博覧会の層楼、生気のない顔と一つの巨大な眼をもってる、地面にもぐり込んだ無脚のふくれ上がった家、地牢ちろうの鉄門、潜水艦の押しつぶされた扉とびら、鉄の籠たか、窓の鉄格子てつこうしについてる金色の隠花植物、表門の上に口を開いてる怪物、あちらこちらに、思いもかけぬところには皆敷いてある、青い瀬戸の敷き石、アダムとイヴとを示す雑色の切りはめ細工、不調和な色の瓦かわらでふいた家根、最上階には銃眼をうがち、頂上には異形の動物をすえ、一方には窓が一つもないが、他方には突然相並んで、方形や長方形のぽかんと開いてる多くの穴が、傷口みたいについてる、要塞ようさい式の家、裸壁の大きな面、その面からはただ一つの窓の所へ、不意に大きな露台が飛び出し、その露台はニーベルンゲン式の人像柱にささえられ、またその石の欄干からは、髭ひげのはえた髪かみの濃い老人の、ベックリンの人魚のような男の、二つのがった頭が飛び出していた。それらの牢獄みたいな人家の一つ——入口には巨人の裸体像が二つある低い二階建ての、古代エジプトの王宮に似た家——の破風はふに、建築家はこう書きしるしていた。

ああ芸術家をして示さしめよ、

過去未来にまたとなき己が宇宙を。

クリストフはハスレルの**ことばかり**考えていたので、**落ち着きのない眼**でそれをながめ、**少しも理解しようとはしなかつた**。彼は**目ざす家へ到着した**。最も簡単な——カロヴァンジャン式の——家の一つだつた。内部は**金目のかかつた卑俗な**ぜいたくさを示していた。階段には、**熱しすぎた暖房器の重い空気が漂つていた**。狭い昇降機がついていた。しかしクリストフは、**訪問の心構えをする隙を得んがために**、それに乗らなかつた。感動のためには**足は震え心は躍りながら**、その五階まで小足に上つていった。そのわずかな歩行の間に、ハスレルとの昔の会見、子供らしい心酔、祖父の面影などが、昨日のことのように彼の頭に浮かんた。

彼が入口の呼鈴を鳴らした時は、十一時に近かつた。家事取締女らしい様子のてきぱきした女が出て来た。彼女は彼をぶしつけにじろじろながめて、「旦那様は疲れていらつしやるからお目にはかかれませんが、」とまず言い出した。が次に、クリストフの顔に**素朴な**失望の色が浮かんたのを見て、きつと興味を覚えたのであろう、彼の全身を厚かましく見調べた後に、突然調子を和らげ、ハスレルの書齋に通して、会えるようにしてあげようと

言つた。そして横目でちらと彼を見やつてから、扉とびらを閉めた。

印象派の絵画やフランス十八世紀の優雅な版画などが、壁にはかかっていた。ハスレルはあらゆる芸術に通じてると自称していたのである。そして自分の党与から指示されたとおりに従つて、マネーとワットーとを自分の趣味の中に結合していた。様式と同様な混合が、家具の配置にも現われていた。ルイ十五世式の非常にりっぱな机は、「新式」の肱掛ひしか椅子けいす数個と多彩の羽蒲団はねぶとんが山のように積んである東方式の安楽椅子とに、取り囲まれていた。扉には鏡が飾りつけてあつた。日本の置物が、棚たなや暖炉の上にいっぱい並んでいた。その暖炉の上には、ハスレルの胸像が一つ厳然と控えていた。円卓の上の一つの盤の中には、警句や賛辞が書き入れてある、女歌手や女崇拜者や友人らの写真が、雑然と並んでいた。机の上は驚くほど乱雑をきわめていた。ピアノは開いたままだった。棚の上には埃ほこりがつもっていた。半ば吸いさしの葉巻が隅々にころがっていた……。

クリストフは隣室に、ぶつぶつ言つてる不機嫌ふきげんな声を聞いた。小間使の強い言葉がそれに答え返していた。ハスレルがあまり出て行きたくない様子を示していることは、明らかだった。また小間使がぜひともハスレルに出て行かせようとしていることも、明らかだった。彼女は少しの遠慮もなく、非常に馴なれ馴なれしい答え方をしていた。その鋭い声は壁を通し

て聞こえてきた。クリストフは、主人に注意してる彼女の言葉を聞くと、落ち着けなかった。しかし主人は、少しも気を悪くしていなかった。否かえって、そういう失礼さを面白がつてるかのようだった。そしてなおぶつぶつ不平を言いつづけながら、小間使をからかい、彼女を焦らして面白がつていた。ついにクリストフは、扉の開く音を耳にし、たえず不平を言ひまたからかいながらハスレルが、足を引きずってやって来るのを耳にした。

彼ははいつてきた。クリストフは胸迫る思いをした。彼はハスレルを見覚えていた。ああむしろ見覚えがなかったら？ それはまさしくハスレルであった、がまたハスレルではなかった。やはりその大きな額には皺もなく、その滑らかな顔は子供のようだった。しかし頭は禿げ、身体は肥満し、顔色は黄色く、眠そうな様子をし、下唇は少したれ下がり、退屈そうな不機嫌な口つきをしていた。肩を曲げ、はだけた上着のポケットに両手をつき込み、足には破れ靴を引きずっていた。ボタンもかけ終わっていないズボンの上には、シヤツがたくね上がっていた。彼は半ば眠っている眼でクリストフをながめた。クリストフが自分の名前をつぶやいても、その眼は輝かなかった。彼は無言のまま自動的な礼を返し、頭でクリストフに席をさし示し、溜息をつきながら安楽椅子にどっかすとすわり、その羽蒲団を身のまわりにつみ重ねた。クリストフはくり返した。

「前に一度……いろいろな御親切を……クリストフ・クラフトという者でございませうが……」

ハスレルは、安樂椅子に深くすわり込み、長い両足を組み合わせ、頤あごの高さまで来てる右膝ひざの上に、瘦やせた両手を握り合わせていたが、答え返した。

「覚えないなね。」

クリストフは喉のどをひきつらしながら、昔面会したことを向こうに思い出させようと試みた。しかしそういう親しい思い出を語ることは、いかなる事情においても彼には困難であった。そして目下の事情においては一つの苦悩であった。彼は文句にまごつき、適当な言葉が見当たらず、馬鹿なことを言つては顔を赤らめた。ハスレルはぼんやりした無関心な眼でじつと見つづけながら、彼を言い洩るままに放ほうつておいた。クリストフがようやく話を終えると、ハスレルはあたかも彼がまだ言いつづけるのを待ってるかのように、しばらく黙ったまま膝をゆすつていた。それから言った。

「そう……だがそんな話で若返りはしないね……。」

そして彼は伸びをした。

欠伸あくびをした後彼は言い添えた。

「……失敬……眠らなかつたものだから……昨晚劇場で夜食をしたので……。」
 そしてふたたび欠伸をした。

クリストフは今話したことについてハスレルからなんとか言ってもらいたかつた。しかしハスレルは、その話に格別興味を覚えないで、もうなんとも言わなかつた。そしてクリストフの身の上についても、なんらの問いをもかけなかつた。欠伸をしてしまつてから、尋ねた。

「前からベルリンへ来てるのかね。」

「今朝ついたばかりです。」とクリストフは言つた。

「そう。」とハスレルは別に驚きもしないで言つた。「宿屋はどこだい。」

返辞を聞くふうもなく、彼は懶げものうに身を起こし、呼鈴のボタンに手を伸ばし、そして鳴らした。

「ちよつとごめん。」と彼は言つた。

小間使が例の横柄おうへいな様子をして現われた。

「キティー、」と彼は言つた、「今日は俺おれに朝飯を食わせないつもりかい。」

「でも、」と彼女は言つた、「お客様とごいっしょのところへ食べ物をもつてまいつては

いけないじゃございませんか。」

「なぜいけないんだい。」と彼は言いながら、ちようしよう 嘲 笑 的 な またた 瞬きでクリストフをさし示した。「この方は俺の精神を養ってくださる。俺は身体を養おうとするんだ。」

「人様の前で召し上がるのを恥ずかしいとは思いなさらないのですか、動物園の獣のよう。」

ハスレルは怒りもせず、笑いだして、言葉を言い直してやった。

「飼われてる犬猫ねこのように、だろう。」

「でもまあもっておいで。」と彼は言いつづけた。「恥ずかしさもいっしょに食べてやろう。」

彼女は肩をそびやかしながら出て行った。

クリストフは、自分のしてゐることをハスレルがなお尋ねようともしないのを見て、ふたび話の糸口を結ぼうとつとめた。田舎いなかにおける生活の困難なこと、人々の凡庸なこと、彼らの精神の偏狭なこと、孤独な情況のこと、などを話した。自分の心の苦悶を訴えて、同情を寄せてもらおうとつとめた。しかしハスレルは、安楽椅子いすにうづくまり、頭を反りそ返らして羽蒲団はねぶとんにもたせかけ、眼を半ば閉じて、彼を話すままにしておいて、聞いても

いないようだった。あるいはまた、ちよつと眼瞼まぶたをあげて、田舎の人々に関する冷やかな皮肉や滑稽こっけいな警句を数語投げつけて、もつとうち解けた話をしようとするクリストフの気をくじいてしまった。——キティーはもどつて来て、コーヒーやバタやハムなどの朝食の盆をもつてきていた。彼女は脹れ顔ふくをして、紙の散らかつてるまん中に机の上にそれを置いた。クリストフは、彼女が出て行くのを待つて、苦しい話をまた始めた。言いつづけるのにたいへん骨が折れた。

ハスレルは盆を自分の前に引き寄せていた。彼はコーヒーをついで唇くちびるをつけた。それから馴なれ馴なれしい人のいいやや軽蔑けいべつ的な様子で、クリストフの話の途中をさえぎつて、彼に勧めた。

「一杯どうだい。」

クリストフは断わつた。彼は文句の筋道をつなごうと骨折つていた。しかしますますまごついてきて、もう何を言つてるのかみずからわからなくなつた。ハスレルの様子に気を奪さらわれていた。ハスレルは皿さらを頤あごの下に置き、バタつきのパンやハムの切れを指でつまみ上げては、子供のようほおぼに頬張ほおぼつていた。でもクリストフはようようのことで、自分は作曲をしてるといふことや、ヘツベルのユーディットにたいする序曲を演奏さしたことがある

などと、話すことができた。ハスレルは気も止めずに聞いていた。

「何を？」と彼は尋ねた。

クリストフは序曲の題名をくり返した。

「ああ、なるほど。」とハスレルは言いながら、パンと指先とをいつしよにコーヒーの中に浸した。

それきりだった。

クリストフはがっかりして、立ち上がって帰ろうかとした。しかし長い旅行が無駄むだになることを考えた。そして勇気を振るい起こしながら、自分の作を少しひいてお聞かせしたいと、口ごもりながら申し出た。その一言を聞くや否やハスレルはさえぎった。

「いやいや、僕にはわからないよ。」と彼は愚弄ぐろう的な多少侮辱的な皮肉の調子で言った。

「それにまた、暇がないからね。」

クリストフは眼に涙を浮かべた。しかし彼は、自作にたいするハスレルの意見を聞かないうちは、ここから出て行かないとみずから誓っていた。彼は困惑と憤慨との交った調子で言った。

「失礼ですが、あなたは昔、私の作を聞いてくれるとお約束なさいました。私はただその

ために、ドイツの奥からやってまいったのです。どうか聞いてください。」

ハスレルはそういう応対に馴なれていなかった。怒おこつて顔を赤らめ泣かんばかりになつてその無作法な青年を、彼はながめた。そして面白く思った。彼は懶ものうげに肩をそびやかしながら、指でピアノを指し示し、おかしな諦あきらめの様子で言った。

「では……やってみたまえ……。」

そこで彼は、仮睡をでもしようとする者のように、安樂椅子いすの中に身を埋め、拳固げんこで羽ねぶとん蒲団を打ちたたき、その平らな上に両腕を伸ばし、半ば眼を閉じたが、クリストフがポケットから取り出した巻いた楽譜の量を測るために、またちよつと眼を見開き、小さな溜息をもらし、そして厭いやいや々ながら聞くことにした。

クリストフは気おくれがし憎ふるえながらも、演奏し始めた。すると間もなくハスレルは、美しいものに我れ知らず心ひかれる芸術家の職業的な興味をもって、眼と耳とをうち開いた。最初はなんとも言わないで、じつとしていた。しかしその眼は前よりはつきりしてき、そのむつつりした唇は動いてきた。次に彼はまったく本気に返つて、驚きと感嘆との声をもらした。それはぼんやりした間投詞だけだった。しかしその調子は、彼の感情を明らかに示していた。クリストフは言い知れぬうれしさを感じた。ハスレルはもはや、ひかれた

ページや残つてるページの数を測ろうとしなかった。クリストフが一曲をひき終わると、彼は言った。

「それから……それから……。」

彼は人間らしい言葉を使い始めていた。

「それはいい、いい！……（彼は感嘆していた）……すてきだ……恐ろしくすてきなものだ！……だがいつたい（彼は驚いてつぶやいていた）どうしたんだ？」

彼は座席に身を起こし、頭を前方に差し出し、手を耳にかざし、独語をし、満足げに笑い、そしてある珍しいハーモニー和声の箇所になると、唇をなめようともするようになり、舌を出した。不意の転調に、彼は非常に動かされて、感嘆の一語をもらしながら急に立ち上がり、ピアノのところへ来てクリストフのそばにすわった。クリストフがそこにいることにも気づかないらしかった。彼は音楽のことばかりを念頭においていた。その一曲が済むと、彼は楽譜帳を取り上げ、ページを読み返し始め、それから次々にページを読んでゆきながら、賞賛と驚きとの独語を言いつづけ、あたかも室には自分一人きりであるかのようだった。

「驚いた！……（彼は言っていた）……此奴はどこからこんなものを見つけ出したのかな

……。」

彼は肩でクリストフを押しつけ、みずから数節をひいてみた。ピアノにおける彼の指先は、きわめてやさしくしなやかで軽くみごとだった。クリストフは、彼の華奢きゃしゃな長いよく手入れの届いた両手を認めた。それは彼の身体つきに似合わない、多少病的な貴族味をそなえていた。ハスレルはある和音のところではき止め、瞬きをしたり音を鳴らしたりしながら、それをくり返しひいた。彼は種々の楽器の音を真似まねながら、唇くちびるでやかましく音をたて、またたえず勝手な激語を音楽に交えていた。その激語には好悪の情がともにこもっていた。ひそかないらだちを、それとなき嫉妬しつとの念を、彼はみずから禁ずることができなかつたのである。そしてまた同時に、貪むさぼるように享樂していたのである。

彼はあたかもクリストフがそこにいないかのように、なお独語をばかりつづけていたが、クリストフはうれしさに真赤まっかになりながら、ハスレルの賛辞は自分にたいしてなされてるのだと思わずにはいられなかつた。そして彼は、自分が何を作るつもりだったかを説明しだした。ハスレルは初めのうち、その青年が言っていることにはなんらの注意も払わないらしく、大声で自分一人の考えを言いつづけていた。が次に、クリストフのある言葉にはつとした。彼はさあらぬ体を装よそおって耳を傾けながら、めくつてる楽譜になお眼をすえたまま、

口をつぐんでしまった。クリストフの方は、次第に元氣になつていた。そしてすっかり信頼してしまつた。彼は無邪氣な興奮をもつて、自分の抱負や身の上を語つた。

黙々としていたハスレルは、またも皮肉な様子をしだした。彼は心ひかれてる楽譜から指を離した。ピアノの柵たなに肱ひじをかけ、手に額ひたいを置いて彼は、年少の客氣と惑乱との調子で自作の注釈をしてるクリストフを、ながめてやつていた。そして自分の初めのころのことや、自分の希望や、クリストフの希望や、彼の前途に待ち受ける苦しみなどを、考えながら、苦笑を浮かべていた。

クリストフは言うべきことを忘れやしないと恐れながら、眼を伏せて話していた。ハスレルが黙つてるので力を得ていた。ハスレルが自分を見守つてること、自分の一言をも漏れなく聞いてることを、彼は感じていた。二人を隔てていた氷が砕けたように思われて、心が輝かしくなつていた。語り終わると、おずおずと——また信頼しきつて——顔を上げ、ハスレルをながめた。そして自分を見すえてる陰鬱いんうつな嘲笑的な好意なき眼を見た時、湧わきかけていた彼の喜びはことごとく、あまりに早い若芽のように一時に凍えてしまつた。彼は口をつぐんだ。

ちよつと冷やかな間を置いてから、ハスレルは冷淡な声で口を開いた。彼はふたたび変

わってしまったのである。彼は相手の青年にたいして一種の酷薄さを装よそおっていた。相手のうちに自分の昔の姿を見出したので、みずから自分を嘲あざけろうとでもしてるかのように、その抱負や成功の希望などを、残酷に嘲笑あざわらっていた。青年の人生にたいする信念を、芸術にたいする信念を、自己にたいする信念を、破壊してしまおうと冷酷にもつとめていた。苦に々がにがしげに自分自身を例にあげて、侮辱的な調子で現在の自作のことを話した。

「くだらない作ばかりだ。」と彼は言った。「くだらない奴らにはそれがちょうどいいんだ。音楽を愛する者が、世に十人といると君は思うか。一人もいないじゃないか。」

「私がいいます。」とクリストフは熱心に言った。

ハスレルは彼をながめ、肩をそびやかし、そして大儀そうな声で言った。

「君も皆と同じようになるだろう。皆と同じことをするようになるだろう。皆と同じように、成り上がったたり楽しんだりすることを考えるだろう。……そして、それがもつともないんだ……。」

クリストフは抗弁しようと試みた。けれどハスレルは彼の言葉をさえぎった。そして彼の楽譜をふたたび取り上げながら、先刻賞賛したその作品を、辛しんらつ辣らつに非難し始めた。青年の眼を逸した、実際上の粗漏を、書き方の不正確さを、趣味や表現の欠点を、ひどく厳

重に指摘したばかりでなく、なお馬鹿げた非難を加え、ハスレル自身がしようがい生涯苦しまなければならなかった、最も偏狭で最も時代におくれた音楽家らがなしそうな非難を、加えたのであった。いったい何を意味するのかと尋ねた。彼はもはや非難してものではなかった。否定してるのであった。心ならずもそれらの作から受けた印象を、憎々しく消し去ろうとつとめてるかのようだった。

クリストフはびつくりして、答えようとも試みなかった。尊敬し愛してる人の口から聞くには恥ずかしい無茶な言葉に、なんで答え返されよう。それにまたハスレルは少しも耳を貸さなかった。彼はそこにぴたりとがんば頑張って、楽譜を両手に閉じ、没表情な眼つきをし、にがにが苦々しげな口つきをしていた。がついに彼は、クリストフがいるのをふたたび忘れたかのように言った。

「ああいちばん悲しいことは、理解し得る人がいないことだ、一人もいないことだ。」
クリストフは感動に身内を貫かれる心地がした。彼は急にふり向き、ハスレルの手の上に自分の手を置き、心は愛情でいっぱいになって、くり返した。

「私がいます!」

しかしハスレルの手は少しも動かなかった。その若々しい叫びにたいして、彼の心の中

で何物かが、一瞬間振るい立ったとしても、クリストフをながめてる彼の鈍い眼には、なんらの光も輝かなかつた。皮肉と利己心が勢いを占めていた。彼は儀式ばつたおかしな様子で上半身をちよつと動かして、会釈の様子をした。

「ありがとう！」と彼は言った。

彼はこう考えていた。

「勝手にするがいい！ 貴様のために俺が生命を失つたとも思つてるのか。」

彼は立ち上がり、ピアノの上に楽譜を投げ出し、よろよろした長い足で、また安楽椅子のところへ行つてすわり込んだ。クリストフは、彼の胸中を読み取り、不快な侮辱を感じながら、人は万人に理解される必要はないと昂然として答えてみた。ある種の魂の人たちだけで全民衆に価する。彼らは民衆に代わつて考えてくれる。そして彼らが考えたことを、かならず民衆は考えるようになる。——しかしハスレルはもう聞いていなかった。彼はまた茫然自失の状態に陥っていた。それは彼のうちに眠つてる生命力の衰弱から来たものだった。クリストフはきわめて健全であつて、そういう急激な変調を理解できなかつたから、もう負けだということを漠然と感じた。しかし勝ちかけたように思ったすぐあとなので、あきらめることができなかつた。彼は絶望的な努力をして、ハスレルの注意

を呼び起こそうとつとめた。楽譜を取り上げて、ハスレルから指摘された不規則さの理由を、説明しようとしてつとめた。ハスレルは安楽椅子いすに埋まって、陰鬱いんうつな沈黙を守っていた。賛成もせず反対もしなかった。ただおしまいになるのを待っていた。

クリストフは、もう仕方がないことを見て取った。文句の途中で言いやめた。楽譜を巻き納めて立ち上がった。ハスレルも立ち上がった。クリストフは恥ずかしくまた気おくれがして、口ごもりながら詫わびを言った。ハスレルは傲慢ごうまんなまた退屈そうな品位を見せながら、軽く身をかがめ、冷やかにいてねいに手を差し出し、そして入口まで送ってきたが、一言引き止めようともせず、また来るようにも言わなかった。

クリストフはがっかりして街路に出た。当てもなく歩いていった。機械的に二、三の通りをたどった後、前に乗って来た電車の停留場に出た。なんの考えもなくまたそれに乗った。手足にも力がぬけはてて、腰掛の上に身を落した。思慮をめぐらすことも、自分の考えをまとめることもできなかった。何にも考えてはいなかった。自分の心中をのぞき込むのが恐ろしかった。まったく空虚だった。その空虚は自分のまわりに町の中にあるような気がした。もう息もつけなかった。その霧、それらの大きな家々が、彼の呼吸をふさいだ。

彼はもう一つの考えしかもたなかった。逃げることに、できるだけ早く逃げることに——あたかも、この町から逃げ出せば、そこに見出した苦い幻滅を残して行けるかのように。

彼は旅館に帰った。十二時半前だった。二時間以前に彼はこの旅館にはいったのだった——いかなる光明を心にいれていたことぞ！——が今は、すべて消え失せてしまっていた。

彼は昼食を取らなかった。室へも上がらなかった。主人が驚いたことには、彼は勘定書を求め、一晚過ごしたかのように金を払い、そして出発するつもりだと言った。何も急ぐ必要はないこと、彼の乗ろうとする汽車は数時間後にしか出ないこと、旅館で待つてゐる方がいいこと、などを説明されても無駄だった。彼はすぐに停車場へ行きしたがった。どれでも構わず最初の汽車に乗りたく、一刻もそこにとどまることを欲しなかった。この長い旅をした後、旅費をだいぶ使った後——ただにハスレルに会うことばかりではなく、博物館を見物し音楽会に行き種々の知己を得ることなどを、楽しみにしていたのであるが——彼はもはや一つの考えしかもたなかった、すなわち出発すること……。

彼は停車場へもどってきた。言われたとおりに、乗るべき汽車は三時間後にしか出なかった。しかもその汽車は急行でなく——（クリストフは最下等にしか乗れなかったのであ

る)——途中で停まるのであった。二時間後に発車して初めの追いつく次の汽車に乗った方が、ずっと利益だった。しかしそれはここで二時間ほど多く過ぎすことであつた。クリストフには堪えがたかつた。彼はもう、待つてゐる間に停車場の外へ出たくもなかつた。

——陰鬱な待合時間だつた。室は広くがらんとして、しかも騒々しく陰気で、見知らぬ人影が、まったくの他人であり無関係である人影が、どれも皆忙しそうに足を早めながら、出入りして、一人の知人もなく、一の親しい顔もなかつた。蒼白いあおしろ明るみは消えてしまった。霧に包まれた電燈が、夜の中に点々ともつて、夜をいつそう暗くしてゐるがようだった。時がたつにつれてクリストフはますます切ない気持になり、出発の時間を苦しげに待つていた。間違えていないことを確かめるために、一時間に十度も時間表を見直しに行つた。そして時間つぶしに、それを隅々すみずみまでまた読み返してると、ある地名にはつとした。どうも覚えがあるようだった。やがてそれは、いかにも親切な手紙をくれたシユルツ老人の土地であることが、思い出された。この見知らぬ友を訪れてみようという考えが、あわただ慌しい中にもすぐに浮かんできた。その町は直接の帰途には当たつていなくて、支線を一、二時間ばかりの所だつた。長い時間待つて二、三度乗り換えをしながら、夜通しの旅になるのだつた。クリストフは何にも計算に入れなかつた。そこへ行こうとすぐにきめた。同

情にすがりたいという本能的な欲求があった。考える暇も待たずにすぐ電報を打って、翌朝着くことをシユルツに知らした。がその電報を出すか出さないうちに、もう後悔した。いつに変わらぬおのれの幻が苦笑された。何故にまた新たな苦しみの方へ向かつて行くのか？——しかしもう済んだあとだった。変更するには間に合わなかった。

それらの考えのうちに待ち残した時間は過ぎた。——彼の乗るべき汽車がついに仕立てられた。彼はまっ先に乗り込んだ。彼はまったく子供らしくなっていて、ようやく息がつけるようになったのは、汽車が動き出して、灰色の空の中に、もの悲しい驟雨しゅううの下に、夜の落ちかかっている都会の影が消えてゆくのを、車窓から見送った時からであった。そこで一晩過ごしたら死ぬかもしれないような気がしていた。

ちようどその時——午後六時ごろ——ハスレルの手紙がクリストフあてで旅館に届いた。クリストフの訪問によつて、彼は心に多くの動揺を受けたのだった。午後じゆう彼は心苦しく考えていた。あれほど熱烈な愛情をいだいてやつて来ながら、自分の冷淡な待遇を受けた憐あわれな青年にたいして、同情の念が湧わかないでもなかった。彼は自分の応対をみずからとがめた。実を言えば彼の方では、いつもの癩かんしゃく癩ままぎれな不機嫌ふきげんの発作にすぎなかった。彼はそれを償おうと考えて、オペラ歌劇の切符とともに閉場後会おうという約束を

クリストフに書き送った。——クリストフはそれを少しも知らなかった。ハスレルは彼がやって来ないのを見てこう思った。

「怒ってるな。気の毒だな。」

彼は肩をそびやかした。そしてさらに求めようとしなかった。翌日になるともう念頭にもなかった。翌日には、クリストフは彼から遠くにいた——いかに永遠をかけてもふたたびたがいに近寄ることがないほど遠くに。そして二人は永久に別れてしまった。

ペーテル・シユルツは七十五歳だった。いつも身体が弱くて、かつ老衰していた。かなりの身長だったが、背は曲がり、頭は胸にたれ、気管支は弱く、呼吸が困難だった。喘ぜんそ息くやカタルや気管支炎がついてまわった。そして必然の苦闘の跡が——幾晩も寢床にすわって、身体を前にかがめ、汗にまみれて、つまった胸に一息の空気を吸い込もうと骨折ることがあった——その瘦やせた無髻むせんの長い顔の痛ましい皺しわの中に刻まれていた。鼻は長くて、その先が少し太くなっていた。幾筋かの深い皺が、齒の抜けて落ちくぼんだ頬ほおを、眼の下から斜めにたち切っていた。そういう衰残の憐あわれな顔を刻んだものは、ただ老年と疾し病びいのみではなかった。生活の苦しみもそれに加わっていた。——がそれにもかかわらず、

彼は悲しんではいなかった。落ち着いた大きな口には、朗らかな温情が現われていた。しかしその年老いた顔に痛切な穏和さを与えてるものは、ことに眼であった。眼は清澄な淡灰色だった。平静と誠実とをもつてじつとまともにながめた。それは魂を少しも隠さなかった。心の底まで開き示してるがようだった。

彼の生涯は事件に乏しかった。長年独身をつづけていた。細君は死んでいた。彼女は大きくして善良でなく、大して伶俐れいりでなく、少しも美しくはなかった。しかし彼は彼女についてしみじみとした思い出をもつていた。彼女を亡なくしたのは二十五年前だった。それ以来彼は一晩といえども、彼女と悲しいやさしい短い対話を心の中でしないでは、眠ったことがなかった。自分の一日一日に彼女を結びつけていた。——彼には子供がなかった。それが生涯の大きな憾うらみみだった。彼は父が子に対するように学生らに愛着して、学生らの上に愛情の欲求を移していた。しかし報いられることはまれだった。年老いた心は、若い心ごく近く自分を感じ、ほとんど同年輩くらいに感じ得る。両者を隔てる年月がいかに短いかわっている。しかし青年はそれを少しも気づかない。青年にとつては、老人は異なった時代の人である。そのうえ、青年は目前の配慮にあまりに心を奪われていて、自分の努力の悲しい終局からは本能的に眼をそらすのである。シユルツ老人は、ある学生らの感謝に

時々出会うこともないではなかった。幸でも不幸でも彼らに起こることにはすべて彼が新鋭な関心を見せるので、彼らはそれに動かされた。時々会いに来てくれた。大学を出ると感謝の手紙をよこした。なお引きつづいて年に一、二回手紙をくれる者もあった。けれどその後になると、シユルツ老人はもう彼らの消息に接しなかった。ただ新聞などで某々の出世を知った。すると彼は自分が成功でもしたかのようにその成功を喜んだ。彼は彼らの無音を恨まなかった。いろんな理由を察しやっていた。彼らの愛情を少しも疑わなかった。彼らにたいする自分の感情と同じような感情が、彼らのうちの最も利己的な者にもあるがように思っていた。

しかし書物こそは、彼にとつて最上の慰安所であった。書物は決して彼を忘れることなく欺くことがなかった。彼が書物の中でいつくしんだ多くの魂は、今はもう時の波を超越タイムしていた。その魂らは愛のうちに永久の確固不動さを保っていた。しかもその愛たるや、彼らが人の心のうちに喚よび起こしかつみずからも感じてるらしいものであって、彼らを愛する人々の上に彼らが光り輝かしてくるものであった。美学と音楽史との教授である彼は、小鳥の歌にそよいでる古い林に似ていた。それらの歌のあるものはごく遠くに響いていた。幾世紀もの彼方かなたから来るものだった。それでも十分にやさしく神秘的であった。ま

た彼にとつて耳馴なれた親しい歌もあつた。それらは親愛な道づれであつた。それらの文句のおのおのは、過去の生涯の喜びや悲しみを思い起こさしてくれた。過去の生涯といつても、意識してゐるものも意識しないものもあつた。（なぜなら、太陽の光に照らされるおのおの日の下には、他の日々が展開してゐて、それを見知らぬ光が照らすのだから。）また最後には、欲求して長い間待ち望んでゐる事柄を言つてくれる、まだかつて聞いたこともない歌があつた。あたかも雨の下の地面のように、心はうち開いてそれらを迎えた。かくてシユルツ老人は、孤独な生活の沈黙のうちに、小鳥の群がatterる森に耳傾けていた。そして伝説中の僧侶のように、魔法の鳥の歌に恍惚こうこつと眠りながら、年月は過ぎてゆき晩年は到来した。しかし彼はいつも二十年代の魂をもつていた。

彼はただに音楽に豊富なばかりではなかつた。詩人をも愛していた——古代や近代の詩人らを。自国の詩人ら、ことにゲーテを、愛好してゐた。しかしまた他国の詩人をも愛してゐた。彼は学問があつて種々の国語が読めた。精神上では、ヘルデルや大ヴェルトブルゲルら——十八世紀末の「世界の公民」らと、同時代人だつた。その広汎こうはんな思想に包まれて、千八百七十年前後の激しい争闘の時代を、生きて来たのであつた。そして彼はドイツを尊びながらも、ドイツを「光榮」とはしなかつた。彼はヘルデルとともに考えてい

た、「何かを光榮とする者のうちで、おのれの国家を光榮とする者は、至極の愚者である」と。またシルレルとともに考えていた、「ただ一国民のためにのみ書くは、きわめて貧弱なる理想である」と。彼の精神は時として臆病おくびょうになることがあった。しかし彼の心はすばらしく広大で、世に美わしいものはことごとく歓迎しようとしていた。おそらく彼は凡庸ぼんようにたいしてあまりに寛大であつたらう。しかし彼の本能は最善なものにたいして少しの疑いをもいだかなかつた。そして、よい世評を得てる偽りの芸術家らを非難するの力はなかつたとは言え、世に認められない独創的な力強い芸術家らを弁護するの力は、常にそなえていた。彼は自分の温良な性質からしばしば誤られた。不正なことをしはすまいかと恐れていた。他人が愛するものを自分が愛しない時には、自分の方が間違つてるのだということを疑わなかつた。そしてしまいにはやはりそれを愛するようになった。愛するとは彼にとつて非常にうれしいことだった。愛と称賛とは、彼の惨めな胸みじに空気が必要であるより以上に、彼の精神生活に必要なだった。それで、愛と称賛との新しい機会を与えてくれる人々にたいして、彼はいかに感謝の念をいだいたことだろう！——クリストフは、自分の歌曲がシユルツ老人にとつてなんであつたかを、夢にも知らなかつた。それを書いてた時の彼自身の感じも、それにたいする老人の生き生きとした感じには及びもつかなかつ

た。彼にとつてはそれらの歌は、内部の熔炉ようろから迸り出た若干の火花にすぎなかった。なお他にも多くの火花が迸り出るに違ひなかった。しかしシユルツ老人にとつては、それは一挙に啓示せられた一世界……愛すべき一世界だった。彼の生活はそれによつて輝かされたのであつた。

一年前から彼は、大学の職を断念しなければならなかつた。ますます不安な健康は、もう彼に講義を許さなかつたのである。病気で床についている時、ウォルフ書店からいつものとおりに、音楽書の新刊の小包が届いた。受け取つてみるとこんどには、クリストフの歌曲集がはいつていた。彼は一人きりだった。近親の者もそばにいなかった。わずかの家族は久しい前に死に絶えていた。一人の老婢ろうひにすべての世話をさしていたが、老婦は彼の不健康につけこんで、勝手なことばかり彼に強しいていた。ほとんど同年輩の二、三の友が、時々訪ねてきてくれた。しかし彼らもまたごく健康ではなかつた。天氣が悪い時には、彼らもやはり家に閉じこもつて、訪問をのばした。ちやうど冬のこと、街路は解けかけた雪に覆おおわれていた。シユルツは終日だれにも会わなかつた。室の中は薄暗かつた。黄色い霧が、衝立ついたてのように窓ガラスを張りつめて、視線を妨げていた。暖炉の熱が重々し

く懶ものうかつた。近くの教会堂では、十七世紀の古い鐘が、不揃ふぞろいな恐ろしく調子はずれな声で、十五分ごとに、単調な賛美歌の断片を歌っていた。こちらであまり愉快でないおりには、その陽気な調子もなんだか渋面しているように思われるのだった。シユルツ老人は咳せきをしながら、一積みの枕蒲団まくぶしんに背中中でよりかかっていた。彼は好きなモンテーニユを読み返そうとした。しかしその日はいつもほど面白く感じなかった。で書物を置き、苦しげに息をついて、夢想にふけた。音楽書の小包が寢床の上にあつた。それを開くだけの勇氣もなかつた。悲しい心持だった。ついに彼は溜ため息をして、包みのひもをていねいに解いてから、眼鏡をかけ、楽曲を読み始めた。彼の考えは他に向いていた。避けたい追憶の方へいつも考えがもどつてゆくのであつた。

彼の眼は古い聖歌の上に落ちた。クリストフが十七世紀の素朴そぼく敬けい虔けんな詩人の言葉を借りてきて、その調子を一新したものであつて、パウル・ゲルハルトのキリスト教徒の旅人の歌であつた。

希望せよ、憐あわれなる魂、

希望をかけよ、勇ましかれ！

.....

待てよ、ただ待てよかし。

美わしき喜びの太陽を、

やがて汝は見るならん。

シユルツ老人はそれらの誠実な言葉をよく知っていた。しかしそれらが彼に話しかけてくれるのは、かつてそんなふうにはなかった……。それはもはや、その単調さによって人の魂を静め眠らしてくれる平静な信仰心ではなかった。それは彼の魂と同じような魂であり、彼自身の魂であり、しかも、さらに若くさらに強く、苦しみながら希望をかけ、喜びを見んと欲しつつ喜びを見る魂であった。彼の手はうち震えた。大粒の涙が頬ほおに流れた。彼は読みつづけた。

起たてよ、振り起たてよかし！

悲哀と懸念を捨て去れよ！

心を乱し悲しむるものを、

汝が許より去らしめよ！

クリストフはそれらの思想に、若い大胆な熱情を伝えていた。その勇壮な笑いは、信じきった率直な最後の句に花を開いていた。

凡てを統べ導くものは、
げに汝には非ざるなり。

―そは神なり。神は王にして、
凡てを適宜に導くなれ！

そして彼が、若い野人の傲慢さをもって、原詩の中の元の場所から平気で引き抜き、自分の歌曲の結末としている、壮大なる軽侮の一連はやって来た。

あらゆる悪魔うち寄りて、
それに反抗なさんとも、

平然たれ、疑うなかれ！

神は退くものならず。

神の企たくみしことはみな、

遂とげんと欲せしことはみな、

ついにならず成るならむ、

神は目的を果すなり！

……すると、それは歓喜の頂点であり、戦闘の陶醉であり、ローマ大將軍の凱がい旋せんであった。

老人は身体じゆうを震わした。あたかも友だから手を取られて駆けさせられる子供のようおこそに、あえぎながらその厳おごそかな音楽についていった。胸が動悸どうきした。涙が流れた。彼はつぶやいた。

「ああ、神よ！……神よ！……」

彼はすすり泣きを始め、また笑っていた。幸福だった。息がつまった。激しく咳せきこん

だ。老婢ろうひのザロメが駆けつけてきた。彼女は老人が死にかけてるのかと思った。彼はなお続けて、涙を流し咳せきこみ、そしてくり返していた。

「ああ神よ！……神よ！……」

そして咳の発作から発作へ移る短い間の時間に、彼は快い鋭い笑いをもらしていた。

ザロメは彼が狂人になったのだと思った。それから、その激情の原因を知ると、彼を荒々しく責めたてた。

「つまらないことでそんなになるということがあるものですか！……それを私にお渡しなさい。もっていってしまいます。もうあなたにはお目にかけません。」

しかし老人は、なお咳き込みながらもしつかりしていた。構わないでくれとザロメに叫んだ。彼女が強情を張ると、彼は癩かんしやく癩いを起こし、怒鳴りつけ、喉のどをつまらしながらのしつた。彼女はかつて、彼がそんなに憤って対抗してくるのを、見たことがなかった。彼女はびっくりして、手を引いた。しかしきびしい言葉をやめなかった。彼を狂人きちがいじい爺いさんだとして、言い進んだ、今まではりっぱな人だと思っていたが、しかしそれは自分の思い違いだった、車夫でさえ顔を赤らめるようなひどいことを言い、眼は顔から飛び出し、その眼がもしピストルだったら、自分は殺されるところだった、などと……。彼女のそう

いう悪態はいつまでつづくかわからなかった。しかし彼は猛然と枕蒲団まくらとんの上に身を起こして叫んだ。

「出て行きなさい！」

それがいかにも厳然たる調子だったので、彼女は扉とびらをばたりと閉めて出て行つた。出て行きながらも、もういくら呼ばれたつて来やしない、勝手に一人で怒鳴るがよい、などと言い捨てて行つた。

そして、夜の影が広がり始めてる室の中には、ふたたび静寂が落ちて来た。会堂の鐘は夕ゆうべの平和の中にふたたび、その落ち着いた奇怪な響きをたてていった。シユルツ老人は激げ昂つこしたのをやや恥じながら、じつと身を反そらしてあえぎながら、心の騒さわぎが鎮しずまるのを待っていた。彼は貴い歌曲集を胸に抱きしめて、子供のように笑っていた。

彼は一種の恍惚こうこつのうちに孤独な日々を過ごした。もはや自分の病氣や冬や佗わびしい光や孤独などのことを考えなかつた。周囲のすべてが光り輝いて愛を含んでいた。死期に近づいていながら彼は、見知らぬ友の若い魂の中に生き返る心地がした。

彼はクリストフの様子を想像してみた。その想像は実際とはまったく違っていた。それ

はみずからこうありたいと思つてる姿だった。金髪で、痩せ形で、眼は青く、やや弱い含み声で口をきき、穏和な内気なやさしい人物だった。實際がどうであろうとも、彼はやはりそれを理想化したがつていた。彼は周囲のすべての者を理想化していた、学生や隣人や友人や自分の老婢をも。彼の温和な性質と批評眼の欠如——あらゆる不穏な考えを避けるために半ばは自意識的な——とは、自分の周囲に、自分と同じく朗らかな淨い面影を織り出していた。それは、彼が生きたために必要としてゐる温情の虚偽だった。しかし彼はそれにすつかり欺かれてばかりもいなかった。夜にしばしば寢床の中で、自分の理想と背馳はいちする種々なこまかい昼間の出来事を、思い浮かべては嘆息した。老婢のザロメが、付近の上かみさんたちと陰で自分の悪口を言つてゐること、また毎週の会計をきまつてごまかしてゐること、それを彼はよく知つていた。学生らが必要な間は自分におもねつてゐるが、期待してゐる助けを受けてしまった後には、自分をうち捨ててしまふこと、それを彼はよく知つていた。隠退後は大学の古い同僚らからもすつかり忘れられてゐること、また自分の後継者が、自分の論説を名前も挙げないで盗み取り、あるいは名前を挙げる時には、不実なやり方をして、無価値な一句を引用したり、誤謬ごびゅうを拾い上げたりしてゐること（それは批評界によく行なわれてゐる方法であるが）、それを彼は知つていた。老友のクンツが今日の午後もまたひど

い嘘うそを言ったこと、も一人の友のポットペチミットが数日間と言って借りていった書物は、もういつまでも返されることがあるまいということ、それを彼は知っていた。右のことは、生きた人と同様に書物を愛惜してゐる彼のような者に取つては、非常に悲しいことだった。また古い新しい他の多くの悲しい事柄が、彼の頭に浮かんで来た。彼はそれらを考えたくなかつた。しかしそれらはいつまでもそこにあつた。彼はそれらを感じた。それらのことの追憶が、刺すような苦痛をもつて時々彼の心を過よぎつた。

「ああ、神よ、神よ！」

彼は静かな夜の中であつた。——それから、不快な考えをすべて遠ざけた。それらを打ち消した。彼は信頼しなかつた、樂觀しなかつた、人を信じなかつた。そして人を信じていた。彼の幻は幾度か荒々しくこわされたことであろう！——しかしまた他の幻が浮かんで来た、いつでも、いつでも……。彼は幻なしにはいられなかつた。

見知らぬクリストフは、彼の生活のうちの光の焦点となつた。最初に受け取つた冷淡な無愛想ぶあいそうな手紙は、彼に苦しみを与えたはずだった。——（おそらく実際に与えよう。）——しかし彼はそうだと認めたくなかつた。そして子供らしい喜びをさえ感じた。彼はいかに謙譲であつて、人に求むることがいかに少なかつたから、人から受けるわずかな

もので、人を愛し人に感謝したいという要求を満たすに足りるのであった。クリストフに会うなどとは、望みも得ない幸福だった。今ではライン河畔まで旅するにはあまりに年老いていたし、また向こうからの訪問を願うことは、思いもつかなかったのである。

クリストフの電報は、夕方彼が食事についてる時に到着した。彼は最初理解しかねた。知らない人からのように思われた。間違つたのでないかしら、他人あてではないかしら、とも考えた。三度よみ返してみた。心が乱れていたし、眼鏡はよくかかかっていず、ランプの光は鈍くて、文字が眼の前で踊っていた。ようやくそれとわかると、彼は心が転倒して、食事を忘れてしまった。ザロメがいくら呼びかけても無駄だった。彼は一口も飲み下すことができなかった。いつでもかならずたたむ胸ナフキン布を、そのまま食事の上に放り出した。よろめきながら立ち上がり、帽子と杖つえを取りに行き、そして出かけた。かかる幸福を得て、善良なシユルツがまっ先に考えたことは、他人にもその幸福を分かつことであり、クリストフが来るのを友人らに知らせることであった。

彼は同じく音楽好き二人の友をもつていて、クリストフにたいする自分の感激を伝えていた。判事のザムエル・クンツと、歯医者のおスカル・ポットペチミットとであった。後者は秀ひいでた歌手だった。三人の老人連中は、いっしょにクリストフの樽うわさをしたことがし

ばしばあった。そして彼の音楽を見当たる限りことごとくやってみた。ポットペチミットは歌い、シユルツは伴奏し、クンツは聞いた。そして彼らはあとで何時間も興奮した。彼らは音楽をやる時に、幾度言ったことだろう。

「ああ、クラフトがいたら！」

シユルツは、自分のもつてる喜びと、これから友人らにもたらさんとする喜びとに、往來で一人笑っていた。夜になりかかっていた。クンツの住居は、町から半時間ばかりの小さな村にあった。空は清らかだった。至つて穏やかな四月の夕だった。鶯うぐいすが歌っていた。シユルツ老人は心が幸福に浸っていた。胸苦しさも感じないで息をし、足には二十年代のような力を覚えた。暗闇くらやみでつまづく石にも気を留めないで、軽快に歩いていった。馬車が来ると、元気に路傍へ身をよけて、御者とうれしげな挨拶あいさつをかわした。道の土手に上っている老人の姿を、角燈の光が通りしなに照らし出す時、御者は驚いて彼をながめていた。

村のとつつきつの、小さな庭の中のクンツの家に着いた時は、もうすっかり夜になっていた。彼は戸を激しくたたいて、大声で呼びたてた。窓が一つ開いて、びっくりしたクンツの顔が現われた。クンツは暗闇の中を透し見て、尋ねた。

「だれですか。なんの用ですか。」

シユルツは息を切らしきき々として、叫んでいた。

「クラフトが……クラフトが明日来るよ……。」

クンツには何にもわからなかった。しかし彼はその声を覚えていた。

「シユルツか！……どうしたんだ。今時分に。何か起こったのか。」

シユルツはくり返した。

「明日来るんだよ、明日の朝！……。」

「何が？」とクンツはまだ呆氣あつけに取られていて尋ねた。

「クラフトがさ！」とシユルツは叫んだ。

クンツはちよつとその言葉の意味を考えていた。それから、響き渡る感動の言葉を発した。了解したのだった。

「降りて行くよ。」と彼は叫んだ。

窓はまた閉められた。彼は手にランプをもって、階段の入口に現われ、庭に降りてきた。背の低い太鼓腹の老人で、灰色の大きな頭と赤い髻ひげとをもち、顔や手には赤痣あかあざがあった。彼は瀬戸のパイプをふかしながら、小股こまたでやって来た。お心よしで多少ぼんやりしてるこ

の男は、生涯しょうがいかつて大して気をもんだことがなかった。けれども、シユルツのもたらした報知には彼も平然たることを得なかった。彼はその短い腕とランプとを動かしながら尋ねた。

「なに、ほんとうかい？ 来るのかい？」

「明日の朝だ。」とシユルツは電報をうち振りながら揚々とくり返した。

二人の老友は青葉あざな棚の下のベンチへ行つてすわった。シユルツはランプを取った。クンツはていねいに電報を開き、半ば口の中でゆっくり読んだ。シユルツは彼の肩越しに声高く読み返した。クンツはなお、電文のまわりの指示欄や、発送された時間や、到着した時間や、語数などをながめた。それからその貴い紙片を、快げに笑つてるシユルツに返し、うなずきながら彼をながめて、くり返した。

「ああよろしい……よろしい！……」

そしてちよつと考え、煙草たばこを一口大きく吸い込んで吐き出した後、シユルツの膝ひざに手を置いて言った。

「ポットペチミットに知らせなけりやいけない。」

「己おれが行こう。」とシユルツは言った。

「己もいつしよに行こう。」とクンツは言った。

彼はランプを置きに家へはいり、またすぐに出て来た。二人の老人はたがいに腕を組み合わして出かけた。ポットペチミットは反対の村はずれに住んでいた。シユルツとクンツとは、報知を心の中でくり返し考えながら、上の空の言葉をかわしていた。突然クンツは立ち止まって、杖で地面をたたいた。

「やあしまった！」と彼は言った、「家にはいない……。」

ポットペチミットがその午後、ある手術のために隣り町へ出かけて、そこで泊まり、なお一両日滞在するはずであることを、彼は思い出したのだった。シユルツは途方にくれた。クンツもやはり弱った。彼らはポットペチミットを自慢にしていた。彼の手腕を看板にしたかった。二人はどうしていいかわからないで、道のまん中に立ち止まった。

「どうしよう、どうしよう？」とクンツは尋ねた。

「ぜひともクラフトにポットペチミットの声を聞かせなけりやいけない。」とシユルツは言った。

彼は考えてから言った。

「電報をうとう。」

二人は電信局へ行つて、何事だか少しもわからないような、感動した長い電文をいっよにつづつた。

それからもどつていった。シユルツは時間をくつていた。

「一番列車に乗つたら、明日の朝は帰つて来れるだろう。」

しかしクンツは、もう間に合わないと注意し、電報は明日でなければ彼の手に渡るはずがないと言つた。シユルツはうなずいた。そして二人はたがいにくり返した。

「弱つたな！」

二人はクンツの門口で別れた。シユルツにたいするクンツの友情はごく深くはあつたけれども、村の外までシユルツを送つてゆき、たといわずかな道程みちのりでも、夜中にただ一人でまたもどつて来るの軽挙を冒すほどには、進んでいなかったのである。翌日、クンツはシユルツの家で昼餐ちゆうさんをとにもする約束だった。シユルツは心配そうに空をながめた。

「明日天気でさえあれば！」

そして彼は、クンツの言葉にいくらか胸の重みが取れた。巧みな日和見ひよしみだと言われているクンツは、厳おごかに空を見調べて——（彼もまたシユルツと同じく、自分らの小さな土地の晴れ晴れとした景色けしきをクリストフに見せたかったのである）——そして言つた。

「明日はいい天気だ。」

シユルツはまた町へもどつていった。町へ達するまでには、轍わだちの中や、路傍に積んである石などに、一度ならずつまずいた。家へ帰る前に菓子屋へ寄つて、町の名物たるある蒸し菓子あともどを注文した。それから家へもどつた。しかし家へはいりかけると、ふいに後あともど戻りして、停車場へ行き、列車到着の正確な時間を調べた。終わりに家へ帰り、ザロメを呼び、翌日の昼餐について長い間彼女と論じ合つた。そしてようやく、疲れはてて床についた。しかし彼は降誕祭クリスマス前夜の子供のように興奮していて、一睡もできないで、終夜蒲団ふとんの中で寝返りをしていた。午前一時ごろ、昼餐にはむしろ鯉こいの蒸し焼をこしらえるようザロメに言うために、起き上がろうと考えた。彼女はその料理が非常に上じょうず手だつたのである。しかし彼は彼女に言わなかつた。もちろんそんなことをしない方がよかつた。それでも彼はやはり起き上がつて、クリストフにあてた室の中の種々な物を整頓せいとんした。ザロメへ聞こえないようにと非常に用心した。しかられやすまいかと恐れていたのである。そして彼は、クリストフが八時前に着くはずはなかつたのに、汽車の時間に遅れやすまいかと気づかつた。早朝から支度したくをした。彼は第一に空をながめた。クンツの見当は当たつていた。

すこぶる上天気だった。寒さと急な梯子段はしごとを恐れてもう長くはいったこともない窞あなぐらへ、爪先つまさき立って降りていった。いちばんよい葡萄酒ぶどうの瓶びんを選んだ。上がって来る時に頭をひどく天井にぶつつけた。葡萄酒瓶かじの籠かごをかかえて梯子段を上りきった時には、息が切れてしまうような思いをした。それから木鋏きばさみをもつて庭へ行つた。いちばん美しい薔薇ばらや初咲きの枝を、容赦なく切り取つた。次に自分の室へ上がり、あわただしく髯ひげを剃り、一、二か所怪我けがをし、ていねいに服装を整え、そして停車場へ出かけた。七時だった。ザロメがいくら言つても、彼は牛乳一滴も飲まなかつた。クリストフも朝食を取らないでやって来るに違いないから、停車場から帰つていっしょに食べるのだと、彼は言つていた。

彼は四十五分前に停車場へ着いた。そしてクリストフを待ちわびながら、ついに見はずしてしまった。我慢して出口で待つてることができないで、プラットホームへ出て行き、乗降客の渦うずの中にまごついた。電報の明確な指示があるにもかかわらず、もしかしたら、クリストフは他の列車で来るかもしれないと彼は想像した。それにまた、クリストフが四等車から降りて来ようとは、思いもつかなかつた。彼はなお三十分以上も停車場に残つて、クリストフを待つてみた。クリストフはもうだいぶ前に到着して、まっすぐに彼の家を訪れて行つたのだつた。さらに間の悪いことには、ザロメが買物に出かけたところだつた。

クリストフが行くと門が閉ま^しっていた。ザロメは隣りの人に、だれかが来たらずぐに帰ると言ってくれるようにとだけ頼んでおいたので、隣人はそれだけを伝えて何にも言い添えなかった。クリストフは、ザロメに会いに来たのでもなければ、ザロメとは何者であるかをも知らなかったのだ、冗談にも程があると思った。大学音楽会長のシユルツ氏はこの地にはいないのかと、彼は尋ねた。いるという答えだったが、どこへ行ってるのかわからなかった。彼は怒って立ち去った。

シユルツ老人は、がっかりした顔つきでもどつてき、同じくもどつたばかりのザロメから、事情を聞いた時には、途方にくれてしまった。泣き出さんばかりになった。自分の不在に出かけて、クリストフを待たしておくだけの取り計らいさえしないでいる、召使の馬鹿さ加減を憤った。ザロメも同じ怒った調子で、待つてる人を見のがすほど彼が馬鹿だろうとは、思いつかなかつたと答え返した。しかし老人は、彼女相手にぐずぐず言い合いはしなかつた。一刻も猶予しないで、ふたたび階段を駆け降り、隣りの人たちが教えてくれる漠^{ぼくぜん}然とした方向へ、クリストフを捜しに出かけた。

クリストフは、だれもいないし一言の言い訳も受けないのを、憤慨していた。次の汽車の時間までどうしていいかわからないので、美しく見える野原を歩き回った。なだらかな

丘に囲まれてる、小さな静かな安らかな町だった。人家のまわりの庭、花の咲いた桜樹、緑の芝地、美しい樹影、擬古式の廃墟、大理石の円柱台の上、緑の間には、昔の女王らの白い胸像、そのやさしいかわい顔つき。町の周囲は皆、牧場と丘陵だった。花咲いた灌木の中には、鶉のうれしげな鳴き声が、快活な明朗なフルートの小合奏をしていた。クリストフの不機嫌は間もなく消えた。彼はペーテル・シウルツを忘れてしまった。

シウルツ老人は、通行人らに尋ねながらむなしく町中を駆け回った。町の上にそびえてる、丘の上の古城にまで上がった。悲しい心でまた降りてきた。その時、ごく遠くまで行く彼の鋭い眼は、牧場の叢の影に横たわってる男の姿を、向こうに見出した。彼はクリストフを見知らなかった。向こうの男が彼であるかどうか、知る術はなかった。男はこちらに背中を向け、頭を半ば草の中に埋めていた。シウルツは牧場の周囲の道をうろつきながら、胸を躍らせていた。

「彼だ……いや彼じゃない……。」

呼びかけることもなしかねた。ふといいことを思いついた。彼はクリストフの歌曲の最初の句を歌いだした。

起てよ、振り起てよかし……

クリストフは水から出た魚のように飛び上がって、その続きを大声に歌った。うれしげにふり向いた。真赤まっかな顔をして、髪には草がついていた。二人はたがいにも名前を呼び合つて、両方から駆け寄つた。シユルツは道の溝みぞをまたぎ越し、クリストフは柵さくを飛び越した。二人は心をこめて握手をし、大声に話したり笑つたりしながら、いっしょに家へ帰つてきた。老人は自分の失策を話した。クリストフは一瞬間前では、新たにシユルツに会いに行かないで、そのまま去つてしまおうと考えていたが、すぐに老人の誠実親切な魂を感じて、彼を愛しだした。家に着くまでにはもう、二人は種々なことをたがいにうち明けていた。家へはいると、クンツがいた。彼はシユルツがクリストフを捜しに出かけたことを聞いて、落ち着き払つて待つていたのである。牛乳入りのコーヒーが出された。しかしクリストフは、町の旅舎で朝食をしたと言つた。シユルツ老人は失望した。この土地でのクリストフの最初の食事が自分の家でなされなかつたことは、彼にとつて真の悲しみだった。それらのつまらない事柄も、彼の愛情深い心にとつては非常に大事なことだった。クリストフはそれを見て取つて、ひそかに面白がり、そしてますます彼を好きになつた。彼を慰め

んがために、二度朝食をしたいほど空腹だと言った。そしてそれを実際に証明した。

不快な気持はことごとく彼の頭から去った。彼はほんとうの友人らの間にある心地がし、生き返った気がした。旅のことを、苦にが々しい事柄を、滑こつ稽けい化して語った。休暇を得た学生のようなふうだった。シュルツは晴れやかな様子で、彼をじっと見守り、心から笑っていた。

ひそかな糸で三人を結びつけていたところのもの、すなわちクリストフの音楽に、話はやがて転じていった。シュルツは、クリストフが自分の作品を少しひくところを聞きたくてたまらなかつたが、しかしそれを頼みかねていた。クリストフは話しながら、室内を大お股おまたに歩いていった。彼が開いたピアノのそばを通りかかると、シュルツはその足つきをうかがった。彼がそこに立ち止まるようにと願った。クンツも同じ思いだった。二人は心を躍らせた。見ると、彼はなお話しつづけながら、機械的にピアノの腰掛にすわり、それから、その楽器へは眼もやらずに、ふと鍵キーの上に手を動かした。シュルツは期待していたので、クリストフが少し琵琶アルペジオ音を奏すると、すぐにその音に心を奪われてしまった。彼はなお話しながら、和音をひきつづけた。それから、楽句全体をひいた。するともう彼は口をつぐんで、ほんとうに演奏しだした。二人の老人は、賢い狡こつ猾かつなうれしげな一瞥べつをか

わした。

「これを知っていますか。」とクリストフは自分の歌曲の一つをひきながら尋ねた。

「知っていますとも。」とシユルツは大喜びをして言った。

クリストフはなお演奏をやめないで、半ばふり返りながら言った。

「ね、このピアノはあまり上等ではありませんね。」

老人はひどく恐縮した。彼は詫^わびた。

「古物です。」と彼はつましく言った、「私と同じです。」

クリストフはすっかり向き返り、自分の老衰について許しを乞^こうてるような老人をなぐめ、笑いながらその両手をとった。彼はその誠実な眼を見守った。

「なに、あなたは、」と彼は言った、「あなたは僕より若いですよ。」

シユルツはうちとけた笑いをして、自分の老体や疾^{しっぺい}病^{びょう}のことを話した。

「いやいや、」とクリストフは言った、「そんなことじゃない。僕は真^ま面^め目に言ってるんです。ほんとうでしょう、ねえクンツ。」

（彼はもう「さん」という敬語を省いていた。）

クンツはある限り力をこめてそれに賛成した。

シユルツは自分のことと古いピアノとを結びつけようとした。

「まだごくいい音が出ます。」と彼はおぼろげに言った。

そして彼は鍵キにさわった——ピアノの中間部の、幾つかの音を、半オクターヴばかりかなり鮮あややかに。クリストフはその楽器が彼にとっては旧友であることを悟り、やさしく言った——シユルツの眼を考えながら。

「そうです、まだきれいな眼をもっていますね。」

シユルツの顔は輝いた。彼は自分の古いピアノをやたらにほめ始めた。しかしやがて黙った。クリストフがまたひきだしたからである。歌曲が相次いでひかれた。クリストフは低い声で歌っていた。シユルツは眼をうるませながら、彼の動作を一々見守っていた。クントフは両手を腹の上に組み合わせて、よく聞き取るために眼をつぶっていた。時々クリストフは、晴れやかな顔をして、二人の老人の方をふり返った。二人は恍惚こうこつとしていた。彼は無邪気な感激の様子で言っていたが、二人には笑う気も起こらなかった。

「ねえ、いいでしょう……。そしてこれは、どう思います……。それから、これは……。これはいちばんりっぱです……。——さあ、ぞっとするようなものを、——ひいてあげよう

……。」

彼が夢幻的な一曲をひき終わつた時、掛時計の杜鵑ほととぎすが鳴きだした。クリストフは飛び上がって怒鳴り声を立てた。クンツはびっくり我れに返つて、驚いた大きな眼玉を動かした。シユルツにも、最初は訳がわからなかつた。それから、クリストフが挨拶あいさつをしてる鳥に拳固げんこをさしつけ、この馬鹿者を、この腹声の化け物ばけものを、もって行つちまえと怒鳴つてるのを見た時、彼は生涯初めて、その音が實際たまらないものであることを感じた。そして椅子いすをもつていつて、その邪魔物を取りはずすために上に登ろうとした。しかし彼は落ちかかつた。クンツは彼がまた椅子に登ろうとするのをとめた。彼はザロメを呼んだ。彼女はいつもものとおりにゆっくりやつて来て、クリストフが我慢をしかねて自分で取りはずした掛時計を、腕に渡されるのを見て、呆氣あっけに取られた。

「これをどうせよとおつしやるんですか。」と彼女は尋ねた。

「勝手にするがいい。もつてゆけ。もう二度と見せるな。」クリストフと同じく短氣にシユルツは言つた。

彼はその厭いやな音をどうしてこう長く我慢できたかみずから怪しんでいた。

ザロメは確かに皆は気が狂つたのだと思つた。

音楽はまた始まつた。幾時間かたつた。ザロメがやつて来て、午餐ごさんの支度したくができたこと

を知らした。シユルツは彼女を黙らした。彼女は十分後にまたやって来、それからふたたび、十分後にまたやって来た。こんどは、ひどく怒っていた。癩癩かんしゃくを起こしながら、しかも平気なふうを装よそおおうとつとめながら、室のまん中につつ立った。シユルツが絶望的な身振りをしたのにも構わず、らっぱのような声で尋ねた。

——皆様は、冷たい食事と熱い食事と、どちらを召し上がりたいのであるか。彼女の方は、どちらでも構わない。お指図を待つてるばかりである。

シユルツはそのやかましい小言こごとに当惑して、彼女をひどくやつつけてやりたかった。しかしクリストフは笑い出した。クンツもその真似まねをした。そしてシユルツもついに同じく笑い出した。ザロメはその結果に満足して、あたかも後悔してゐる人民どもを許してやる女王のような様子で、踵くびすをめぐらして出て行つた。

「これは元気な女だ！」とクリストフは言いながらピアノから立ち上がった。「彼女の言うところはもつともだ。演奏中にはいつて来る聴衆ぐらいたまらないものはない。」

彼らは食卓についた。非常に嵩かさの多い滋養に富んだ食事であった。シユルツがザロメの自負心をおだてたのだつた。彼女は何か口実さえあれば自分の腕前を見せたがつていた。そしてその口実を作り出す機会をのがさなかつた。二人の老人は非常に健啖けんたんだつた。ク

ンツは食卓につくと別人の感があった。太陽のように輝き出すのだった。料理屋の看板にもなり得るほどだった。シユルツもまたそれに劣らず御馳走ごちそうには敏感だった。しかし不健康のためにいくらか控え目にしなければならなかった。実を言えば、しばしばそれを忘れることがあった。そしてひどい報いを受けた。そういう時彼は愚痴をこぼさなかった。病気であるとしても、少なくともその原因を知っていたのである。ところで彼には、クンツと同じく、親から子へ代々伝えきった料理法があった。ザロメがいつも通人らのために腕をふるった。しかるにこんどは、彼女はただ一つの献立表の中に、自分の得意な料理をすべてぶち込んでしまおうと工夫した。それは、少しも悪化していない真正なあの忘るべからざるライン料理法を、すっかり並べたてたようなものだった。あらゆる草かおの香り、濃いソース、実質に富んだポタージュ、模範的なスープ肉、すばらしい鯉こい、漬け菜、鷺がらよ鳥、手製の菓子、茴ういぎよう香とキメンとのはいってるパン、などがあった。クリストフは非常に喜んで、口いっぱい頬張りながら、餓鬼のように食べた。鷺鳥一匹をも食いつくすほどの父や祖父から、たいへんな能力を受け継いでいた。それにまた彼は、パンとチーズとで一週間も暮らすことができるとともに、機会がくれは腹の裂けるほど食べることもできるのであった。シユルツは懇切なまた儀式ばった様子をして、彼をやさしい眼つきで見

守り、ライン産の葡萄酒ぶどうしゆを盛んについでやった。クンツは赤い顔色になりながら、彼をいい食い友だちだと思っていた。ザロメの広い顔は、満足げに笑えみを浮かべていた。――最初彼女は、クリストフがやって来たのを見た時、当てが違ったような気がした。シユルツが前もってあまり吹ふい聴ちようしていたものだから、彼女は彼のことを、閣下ともいうべき顔つきをしりっぱな肩書になつた人だろうと、想像していた。そして彼を見ると、驚きの声を発せずにはいられなかつた。

「こんな人か。」

しかし食卓で、クリストフは彼女の眞ひい心いきを得ることができた。彼女はかつて、自分の腕前をそんなに称美してくれる人に会つたことがなかつた。彼女は料理場へもどつてもゆかないで、敷居のところに立ち止まつて、クリストフをながめていた。クリストフは口を休めずに食べながら、盛んな冗談ばかり言つていた。彼女は腰に手をつけて、大笑いをしていた。皆愉快だつた。彼らの幸福のうちには、ただ一つの黒点しかなかつた。ポットベチミツトがないことだつた。彼らはしばしばそのことをくり返し言つた。

「ああ、彼がいたら！ 食べるのは彼に限る。飲むのは彼に限る。歌うのは彼に限る。」
 彼等は贅辞をやめなかつた。

「クリストフに彼の歌を聞かせることができたら！……いやたぶんできるだろう。ポットペチミットは夕方帰ってくるかもしれない、遅くとも今夜は……。」

「え、今夜僕はもう遠くに行つてますよ。」とクリストフは言った。

シユルツの輝いていた顔は曇った。

「なに、遠くに！」と彼は震える声で言った。「いや、発つてはいけません。」

「発つんです。」とクリストフは快活に言った。「夕方また汽車に乗るんです。」

シユルツは落胆した。クリストフを幾晩も泊めるつもりだった。彼は口ごもった。

「いや、いや、そんなことはない！……。」

クンツはくり返した。

「そしてポットペチミットが！」

クリストフは二人をながめた。彼らの善良な懇切な顔に浮かんでる失望の色に、彼は心を動かされた。彼は言った。

「あなた方はほんとにいい人たちだ。……明日の朝発つことにしましょう。それでどうです？」

シユルツは彼の手を取った。

「ああ、よかつた！」と彼は言った。「ありがとう、ありがとう！」

彼は子供のようになつていて、明日はいかにも遠く思われ、考えも及ばないほど遠く思われた。クリストフは今日発ちはしないし、今日じゆうは自分たちのものであり、一晩じゆういつしよにすぎし、同じ屋根の下に眠るのだ。それだけのことをシユルツは思つてゐた。それから先はもうながめたくなかつた。

ふたたび快活になつた。シユルツは突然立ち上がり、おこそかな様子をした。この小さな町と自分のささやかな家とを訪れてきてくれて、無上の喜びと名誉とを得さしてくれた賓客にたいし、感動した仰ぎようさん山やまな祝杯を挙げた。喜ばしい彼の再来、彼の成功、彼の光榮、地上のあらゆる幸福、などを心から希望して、杯を干した。それから、「高尚なる音楽」のためにまた杯を挙げ——さらに、老友のクンツのために——さらに、春のために——そしてまたポットペチミットをも忘れなかつた。クンツの方でも、シユルツと他の数人のために杯を挙げた。そしてクリストフは、それらの祝杯に終わりをつけるために、ザロメさんのために杯を干した。ザロメは真赤まつかになつた。そのあとで彼は、弁士らに返答の余裕を与えないで、よく世に知れてる歌謡を歌つた。二人の老人もいつしよにやりだした。その後でまた他の唄うたを歌い、なお次に、友情と音楽と葡萄酒ぶどうしゆとに関するものを、三部合

唱で歌った。響きわたる笑声とたえず触れ合う杯の音とで、すべてが伴奏された。

彼らが食卓から立ち上がったのは、三時半であった。皆少しけだるくなっていた。クンツはひしかけいす肱掛椅子にぐったりとすわった。ちよつと一眠りしたいほどだった。シユルツは午前中の興奮とまた祝杯の酔いのために、足がよろよろしていた。二人とも、クリストフがまたピアノについて幾時間も弹奏することを、希望していた。しかしきわめて快活軽敏なこのひどい青年は、ピアノで三、四の和音をひいてから、にわかふたにその蓋を閉じ、窓から外をながめて、夕食までの間に一回りしてきてもよいかと尋ねた。野の景色が彼をひきつけたのだった。クンツはあまり気乗りの様子を見せなかった。しかしシユルツは即座に、それをいい考えだと思ひ、シエーン・ブッフ・ワルデルの遊歩場を客に見せなければいけないと思つた。クンツはちよつと顔をしかめた。しかし別に逆らいはしないで、いっしよに立ち上がった。彼もやはりシユルツと同様に、土地の美景をクリストフに見せたかった。彼らは出かけた。クリストフはシユルツの腕をとつて、老人の気ままな足取りよりも少し早く歩かせた。クンツは汗をふきながらあとにつづいた。彼らは快活にしゃべっていた。人々は門口に立つて彼らを通るのをながめ、シユルツ教授の若返つてる様子を認めた。彼らは町から出ると、牧場を横切つた。クンツは暑いのをこぼしていた。クリストフは思い

やりもなく、空気がさわやかだと言っていた。二人の老人らにとって仕合わせなことには、皆はたえず立ち止まっては議論をし、譜のうちには道の長さが忘れられた。森の中にはいった。シユルツはゲーテとメーリケとの詩句を誦した。クリストフは詩がたいへん好きだった。しかしその詩を一句も聞き止めることができなかつた。彼は耳を傾けながらぼんやりした夢想到に身を任せ、夢想の中で言葉は音楽に代わつて、その言葉をすっかり忘れてしまつた。彼はシユルツの記憶に感嘆した。一年の大部分は室の中に閉じこもり、ほとんど一生の間田舎の町に閉じこもつてゐる、不具に近いこの病身な老人の元氣——それからまた年若くて、芸術運動の中心地に名声を馳せ、そして各地の演奏のためにヨーロッパじゅうを歩き回り、しかも何物にも興味を覚えず、何物をも知ろうとしないハスレル、両者の間にはいかに大なる差異があることぞ！ シユルツは単に、クリストフが知つてゐる現在の芸術界の諸相に通じてるばかりでなく、クリストフが聞いたこともないような過去の音楽家や外国の音楽家などについても、豊富な知識をもつていた。彼の記憶は深い天水桶のようであつて、あらゆる清い天水が蓄えられていた。クリストフはあきずにその水をくみ出した。そしてシユルツはクリストフの興味を見てうれしがつた。彼は時々、慇懃な聞き手や従順な学生などに出会うこともあつた。しかしながら、息づまるまでにあふれてくる感激の

情を分かち得るような若い熱烈な心を見出すことは、かつてなかったのである。

彼らが最もうち解けている最中に、老人はおり悪しく、ブラームスにたいする賛辞を述べた。クリストフは冷やかな憤りにとらわれた。彼はシュルツの腕を放して、なぐりつけるような調子で、ブラームスを愛する者は自分の味方であり得ないと言った。彼らの喜びはそのために冷水を注がれた。シュルツは議論するにはあまりに気おくれがしていたし、嘘をつくにはあまりに正直だったので、弁解しようとして口ごもっていた。しかしクリストフは一言で彼をさえぎった。

「たくさんです！」

その鋭利な調子は返答を許さなかった。冷たい沈黙がきた。彼らは歩きつづけた。二人の老人は顔をも見合わかねた。クンツは咳払いをしてから、また話の糸を結ぼうと試み、森や天気のことを言おうとした。しかしクリストフは不機嫌な様子をして、話を進めてゆこうともせず、一言二言の答えをするばかりだった。クンツはこの方で反響を見出さないのので、沈黙を破るために、シュルツと話そうとつとめた。しかしシュルツは喉をつまらして、口をきくことができなかった。クリストフはそれを横目で見やって、笑いたくなかった。彼はもう許してやっていた。彼は決して真面目に怒るつもりではなかった。この憐

れな老人を悲しませるのは畜生にも等しいときえ思っていた。しかし彼は自分の力を濫用したのであって、また、前言を翻す様子をしたくなかったのである。彼らは森を出るまでそのままの状態だった。聞こえるものはただ、当惑してる二人の老人の引きずるような足音ばかりだった。クリストフは口笛を吹いて、二人の方を見ないふうをしていた。とにかく、彼はたまらなくなつた。彼は放笑ふきだして、シュルツの方へ振り向き、丈夫な手でその両腕をつかんだ。

「ああ、シュルツ！」と彼はやさしげにその顔をながめながら言った、「いいですね、いいですね!……!」

彼は景色と天気とのことを言ってるのだった。しかし笑ってる彼の眼はこう言ってるがようだった。

「あなたはいいい人だ。僕は乱暴者だ。勘弁してください。僕はあなたが大好きだ。」

老人の心は解けた。日食のあとにまた太陽が出たようなものだった。一瞬間待たなければ言葉を発することができなかつた。クリストフはまた彼の腕をとって、このうえもなく親しげに話した。夢中になつたあまり足を早めて、二人の連れをへとへとにならしてゐることは気にも止めなかつた。シュルツは不平をこぼさなかつた。疲れをさえ気づかない

ほど満足していた。今日一日の不用心な行ないのために、やがてひどい目に会うことも知ってはいた。しかしこう考えていた。

「明日にとつては災難だ！ けれど彼が発^たつてから、身体を休める際は十分あるだろう。」

しかしクンツは、それほど興奮してはいないで、かわいそうな顔つきをして十五、六歩あとからつづいていた。クリストフはようやくそれに気づいた。彼は恐縮して詫^わびた。そして牧場の白楊樹^{はくようじゆ}の影に寝そべろうと言いだした。シウルツはもとより承知した。それが自分の気管支炎にさわるかどうかも考えなかった。幸いにも、クンツは彼に代わってそのことを考えてくれた。もしくは少なくとも、汗びっしりになってる自分の身体を牧場の冷気にさらさないために、それを口実とした。次の停車場から汽車に乗って町へ帰ろうと提議した。それに一決された。彼らは疲れていたけれども、乗りおくれないうちに足を早めなければならなかった。そしてちょうど汽車がはいつてくる時に停車場へ着いた。

彼らの姿を見て、一人のでつぷりした男が、車室の入口に飛び出してき、狂人のように両腕を振り動かしながら、あらゆる肩書をくつつけてシウルツとクンツの名前を吼^ほえた。シウルツとクンツとの方でもまた、両腕を競り叫びながらそれに答えた。二人はその大男の車室へ駆けつけ、大男の方でも、他の乗客らをつきのけながら駆け寄ってきた。ク

リストフは呆氣あつけに取られて、二人をあとから追っかけてゆきながら尋ねた。

「なんですか。」

二人は雀躍こおどりしながら叫んでいた。

「ポットペチミットだ！」

その名前は、彼には大した感じを与えなかった。彼は午餐のおりの祝杯のことを忘れていた。ポットペチミットは客車の入口に立ち、シユルツとクンツとは踏段の上に立って、やかましくしゃべりたてていた。彼らはその幸運に感激していた。皆が汽車に乗ると、汽車はすぐに出た。シユルツは紹介してやった。ポットペチミットはにわか石のように顔を引きしめ、棒杭ぼうくわいのように堅くなって、お辞儀をし、一通りの挨拶あいさつを済ますや否や、クリストフの手に飛びついて、それをもぎ取るうとでもするように五、六度打ち振り、そして叫び出した。クリストフはその叫び声のうちに、彼がこの奇遇を神と運命とに感謝していることを見て取った。それでも彼はすぐあとで、腿ももをたたきながら、ちようど先生の御到着の通りに、町から出かけていた——かつて町から出かけたことのない自分が出かけていた——不運を、ののしらずにはいなかった。シユルツの電報は、その朝汽車が出て一時間後にしか、彼の手に渡らなかった。電報が着いた時彼は眠っていて、人々は彼を起こさ

ない方がいいと思つたのだつた。それで彼は朝じゆう、旅館の者らにたいして怒りたつていた。今もまだ怒りたつていた。彼は患者筋の人々を追い歸し、用件の面会を断わり、歸りを急いで手当たり次第の汽車に乗つた。しかしこのやくざな汽車は、本線と連絡していなかった。ポットペチミットはある駅で、三時間も待たなければならなかった。そこで彼は、知つてる限りの憤慨の言葉を言い尽くし、自分と同じように待たされてる乗客やまた駅夫などに、幾度となく自分の不運を物語つた。ついに汽車が出た。彼はもう間に合わないかと恐れていた。……しかし、ありがたいことには、ありがたいことには！……

彼はふたたびクリストフの手を取つて、毛深い指のある大きな手のひらの中で、それをなで回した。彼は驚くほどでつぶり太つていて、またその割合に背も高かつた。四角な頭、短く刈つた褐かつしよく色の髪、痘痕あはたのある無髻むげんの顔、太い眼、太い鼻、太い唇くちびる、二重頤あご、短い首、恐ろしく大きな背中、樽たるのような腹、胴体から分かれ出てる腕、馬鹿に大きな手足、食物とビールとを取り過ぎて変形した巨大な肉塊、それはあたかも、煙草の罐かんのような人間だつた。バヴァリアの町に行くと、そういう人間が通りをぶらついていることがある。籠かごの中の鶏に施すのと同じような飽食の方法によってでき上がった一種の人種、その秘訣ひけつを彼らは保持しているのである。ポットペチミットは喜びと暑さとのために、バタの塊かたまりみた

いに光っていた。そして自分の開いてる膝ひざに、あるいは隣りの者の膝の上に、両の手を置いて、飽かずに口をききながら、弩いしゆみのような強さで子音を空中にころがしていた。時々大笑いをしては、全身を揺ぶった。頭を後ろに反り返らして、口を開き、鼻や喉のどに息をはずませ、胸をつまらしていた。その笑いはシュルツやクントツにも伝わった。二人は笑いの発作が済むと、眼の涙をふきながらクリストフをながめた。あたかも彼に尋ねるがような様子だった。

「ねえ……この男をどう思われますか？」

クリストフはなんとも思つてはいなかった。ただ彼は気味悪く考えていた。

「この化け物ばが俺おれの音楽を歌うのかな。」

一同はシュルツの家へもどった。クリストフはポットペチミットの歌を避けたがつていた。聞かせたくてたまらないでいるポットペチミットがほのめかしても、彼はなんとも言い出さなかった。しかしシュルツとクントツとは、その友を自慢にしたい心でいっぱいだった。仕方がなかったので、クリストフはかなり厭いやいや々ながらピアノについた。彼はこう考えていた。

「このお人よしめが！ どういう目に会うか知らないんだな。用心するがいい。少しも容

赦はしないぞ。」

彼はシユルツに心配をかけるだろうと考え、それが気の毒になった。それでも彼は、このジョン・フォルスタフのような男から自分の音楽が台なしにされるのを我慢するよりは、むしろシユルツに心配をかけたつて構わないと決心した。ところが、シユルツに心配をかけるのを恐れるには及ばなかった。大男はすてきな声で歌った。最初の小節からして、クリストフは驚きの身振りをした。彼から眼を離さなかったシユルツは、身を震わした。クリストフが不満足に思つてると考えたのだった。そして彼がようやく安心したのは、弾ひき進むに従つてクリストフの顔がますます輝いてくるのを見てからだ。彼自身もその喜びの反映を受けて晴れやかになつていった。その楽曲が終わり、自分の歌曲がこんなによく歌われたのをかつて聞いたことがないと叫びながら、クリストフが振り向いた時、シユルツの歓よろこびは、満足してるクリストフの歓びよりも、得意げなポツトペチミットのそれよりも、さらに楽しい深いものだった。なぜなら、二人は自分自身の愉快だけしか感じてはいなかったが、シユルツは二人の友の愉快を感じていたのだから。演奏はなおつづいていった。クリストフは驚嘆していた。この重々しい平凡な男が、どうして自分の歌曲の思想を現わし得るかを、彼は了解できなかったのである。もとより、正確な色合いがすっかり

出てはいなかった。しかし、彼がかつて専門の歌手らに完全に吹き込むことのできなかった、澁刺^{はつらつ}さが熱情が現われていた。彼はポットペチミットをながめ、いぶかっていた。

「ほんとうに感じてるのかしら。」

しかし彼は相手の眼の中に、満足してる驕^{きよう}慢^{まん}心の炎以外に、なんらの炎をも認めなかった。無意識的な一つの力がその重い肉塊を動かしていた。その盲目的な消極的な力は、相手も知らず理由も知らないで戦う軍隊に似ていた。歌曲の精神はその力をとらえ、その力は喜んで服従していた。ただ活動したかったからである。自分一人に任せられると、どうしていいかわからなかったであろう。

クリストフは考えた。宇宙の偉大なる彫刻家はその創造の日において、形のでき上がった被造物の離れ離れの各部を整頓^{せいとん}することには、あまり心を用いなかったに違いない。いっしよに集まっとうまくゆくようにできてるかどうかには頓着^{とんじやく}なく、ともかくも各部をくつつけてみたのだ。それで各人は、あらゆる方面から来た断片で作られることになった。そしてまた、同一人が別々な五、六人の中に分散することとなった。頭脳はある者の中にはいり、心は他の者の中にはいり、この魂に適した身体は、また別な者の有となった。楽器は一方にあり、その演奏者は他方にあるようになった。ある者らは、演奏者がな

くて永久に箱に納められてる、みごとなヴァイオリンのようになった。演奏するために作られた者らは、生涯^{みじ}惨めな楽器で満足しなければならなくなった。とこういうふうには彼が考えたのは、かつて一ページの音楽をも自分がうまく歌い得ないことを憤慨していたあまりでもあつた。彼は調子はずれの声をもつていて、自分の歌を聞くと厭^{いや}にならざるを得なかつた。

やがてポットペチミットは自分の成功に酔つて、クリストフの歌曲に「表情をつけ」始めた。言い換えれば、クリストフの表情を自分の表情と置き換え始めた。クリストフはもとより、そのために自分の音楽がよくなつたとは思わなかつた。彼の顔は曇つてきた。シユルツはそれに気づいた。彼には批評眼がなく、また友人らに感心してばかりいたので、みずからポットペチミットの悪趣味を認めることはできなかつた。しかしクリストフにたいする愛情のために、その青年の考えの最も隠微な色合いをも見て取ることができた。彼はもはや自分のうちにはいないで、クリストフのうちにいた。そして彼もまた、ポットペチミットの誇張に厭な気がした。その危険な傾向から引き止めてやろうと工夫した。けれどポットペチミットの口をつぐませることは容易でなかつた。彼はクリストフの曲を皆歌いつくすと、クリストフがその名前を聞いただけでもすでに豪^{やま}猪^{あらし}のように髪を逆立て

た、凡庸ほんよう作家の力作を歌おうとしたので、シユルツはそれを止めさせるためにどんなに苦心したかわからなかった。

幸いにも晚餐の知らせがあつたので、ポットペチミツトは口をつぐんだ。そして彼の腕前を示すべき別な戦いとなつた。こんどは彼の独りひと舞台だった。クリストフは午餐の時に手柄を立ててやや食い疲れていたので、もう少しも彼と争おうとしなかった。

夜はふけていった。食卓のまわりにすわつて三人の老人連中は、クリストフを見守つていた。彼らは彼の言葉を一々のみ下していた。かくて現在、この辺鄙へんぴな小さな町で、今日まで一面識もなかった老人たちに取り囲まれ、ほとんど家族以上に彼らと親密にしているということが、クリストフにはきわめて不思議に思われた。世の中に自分の思想が出会う未知の友のいることを想像し得るとしたならば、それは芸術家にとっていかに仕合わせなことだろう——そのために芸術家の心はどんなにか温めあたられ、力はどんなに増すだろう、とクリストフは考えた。……しかししたいはそういうことは起こらない。人は強く感ずれば感ずるほど、そしてそれを言いたければ言いたいほど、ますます感じてることを言うのを恐れながら、いつまでも一人ぼっちであつて、一人ぼっちで死んでゆく。阿諛あゆ的な俗人らはなんの苦もなくしゃべりたてる。最も深く愛してる人々は、口を開いてそして愛し

てると言うためには、ひどく気持の苦勞をせざるを得ない。それゆえに、あえて言い得る人々には感謝しなければいけない。そういう人々はみずから知らずして、創作家の協力者である。——クリストフは、シュルツ老人にたいする感謝の念を心から覚えた。彼はシュルツ老人と他の二人の仲間とを混同しなかった。シュルツこそこの少数の友人連中の魂であると、彼は感じた。他の二人は、この温情との生きた竈かまどの反映にすぎなかった。彼にたいするクンツとポットペチミットとの友情は、だいぶ異なっていた。クンツは利己主義者だった。愛撫あいぶされる太い猫ねこが感ずるような一種の安逸な満足かまどの情を、音楽から得てるのであった。ポットペチミットは音楽のうちに、驕慢と肉体運動との快樂を見出してるのであった。どちらもクリストフを理解しようとはつとめていなかった。しかしシュルツはまったく自分を忘れていた。彼は愛していたのである。

もう晩おそかった。招かれてる二人の友は夜中に帰っていった。クリストフはシュルツと二人きりになった。彼は言った。

「こんどはあなた一人のためにひきましよう。」

彼はピアノについてひいた——だれか親愛な人がそばにいる時弾ひいてやるようなふうに。彼は自分の新作をひいた。老人は恍惚こうこうとしていた。クリストフのそばにすわって眼も放

さず、息を凝らしていた。そしてわずかな幸福も独占することができないで、親切な心のあまり、彼は知らず知らずくり返した（クリストフを少しいらだたせることだったが）。

「ああ、クンツが帰ったのが残念だ！」

一時間たった。クリストフはやはりひきつづけていた。二人は言葉をかきまななかつた。クリストフが弾き終わっても、どちらからもなんとも言わなかつた。すべてが沈黙していた。家も街路も眠っていた。クリストフは振り向いた。老人の泣いてるのが眼に止まった。彼は立ち上がって、そのそばに行つて抱擁してやった。二人は夜の静けさの中で、声低く話した。掛時計の秒を刻む鈍い音が、隣りの室で響いていた。シユルツは両手を握り合わせ、身体を前にかがめて、小声で話した。クリストフに尋ねられて、身の上や悲しい事柄を物語つた。そしてたえず、愚痴を並べることを恐れては、こう言わざるを得なかつた。

「私が悪かつた……私は不平を言う権利はない……私は皆からたいへん親切にしてもらつた……。」

そして彼は実際不平を言つてゐるのではなかつた。それはただ、孤独な生活のつましい物語から出てくる、無意識な憂愁にすぎなかつた。最も悲しい刹那には、ごく漠然としせつなた感傷的な理想主義の信念告白を交えた。クリストフはそれに悩まされたが、しかし抗弁

するのも残酷だった。要するにシユルツのうちにあるものは、確固たる信念よりもむしろ、信ぜんとする熱烈な欲求——不確かな希望であつた。彼はそれに、浮標へすがるようにすがりついていた。彼はクリストフの眼の中にその確認を求めていた。クリストフは、切実な信頼の念をもつて自分を見入り、自分の答えを懇願し——こう答えてくれと指図して、友の眼の訴えを心に聞いた。すると彼は、落ち着いた信念と力との言葉を言つてやった。老人はそれを待つていて、それから慰謝を受けた。老人と青年とは、間を隔てる年月をうち忘れた。二人はたがいに接近して、愛し合い助け合う同年輩の兄弟のようであつた。弱い方は強い方に支持を求めていた。老人は青年の魂の中に避難していた。

彼らは十二時過ぎに別れた。クリストフは乗つて来たのと同じ列車に乗るために、早く起きなければならなかつた。それで服をぬぎながらぐずつていなかつた。老人は客の室を、幾月もの滞在を強いるかのようにしつらえていた。花瓶かびんにいけた薔薇ばらと一枝の月桂げっけい樹じゆとを、テーブルの上にのせておいた。机の上には真新しい吸取紙を備えておいた。朝のうちに、豎形たてがたピアノを運ばせておいた。自分の最も大事な最も好きな書物を数冊選んで、枕頭ちんとうの小棚こだなにのせておいた。どんな些細ささいなものも、愛情をこめて考えなかつたものはない。しかしそれは徒勞に終わった。クリストフは何にも見なかつた。彼は寢台に飛び

のつて、すぐにぐっすり寝入った。

シユルツは眠らなかつた。自分の受けたあらゆる喜びや、友の出発について今から感じてるあらゆる悲しみなどを、一時に考え出していた。二人で言いかわした言葉をもた頭に浮かべていた。自分の寝台のよせかけてある壁の彼方に、すぐ近くに、親愛なるクリストフが眠つてることを、考えていた。疲れはててがっかりしぬいていた。散歩の間に冷えて、病気が再発しかけてると感じていた。しかし彼はただ一つのことしか思つてはいなかつた。「彼が発つてしまってもちこたえさえすれば！」

そして咳き込むと、クリストフを起こしはすまいかとびくびくしていた。彼は神にたいする感謝の念で、いっぱいになつていて、老シメオンの今や逝せ給え（訳者添、今や僕（しもべ）を安全に世を逝（さら）せ給え）という聖歌に基づいて、詩を作りはじめた。……作つた詩を書くために、汗まみれになつて起き上がった。そして長くテーブルにすわつて、ていねいにそれを書き直し、愛情のあふれた捧呈文をつけ、下部に署名をし、日付と時間とを書き入れた。それから、震えが出てまた床についたが、もう夜通し身体が温まらなかつた。

曙がきた。シユルツは残り惜しい心持で、前日の曙のことを考えた。しかしそういう考

えで、残つてゐる最後の幸福の瞬間を乱すことを、みずから責めた。翌日になつたらただいま去りつつある時間を愛惜するようになるだろうと、よく知っていた。彼はこの時間を少しも無駄むだに失うまいとつとめた。彼は隣室のわずかな物音にも耳を澄ました。しかしクリストフは身動きもしなかつた。彼は寝た通りの場所にまだ横たわつていて、少しも身を動かしてはいなかつた。六時半が鳴つた。彼はまだ眠つていた。彼に汽車を乗り遅らせることは訳もないことだつた。そしてきつと彼はそれを笑つて済ますに違ひなかつた。しかし老人は小心翼翼としていて、友のことを承諾も得ずに勝手にきめることはできなかつた。彼はいたずらにくり返し言つた。

「私のせいじゃない。私にはなんの責せめもあるまい。ただ知らせないだけでいいのだ。そして彼がおりよく眼を覚さまさなかつたら、私はも一日彼といつしよに過とごせるのだ。」

しかしこうみずから答え返した。

「いや、私にはその権利がない。」

そして、起おこしに行かなければならないと思つた。その扉とびらをたたいた。すぐにはクリストフの耳にはいらなかつた。なおたたきつづけなければならなかつた。それが老人にはつらかつた。彼は考えていた。

「ああ、なんとよく眠ってることだろう！ お午^{ひる}までも寝^{ひる}つづけるかもしれない……。」
 ついに、壁の向こうから、クリストフの快活な声が答えた。彼は時間を知ると驚きの声を挙げた。室の中を駆け回り、騒々しく身支度をし、切れ切れの節^{ふし}を歌いながら、壁越しに親しくシユルツを呼びかけ、冗談を言ってるのが聞こえた。老人は悲しくなつてはいたが、それに笑わせられた。扉が開いた。彼はうれしげな顔をし、休らつたさわやかな様子で現われた。老人に心を痛ましめてることはまったく考えていなかった。実際は少しも急いで帰る必要はなかった。なお数日滞在してもいっこう差しつかえなかった。そうしたらシユルツはどんなに喜んだであろう！ しかしクリストフはそれをはつきり思いつき得なかつた。それにまた、彼は老人にたいしていかなる愛情をいだいていたにせよ、出発する方がずつと気楽だつた。たえず話しつづけた一日で、絶望的な愛情をもつてすがりついてくる人々で、すつかり疲^はらされていた。そのうへ彼は年若くて、再会の期があることと思つていた。何も世界の果^はへ出かけて行くのではなかつた。——老人の方では、世界の果よりもつと遠くへ自分がやがて行くことを知つていた。そして彼は永久の見納めにクリストフをながめていた。

彼は極度に疲れていたにもかかわらず、停車場までついて来た。細かな冷たい糠^{ぬか}雨^{あめ}が

音もなく落ちていた。停車場でクリストフは、金入れを開きながら、家までの汽車賃が不足していることに気づいた。シユルツが喜んで貸してくれるだろうとは承知していた。しかしそれを頼みたくなかった。……なぜか？ 何かの世話をする機会を——幸福を、愛してくれる人になぜ与えないのか？……彼はなんとなくそれを欲しなかった。おそらく自尊心からであろう。彼は途中のある駅までの切符を買った。残りの道は歩いて行こうと考えていた。

発車の時刻が鳴った。客車の踏み段の上で、二人は抱擁し合った。シユルツはクリストフの手に、夜中に書いた詩をそつと握らした。彼は車室の下のプラットホームに残った。別れの瞬間が長引く時よく起こるように、二人はもう何にも言うことがなかった。しかしシユルツの眼は話しつづけていた。それは汽車が出るまでクリストフの顔から離れなかった。

汽車は線路の曲がり角で見えなくなつた。シユルツはまた一人きりになつた。彼は泥^{ねかる}の並木道を通つて帰つた。足を引きずつていた。疲れと寒さと雨の日の悲しさをにわかを感じた。家までもどるのに、そして階段を上るのに、たいへん骨が折れた。自分の室にはいるや否や、息切れと咳^{せき}との発作に襲われた。ザロメが介抱にやって来た。無意識

にうめきながらも、その最中に彼はくり返していた。

「実に仕合わせだった！……今まで起こらなかったのは実に仕合わせだった！……」

彼はひどく悪いような気がした。床についた。ザロメは医者を呼びに行つた。寢床の中で彼の身体は、布片のようになぐつたり放り出されていった。身動きもできないほどだった。ただその胸だけが、鞆ふいしのようにあえいでいた。頭は重苦しくて熱ばんでいた。彼は前日の各瞬間をそれからそれへと思ひ生かして、その一日を送つた。思ひ生かしては苦しい気持ちになり、また次には、あれほどの幸福のあとで愚痴をこぼすのをみずから責めた。彼は手を振り合わせ、心は愛に満ちて、神に感謝した。

クリストフは、この一日のために気が晴れ晴れとし、あとに残してきた愛情のために自信の念が増してきて、故郷へ帰つていった。切符の終わりの駅に達すると、快活に汽車から降りて、徒歩で進んでいった。約六十キロメートルばかり歩かなければならなかった。別に急ぐこともないので、小学生徒のようにぶらぶらやっていった。四月のことだった。野原は大して景色づいてもいなかった。黒い木の枝の先には、皺しわ寄つた小さな手のように葉が開いていた。数本の林檎りんごの樹には花が咲いていた。細く伸びた野薔薇のばらが、籬まがきのほとり

に微笑^{ほほえ}んでいた。葉の落ちつくして森には、細かい淡緑の新芽^もが萌え出して、その向こうに見える小さな丘の頂には、鎗^{やり}先に貫いた戦利品のように、ロマン式の古城がそびえていた。ごくやさしい青色の空には、まつ黒な雲が飛んでいた。陰影が春めいた野の面を駆けつていった。にわか雨が通り過ぎた。そして明るい太陽がまた現われ、小鳥が歌いだした。

クリストフは、先刻からゴットフリート叔父^{おじ}のことを考えてたのに気づいた。彼はこの憐^{あわ}れな叔父のことをもう長い間考えたことがなかった。そして、今執拗^{しつよう}にその思い出が浮かんでくるのはなぜだかを怪しんだ。澄み切った運河に沿って白楊樹^{はくようじゆ}の並木道をたどりながら、その思い出がしきりに浮かんできた。あまりにその面影が眼先にちらつくので、大きな壁の角が曲がりつたりすると、叔父が向こうからやって来はすまいか、などと思われた。

空は曇った。霰^{あられ}交りの激しい驟^{しゅう}雨が降りだして、遠くで笛が鳴った。クリストフはあの村落に近づいていた。人家の薔薇色^{ばらいろ}の正面や赤い屋根などが、木の茂みの間に見えていた。彼は足を早めて、最初の家の庇^{ひさし}の下に身を避けた。霰^{すきま}が隙間もなく落ちていた。あたかも鉛の粒のように、屋根に音をたて往来にはね返っていた。轍^{わだち}には雨水がいつぱいにな

つて流れていた。光り輝く恐ろしい帯を広げたような虹が、花の咲いた果樹園から横ざまに、青黒い雲の上にかかつていた。

戸の入口に一人の若い娘が、立ちながら編み物をしていた。彼女は親しく、クリストフにはいれと言った。彼はその勧めに従った。はいって行くとその室は、台所と食堂と寢室とに兼用されてるものだった。奥には盛んな火の上に鍋がかかつていた。野菜を選び分けていた百姓女が、クリストフに挨拶をして、火のそばに寄って服を乾かせと言った。若い娘は葡萄酒の瓶を取って来て、彼に飲ましてくれた。そしてテーブルの向こう側にすわって、編み物をつづけながら二人の子供に気を配っていた。子供たちは、田舎でどろぼうとかえんとつやとか言われている草の穂を、頸につつまみ合って遊んでいた。娘はクリストフと話しました。やがて彼は、彼女が盲目であることに気づいた。彼女は少しも美しくはなかった。頬の赤い、歯の白い、丈夫な腕をした、たくましい娘だったが、顔だけは整っていないかった。多くの盲人に見るような、やや無表情なにこやかな様子をしていた。また盲人通有の癖として、あたかも眼が見えるように事物や人物のことを話した。いい顔色をしていらつしやるとか、今日は野の景色がたいへんいいとか言われると、初めのうちクリストフは惘然として、なんの冗談かと怪しんだ。しかしその盲目の娘と野菜を選び

分けてる女とを、代わる代わる見比べたあとには、それも驚くに当たらないことを知った。二人の女は、どこから来たか、どこを通つて来たかななどと、親しくクリストフに問いかけた。盲目娘はやや大袈裟おおげさにはしやいで、話に口を出していた。道路や野に関するクリストフの観察を、承認したり注釈したりした。もとより彼女の言葉はしばしば的はずれていた。彼女は彼と同様によく眼が見えると思ひ込みたがってらしかつた。

家族の他の人たちが帰つてきた。三十歳ばかりの頑がんじょう丈な農夫とその若い妻とだつた。クリストフは皆と代わる代わる話した。そして晴れゆく空をながめながら、出かける時を待つていた。盲目娘は編み物の針を運びながら、ある唄うたの節ふしを小声で歌つていた。その節は、クリストフに種々の古い事柄を思い起こさせた。

「おや、あなたもそれを知つてゐるんですか。」と彼は言った。

(ゴットフリートがクリストフにそれを昔教えたのであつた。)

彼は続きを低く歌つた。若い娘は笑いだした。彼女は唄の前半を歌い、彼は愉快にそのあとを終わりまで歌つた。彼は立ち上がつて天候を見に行つた。そしてなんの気もなく室の中を隅すみずみ々まで見渡すと、戸棚とだなのそばの角のところに、ある物を見つけてはつとした。それは頭の曲がつた長い杖つえで、粗末な彫刻を施した柄えは、身をかがめてお辞儀してゐる小

な男を現わしていた。クリストフはそれをよく知っていた。昔それで子供心に遊んだことがあった。彼は杖に飛びつき、息つまった声で尋ねた。

「どうして……どうしてこれをおもちですか。」

男は彼をながめて言った。

「友だちが残していったんです、亡なくなった古い友だちが。」

クリストフは叫んだ。

「ゴットフリートですか。」

皆彼の方をふり向きながら尋ねた。

「どうして御存じですか。」

クリストフが、ゴットフリートは自分の叔父おじだと言うと、人々は皆びっくりした。盲目娘は立ち上がった。毛糸の玉が室のなかに入った。彼女は編み物をふみつけながらやって来て、クリストフの手をとってくり返した。

「あなたが甥おいごさんですか。」

皆が一度に口をきいていた。クリストフの方でも尋ねた。

「でもあなた方は、どうして……どうして御存じですか。」

男が答えた。

「ここで死んだんです。」

人々はまた腰をおろした。感動がやや静まると、母親はまた仕事にとりかかりながら、ゴットフリートが数年来立ち寄つてたことを話した。ゴットフリートは行商の行き帰りは、いつもここに足を止めた。最後にやつて来た時には——（今年の七月だった）——たいへん疲れてる様子だった。梱こりをおろしてからも、しばらくは口をきくことができなかった。しかし彼がやつて来る時はいつもそうであるのを見馴みなれていたし、また彼の息が短いことも知っていたので、だれも気にならなかった。彼は愚痴をこぼさなかった。かつて愚痴をこぼしたことがなかった。不快な事柄のうちにも常に満足の種を見出していた。骨の折れる仕事をする時には、晩に寢床についてうれいだろうと考えて、楽しんでいた。苦しい時には、苦しみが去つたらどんなに愉快だろうかと考えていた……。

「でも、いつも満足ばかりしてはいけません。」と善良な婆ばあさんは言い添えた。「なぜかつて言えば、愚痴をこぼさないとだれも憐あわれんではくれませんから。私はいつも愚痴をこぼしてばかりいます……。」

ところで、だれも彼に注意を払わなかった。顔色がいいなどと冗談まで言っていた。そ

してモデスタ——（それは若い盲目娘の名だった）——が、彼の荷物をおろしてやりや
つて来て、若者のようにそんなに歩き回つても疲れないのかと、彼に尋ねた。彼はその答
えとしてただ微笑ほほえんだ。口をきくことができなかつたのである。彼は戸の前の腰掛にすわ
つた。人々はめいめい仕事をしに行った、男たちは野へ、母親は台所へ。モデスタは腰掛
のそばにやつていった。そして戸口にもたれて立ち編み物を手にしながら、ゴットフリー
トと話した。彼は返辞をしなかつた。が彼女は返辞を求めなかつた。彼がこの前来た時か
らの出来事を残らず語つていた。彼は苦しげに息をしていた。口をきこうとつとめてる呼
吸の音が聞こえた。彼女は別に気にもかけないで、彼に言った。

「話さないがいいわ。身体をお休めなさいよ。あとで話さないよ。……こんなに疲れる
つてことがあるかしらん……。」

すると彼はもう口をきかなかつた。彼女は彼が聞いてくれることと思つて、また話を
つづけた。彼はほつと息をついて、それからひっそりとなつた。しばらくたつて母親が出
てみると、モデスタはなお話しつづけており、ゴットフリートは頭を反り返らして天を仰
ぎ、腰掛の上に身動きもしないでいた。先刻からモデスタは死人を相手に話してるのであ
つた。その時になつて彼女にもようやくわかつた、この憐れな人は、死ぬ前に二、三言い

おうとしたが、それができなかつたので、悲しい微笑を浮かべながらあきらめて、夏の夕の平和のうちに眼を閉じたのである……。

雨はもうやんでいた。嫁は厩うまやへ行つた。息子は鶴つる嘴はしを取つて、泥どろのつまつた表の溝みぞをさらえた。モデスタは話の初めから立ち去つていた。クリストフは母親と二人きり室に残つて、感に打たれて黙つていた。老婆ろうばは多少おしやべりで、長い沈黙に堪えることができなかった。そしてゴットフリートとの交わりを残らず語り出した。それはごく遠い昔のことだつた。彼女がまだうら若いころ、ゴットフリートは彼女に恋していた。彼はそれをうち明け得なかつた。しかし人々はそれを彼にからかつていた。彼女は彼を嘲ちやうろう弄うしていた。皆が彼を嘲弄ちやうろうしていた。——（どこでも彼は嘲弄されるのが常だつたのだ。）——それでもゴットフリートは、忠実に毎年やつて来た。人々から嘲弄されるのも、彼女から少しも愛せられないのも、彼女が他の男と結婚して幸福に暮らしてるのも、皆当然だと彼は考えていた。彼女はあまりに幸福だつた。自分の幸福をあまりに自慢にしていた。そして不幸が起こつた。良人おとこが突然死んだ。次には娘が——健やかなしつかりした美しい娘で、すべての人から感心されていて、土地一番の豪農の息子と結婚することになつていたのであるが、ある災難のために失明してしまつた。ある日彼女は、裏手の大きな梨なしの木に登つ

て、梨をつみ取つていたところが、梯子はしごが滑りすべり倒れた。彼女は落ちるはずみに、一本の折れ枝へ眼の近くをひどくぶつつけた。最初のうちはだれも皆、ちよつとした傷あとで済むだろうと思つていた。しかしそれ以来彼女は、額の激しい痛みからたえず苦しめられた。片方の眼が曇つてきて、次に他方の眼も曇つた。いくら手当をしても駄目だめだった。もとより縁談は破れた。約婚の男はなんらの理由も言わずに姿を隠した。そして、一月以前までは彼女と一踊りするためたがいがいに競い合つてた青年らのうち、この不具な娘と腕を組み合わせるだけの勇氣——（勇氣がいるのはもつともである）——をもつてる者は一人もいなかった。すると、それまで呑氣のんきでにこやかだったモDESTAは、死にたく思うほどの絶望に陥つた。彼女は食事をすることも肯がえんぜず、朝から晩まで泣いてばかりいた。夜もなお床の中で彼女の嘆くのが聞かれた。人々はもうどうしていいかわからなかった。彼女といつしよに悲嘆するのほかはなかった。すると彼女はますます泣くばかりだった。皆もつ人には彼女の愁訴をもてあました。それからしかりつけた。彼女は運河に身を投げてやると言つた。時々牧師がやつて来た。神様のことだの、永遠の事柄だの、今の苦しみを忍びながら彼世あのよで得られる仕合わせなどを、話してきかした。しかしそれは彼女を少しも慰めなかつた。ある日、ゴットフリートがやつてきた。モDESTAはかつて彼にあまり親切にして

やらなかった。彼女は悪意はもたなかったが、しかし人を軽蔑しがちだった。そしてまた、深く考えることがなく、笑い好きだった。彼女は彼に向かつて、ありったけの意地悪をしていた。ところで、彼は今彼女の不幸を知ると、ひどくびっくりした。けれどもその様子を少しも見せなかった。彼は彼女のそばに行つてすわり、彼女の災難には少しも言葉を向けず、以前と同じように落ち着いて話しだした。気の毒だという一言も発しなかった。彼女の盲目に気づいてもいないがようなふうだった。ただ彼は、彼女が見ることのできない事物は少しも話さなかった。彼女がそういう状態で聞いたり気づいたりし得る事柄だけを話した。しかもそれを当然なことのように単純にやっていた。彼自身もまた盲目であるかのようなだった。最初彼女は耳も貸さないうで泣きつづけていた。しかし翌日になると、いくらか耳を傾けるようになり、少しは口をききさえた……。

「そして、」と母親は話をつづけた、「あの人が娘にどんなことを言ったのか私は知りません。乾草の始末をしなければなりませんでしたし、娘にかまつてる隙ひまがありませんでした。晩になつて、私どもが畑から帰つてきますと、娘は静かに話をしていました。それからだんだんよくなつてきました。自分の不幸を忘れてるようでした。けれどもやはり時々はまだ始まることがありました。涙を流したり、ゴットフリートへ悲しい事柄を話そうと

したりしました。けれどもゴットフリートは聞こえないふうをしました。娘を慰め面白がらせるような事柄を、おだやかに話しつつづけました。娘は災難にあってからもう少しも家から出ようとしませんでしたが、とうとうあの人に勧められて外を歩いてみる気になりました。あの人は娘を連れて、初めは庭のまわりを少し歩かしたただけでしたが、次には畑の方へ長く歩かしてくれました。そして今ではもう娘は、眼が見えるのと同じに、どこへ行つてもわかりますしなんでも知るようになります。私どもが気にも止めない事柄を見て取ります。以前は自分に縁遠い事柄には興味をもちませんでした。今ではどんなものにも興味をもっています。あの時ゴットフリートは、私どもの家にいつも長くどどまっています。私どもは発つ^たのを延ばしてくれとは頼みかねましたが、あの人は娘がもつと落ち着くのを見るまで自分からどどまってくれました。するとある日——娘はあそこに、中庭にいたのですが——私はその笑い声を聞きました。それを聞いて私はどんな気持ちでしたか、とても申すことはできません。ゴットフリートもたいへんうれしそうな様子でした。ゴットフリートは私のそばにすわっていました。私どもは顔を見合わせました。あなた、私は少しも後ろ暗い思いをしないで申すことができます、私は心からあの人を抱きしめました。するとあの方は私に言いました。

『もう私は出かけていいようだ。私がいなくても済むようになったから。』

私は引き止めようと思いました。けれどあの人はこう言いました。

『いや、もう私は出かけなけりやならない。これ以上とどまってはいられない。』

だれも知つてるとおり、あの人は彷徨さまよえるユダヤ人に似ていました。一つ所に住んでることができませんでした。無理に引き止めるわけにもゆきませんでした。そしてあの人は出かけました。けれども、前よりはしばしばここを通るように都合してくれました。そのたびごとにモデスタは大喜びをしました。あの人が来てくれたあとでは、きつと前よりもよくなっていました。家の仕事にかかるようになりました。兄が結婚してからは、子供たちの世話をしてくれます。今ではもう決して愚痴をこぼしませんし、いつも楽しそうにしています。娘は眼が見えてもこんなに幸福でいられるだろうか、私は時々思うことがあります。ええそうですね、娘のようになって、賤いやしい人たちや悪い事柄が眼につかなくなる方がいいと、そんな考えが起る日はよくあるではありませんか。世間はほんとに醜みにくくなつていきます。一日一日と悪くなつていきます。……といつても、神様からこんな言葉をしかられはすまいかという気もします。そしてほんとうのことを申せば、世間がどんなにきたなくつても、私はやはり世間を見つづけてゆく方が望みです……。」

モDESTAがまた現われた。話は他へそらされた。クリストフは、もう天氣がよくないので出かけたがった。しかし人々は承知しなかつた。彼はやむを得ず、夕食の馳走ちそうになつて一夜を共にすることとなつた。モDESTAはクリストフの横にすわつて、一晩じゆうそばを離れなかつた。彼はこの若い娘の運命を憐れあわんで、しみじみと話をしたかつた。しかし彼女はその機会を与えなかつた。彼女はただゴットフリートのことを尋ねるばかりだつた。クリストフが彼女の知らないことを話してやると、彼女はうれしがるとともにまた多少妬ねたんでいた。彼女の方ではゴットフリートのことを進んで語ろうとしなかつた。明らかにすつかり言つてしまいはしなかつた。あるいはすつかり言うと、言つたあとで後悔していた。思い出は彼女の財産であつて、彼女はそれを他人へ分かちたくなかつた。彼女のこの愛情のうちには、おのが土地に執しゆうじやく着ちやくしてる百姓女のような峻しゆん烈れつさがあつた。自分と同じようによくゴットフリートを愛する者がいると考えることは、彼女にとつては不快であつた。実際彼女はそういうことを信じたくなかつた。クリストフはその心中を読み取つて、彼女を満足のままにしておいてやつた。彼女の話聞きながら彼は気づいた、彼女は昔ゴットフリートを眼で見たことがあるにもかかわらず、盲目になつてからは、実際とまつた

く異なつた面影を作り出しているということは。彼女はその幻影の上に、自分のうちにある愛の要求をことごとくなげかけてるのであつた。何物もかかる幻想の働きを妨げるものはなかつた。自分の知らないことをも平気で作り出す盲人通有の、大胆な確信をもつて、彼女はクリストフに言った。

「あなたはあの人に似ています。」

彼が了解したところでは、彼女は数年来、雨戸を閉め切つて真実の光のさし込まない家の中に、暮らしつづけてきたのであつた。そして、あたりに罩めてる闇の中で見ることを覚え、闇をも忘れるまでになつてゐる今では、闇にさし込む一条の光に会つたら、たぶんそれを恐れることであろう。彼女はクリストフとともに、やさしい切れ切れの話をしながら、かなり幼稚な些細な事柄ばかりをやたらにもち出してゐた。そういう話にクリストフはあまり興を覚えなかつた。彼はその無駄話に厭気がさしてきた。このようにひどく苦しんだ者が、苦しみのうちにもつと真面目にならないで、そんなつまらない事柄をどうして面白がるのか、彼には理解がいかなかつた。彼は時々もつと重大な事柄を話そうと試みた。しかしそれにはなんらの反響もなかつた。モデスタは重大な話にはいつてゆくことは、できなかつた——欲しなかつた。

人々は床についた。クリストフは長く眠れなかった。彼はゴットフリートのことを考え、モデスタの幼稚な思ひ出話から、その面影を引き離そうとつとめた。しかし容易にできないのでいらだつてきた。叔父がここで死んだこと、この寝台にその身体は休らつたに違いないこと、それを考えては胸迫る思ひがした。口をきいて盲目娘に自分のありさまを知らせることができないで、眼を閉じて死んでいったおりの、その臨終の苦悶を思ひ起こそうと彼はつとめた。彼はその眼瞼を開いて、その下に隠れてる思想を、人からも知られずまたおそらくみずからも知らないで去つていったこの魂の秘奥を、どんなにか読み取りたかつた！ しかしこの魂自身は、そういうことを少しも求めてはいなかった。その知恵はすべて、知恵を欲しないことにあつた。自分の意志を事物に強いたがらないことに、事物の成り行きに身を任せ、その成り行きを受け入れ愛することに、あるのだった。かくて彼は事物の神秘的な本質と同化していた。そして、この盲目娘や、クリストフや、またきつと人の知らない多くの者に、あれほどいいことをしてやったのも、自然にたいする人間の反抗の常套語をもたらず代わりに、自然そのものの平和を、和解を、もたらしやうたからである。彼は野や森のように、人に恵みを与えていたのである。……クリストフは、ゴットフリートとともに野の中で過ごした晩のこと、子供のおりに連れて行かれた散歩のこ

と、夜中に聞かされた物語や歌のこと、などを思い浮かべた。絶望の冬の朝、町を見おろす丘の上を、叔父おじとともに試みた最後の散歩、それを思い起こした。そして眼に涙が湧わいてきた。彼は眠りたくなかった。ゴットフリートの魂が満ちているこの田舎いなかに、偶然たどりついて来た今、この神聖な一夜を少しも無駄むだに失いたくなかった。しかし、不規則に断続して流れる泉の音や、蝙蝠こうもりの鋭い鳴き声などに耳を傾けてるうちに、青春の頑丈がんじょうな疲労は彼の意志にうち勝った。そして彼は眠りに落ちた。

彼が眼を覚ました時には、太陽は輝いており、農家の人々はもう働いていた。下の室には老婆と子供たちしかいなかった。若夫婦は畑に出ていた。モDESTAは乳をしぼりに出かけていた。捜しても見当たらなかった。クリストフは彼女の帰りを待とうとしなかった。彼女にぜひ会いたいとも思っていなかった。そして先を急ぐからと言った。皆によろしくと婆さんに頼んでから、彼は出かけた。

彼が村から出ると、道の曲がり角に、山さんざし子の籬まがきの根元の斜面に、盲目娘のすわってるのが見えた。

彼女は彼の足音をきいて立ち上がり、微笑ほほえみながら近づいてき、彼の手を取って言った。

「いらっしやい。」

二人は牧場を横切つて上つてゆき、花の咲いてる小さな野に出た。方々に十字架が立っていて、村が下の方に見おろされた。彼女は彼をある墓のそばに連れて行って、そして言った。

「これですよ。」

彼らはひざまずいた。クリストフは、かつてゴットフリートとともにひざまずいたも一つの墓のことを思い出した。そして考えた。

「やがて俺おれの番になるだろう。」

しかしその時、この考えには少しの悲しみもなかった。平和の気が土地から立ち上つていた。クリストフは墳墓の上に乗りに出して、ごく低くゴットフリートに叫んだ。

「私のうちにおはいりなさい!……!」

モデスタは両手を組み合わせて、無言のうちに唇くちびるを動かしながら祈っていた。それから、草や花を手探りにしながら、膝ひざがしら頭あたまで墓を一回りした。彼女はそれらの草や花を愛撫あいぶしてゐるかのようだった。彼女の伶俐れいりな指先は一々見分けていた。枯れつた蔦つたの幹や色褪あせた葎すみれなどを静かに引き抜いた。立ち上がる時に、彼女は板石の上に手をついた。クリストフが見ると、その指はゴットフリートという名前の一字一字を、そつとかすめるようになでてい

た。彼女は言った。

「今朝は地面がいい気持です。」

彼女は手を差し出した。彼は手を貸してやった。彼女は彼を湿った冷やかな地面にさわらした。彼は彼女の手を離さなかった。二人のからみ合った指は土の中にはいつていた。彼はモDESTAを抱擁した。彼女は彼に接吻した。

二人は立ち上がった。彼女は摘み取った葶のうち、勢いのいいのを彼に差し出し、しおれたのを自分の胸にさした。二人は膝の塵を払ってから、一言もかわさないで墓地を出た。野には雲雀が歌っていた。白い蝶が二人の頭のまわりを飛んでいた。二人はある牧場の中に腰をおろした。村の煙がまっすぐに、雨に洗われた空へ立ち上っていた。静まり返つてゐる運河が、白楊樹の間に輝いていた。青い光の霞がうっすりと、牧場や森を包んでいた。しばらく黙っていた後、モDESTAは、あたかも眼が見えるかのように、いい天気のことを低く話した。唇を少し開いて空気を吸い込んでいた。生きものの音を聞き澄ましていた。クリストフもまたそういう音楽の価値を知っていた。彼は彼女が考えながら言い得ないでゐる言葉を言った。草の下や空気の奥に聞こえる、かすかな鳴き声や戦ぎの名を挙げた。彼女は言った。

「ああ、あなたにもおわかりですか。」

彼はゴットフリートからそれらを聞き分けることを教わったと答えた。

「あなたも？」と彼女はいくらか不快そうに言った。

彼はこう言つてやりたかつた。

「妬^{ねた}んではいけません。」

しかし彼は、自分たちの周囲に微笑^{ほほえ}んでいる聖^{きよ}い光を見、彼女の失明した眼をながめ、

そしてしみじみと憐^{あわ}れを覚えた。

「では、」と彼は尋ねた、「あなたに教えたのはゴットフリートですな。」

彼女はそうだと答え、前よりは今の方がいつそうよくそれを樂しめるようになったと言つた。——（彼女は何より前であるかは言わなかつた。盲目という言葉を口にするのを避けていた。）

二人はちよつと口をつぐんだ。クリストフは同情の念で彼女をながめた。彼女はながめられてるのを感じていた。彼は彼女を氣の毒に思つてることを言つてやりたく、彼女から心を打ち明けてもらいたかつた。彼はやさしく尋ねた。

「あなたは苦しんだでしょうね。」

彼女は黙つて身を堅くしていた。草の葉をむしり取つては、無言のままそれを噛んでいた。やがて——（雲雀ひばりの歌は空の奥に遠くなつていった）——クリストフは、自分もまた不幸だつたこと、ゴットフリートから助けてもらつたこと、などを語つた。あたかも声に出して考へてるかのように、自分の苦しみや困難を語つた。盲目の娘はその話はなに顔を輝かせ、注意深く聞いていた。様子を見守つていたクリストフは、彼女が口をきこうとしてるのを見た。彼女は近寄ろうとして身を動かし、彼に手を差し出した。彼も前に乗り出した——がすでに、彼女はまた冷静な様子に返つていた。そして彼が話し終わると、彼女は平凡な二、三言を返しただけだつた。一つの皺しわもないその高い額ひたいの奥に、石のように頑固がんこな田舎者の強情じやうせいさが感ぜられた。兄の子供たちを世話するために家へ帰らなければならぬと彼女は言つた。にこやかに落ち着き払つて口をきいていた。

彼は尋ねた。

「あなたは幸福ですね。」

彼女は彼からそう言われるのを聞いてさらに幸福そうだつた。彼女は幸福だと答え、幸福であるはずの理由を主張し、それを彼に思い込ませようとしていた。子供たちのこと、家のこと、などを彼女は話した……。

「ええほんとに、」と彼女は言った、「私はたいへん幸福です。」

彼女は帰るために立ち上がった。彼も立ち上がった。二人は無関心な快活な調子で、別れの言葉をかわした。モDESTAの手はクリストフの手の中で少し震えた。彼女は言った。

「今日はお歩きなさるにいい天気でしょう。」

そして、間違えてはいけない曲がり道について、いろいろ注意してくれた。

二人は別れた。彼は丘を降りていった。降りつくして振り返った。彼女は頂の同じ場所に立っていた。ハンカチを打ち振って、あたかも彼の姿が見えるかのように合図をした。た。

自分の不幸を否定するかかる強情さのうちには、ある悲壮なかつ滑稽こっけいなものが含まれていた。クリストフはそれに心を動かされまた苦しめられた。モDESTAがいかに憐憫れんびんに働はたらきまた嘆賞たんしょうにさえ働はたらきするかを、彼は感じていた。そして彼は彼女といっしょに二日とは暮らせなかつただろう。——花の咲いた籬まがきの間の道をたどりながら、彼はまた、親愛なるシユルツ老人のことも、あの澄んだやさしい老人の眼のことも、考え及ぼしていた。その眼は、多くの悲しみが前を通つても、それらを見ることを欲せず、厭な現実を見ていないのであつた。

「彼はこの俺われをどう見てるだろうかしら。」と彼はみずから尋ねた。「俺は彼が見てる所とは非常に異なっている。俺は彼にとつては、彼が望むとおりの人間となっている。彼にとつてすべてのものは、彼自身の面影どおりで、彼自身と同じく純潔で高尚である。もし彼が有りのままの人生を見たら、彼はおそらく人生に堪え得ないだろう。」

また彼は今の娘のことを思った。彼女は闇やみに包まれながらその闇を否定し、あるものがないと信じたがり、ないものがあると信じたがっているのであった。

その時彼は、ドイツの理想主義の偉大さを認めた。彼がそれをあんなにしばしば憎んだのは、それが凡庸ほんような魂のうちにおいて、偽善偽君子的愚劣さの源泉となつてゐるからであつた。ところが今彼は、大洋中の一孤島のように、世界のまん中に異なつた一世界を創つくり出してゐる、この信念の美を認めた。——しかし彼は、自分ではそういう信念を堪えることができなかった。彼はそういう「死人島」へ避難することを肯がえんじなかつた……。ただ生命！ ただ真理！ 彼は嘘うそをつく英雄となりたくなかつた。その楽天的虚偽は、おそらく弱者にとつては生きるために必要であつたらう。それらの不幸な人々から支持となる幻影を奪ぎい去ることは、クリストフもこれを罪惡だと見なしたかつた。しかし彼自身は、そういう欺瞞ぎまんに頼り得なかつた。彼は幻影に生きるよりはむしろ死を望んでいた……。しかる

に、芸術もまた一つの幻影ではないのか？——否、芸術は幻影たるべきではない。真理だ！ 真理！ 両眼を大きく見開き、全身の気孔から生命の強烈なる気を吸い込み、事物があるがままにながめ、不幸をも正視し——そして笑つてやることだ。

数か月過ぎていった。クリストフは自分の町から外へ出る望みを失った。彼を救い得るかもしれない唯一人のハスレルは、助力を拒んでしまった。またシュルツ老人の友情も、与えられて間もなく奪い去らるることとなった。

彼は帰つてから一度シュルツへ手紙を書いた。そして愛情に満ちた手紙を二通受け取つた。しかし懶いものう気持のために、ことに考えを文字で書き現わすことが困難だったために、彼はその親愛な文句を感謝するのを遅らした。一日一日と返事を延ばした。そしていよいよ書こうと決心しかけると、クンツから短い便りたよが来て、老友の死を報じた。その報知によれば、シュルツは気管支炎が再発して、それが肺炎に変化したのであった。彼はたえずクリストフのことを口にしながら、クリストフに知らして心配をかけてはいけなさと禁じた。極端に衰弱しておりまた多年病気がちではあったが、それでも長い苦しい臨終であった。彼はクリストフへ死去の報知をしてくれとクンツへ頼み、最期まで彼のことを考えて

いたこと、彼に負うあらゆる幸福を感謝していたこと、彼が生きてる間は草葉の陰から祝福していること、などを彼に告げてくれと頼んでいた。——ただクンツが言い得なかったことは、クリストフとともに過ごした一日が、おそらく病氣再発の原因であり死去の起因であるという一事だった。

クリストフは黙然として涙を流した。その時になって彼は初めて、亡くした友のあらゆる価値を感じ、どんなに彼を愛してたかを感じた。そのことをよく言つてやらなかったのを、いつものとおりに苦しんだ。今はもう間に合わなかった。そして彼の手には何が残されたか？ 善良なシユルツは、その死後空虚をさらにむなしく思わせるために、ちょうど現われてきたのにすぎなかった。——クンツとポットペチミットの方は、シユルツにたいする彼らの友情と彼らにたいするシユルツの友情以外には、なんらの価をももってはいなかった。クリストフは彼らに一度手紙を書いた。そして関係はそれだけのものだった。——彼はまたモデスタへ手紙を書いてみた。しかし彼女は平凡な手紙を書いてもらつてよこした。その中にはつまらない事柄しか述べられていなかった。彼は文通をつづけることをあきらめた。彼はもう手紙を出さなかった。だれからももう手紙が来なかった。

沈黙、沈黙。沈黙の重いマントが日に日にクリストフの上にかぶさつてきた。それは灰

の雨が降りかかってくるのに似ていた。もう晩年になったように思われた。しかもクリストフはようやく生き始めたばかりだった。彼は今からもうあきらめようとは欲しなかった。眠るべき時にはなつていかなかった。生きなければならなかった……。

そして彼はもはやドイツで生活することができなかった。小さな町の偏狭さに圧迫される彼の才能の苦しみは、彼を絶望さして不正にまで陥らした。彼の神経はむき出しになつていた。すべてが血を迸ほとぼしらせるほどに彼を傷つけた。彼はあたかも、公園の穴や檻おりに閉じこめられて退屈に苦しんでる、あの惨めな野獣のようであった。クリストフは同情からそれらの獣を見に行つた。彼は獣らの驚嘆すべき眼を見守つた。その眼には荒々しい絶望的な炎が、燃えていた——日に日に消えてゆきつつあつた。ああ彼らは、自分を解放してくれる暴虐な射殺を、いかに望んでいることであろう！ 彼らに生をも死をも妨げる人間の獍どうもつ猛な冷淡さに比ぶれば、むしろいかなることでもはるかに望ましいのだ！

クリストフにとつて最も圧迫的に感ぜられるものは、人々の敵意ではなかつた。それは人々の形も根底もない不定な性質であつた。あらゆる新思想を了解することを拒む、偏狭な頑固な頭脳を有する人々の執拗しつような對抗にたいして、どうすればよかつたのか。力にたいしては力がある、岩石を切り砕く鶴嘴つるはしと爆薬とがある。しかしながら、凝液のごとく

ぬらりとして、少しの圧力にもくぼみ、しかもなんらの痕跡こんせきをも残さない、無定形かたまりな塊にたいしては、いかんとも方法がない。あらゆる思想、あらゆる精力、すべては泥潭でいねいのうちうちに没してしまふのであつた。一つの石が落ちて、深淵しんえんの表面せんめんにようやく二、三の波紋なみずみがたつのみだつた。その顎あごは開いてはまた閉じた。そしてそこにあつたものの痕跡は、もはや少しも残らなかつた。

彼らは敵ではなかつた。むしろ敵であればありがたいのだが！ 彼らは、愛することも、憎むことも、信ずることも、信じないことも——宗教、芸術、政治、日常生活、すべてにおいて——皆その力がない徒輩であつた。彼らの気力はことごとく、和解し得ざるものを和解させんとつとめることに費やされていた。ことにドイツの戦勝以来、新しい力と古い主義との妥協を、嫌悪けんおすべき陰謀を、彼らは企図していた。古い理想主義は捨てられていなかつた。そこにこそ人々がなし得ないでいる解放の努力が残されていた。彼らはドイツの利益に役だたせんがために理想主義を歪曲わいきよくして満足していた。たとえば冷静にして表裏あるヘーゲルを見るがいい。彼はライプチヒとワートルローとの戦役を待つて、おのれの哲学の趣旨とプロシヤ国家とを同一たらしめた——利害關係が変わつたので主義も変わったのである。人々は敗北したおりには、ドイツは人類を理想とするとい言つていた。今

や他に打ち克つと、ドイツは人類の理想であると言っていた。他の国家が強大であるおりに、レッシングとともに、「愛国心は一つの勇ましい弱点で、なくてもよろしいものだ」と彼らは言い、おのれを「世界の公民」だと呼んでいた。しかるに勝利を得た現在では、「フランス式の」空想たる、世界の平和、友愛、平和的進歩、人間の権利、生来の平等などにたいして、あくまで軽蔑の念をいだいていた。最強の国民は他の国民にたいして絶対の権利を有するものであり、他の国民はより弱きがゆえにこの国民にたいしてならの権利も有しないものであると、彼らは言っていた。最強の国民は生きたる神であり、理想の化身であつて、その進歩は戦争と暴力と圧制とによつてなされるのであつた。今や力がおのれの方にあると、力は神聖なるものとなされていた。力はあらゆる理想となり知力となつていた。

実を言えば、ドイツは数世紀の間、理想を有して力を有しないことを、非常に苦しんできたので、多くの艱難を経た後になつて、何よりもまず力が必要であると、痛ましい告白をなすにいたつたのは、恕すべきことではある。しかしながら、ヘルデルやゲーテを有する国民のこの告白のうちには、いかに憂苦が潜んでいたことであらう！そしてこのドイツの戦勝は、ドイツ理想の放棄であり墮落であつた……。ああ、ドイツのすぐれた人々

の嘆かわしい服従的傾向よりすれば、かかる放棄は実に易々たることにすぎなかつたのである。

モーゼルはすでに一世紀余り以前に言っていた。

「ドイツ人の特徴は服従である。」

またスタール夫人も言っていた。

「彼らは勇敢に服従します。世に最も哲学的で良い事柄、すなわち力にたいする尊敬や、この尊敬を變じて賛美とならしむる驚怖の感動など、それを説明するために、彼らは哲学的推論を用います。」

クリストフは、ドイツの最も偉大な人物から最も微小な人物にいたるまで、すべての者のうちに右の感情を見出した。上にはシルレルのウィルヘルム・テルがいた。人夫のような筋骨をもつて厳格なこの小市民は、自由なユダヤ人ペールネが言ったように、「ゲスレル閣下の帽子柱の前を、その帽子を見なかつたし敬礼の命令にそむいたのでもないということを証明するため、眼を伏せて通りながら、名誉と恐怖とを妥協せしめんとした。」
降^{くだ}つては七十歳の敬すべき老教授ヴァイセがいた。彼は町で最も名誉な学者の一人だったが、一人の中尉殿が来るのを見ると、急いで歩道の高みを向こうに譲つて、車道へ降りて

行くのであつた。クリストフは、常住卑屈のかかるつまらない行為を見ると、血が湧きたつのを覚えた。卑下したのはあたかも自分自身であるかのように、苦しい思いをした。往来ですれちがう将校らの傲慢な様子は、彼らの横柄な鯨子張り方は、彼にひそかな憤怒の念を与えた。彼は彼らに少しも道を譲る様子を見せなかった。通り過ぎる時には彼らと同じように傲慢な眼つきで見返した。も少しで喧嘩をひき起こしかけたことも一度ならずあつた。あたかも彼は喧嘩を求めてるかのようだった。けれども彼は、そういう空威張りの危険な無益さを認むることににおいては、あえて人後に落つるものではなかつた。ただ時々彼はめちな気持になるのであつた。たえず自制していたので、また頑強な力が鬱積して少しも費やされなかつたので、そのためにいらだつてきた。するともうどんな馬鹿げた事でもやりかねなかつた。もう一年もこの地にいたら自分は破滅するだろう、というような気がしていた。自分の上にのしかかってくる野蛮な軍国主義、舗石の上に鳴つてる佩劍、多くの叉銃、砲口を町の方へ向けて発射するばかりになつてる、兵營の前の大砲、それらのものに彼は憎悪の念をいだいていた。当時評判の高かつた卑猥な小説は多く、大小を問わずあらゆる兵營内の腐敗を暴露していた。将校らは皆悪徳の人物として描かれていて、その自働機械的な職務以外においては、ただ怠惰に日を送り、酒を飲み、

賭博^{とくぱく}をし、負債をこしらえ、他人から補助を仰ぎ、たがいに悪口をし合い、その階級の下を問わず皆、自分より下位の者にたいして権力を濫用するのであった。クリストフは、他日彼らの下に服従しなければならぬかと思っただけでも、喉^{のど}をしめつけられる心地がした。彼らから侮辱と不正とを被^{こうむ}つてゐる、不名誉きわまる自分の姿を見ることは、堪えられなかった、断じて堪えられなかった……。彼らのうちのある者らが有してゐる精神上の偉大さを、彼は知らなかった。彼らがみずから苦しんでるところのものを、彼は知らなかった。失われた幻、悪用され濫用された、多くの力や青春や名誉や信念や犠牲の熱望——無意義な職業。もしそれが単に一つの職業であるとするならば、犠牲を目的としないものであるとするならば、それはもはや一つの哀れな活動にすぎないし、無能な道化^{どうけ}にすぎないし、みずから信ぜずして口先で唱える範例にすぎないのである。

クリストフはもはや祖国では満足しきれなかった。潮の干満のように一定の時期において、ある種の鳥のうちに突然不可抗的に眼覚^{めざ}めてくるあの不思議な力を、彼は自分のうちにかけていた——それは大移住の本能であつた。シユルツ老人から遺贈されたヘルデルやフィヒテの書物を読みながら、彼はその中に自分と同じ魂を見出した——土塊に執着してゐる土地の子ではなく、光の方へ向かざるを得ない精神を、太陽の子を。

どこへ行くべきか？ 彼はそれを知らなかった。しかし彼の眼はラテンの国たる南欧に注がれていた。そしてまずフランスに。混乱に陥ったドイツのいつもの避難所たるフランス。ドイツ思想はフランスを悪口しつつながらも、幾度その世話になったことであろう！ 一八七〇年以後においてさえ、ドイツの砲火の下に焼かれ破砕されたその大都市から、いかなる魅力が発してきたことであるか！ 思想および芸術の最も革命的な形式も最も復古的な形式も、順次にまたは時として同時に、実例や靈感やをそこに見出したのである。クリストフもまた、ドイツの大音楽家らの多くが逆境に陥った時と同じく、パリの方を振り向いた……。彼はフランス人についてどれだけ知っていたか？——二人の女の顔と手当たり次第に読んだ若干の書物。しかしそれだけでも彼にとつては、光明と快活と元氣との国、その上に大胆な若い心に適するゴールの高慢さを多少そなえた国、それを想像するには足りるのであった。彼はフランスをそういう国だと信じていた。なぜなら、そう信ずる必要があつたし、そうであれかしと心から願つていたから。

彼は出発の決心をした。——しかし母のために出発することができなかった。

ルイザはしだいに老いていった。彼女は息子を鐘愛しょうあいしていた。息子は彼女の喜びの

すべてだった。そして彼女は、彼がこの世で最も愛してるもののすべてだった。けれども彼らはたがいに苦しめ合っていた。彼女はクリストフをほとんど理解せず、また理解しようともつとめなかった。ただ彼を愛しようとはばかりした。彼女は狭い臆病なぼんやりした精神を有し、また感心すべき心を、なんとなく人の心を動かし圧迫するような、愛されたという強い欲求を有していた。彼女は息子を非常な学者だと思つて尊敬していたが、彼の天分を窒息させるようなことばかりしていた。彼がこの小さな町に自分のそばに生涯とどまつてるだろうと思つていた。もう幾年もいっしょに暮らしてきたし、ずっと同じような状態でゆくだろうと思わざるを得なかった。かくして彼女は幸福だった。どうして彼もまた幸福でないことがあるうぞ。彼にこの町の気楽な中流階級の娘を娶わせ、日曜日には彼が教会堂のオルガンを弾くのを聞き、そしていつまでも自分のそばにとどまつてること、それが彼女の夢想の全範囲だった。彼女は息子をいつも十一、二歳くらいに見ていた。それ以上になつてほしくなかった。そして彼女はこの狭い天地に息づまつてる不幸な一個の男子を、別に悪い心ではなしに苦しめていた。

とは言え、大望のなんたるかを理解し得ないで、家庭の愛情ときさやかな義務の遂行とに、人生の全幸福を置いている母親の、かかる無意識的な哲理のうちには、多くの真——

一つの精神的偉大さ——が存在していた。それは愛することを欲する魂であり、愛することのみを欲する魂であった。愛を捨てるよりもむしろ、生活、理性、論理、全世界、すべてを捨てる方が好ましかったのだ！そしてこの愛は、無際限で懇願的で要求深いものだった。それはすべてを与えるものであり、またすべてを得んと欲するものだった。それは愛せんがためには生きることを犠牲にし、また他人にも、自分の愛する人々にも、同じ犠牲を求めていた。ああ、単純なる魂の愛の力よ！その力は、たとえばトルストイのごとき不安定な天才の模索的理論や、あるいは死滅しつつある文明のあまりに精練されたる芸術などが、激しい闘争や傾け尽くされたる努力の一生——数世紀——を終わると、いかなる帰結に到着するかを、一目で見出させてくれる……。しかしながら、クリストフのうちうなつていた傲然ごうぜんたる世界は、はるかに異なつたる法則をもっていて、他の知恵を要求していた。

彼は久しい前から、自分の決心を母へ告げたがつていた。しかし母に与える苦しみを思つては、ひどく恐れていた。口へ出そうとすると、卑怯ひきような気持になつて、また先へ延ばした。それでも二、三度彼は、おずおずと出発のことをほのめかした。しかしルイザはそれを真面目まじめに取らなかつた——おそらくは、彼自身にも冗談に言つてるのだと思わせんが

ために、真面目に取らないふうを装よそおつたのであろう。すると彼はもう言い進むことができなかつた。ただ陰鬱いんうつに考え込んでばかりいた。何か心に重い秘密でもあるがようだった。そして憐あわれな彼女は、その秘密がなんであるかを直覚し得たので、その自分を遅らせようとこわごわつとめていた。晩に、たがいに近くランプの火影ほかげにすわって、沈黙に陥るような場合に、彼女は彼が今にも言い出しはすまいかとにわか感ずるのであつた。すると彼女は恐ろしさのあまり、なんでも構わずでたらめなことを口早やに話し出した。自分でも何を言つてるのかわからないくらいだった。しかしどうしても彼が言い出すのを妨げなければならなかつた。通例彼女は本能から、彼に沈黙を強しいる最上の事柄を見出していた。自分の健康状態を、脹はれてきた手足のことを、不随になりかかつて膝ひざのことを、静かに訴えるのだつた。彼女は自分の悩みを誇張して、もうなんの役にも立たない無能な婆ばあさんになつたと言つた。だが彼はそういう幼稚な策略に欺かれなかつた。無言の非難をこめて悲しげに彼女をながめていた。そして間もなく、疲れてるから床にはいるという口実で、座を立つのであつた。

しかしそういう手段は長くルイザを救うことができなかつた。ある晩、彼女がまたその手段に頼ると、クリストフは勇気を振るい起こして、老母の手に自分の手をのせて言つた。

「お母さん、私は少しお話したいことがあるんです。」

ルイザははつとした。しかしにこやかな様子をしようとしてとめながら、答えた——喉^{のど}をひきつらして。

「どういうことですか。」

クリストフは口ごもりながらも、出発の意志を告げた。彼女はいつものとおり、それを冗談にして話をそらそうとした。しかし彼は気色を和らげないで、こんどはいかにも思い込んだ真面目^{まじめ}なふうで言いつづけたので、もはや疑う余地はなかった。すると彼女は口をつぐみ、血の流れも止まり、無言のまま冷たくなって、怖^おじ恐れた眼でじつと彼をながめた。そして非常な苦悶^{くもん}の色が彼女の眼に上つてきたので、彼の方でも言葉が出せなくなった。そして二人とも黙っていた。ついに彼女はほつと息をつくとともに、言った。——

(その唇^{くちびる}はふるえていた。)

「そんなことがお前……そんなことが……。」

大粒の涙が二つ彼女の頬^{ほお}に流れた。彼はがっかりしてわきを向き、両手に顔を隠した。二人は泣いた。しばらくしてから、彼は自分の室にはいって、翌日まで閉じこもった。二人はもはやそのことを口先へも出さなかった。そして彼がなんとも言わないので、彼女は

彼がその計画をやめたのだと信じようとした。それでもやはりたえず気にかかった。

そのうちに、彼はもう黙っておれなくなつた。たとい彼女に断腸の思いをさせることになろうとも、ぜひと話さなければならなかつた。彼はあまりに苦しかったのだ。自分の苦しみにたいする利己心は、彼女に苦しみをかけるといふ考えに打ち克つた。彼は口を開いた。心が乱されるのを恐れて母を見ないようにしながら、終わりまで言い進んだ。もう二度と言ひ合うことがないように、出発の日まで定めた。——（この次になったら、今日ほどの悲しい勇気が出るかどうか、自分でもわからなかつた。）——ルイザは叫んでいた。「いえ、いえ、そんなことを言つてはいけません！……」

彼は身を堅くして、厳然たる決心をもつて言いつづけた。言い終えると——（彼女はすすり泣いていた）——彼は彼女の手を取つて、自分の芸術のため生命のためには、しばらく出かけることがいかに必要であるかを、彼女に了解させようとつとめた。彼女は聞くことを拒み、涙を流し、そしてくり返していた。

「いえ、いえ！ いやです……。」

彼はいかに彼女へ理屈を説いても無駄むだだったので、夜になったら彼女の考え方も変わるかもしれないと思つて、そのまま座を立つた。しかし翌日食卓でまたいっしょになると、

彼は少しの思いやりもなくまた計画のことを言い始めた。彼女は唇くちびるにあてた一口のパンをとり落して、悲しい非難の調子で言った。

「では私を苦しめたいんだね。」

彼は心を動かされたが、それでも言った。

「お母さん、必要なことなんです。」

「いいえ、いいえ、」と彼女はくり返し言った、「そんな必要があるものですか……。私に心配をかけるためにです……。まるで狂気の沙汰さたです……。」

二人はたがいに説服しようとした。しかしたがいに相手の言葉を耳に入れなかった。彼は議論の無駄なことを悟った。議論はたがいにますます苦しめ合うのに役だつばかりだった。そして彼は頑がんとして、出発の準備を始めた。

ルイザは、いかに願っても彼を引き止めることができないのを見て取ると、陰鬱いんうつな悲嘆のうち沈み込んだ。終日室の中に閉じこもつて、晩になつても燈火もつけなかった。もう口もきかず食事もしなかった。夜にはその泣き声が聞こえた。彼は身を切られるような思いをした。悔恨の情にとらえられて、夜通し眠れないで輾轉てんでんしながら、床の中で苦しい声をたてた。それほど彼は母を愛していたのだ！ なんのために彼女を苦しめなければ

ばならなかったのか？……ああ、苦しむのは彼女一人ではないだろう。彼にはそれがよくわかっていた……。なんのために運命は、愛する人々を苦しめるような使命をも果たさんとする欲求と力とを、彼のうちに置いたのであるか？

「ああ、もし私が自由であつたら、」と彼は考えた、「もし私が、自分のなるべきものになろうとする、あるいははなれなかつたら自分にたいする恥と嫌悪けんおとのうちに死のうとする、この残忍な力に縛られていながつたら、愛するあなたがたをいかに幸福ならしむることができることでしょう！ けれどまず、私を生き活動し戦い苦しませてください。そして私はいつその愛をもつておそばにもどつて来るでしょう。どんなにか私は、愛し、愛し、愛することだけをしたいんです！……。」

母の絶望的な魂の不断の非難が、もし黙っているだけの力をもつていたならば、彼は決してそれに対抗することができなかつたらう。しかし気の弱いやや饒じょうぜつ舌なルイザは、胸ふさがるような心痛を自分一人に取つておくことができなかった。そして近所の女たちに話した。他の二人の息子むすこにも話した。二人の息子は、クリストフを非難する絶好の機会を利用せずにはおかなかつた。ことに、今ではほとんど理由もないのに兄を妬ねたみつづけていたロドルフは——クリストフのわずかな好評にもいらだつて、あえて自認しかねるよう

な下等な考えで、ひそかに兄の未来の成功を恐れていた（なぜなら、彼はかなり伶俐であつて、兄の実力を感じていたし、他人も自分と同様にそれを感じてはいはしないかと思つてきたから）——そのロドルフは、自分の方がすぐれてるとしてクリストフを頭から押えつけるのを、この上もなく喜んだ。彼は母の困窮を知つていながら、かつてあまり気にかけたこともなく、母を助け得るだけの十分余裕ある身分でありながら、クリストフの世話にばかり任していた。ところがクリストフの計画を知ると、彼はただちに多くの愛情を示してきた。彼は母親を見捨てるという考えを憤慨して、それを恐るべき利己心とした。彼は厚顔にも自分でやつてきて、クリストフにそれを言った。あたかも鞭打ちに相当する子供にでも対するがように、ごく横柄おうへいに訓戒をたれた。母親にたいする義務や、母親が彼のためになした犠牲などを、傲慢ごうまんな様子で説きかした。クリストフは危うく激怒するところだった。彼はロドルフを狡猾こうかつ漢まんだとし偽善の犬だとして、臀しりを蹴けた立てて追いつ出した。ロドルフはその仕返しに母を煽動せんどうした。ルイザは彼から刺激されて、クリストフが不孝者のような行ないをしてると思ひ込み始めた。クリストフには出奔の権利がないとくり返し聞かされたし、それは彼女の信じたがつてるところだった。彼女は最も強力な武器たる涙に頼ることをしないで、クリストフに向かつて不当な非難を加えた。クリストフは

それに反感を覚えた。二人はたがいに厭いやなことを言い合った。その結果はただ、それまでなお躊躇ちゆうちよしていたクリストフに、出発の準備を急いそぐと考えさせたばかりだった。慈悲深い隣人らが母を気の毒があはれること、近所の評判では母を犠牲者だとし自分を酷薄漢だとしてること、それを彼は知った。彼は齒をくいしばって、もはや決心を翻さなかつた。日は過ぎ去つていった。クリストフとルイザとはほとんど口をきかなかつた。たがいに愛し合つていたこの二人は、いつしよに過あやごす最後の日々をできるだけ味わいつくそうともしないで、多くの愛情をも埋没せしむる無益な不機嫌ふきげんのうちに、残つてる時間を失つていった——世にはしばしばそういう例がある。二人は食卓で顔を合わせるばかりだった。しかも、たがいに向かい合つてすわりながら、眼を見合わせもせず、言葉を交えもせず、幾口かを無理に食べるだけで、それも食べるためではなく、むしろ体裁を保つたための方が多かつた。クリストフは辛かろうじて、喉のどから二、三言しばり出すこともあつた。しかしルイザは返辞をしなかつた。そしてこんどは彼女の方で口をきいてみると、彼の方で口をつぐんでしまった。かかる状態は二人には堪えられなかつた。そしてそれが長引けば長引くほど、それから脱するのがますます困難になつた。このままで二人は別れるのであろうか？

ルイザは今となつて、自分が不正で拙劣だつたことを認めた。しかし彼女はあまりに苦

しんでいたので、失ってしまったように思われる息子むすこの心を、どうして取りもどしていいかわからなかったし、思ってもぞつとするほどのその出発を、どうしたらやめさせられるかわからなかった。クリストフは、母の蒼あおざめてるはれぼつたい顔を、ひそかにながめやつては、悔恨の念に責められた。しかしもう出発の決心を固めたことだし、自分の一生に關することだと知っていたので、悔恨の念からのがれるために、もっと早く出発しておけばよかつたと卑ひきょう怯けうにも考えた。

彼の出発の日は翌々日となった。悲しい差し向かいの時がまた過ぎた。たがいに一言もかわさないで夕食を済ますと、クリストフは自分の室に退いた。そして机の前にすわり、両手に頭をかかえ、なんの仕事もできないで、一人悩んでいた。夜はふけた。もう一時に近かつた。とふいに隣室で、物音がした。椅子いすがひっくり返つた。扉とびらが開いた。シャツ一つの素足の母が、すすり泣きながら彼の首に飛びついてきた。彼女は熱で焼けるようになっていた。息子を抱きしめて、絶望の嗚咽おえつのうちに訴えた。

「発たつてはいけません、発つてはいけません。お願いだから、お願いだから！ ねえ、発つてはいけません！……私は死にそうです……我慢が、我慢ができません！……」

彼は驚き恐れて、母を抱擁しながらくり返した。

「お母さん、落ち着いてください、落ち着いてください、どうぞ！」
しかし彼女は言いつづけていた。

「私には我慢ができません。……もうお前ぎりなんです。お前が発たつてしまったら、私はどうなるでしょう？ 死んでしまふに違いありません。私はお前と離れて死にたくない。一人で死にたくない。私が死ぬまで待つてください！……！」

彼はその言葉に胸を裂かれる思いがした。どう言つて慰めてよいかわからなかつた。この愛情と悲しみとの訴えにたいしては、いかなる理由がよく抵抗し得ようぞ！ 彼は彼女を膝ひざに抱き上げて、接せつ吻くちゅんややさしい言葉で、気を鎮しずめさせようとした。老母は次第に口をつぐんで、静かに泣きだした。彼女が少し落ち着いた時、彼は言った。

「お寝やすみなさい。風邪かぜをひきますよ。」

彼女はくり返した。

「発たつてはいけません！」

彼はごく低く言った。

「発たちません。」

彼女は身を震わした。そして彼の手を取つた。

「ほんとうですか。」と彼女は言った。「ほんとうですか？」

彼はがっかりして顔をそむけた。

「明日、^{あした}」と彼は言った、「明日、申しませう……。私をこのままにしておいてください、お願いですから……」

彼女はすなおに立ち上つて、自分の室へもどつた。

翌朝になると彼女は、狂人のように真夜中に絶望の発作に襲われたことが、恥ずかしくなつた。そして息子がなんと言うだろうかとびくびくしていた。彼女は室の隅^{すみ}にすわつて待つていた。編み物を取つてそれに心を向けようとしたが、手が思うままにならないで取り落してしまつた。クリストフがはいつて来た。二人はたがいに顔を見合わせないので、小声で挨拶^{あいさつ}をした。彼は陰鬱^{いんうつ}な様子で、窓の前に立ち、母へ背中を向けて、黙り込んだ。彼のうちには鬨^{たたか}いがあつた。前もつてその結果はわかりすぎていたが、それを延ばそうとつとめていた。ルイザは彼に言葉をかけかね、待ちまた恐れている返辞を促しかねた。彼女はまた強^しいて編み物を取り上げた。しかし何をしてるのか夢中だつた。編み目はゆがんでいった。外には雨が降つていた。長い沈黙のあとに、クリストフは彼女のそばに來た。彼女は身動きもしなかつたが、胸は動悸^{どうき}していた。クリストフは不動のまま彼女をながめ

た。それからにわかには、そこにひざまずいて、母の長衣の中に顔を埋めた。そして一言も言わないで、涙を流した。その時彼女は、彼がとどまることを悟った。彼女の心は、死ぬほどのつらい苦しみから和らいだ。——しかしすぐに、苛責かしやくの念が交ってきた。息子が犠牲にしてくれたすべてのものを、彼女は感じたのである。そして、彼が彼女を犠牲にした時に苦しんだすべてを、彼女が苦しみ始めた。彼女は彼の上に身をかがめてその額ひたいや髪くちびるに唇をあてた。二人は無言のうちに、涙と悲痛とを共にした。ついに彼は頭を挙げた。ルイザは彼の顔を両手にはさんで、眼の中を見入った。彼女は言いたかった。

「お発たちなさい！」

しかしそれを言うことができなかった。

彼はこう言いたかった。

「喜んでとどまりましょう。」

しかし彼はそれを言うことができなかった。

どうにもできない状況だった。二人とも処置に困った。彼女は切ない愛情のうちに溜ため息いきをついた。「ああ、みんないっしょに生まれていっしょに死ぬことができるのだったら——」

その素朴そぼくな願いが、彼のうちにやさしく沁しみみ通った。彼は涙をふいて、微笑ほほえもうとつとめながら言った。

「いつしよに死にしましょう。」

彼女はなお尋ねた。

「確かですか。発たたないんですね。」

彼は立ち上がった。

「きまつたことです。もうそのことを言うのはよみましょう。またあともどりをするには及びません。」

クリストフは言葉を違えなかった。もう出発のことを言い出さなかった。しかしそれを考えずにはいられなかった。彼はとどまつた。しかしその犠牲の返報として、悲しい様子ふきげんや不機嫌ふきげんさで母を悩ました。そしてルイザは、やり方が拙劣であつて——自分は拙劣だと知りつつも、していけないことをかならずするほど、きわめて拙劣で——彼の悩みの原因を知りすぎていながら、しつこくそれを彼の口から言わせようとした。落ち着うちさきのない煩うるさい理屈うそっぽい愛情で彼をなやまし、二人はたがいに異なつた性質であることを——彼が忘れようとしていたことを、始終彼に思い出さした。幾度彼は彼女に心のうちをうち明

けたがったことだろう！　しかし口を開こうとすると、いかんともできない壁が間につつ立った。そして彼は内心の思いを胸に潜めた。彼女はそれに気づいていた。しかし彼のうち明け話を求むることもなしかねたし、またどういうふうに求めていいかもわからなかった。思いきつてやってみても、彼が胸につかえて言いたくてたまらながつてるその思いを、ますます深く秘めさせるばかりだった。

多くの些細なことのために、罪のない癖のために、彼女はまたクリストフをいらだたせて、間をうとくならしていた。人のいいこの老母は少しぼけていた。彼女は近所の噂話をくり返したがった。また保母めいた愛情をもつていて、人を揺籃に結びつける子供時代のおくだらない事柄を、しきりにもち出した。しかしそれからのがれるには、一人前の男となるには、もう非常に骨を折ってきたではないか。しかるにいまさら、ジュリエットの乳母のごときが現われてきて、汚ない襤褸や、くだらない考えや、また、幼い魂が卑しい物質と息苦しい環境との圧迫に逆らう、あの厄介な時代を、一々述べたてなければならぬというのか！

それらのことの合い間には、彼女はいとやさしい愛情の発作を——あたかも赤ん坊を相手にしてるかのように——示すのであった。彼はそれに心をとらわれて、身をうち任せる

——あたかも赤ん坊のように——のほかほかであった。

最も悪いのは、彼らのように、朝から晩まで始終二人きりで、しかも他人から孤立して、暮らしてゆくことである。二人でいて苦しむ時には、たがいにその苦しみを医することができない時には、それを激烈ならしむるのは必然の勢いである。自分の苦しみの責をたがいに転嫁し合い、実際にそうだと信じてしまう。それよりはむしろ一人きりの方がよい。苦しむのは一人きりだから。

彼ら二人には毎日苦悩の日がつづいた。世間にしばしばあるごとく、偶然の事件が起こって、外見上不幸な——実は巧妙な——方法で、二人がもがいている残忍な不決定な状態を断ち切ってくれなかったならば、彼らは長くそれから脱し得なかったであろう。

十月のある日曜日だった。午後四時のこと。天気は晴れ晴れとしていた。クリストフは終日室にとじこもって、「自分の憂鬱ゆううつを嘗なめ」ながら考え込んでいた。

彼はもう我慢ができなかった。外に出て、歩き回り、精力を費やし、身体を疲らして、もう考えないようになりたくてたまらなかった。

前日から母との間が気まずかった。なんとも言わないで出かけようとした。しかし階段

の上まで来るうちに、彼女が独りぼっちで一晩じゆう心配するだろうと考えた。彼は忘れ物があるという口実をみずから設けて、また室にもどった。母の室の扉が半ば開いていた。彼はその間からのぞき込んだ。そして数秒の間母をながめた……。その数秒が、今後彼の生涯中いかなる場所を占めることになったか！……

ルイザはその時、晩の祈祷からもどつて来たところだった。窓の隅の例の好きな場所にすわっていた。正面の家の亀裂のあるよごれた白壁が、ながめをさえぎっていた。しかし彼女がすわつてる隅からは、右手の方に、隣家の二つの中庭の向こうに、ハンカチほどの芝生の片隅が見られた。窓縁には一鉢の朝顔が絲にからんで伸びていて、ぶらさがつてる梯子の上にその細やかな蔓を広げていた。一条の光線がそれに当たっていた。ルイザは椅子に腰掛け、背を丸くして、大きな聖書を膝の上に開きながら、別に読んでもいかなかった。両手を——筋が太くふくれて、労働者のように少し曲がつてる四角な爪のある両手を——聖書の上に平たくのせて、小さな植物と斜めに見える空の一角とを、しみじみとながめていた。金緑色の朝顔の葉から来る光の反射が、少し痣のある疲れた顔を、ごく細かくてあまり濃くない白い髪を、微笑んで半ば開いてる口を、照らしていた。彼女はこの安息の時を楽しんでいた。それは彼女の一週間で最もよい瞬間だった。苦しんでる者にとっては

ごく楽しい状態、何事も考えず、ただあるがままにうつとりとして、半睡の心だけが口をきいてくれる状態、それに彼女は浸っていた。

「お母さん、」と彼は言った、「少し出かけてみたいんです。ブイルの方を一回りしてきます。帰りは少し遅くなるかもしれませんが。」

うとうととしていたルイザは、軽く身を震わした。それから彼の方へ向き返り、平和なやさしい眼で彼をながめた。

「行つておいで。」と彼女は言った。「ほんとうにね、よいお天気だから。」

彼女は微笑ほほえんでみせた。彼もまた微笑み返した。二人はしばし顔を見合わしていた。それからたがいに頭と眼とで、ちよつとやさしい会釈をかわした。

彼は静かに扉とびらを閉めた。彼女はまた徐ろおもむに夢想にふけた。色褪あせた朝顔の実にさして光線のように、息子の微笑みはその夢想に、一条の輝いた反映を投じていた。

かくして、彼は母を置きざりにしたのであつた——一生の間。

十月じゅうがつの夕ゆふ。青白い冷やかな太陽。懶ものうげな田舎いなかはまどろんでいる。村々の小さな鐘が、野の沈黙のうちにゆるやかに鳴っている。耕作地のまん中から、数条の煙が徐ろに立ち上つ

ている。こまやかな靄せやが遠くに漂っている。ぬれた地面を覆おほっている白い霧が、夜の来るを待つて立ち上ろうとしている……。一匹の獵犬が、地面に鼻をすれすれにして、甜菜てんさいの畑の中を駆け回っていた。小鳥の群れが幾つもの薄暗い空に舞っていた。

クリストフは夢想にふけりながら、目当ても定めずに、しかも本能的に、一定の方向へ歩いていった。数週間以来、彼の散歩は、ある村の方へ向かいがちだった。そこへ行けばきつと、一人の美しい娘に出会うのだった。彼はその娘に心ひかれていた。それは単に好きだというにすぎなかったが、しかしごく強い多少不安な好き方だった。クリストフはだれかを愛せずにはほとんどいられなかった。彼の心はめつたにむなしことがなかった。偶像たるべき何かの美しい面影が、いつもすえられていた。愛してゐることをその偶像から知られるか否かは、多くの場合どうでもいいことだった。彼に必要なのは愛することだった。心の中が決してまっくらにならないこと、それが必要だった。

こんどの新しい炎の対象は、ある農家の娘だった。エリエゼルがレベツカに会ったように、彼は彼女に泉のそばで会った。しかし彼女は彼に水を飲めとは言わなかった。彼の顔に水をはねかけたのだった。小川の岸のくぼんだ所、巢のように根を張つてゐる二本の柳の間に、彼女は膝ひざをついて、勇敢にシャツを洗っていた。その舌も腕うでに劣らず活発だった。

小川の向こう岸でせんたくをしている他の村娘たちと、盛んに談笑していた。クリストフは数歩離れて、草の上に寝そべっていた。そして両手に頤あごをのせて、彼女らをながめていた。彼女らはほとんどきまり悪がりもしなかつた。時とすると生意気に聞こえる調子でしやべりつづけていた。彼はあまり耳にも止めなかつた。せんたく板の音や牧場の牛の遠い鳴き声などに交つてる、彼女らの笑い声の響きばかりを聞いていた。そして彼は、一人の美しい娘から眼を離さないで、ぼんやり夢想にふけていた。——娘たちはやがて、彼の注意の対象を見分けた。意地悪いあてつけの言葉をたがいに言い出した。彼の好きな娘は、ごく鋭い悪口を彼に投げかけた。それでも彼が動かなかつたので、彼女は立ち上がって、しぼつたせんたく物をひとかかえ取り上げ、それを叢くさむらの上に広げ始めながら、彼の顔をうかがう口実を得るために近寄つていった。近くを通る時に、ぬれた布で彼に水をはねかけるように振舞つて、そして笑いながら厚かましく彼をながめた。彼女は瘦やせていたが、頑がんじ丈ようで、多少しやくれたきつい頤あご、短い鼻、丸みを帯びた眉まゆ、輝いた厳きびしい大胆なごく青い眼、ギリシヤ式の多少つき出た太い唇くちびるのある美しい口、頸くびすじ筋の上に束つかねてる房ふさふさ々とした金髪、日焼けのした顔色をもっていた。頭をまっすぐにして、一語一語に冷笑を浮かべ、日にさらした両手を打ち振りながら、男のように歩いていった。挑いじむような眼つきでク

リストフをながめながら——彼が口をきくのを待ちながら、せんたく物を広げつづけた。クリストフもまた彼女をながめていた。しかし彼は少しも彼女へ口をききたくはなかった。終わりに彼女は、彼の鼻先で笑い出して、仲間の方へ帰っていった。彼はいつまでもそこに横たわっていた。そのうち夕方になると、彼女は背負い籠かごを背にし、露あらわな両腕を組み、少し前かがみになって、たえず談笑しながら立ち去っていった。

彼は二、三日後、町の市場の、にんじんやトマトやきゅうりやキャベツなどが山のように積まれた中で、また彼女を見かけた。その時彼は、売りに出された奴隷のように、籠の前にずらりと立ち並んでる女商人の群れをながめながら、ぶらぶら歩いていた。金袋と切符束とをもつてる警官が、彼女らの前を順次に通って行って、貨幣を受け取り切符を渡していた。コーヒー売りの女が、小さなコーヒー壺つぼがいっぱいはいつてる籠かごをもって、列から列へと歩き回っていた。快活な太った一人の老尼が、腕に二つの大きな籠をさげて市場を回り、神様のことを語りながら、恥ずかしげもなく野菜の寄進を求めている。人々は大声に叫んでいた。緑色にぬった皿さじらをそなえてる古い秤はかりが、鎖の音といっしょにきしり鳴っていた。小さな車につけられてる大きな犬どもが、自分の大事な役目を誇りげに愉快ほに吠えていた。そういう喧騒けんそうの中に、クリストフはかのレベツカを認めた。——そのほんと

うの名はロールヘンというのだった。——彼女は金髪の後部に、白と青とのキャベツの葉を一枚さしていた。それがちようど齒形に切り刻んだ帽子のようになつていた。彼女は籠の上に腰をかけ、黄色いたまねぎや小さな薄赤い蕪菁かぶらや青いんげん豆や真赤まっかな林檎りんごなどの山を前にし、売ろうともしないで林檎をかじつていた。彼女は食べてやめなかつた。時々、前掛あしで頤あごや首をふき、腕で髪かみの毛をかき上げ、頬ほおを肩にこすりつけ、または手の甲で鼻をこすつていた。あるいは両手を膝の上に置いて、一握りのえんどうを際限もなく手から手へ移していた。そして閑散な様子で、左右をながめていた。しかし身のまわりで起こることは少しも見落とさなかつた。気がつかないふりをしながらも、自分の方へ向けられる眼つきを見て取つていた。彼女は完全にクリストフを認めた。買い手たちと話しながら、その頭越まゆねしに、眉根まゆねをよせて自分の贅美者を観察していた。彼女は法王のように威儀堂々としていた。しかし心のうちではクリストフを嘲あざけつていた。彼は嘲られるに相当していた。数歩向こうにつつ立つて、彼女を貪むさぼるようにつめていたのである。それから彼は、言葉をかけずに立ち去つた。

その後彼は何度か、彼女の村のまわりをさまよつた。彼女はよく農家の中庭を歩き来していた。彼は往來に立ち止まつて彼女をながめた。彼女のためにやって来たのだとは自認

していなかった。そして実際、そんなことはほとんど考えていなかった。彼はある作曲に没頭すると、夢遊病者みたいな状態になるのだった。意識的な魂が音楽的思想を追い求めている一方に、一身の他の部分は無意識的なものとなり、その魂はわずかな放心の隙すきをもうかがって自由の天地にのがれようとしていた。彼はしばしば、彼女の正面にいる時でも、自分の音楽の囁ささやきに気を取られていた。そして彼女をながめながら夢想しつづけていた。彼は彼女を愛してるとは言い得なかった。そんなことは考えてもいなかった。彼女を見るのが楽しい、ただそれだけだった。自分を彼女の方へ導いてゆく欲望には、みずから気づいていなかった。

そういう執拗しつようなやり方は、噂うわさの種となった。農家の人々はそれを笑っていた。クリストフが何者であるか知られてしまった。人々は笑いながらも彼を放ほうつておいた。なぜなら彼は害を与えはしなかったから。要するに、彼は馬鹿者のような様子をしていた。そして自分でも平気でいた。

村の祭りだった。悪戯いたずらつ兎こらは小石の間で癩かんしゃく癩く玉をつぶしながら、「皇帝陛下万歳！」を叫んでいた。小屋に閉じこめられてる牛の鳴き声が聞こえ、居酒屋には酔っ払い

の歌が聞こえていた。彗星すいせいのような尾をつけた風たかが、烟の上高く空中に動いていた。鶏が黄色い敷き藁わらを狂気のようにかき回していた。風がその羽を、老婦人の裳衣しょういに吹き込むように、吹き広げていた。一匹の薄赤い豚が、日向ひなたで快こころよげに横たわって眠っていた。

クリストフは三王星という飲食店の赤い家根の方へ進んでいった。その上には小さな旗が翻っていた。正面にはたまねぎの数珠じゆずがかかっている、窓には赤と黄との金蓮花きんれんかが飾っていた。彼はその広間にはいった。煙草たばこの煙が立ちこめていて、壁には黄ばんだ着色石版画が並び、いちばん誉ほまれある場所に、帝王の彩色像が掲げられて、櫛かしの葉飾りで縁取られていた。人々は踊っていた。クリストフは、あの美しい娘もそこにいるに違いないと思っていた。そして実際彼はその顔をまっ先に認めた。彼は室の隅すみにすわった。そこからゆつくりと踊り手らの動きがなめられた。彼は気づかれないようにごく注意していたが、ロールヘンは向こうから彼を見つけ出した。つきることなきワルツを踊りながら、彼女は相手の男の肩越しに、ちらちらと横目を注いだ。そして彼の心をなお刺激するために、大口を開いて笑あいながら、村の若者らとふざけていた。ひどく饒じょうぜつ舌ぜつで、つまらないことな言あいたてていた。この点では彼女も、社交裏の若い娘らと同じだった。彼女らは人からなめられてると、笑ったり動き回ったりしなげなければならないと思あい、自分だけではなく

見物人のために、馬鹿にならなければならぬと思うのである。——でもこの点では、彼らはそれほど馬鹿ではない、なぜなら、見物人は自分をながめてはいるが耳を傾けてはいないということを知っているからである。——クリストフはテーブルに両腕をつきその拳に頤をのせて、娘の素振りを熱烈な眼で見守っていた。彼の精神はあまりとらわれていなかった。彼女の狡猾から欺かれはしなかった。しかしそれからひきつけられないほど自由でもなかった。そしてあるいは憤りの声をもらしたり、あるいはひそかに笑ったりしながら、畏にかかりかけると肩をそびやかしていた。

も一人の者が彼の様子をうかがっていた。それはロールヘンの父だった。背が低くでっぷりして、鼻の短い大きな顔で、禿げてる脳天は日にやけ、まわりに残ってる昔の金髪は、デューラーの聖ヨハネのように、厚く巻き縮れてい、鬚はすっかり剃り、冷静な顔つきをし、口の角に長いパイプをくわえて、彼は他の百姓らとごくゆっくり話しながら、クリストフの無言の身振りを、流し目にかがっていた。そしてひそかに笑みをもらしていた。やがてちよつと咳払いをした。小さな灰色の眼の中に、悪意の光を輝かせながら、クリストフのテーブルの横手に来てすわった。クリストフは不快になって、しかめた顔をふり向けた。するとその老人の狡猾な眼つきに出会った。老人はパイプをくわえたままで、馴

れ馴れしく言葉をかけた。クリストフは彼を見知っていた。性質の悪い老人だと思つていた。しかし娘にたいする弱みから、その父親にたいして寛大になつていて、いっしょにいると妙な喜びをさえ感じた。こざかしい老人はそれに気づいた。彼は天氣の晴雨について話し、向こうの美しい娘たちのことや、クリストフが踊らないことなどを、遠回しにひやかしたあとで、踊る労を取らないのはもつともことであり、酒杯の前に肱をついて食卓にすわつてる方がましだと結論した。そして遠慮なく一杯御馳走になつた。飲みながらも彼は、やはりゆつくりと話していった。こまごました事柄、生活の困難なこと、天氣の悪いこと、諸物価の高いこと、などを言い出した。クリストフは不機嫌な二、三言を返すばかりだった。そのことに興味はなかつた。彼はただロールヘンをながめていた。時々沈黙がおちてきた。百姓は彼の一言を待った。しかしなんら答えもなかつた。それでまた静かに話しだした。クリストフは、この老人の相手をしその打ち明け話を聞くの光榮に浴する訳を、みずから怪しんでいた。ところがついに了解した。老人は苦情を述べつくしたあとで、他の問題に移つていった。自分の所でできるもの、野菜や飼ひ鳥や卵や牛乳などを、上等だと自慢した。そしてだしぬけに、官邸を顧客にしてもらえまいかと尋ねた。クリストフははつとした。

——どうして知ってるのかしら？……俺おれのことは知ってるのかな。

——そうだとも、と老人は言っていた、なんでも知れるものさ……。

だが次のことは口にしなかった。

——……自分で骨折つて調べる時には。

クリストフは意地悪い喜びを感じながら、「なんでも知れる」にもかかわらず、自分があの小宮廷と仲違いたがをしたこと、昔は官邸の大膳局だいぜんや厨房ちゆうぼうに信用を得ているの自惚ぬぼれがあつたにしろ——（それをも実は疑っていた）——その信用も今では没落してしまつてること、などは知られてやすまいと教えてやつた。老人はかすかに口元をしかめた。それでも落胆はしなかった。ちよつと間をおいてから、せめて某々の家庭に紹介してもらえまいかと尋ねた。そしてクリストフが関係のある家庭を皆列挙した。市場で正確に聞きただしておいたのである。クリストフはそういう探索を怒り出すはずだったが、しかしこの老人がいかに狡猾こうかつでも結局は馬鹿をみるにすぎないだろうと考えて、むしろ笑い出したくなつた。（老人は自分の求めている紹介が、新しい顧客を得るよりも在来の顧客を減らすに役だつような紹介であることを、ほとんど気づかないでいた。）それでクリストフは、老人がその粗雑そさつなくだららない奸計かんけいを、無駄むだに頭からしぼり出しつくすのを放っておいた。

そして否とも応とも答えなかった。しかし百姓はしつこく言いたてた。取って置きのクリストフ自身やルイザの方へ銚ほこぎ先を向けて、牛乳やバターやクリームを無理にも押しつけようとした。クリストフは音楽家だから、朝晩に新しい生卵をのむくらい声にきくものはないと、言い添えた。生み立てのぼかぼかした卵を差し上げようと、盛んにすすめた。クリストフは老人から歌手だと思われたことを考えて、放笑ふきだした。百姓はそれにつけ込んで、も一本酒を取り寄せた。それから彼は、クリストフから当座引き出し得るものは皆引き出してしまったので、そのままぶつきら棒に立ち去っていった。

夜になつていた。踊りはますます活気だつてきた。ロールヘンはもはやクリストフに注意を向けていかなかった。村のある馬鹿な若者の方へ、頻ひんぱん繁に振り向かなければならなかった。それは豪農の息子で、すべての娘たちの争いの的となつていた。クリストフはその競争を面白がった。娘たちはたがいに微笑み合い、また喜んで引っかき合つていた。お坊ちゃんのクリストフは夢中になつて見ていた。そしてロールヘンの勝利を願つていた。しかしその勝利が得られると、少し悲しい気がした。それをみずからとがめた。彼はロールヘンを愛していなかったし、彼女が自分の好きな者を愛するのは当然だった。——もちろんそうである。しかしながら、一人ぼっちだという気持は愉快なものではなかった。ここ

にいるすべての人々は、彼を利用して次に彼を嘲笑うためにしか、彼に興味をつないではしなかつたのである。彼は溜息ためいきをついた。ロールヘンをながめながら微笑んだ。ロールヘンは、競争者たる他の娘どもを憤らせる喜びで、平素よりはるかに美しくなっていた。彼は帰ろうと思った。もう九時近くだった。町へ帰るには、たつぷり二里ほどは歩かなければならなかつた。

彼がテーブルから立ち上がりかけると、扉とびらが開いた。十人ばかりの兵士が、どやどやはいり込んできた。そのために室の中が白しろけわたつた。人々はささやきだした。踊っていた男女の幾組かは、その踊りをやめて、新来者に不安な眼を注いだ。扉の近くに立っていた百姓は、わざと兵士らへ背中を向けて、自分たちだけで話をしだした。しかし様子にはそれと見せないで、用心深く身をよけて、兵士らを通らした。——先ごろから、町の周囲にある要塞ようさいの守備兵らと、土地の者らは暗闘を結んでいたのである。兵士らは退屈でたまらないので、百姓らに向かつてその鬱憤うつぶんを晴らしていた。百姓らを無遠慮に嘲笑し、ひどくいじめつけ、その娘らにたいしては、征服地におけると同様の振舞いをしていた。前週なんかは、酒に酔った兵士らが、隣村の祭礼を騒がして、一人の小作人を半殺しにした。クリストフはそれらのことを知っていたので、百姓らと同じ心持になっていた。そしてふ

たたび席につきながら、どういふことが起こるかを待った。

兵士らは厭いやな様子で迎えられたのを気にもかけずに、ふさがってるテーブルへ騒々しくやつて行き、人々を押しつけて席を取った。それはちよつとの間のことだった。多くの人はぶつぶつ言いながら身を避けた。腰掛の端にすわっていた一人の老人は、そう早く退どくことができなかつた。彼は兵士らから腰掛をもち上げられて、哄こう笑しょうのうち引つくり返つた。クリストフは憤然と立ち上がった。しかし將まさに口を出そうとすると、老人はようよう起き上がつて、不平を言うどころか、やたらに謝あやまつてばかりいた。二人の兵士がクリストフのテーブルへやつて来た。彼は拳こぶしを握りしめて彼らが近づくのをながめた。しかし防御の要はなかつた。二人の兵士は、格闘者のように大きな人のいい奴らで、一、二の無鉄砲者のあとから従順についてきて、その真似まねをしようとしてるのだった。彼らはクリストアの昂こうぜん然たる様子に気おくれがした。クリストフは冷やかな調子で言つてやった。

「僕の席です。」

すると彼らは急いで詫わびて、邪魔にならないように腰掛の端へ退いた。クリストフの声に首長らしい抑揚があつたので、本来の服従心が強く働いたのだった。クリストフが百姓でないことを彼らはよく見て取つていた。

クリストフはその従順な態度に多少心が静まって、いつその冷静さで観察することができた。兵士らは一人の下士に率いられてることが、容易に見て取られた。きびしい眼をした小さなブルドッグみたいな男で、偽善的な意地悪な奴僕的な顔をしていた。先の日曜日に大喧嘩げんかをした豪傑連の一人だった。彼はクリストフの隣のテーブルにすわり、もう酔っ払いながら、人々の顔をじろじろながめては、ひどい毒舌を投げつけていた。人々は聞こえないふうをしていた。彼はことに、踊つてる男女に鉾ほこさき先を向けて、その身体の美点や欠点を、破廉恥な言葉で述べた。連中はそれでどつと笑った。娘らは真赤まっかになつて、眼に涙を浮かべていた。青年らは齒をくいしばつて、無言のうちに憤つていた。攻撃者の眼は徐々に室内を一巡して、一人をも見のがさなかった。クリストフは自分の番になつてくるのを見て取った。彼はコップをつかんだ。ちよつとでも侮辱の言を発したらその頭にコップを投げつけてやるつもりで、テーブルの上に拳をすえて待ち受けた。彼はみずから言っていた。

「俺おれは狂人だ。出かけた方がましだ。腹をえぐられるようなことになるだろう。そしてもしのがれても、牢屋ろうやにぶちこまれるかもしれない。わりに合わない話だ。喧嘩をしかけられないうちに出かけよう。」

しかし彼の傲慢心ごうまんはそれを拒んだ。こういう奴どもから逃げ出すふりをしたくなかつた。——陰險暴戾ぼうれいな眼つきは彼にすえられた。彼は堅くなつて、憤然とにらみ返した。下士はちよつと彼を見調べた。クリストフの顔つきにおかしくなつた。隣りの兵士を肱ひじでつつついて、冷笑しながら青年を指さし示した。そして早くも、口を開いて毒づこうとしかけた。クリストフは腹をすえて、コップを発止と投げつけようとした。——がこんども、偶然に助けられた。酔漢が口をきこうとしたとたんに、一組のへまな踊り手が彼に突き当たつて、そのコップを下に落とさした。彼は猛然と振り向いて、盛んにののしり散らした。彼の注意はそちらにそらされてしまつた。彼はもうクリストフのことを考えていなかった。クリストフはなお数分間待つた。それから、相手がもう悪口を言い出そうとしないのを見て取ると、立ち上がつて、静かに帽子を取り、扉とびらの方へゆっくり歩いていった。彼は相手がすわつてる腰掛から眼を離さないで、逃げ出すのではないことを感じさせようとした。しかし下士はすっかりクリストフのことを忘れていた。だれもクリストフに気を配つてる者はなかつた。

彼は扉のハンドルを回した。も少しで外に出るところだつた。しかし無難では出られない運命にあつた。室の奥に騒ぎがもち上がつていた。兵士らは酒を飲んだあとに、こんど

は踊ろうとしていた。娘たちにはそれぞれ相手の男があつたので、兵士らはその男どもを追い払った。男どもはなされるままになつた。しかしロールヘンは言うことをきかなかつた。クリストフの氣に入つた勇ましい眼つきと意志の強そうな顔とを、彼女は無駄にもつてるのではなかつた。彼女が狂氣のように踊つてる時、彼女を選んだ下士は、彼女からその相手の男を奪いに來た。彼女は足を踏み鳴らし、叫びたて、下士を押しつけながら、こんな無骨者と踊るものかと言いたてた。下士は追つかけてきた。彼女が人々の後ろに隠れると、彼はその人々をなぐりつけた。ついに彼女はテーブルの後ろに逃げ込んだ。そこでちよつと彼の手からのがれると、息をついてののしりだした。彼女は抵抗してもなんの役にもたたないことを知つていた。癩かんしゃく癩まぎれに地だんだふんで、最もひどい言葉を見つけては浴びせかけ、彼の顔を家畜場の種々な動物の顔にたとえた。彼はテーブルの向こう側から彼女の方へ乗り出し、薄気味悪い微笑を浮かべ、怒りに眼を輝かしていた。にわかには彼は勢いをこめて、テーブルを飛び越し、彼女をとらえた。彼女はたくましい女としての本性どおりに、なぐりつけ蹴りつけた。彼はしっかり直立していながつたので、身体ほおの平均を失いかけた。そして憤然として彼女を壁に押しつけ、頬ほおに平手の一撃を食くらわした。さらにも一度打とうとした。その時、だれかが彼の背に飛びかかり、力任せになぐりつけ、

一蹴りで酔漢らのまん中に蹴飛ばした。テーブルや人々を押しつけて彼に飛びかかったその男は、クリストフだった。下士は狂気のように怒りたつて、剣を抜きながら向き直った。その剣を使う間も与えずにクリストフは、床しょうぎ几で彼をなぐり倒した。見物人のうちで仲裁しようと思いつく者もなかったほど、万事が素早く行なわれてしまった。しかし、下士が床の上に牛のように倒れるのが見えると、恐ろしい騒動がもち上がった。他の兵士らは剣を抜いて、クリストフに駆け寄った。百姓らは兵士らに飛びかかった。全般の争闘となった。コツプは方々へ飛び、テーブルはひっくり返った。百姓らは本気になっていった。

宿しゆくえん怨を晴らそうとしていた。人々は床にころがって、猛然とつかみ合った。ロールヘンを横取られた踊りの相手は、強壯な農家の下男だったが、先刻侮辱を加えた一人の兵士の頭をつかんで、壁に激しくぶつつけていた。ロールヘンは棒を取って、容赦もなく引っぱたいていた。他の娘らは喚わめきながら逃げ出していた。ただ二、三の元気な者たちが、面白がつて争闘に加わっていた。その一人の、太った金髪の小娘は、一人の大きな兵士——先刻クリストフのテーブルにすわっていた兵士——が相手を引っくり返して胸を膝ひざでこぼしているのを見て、炉のところへ走って行き、またもどつて来て、その暴漢の頭を後ろに引き向け、一つかみの焼き灰を眼に振りかけた。兵士は唸うなり声をたてた。娘はその抵抗を失

つた敵をののしつてよろこんでいた。彼は今や百姓らから思うままなぐりつけられていた。ついに兵士らは敵しかねて、床の上に三人の仲間を残したまま、戸外へ退却した。争闘は村の往来でつづけられた。兵士らは殺戮さつりくの叫びを発しながら、あらゆる人家に闖入ちんにゆうして、あらゆる狼藉ろうぜきを働こうとした。百姓らは棒を持って追っかけ、荒れ犬をけしかけていた。第三の兵士が、三叉みつまたに腹を刺されて倒れた。他の兵士らは村から追い出されて、逃げ出すよりほかに仕方がなかった。畑を横ぎつて逃げながら、仲間を集めてじきにもどつてくるぞと、遠くから叫んでいた。

百姓らは陣地を手中に収めて、飲食店へ帰ってきた。彼らは雀躍こおどりして喜んでいた。被こむつていた迫害の意趣晴らしを、久しく期待していたのが今得られたのであった。争闘の結果にはまだ思い及ぼしていなかった。皆一度に口をきいて、各自に勇気を誇っていた。彼らはクリストフに親密な様子を見せた。クリストフは彼らに近づいた心地がしてうれしかった。ロールヘンは彼のところへ行つて手を取り、その鼻先で笑いながら、自分の硬い手かたの中に彼の手をしばらく握っていた。彼女はもう彼を滑稽こっけいだと思っていなかった。

人々は怪我けが人の世話にかかった。村人のうちには、齒のかけた者、肋骨ろつこつの折れた者、瘤こぶや青痣あおあざができた者があるばかりで、大した害も被っていなかった。しかし兵士らの方

はそうでなかった。三人の者は重傷を受けていた。眼を焼かれ肩を半ば斧おので切り取られて大男、腹をえぐられてあえいでる男、クリストフからなぐり倒された下士。人々はその三人を、炉のそばに横たえておいた。最も軽傷な下士が眼を見開いた。取り巻いてのぞき込んでる百姓らを、憎悪ぞうおのこもった眼つきでじつとながめ回した。そして出来事を思い出すや否や、彼らをののしり始めた。復讐ふくしゅうをし思い知らしてやるぞと断言し、怒りに喉のどをつまらしていた。できるならみなごろしにしてやるつもりでいることが、それと感ぜられた。人々はつとめて笑った。しかしそれは強しいて装よそおった笑いだった。一人の若い百姓は、負傷者に叫びつけた。

「黙れ、黙らなきやぶち殺すぞ！」

下士は起き上がろうとした。口をきいた男を、血走った眼で見すえながら言った。

「野郎め、殺してみろ！ 貴様らの首も取つてやる。」

彼は怒鳴りつづけた。腹をえぐられた男は、血をしぼられる豚のように鋭い叫びを挙げている。三番目の男は身動きもしないで、死人のほうに硬こわばっていた。重苦しい恐怖が、百姓らの上に落ちかかった。ロールヘンと数人の女たちは、負傷者らを他の室へ運んだ。下士の怒鳴り声や死にかかつてる兵士の唸うなり声が、遠く消えていった。百姓らは黙り込ん

でしまった。三人の身体がやはり足下に横たわつてゐるかのようになり、同じ場所に丸く立ち並んでいた。恐怖のあまりに、身を動かすことも顔を見合わせることもしかねてゐた。ついに、ロールヘンの父が言った。

「お前たちはえらいことをしてかしたな！」

心配の嘔せきざやきが起こつた。彼らは固唾かたずをのんでいた。それから皆一度に口をききだした。初めは、立ち聞かれるのを気づかうかのようになり、ひそひそやっていたが、間もなく、調子が高まつて激しくなつた。彼らはたがいに責め合つた。なぐりつけたことをたがいにとがめ合つた。口論が激烈になつてきた。今にも腕力沙汰ざたになるかと思われた。ロールヘンの父は皆をなだめた。腕を組んでクリストフの方へ向きながら、頤あごでさし示した。

「そして彼奴あいつは、」と彼は言った、「何しにここへ来てゐるんだ？」

一同の怒りはことごとくクリストフに向かつた。

「そうだ、そうだ！」と人々は叫んだ、「彼奴がおつ始めたんだ。彼奴がいなけりや、何も起こりはしなかつたんだ。」

クリストフは呆然ぼうぜんとして、答え返そうと試みた。

「僕がしたことは、僕のためではなくて、君たちのためなんだ。君たちもよく知つてゐるは

すだ。」

しかし彼らは猛りたつて言い返した。

「俺たちだけで防げねえことがあるものか、町の者からどうしろと教わるに及ぶものか。だれがお前さんの意見を聞いた？ 第一、だれがお前さんに来てくれと頼んだ？ お前さんは家にいることができなかったのか。」

クリストフは肩をそびやかして、扉の方へ進んでいった。しかし、ロールヘンの父はその道をさえぎりながら、鋭く叫んだ。

「そら、そら！ 俺たちに難儀をかけておいて、もう逃げ出すつもりでいやがる。帰してなるものか！」

百姓らは喚いた。

「帰してなるものか！ 元の起こりは彼奴だ。万事の始末をつけるのは、彼奴の役目だ。」
 彼らは拳固をつき出しながら彼を取り巻いた。その威脅的な顔の輪が狭まってくるのをクリストフは見た。彼らは恐怖のあまり猛りたつていた。彼は一言も言わず、嫌悪の澁面をし、テーブルの上に帽子を投げ出しながら、室の奥に行つてすわり、彼らの方へ背を向けた。

しかしロールヘンは憤然として、百姓らのまん中に飛び込んだ。その美しい顔は真赤になり、憤怒の皺をよせていた。彼女はクリストフを取り巻いてる人々を手荒く押しつけた。「卑怯者のより集まり、畜生ども！」と彼女は叫んだ。「お前たちは恥ずかしくないんですか。あの人がみんなやっただと思わせたがったりしてさ！ だれも見てる人がなかったとしてもいうような顔をしてさ！ 一生懸命になぐりつけた者は一人もないようなふりをしてさ！……皆がなぐり合ってる最中に、一人でも腕組みをしてぼんやりしてる者があつたとしたら、私はその顔に唾を吐きかけて、卑怯者、卑怯者、と言つてやっただけですよ……。」

百姓らは、この意外な叱責にびっくりして、ちよつと口をつぐんだ。それからまた叫びだした。

「彼奴が始めたんだ。彼奴がいなけりや、何にも起こらなかつたんだ。」
ロールヘンの父は娘に合図をしていたが、無駄だった。彼女は言った。

「あの人が始めたに違いないとも！ それがお前たちの自慢になりますか。あの人がいなかつたら、お前たちは馬鹿にされ、私たちも馬鹿にされるところだったじゃないか。意気地なしめ、臆病者！」

彼女は相手の男を呼びかけた。

「そしてお前さんは、何にも言わないで、へいへいして、蹴けってくださいとお臀しりを出していたね。も少しでお礼でも言うところだったろう。恥ちずかしくないんですか。……皆さんは恥ちずかしくないんですか。お前たちは男じゃない。勇気と言ったら、いつも地面に鼻をつけてる小羊くらいなものだ。あの人を手本を示してくれたのはもっともです。——そして今になって、なんでもあの人に背負せわせたいんでしょう。……いつたい、そんなことつてあるもんですか。私がさせやしません。あの方は私どものために喧嘩けんかをしてくれました。あの人を助けるか、いっしょに祝杯を挙げるかがほんとうです。私はきっぱりそう言います！」

ロールヘンの父は彼女の腕を引つ張ひっていた。夢中になって怒鳴なみっていた。

「黙もくれ、黙もくれ!……黙もくらないか、こら!」

しかし彼女は父を押しおしのけて、ますます言い募もった。百姓らは叫こまびたてていた。彼女は鼓膜こまくの破やぶれるような鋭い声で、さらに高く叫こまんだ。

「第一お前さんには、なんの言い草くさがあるんですか。隣りの室むろに半分死しんでるようになってるあの男を、先刻さつきお前さんが蹴けりつけてたのを、私が見みなかつたとも思おもってるんです

か。それからお前さんは、ちよつと手を見せてごらん下さい。……まだ血がついています。ナイフをもつてるところを、私に見られなかったとでも思ってるんですか。もしお前たちが、あの人にちよつとでもひどいことをしたら、私は見たことをみんな、みんな言つてやります。お前たちをみな罪におとしてやります。」

百姓らは激昂げつこうして、その怒つた顔をロールヘンの顔に近づけ、鼻先で怒鳴りつけていた。そのうちの一人は、彼女を打とうとする様子をした。ロールヘンに惚ほれてる男は、その男の襟首えりくびをつかんだ。そして二人はなぐり合はんばかりになって、たがいに身構えをした。一人の老人がロールヘンに言つた。

「俺おれたちがみな仕置きにあつたら、お前もあうぞ。」

「私もあいましょう。」と彼女は言つた。「私はお前さんたちのように卑怯ひきようじゃありません。」

そして彼女はまたしやべりたてた。

彼らはどうしていいかわからなかつた。そして父親へ言葉を向けた。

「お前は娘を黙らせないか。」

老人はロールヘンを極端に走らせるのは軽率だと悟つていた。彼は皆に静まるよう合図

をした。沈黙が落ちてきた。ロールヘン一人が語りつづけた。それから彼女は、もう答弁を受けないので、薪まきのない火のように静まった。しばらくして、父は咳せき払いをして言った。「じゃあいつたいお前はとうしたいとうんだ？ まさか俺たちの身を滅ぼしたいんじゃないだろう。」

彼女は言った。

「あの人を助けてもらいたいです。」

彼らは考え始めた。クリストフは同じ場所にじっとしていた。傲然ごうぜんと身を堅くして、自分に関する事だとも思っていないがようだった。しかしロールヘンの仲介には感動していた。ロールヘンもやはり、彼がそこにいることを知らないようなふうをしていた。彼がすわってるテーブルに背中をもたして、喧嘩腰けんかで百姓らを見すえていた。百姓らは眼下に落ちて、煙草たばこを吹かしていた。ついに、彼女の父はパイプを噛かんでから言った。

「どんな申し立てをしようと、ここに残ってる以上は、あの男の罪は明らかだ。軍曹がちやんと見覚えてるから、とても許すまい。あの男にとってはただ一つの方法があるばかりだ。すぐに国境の向こう側に逃げ出すことだ。」

要するにクリストフの逃亡が自分たちには利益だと、考えたのであった。逃亡は罪の自

認となる。そして彼がここにいて弁解しないかぎり、事件のおもな責任を彼になすりつけるのは容易だ。他の百姓らも賛成した。彼らはその考えをよく理解し合っていた。——そうと決定すると、早くクリストフに出かけさせたかった。一刻前に言った言葉はさらりと忘れた顔をして、彼らはクリストフに近寄り、彼の安危をひどく心配してようなふうをした。

「旦那、一刻も猶予しちやいけません。」とロールヘンの父は言った。「奴らがまたやって来ますぜ。要塞へ行くに半時間、もどつて来るに半時間……。もう逃げ出す隙ひまきりありません。」

クリストフは立ち上がっていた。彼も考えてみたのだった。とどまっていたら身の破滅だと、彼もよく知っていた。しかし、出かける、母に会わないで出かける？……否、それはでき得ることではなかった。彼は言った、まず町へ帰り夜中に出発して国境を越える、それだけの余裕はあるだろうと。しかし百姓らは大声を発した。先刻は彼が逃げるのをさえぎつて戸口をふさいだのに、今では彼が逃亡しないことに反対していた。町へもどれば、きつとつかまつてしまう。彼が着くうちには、もう知らせがいつてる。家に帰ったところを捕えられるだろう。——でもクリストフは強情を張った。ロールヘンはその意中を了解

していた。

「あなたはお母さんに会いたいでしょ。……私が代わりに行ってあげましょう。」

「いつ？」

「今夜。」

「ほんとに？　そうしてくれますか。」

「行きますとも。」

彼女は肩掛を取って、それを身にまとった。

「何かお書きなさい。もっていつてあげます。……こちらへいらっしやい。インキをあげましょう。」

彼女は彼を奥の室へ引つ張つていった。入口でふり返つて、自分に心を寄せてる男に呼びかけた。

「そして、お前さんは支度したくをなさい。この人を案内するんです。国境の向こうへ見送るまで、そばを離れてはいけませんよ。」

「いいとも、いいとも。」と男は言った。

彼もまた、クリストフがフランスへはいり、できることならもつと遠くへ行くことを、

よく見届けたいとだれにも劣らず急いでいた。

ロールヘンは、クリストフとともに別の室へはいった。クリストフはなお躊躇ちゆうちよ躊躇ちよしていた。もう母を抱擁することもないかと思うと、悲痛の情に堪えなかった。いつになつたらまた会えるだろう？ あんなに年老い、疲れはて、一人ぼっちである。この新しい打撃にまいってしまいかもしれない。自分がいなくなつたら、どうなるだろう？……しかし、自分がとどまつていて、処刑され、幾年も禁錮されたら、母はどうなるだろう？ 母にとつてはそれの方が、確かに孤独であり悲惨であるに違いない。たとい遠くにいようともせめて自由であれば、母の助けとなることもできるし、また母の方からやって来ることもできる。——彼は自分の考えを明らかに見分ける隙ひまがなかった。ロールヘンは彼の両手を取り、すぐそばに立つて、彼をながめていた。二人の顔はほとんど触れ合っていた。彼女は彼の首に両腕を投げかけて、その口に接せつぷん吻した。

「早く、早く！」と彼女はテーブルを指さしながらごく低く言った。

彼はもう考えようとしなかった。テーブルにすわつた。彼女は一冊の出納簿から、赤の方罫ほうけいがついてる紙を一枚裂き取つた。

彼は書いた。

お母さん許してください。たいへんな御心配をかけることになりました。他に仕方
もなかったのです。私は少しも間違ったことをしたではありません。けれども今、
逃げ出して国を去らなければなりません。この手紙をお届けする人が、すっかり申し
上げますでしょう。私はお別れの言葉を親しく申したかったです。しかし皆が承知
しません。その前に捕えられるだろうと言います。私はほんとに悲しくて、もう意志
の力もありません。私はこれから国境を越えます。けれども、お手紙をいただくまで
はすぐ近くにとどまっています。私の手紙をお届けする人が、御返事を私にもって来
てくれますでしょう。私がどうすべきかおっしゃってください。何をおっしゃろうと
も、そのとおりにいたします。私のもどるのがお望みでしたら、もどって来いとおっ
しゃってください。あなたを一人残すことは、考えてもたまりません。あなたはど
うして暮らしてゆかれるでしょうか。許してください。許してくださいませ。私はあな
たを愛してそして抱擁いたします……。

「早くしましよ、旦那。そうでないと間に合いません。」とロールヘンに心を寄せてる

男が、扉を半ば開いて言った。

クリストフはあわてて署名をし、手紙をロールヘンに渡した。

「自分で手渡ししてくれませんか。」

「自分で行きます。」と彼女は言った。

彼女はもう出かけようとしていた。

「明日、^{あした}」と彼女は言いつづけた、「返事をもつて来ます。ライデン——（ドイツを出て

第一の停車場）——で待っていてください、停車場のプラットホームの上で。」

（^{ものずき} 好きな彼女は、後が手紙を書いてる間に、その肩越しに読んでしまっていたのである。）

「その時すっかりきかしてください、母がこの打撃に会ってどんなふうだったか、またどんなことを言ったかみんな。何も隠さないでしょうね。」とクリストフは懇願して言った。

「すっかり言います。」

二人はもう自由に話がでなかつた。入口にはかの男が立って彼らを見ていた。

「そしてクリストフさん、」とロールヘンは言った、「私は時々お母さんを訪ねてあげましょう。お母さんの様子を知らしてあげましょう。心配してはいけません。」

彼女は男子のように元気な握手を彼に与えた。

「行きましょう。」と百姓は言った。

「行こう！」とクリストフは言った。

三人とも出かけた。途中で別れた。ロールヘンは一方へ行き、クリストフは案内者とともに他方へ行った。二人は少しも話をしなかった。霧もやに包まれた三日月が、森の彼方かなたに隠れていった。ほのかな光が野の上に漂っていた。低地には、牛乳のように白い濃い霧が立ちのぼっていた。震えてる木立が湿った空気に浸っていた……。村から出てわずか数分行くくと、百姓はにわかにも後ろへ飛びさがって、クリストフへ止まれという合図をした。二人は耳を澄ました。街道の前方から、一隊の兵士の歩調の音が近づいてきた。百姓は籬まがきをまたぎ越して、畑の中へはいった。クリストフも同様にした。二人は耕作地を横ぎって遠ざかった。街道を通る兵士の足音が聞こえた。暗闇くらやみの中で百姓は彼らに拳こぶしを差し出した。クリストフは狩り出された獣のように、胸せまる思いをした。二人はまた街道に出たが、犬に吠ほえられて人に知られるので、村落や一軒家などを避けていった。木深い丘の向こうに出ると、鉄道線路の赤い火が遠くに見えた。その燈火で見当を定めて、第一の停車場へ行くこうときめた。それは容易ではなかった。谷へ降りるに従って、霧の中へ没していつ

た。二、三の川を飛び越さなければならなかった。次には、甜菜てんさいの畑と耕こう地との広々とした中に出た。とうていそれから出られないような気がした。平野はでこぼこしていた。高みとくぼみとが相つづいて、ともするところげそうだった。ついに、むやみと歩き回り、霞の中におぼれきつた後、二人は突然数歩先に、土手の上の線路の照燈を見出した。二人は土手によじ上った。汽車に襲われる危険を冒して、線路に沿って進み、停車場から百メートルばかりの所まで行つた。そこでまた街道にもどつた。汽車が通る二十分前に駅へ着いた。ロールヘンの頼みがあつたにもかかわらず、百姓はクリストフを置きざりにした。他の者らがどうなつたか、また自分の財産がどうなつたか、それを見に早く帰りたがつたのである。

クリストフはライデン行きの切符を買つた。ひっそりしてる三等待合所に一人で待つた。腰掛の上にとうとうとしていた駅員が、汽車が着くとやってきて、クリストフの切符を調べて、扉とびらを開いてくれた。車室の中にはだれもいなかった。列車の中のすべては眠つていた。野の中のすべては眠つていた。一人クリストフは、疲れていながらも眠れなかつた。重い鉄の車輪で国境へ近く運ばれてゆくに従つて、安全の地に脱したいという焦慮を感じてきた。一時間たてば自由になるはずだった。しかしそれまでの間に、ただ一言の通知でもあ

れば捕縛されるに違いなかった。……捕縛！ 思っただけでも全身に反抗の気が湧いた。
 嫌悪けんおすべき暴力によつて窒息させられる！……そう思うと息もつけなかった。別れてゆく
 母も故国も、彼の念頭には浮かばなかった。自分の自由が脅かされるといふ利己的な考
 えのうちに、救いたいその自由のことをしか考えなかった。いかなる価を払つても！ そ
 うだ、たとい罪悪を犯しても……。国境まで歩きつづけないうでこの汽車に乗つたことを、
 彼は苦にが々しくみずから責めた。それもただ数時間節約したかたのみである。それがな
 んの足しになろう！ 狼おおかみの口に飛び込もうとするようなものだった。確かに国境の駅で綱
 を張られてるに違いなかった。命令が発せられてるに違いなかった……。彼は一時、停車
 場へ着く前に進行中の汽車から飛び降りようかと考えた。車室の扉しびらを開きませんでした。しか
 しもう遅おそかった。到着しかけていた。汽車は止まった。五分間。それが永遠のように思わ
 れた。クリストフは部屋の奥に飛びのき、窓掛の後ろに隠れて、不安にプラットホームを
 眺めた。そこには一人の憲兵がじつと立っていた。駅長が一通の電報を手にして、駅長室
 から出て来、あわただしく憲兵の方へ進んでいった。クリストフは自分に関することだと
 疑わなかった。彼は武器を捜した。二枚刃の丈夫なナイフよりほかに何もなかった。彼は
 ポケットの中でそれを開いた。胸に角燈をかざした一人の駅員が、駅長とすれ違って、列

車に沿って駆けてきた。クリストフはその駅員がやって来るのを見た。彼はポケットの中でナイフの柄を握りしめて、考えた。

「もう駄目だ！」

彼は極度に興奮していたから、もしその駅員がおり悪しくも、彼の方へやって来て彼の車室へはいろいろとしたら、その胸にナイフを刺し通したかもしれないなかった。しかし駅員は隣りの車室に立ち止まって、今乗った一乗客の切符を調べた。列車はまた進行しだした。クリストフは胸の動悸を押し静めた。身動きもしなかった。助かったともまだ思いかねていた。国境を越えないうちはそう思いたくなかった。……夜が明け始めた。木立の姿が闇から出てきた。一つの馬車が、鈴音をたて燈火をちらつかせながら、幽霊のように街道を通っていった……。クリストフは車窓に顔をくつつけて、版図の境界を示す帝国章のついた標柱を見ようとつとめた。汽車がベルギーの最初の駅へ到着する汽笛を鳴らした時、彼はまだその標柱を夜明けの光の中に捜していた。

彼は立ち上がった。扉をすっかり開け放した。冷たい空気を吸い込んだ。自由！ 前途に横たわつてる全生涯！ 生きる喜び！……そして間もなく、残してきたものにはたいする悲しみが、これから見出そうとするものにたいする悲しみが、一時に彼の上へ襲

いかかった。一夜じゅうの激情の疲れが彼を圧倒した。彼はがっくりと腰掛に身を落した。停車場へ着くまでにはわずか一分あるかなしかだった。その一分間後に、一人の駅員が車室の扉を開くと、クリストフの寝姿を見出した。クリストフは腕を揺られて眼を覚まし、一時間も眠ったような気がして変だった。重々しく汽車から降りて、税関へやって行った。そして、もうすっかり他国の領土へはいつてしまい、もはや身を護る要もなかったので、待合室の腰掛に長々と寝そべって、ぐっすり眠り込んでしまった。

彼は午ごろ眼を覚ました。ロールヘンは二時か三時より前には来るはずがなかった。彼は汽車の到着を待ちながら、その小駅のプラットホームの上を百歩ばかり歩いた。それからまっすぐに牧場の中へ行った。冬の来るのを思わせる灰色の陰気な日だった。日の光が眠っていた。運転されてある列車の寂しい汽笛の音ばかりが、もの悲しい静けさを破っていた。クリストフは蕭条たる野の中で、国境から数歩の所に立ち止まった。彼の前にはごく小さな沼があった。いと清らかな水溜りで、陰鬱な空が反映していた。沼には柵がめぐらされて、二本の樹木が岸に立っていた。右手のは白楊樹で、梢の葉は落ちつくして震えていた。後方のは大きな胡桃の木で、黒い裸の枝を差しのとべて偉大な蛸のよう

な格好だった。まつ黒な実が房ふせになつて重々しく揺いでいた。枯れて散り残つた木の葉がおのずから枝を離れて、静まり返つてゐる沼に一つ一つ落ちていた……。

彼はそれらをかかつて見たことがあるような気がした、その二本の樹きと沼とを……。——
そして突然、彼は眩暈めまいの状態に陥つた。それは生涯の平野に時おり開かれるものである。時タイムの中の穴である。自分はどこに居るのか、自分はだれであるのか、いかなる時代に生きているのか、幾世紀以来こうしているのか、もはやわからなくなつてしまふ。クリストフは、これはかつてあつたことで、今のことは今あるのではなくて他の時にあつたのだ、というような感じがした。彼はもはや彼自身ではなかつた。彼は自分自身を、かつてここにこの場所に立つていた他人のようなふうに、外からごく遠くからながめていた。種々の見知らぬ思い出のざわめきが、耳には聞こえていた。彼の動脈は音をたてていた……。

——このように……このように……このように……

幾世紀もの唸り声……。

彼以前のクラフト家の多くの人たちも、彼が今日受けてゐる試練を受け、郷土における最後の時間の悲嘆を味わつたのだつた。たえず放浪する血統、独立独歩と焦慮とのために至る所から追い払われる血統。どこにも定住するを許さない内心の悪魔から、常にさいなま

れる血統。しかももぎ離される土地に執着して、それを捨て去ることのできない血統だった。

こんどはクリストフの番となつて、その同じ道程をまたたどつてるのであつた。そして彼は途上に、先だつた人々の足跡を見出していた。彼は眼に涙をいっぱい浮かべて、祖国の土地が靄もやの中に消えゆくのをながめた。それに別れを告げなければならなかつた。……彼は祖国を離れたいと熱望してはいたではないか？——そうだ。しかしほんとうに祖国を去る今となつては、苦悶くもんに身をしばらるる心地がした。生まれた土地からなんらの感情もなく別れ得るものは、動物の心よりほかにない。幸福にせよ不幸にせよ、生まれた土地とともに暮らしたのだ。それは母であり伴はんりよ侶であつた。その中に眠り、その上に眠り、それに浸ひされていた。その胸の中には、吾人の貴い夢が、吾人の過去の全生涯が、吾人の愛した人々の聖きよい塵ちりが、蓄たくわえられているのだ。クリストフは、自分の日々の生活と、その土地の上にまた下に残してゐる親愛な面影とを、眼前に思い浮かべた。彼にとつては、苦しみは喜びに劣らず貴いものだつた。ミンナ、ザビーネ、アーダ、祖父、ゴットフリート叔父、シウルツ老人——すべてが数分間のうちに彼の眼に浮かんだ。彼はそれらの故人（アーダをも彼は故人のうちに数えていた）から身をもぎ離すことができなかつた。愛する人々の

うちでただ一人生き残つてゐる母を、それらの幽鬼中に残してゆくことを考えると、さらに堪えがたかつた。彼はまた国境を越えてもどろうとした。それほど、逃亡を求めたことが卑怯ひきょうに思われた。ロールヘンがもたらすはずの母の返事に、もしもあまり大きな悲しみが現われていたら、どんなことがあつても帰ろうと決心した。しかし、もし何にも受け取らなかつたら？ もしロールヘンがルイザのもとまで行くことができないか、あるいは返事をもつて来ることができないかしたら？ やはり帰るとしよう。

彼は停車場へもどつた。侘わびしく待ちあぐんだ後、ついに汽車が現われた。クリストフは車室のどの扉口とぐちかに、ロールヘンの精悍せいこんな顔つきを待ち受けた。彼女が約束を守ることを確信していたのである。しかし彼女は姿を見せなかつた。彼は不安になつて、車室から車室へと駆け回つた。そして乗客の人波に駆けながらぶつつかつてると、見覚えがあるように思われる一つの顔を認めた。十三、四歳の少女で、頬ほがふくれ、太ちつちよで、林檎りんごのように真赤な色をし、反そり返つた太い短い鼻、大きな口、濃い縮み髪を頭に束ねていた。なおよくながめると、自分のによく似た古靴かばんを手にさげることがわかつた。彼女の方もまた、雀すずめのように彼を横目にうかがつていた。そして彼からながめられることを見て取ると、彼の方へ数歩寄つてきた。しかし彼の正面につつ立つたまま、一言も言わないで、

はつかねずみ
 廿日鼠のような小さい眼で彼の顔をのぞき込んだ。クリストフは思い出した。ロールへの家の牛飼いの少女だった。彼は鞆を指しながら言った。

「僕へだろう、ね？」

少女は身動きもしなかった。そしてとぼけた様子で答えた。

「どうですか。いったいどこからいらしたの。」

「ブイルから。」

「鞆を送った人はだれですか。」

「ロールヘンだ。さあ渡してくれ。」

娘は鞆を差し出した。

「はい！」

そして彼女は言い添えた。

「ああ、すぐにあなたとわかったわ。」

「では何を待っていたんだい。」

「あなただとおっしゃるのを待ってたの。」

「そしてロールヘンは？」とクリストフは尋ねた。「なぜ来なかったんだい。」

少女は答えなかった。クリストフはこの人中では何も言いたくないのだなと悟った。まず荷物の検査を受けなければならなかった。それが済むと、クリストフはプラットホームの先端へ少女を連れていった。

「憲兵たちが来たのよ。」と少女はもう非常に饑舌じょうぜつになつて話した。「あなたが出かけると、すぐ入れ違いにやつて来たのよ。方々の家へはいり込んで、みんなに尋ねて、ザーミ姉さんやクリスチャンやカスバル小父おじさんなんかをつかまえたの。それからメラニーやゲルトルーデもつかまったの。何にもしなかったと喚わめいても駄目だめだった。泣いてたわ。ゲルトルーデは憲兵を引つかいたわ。何もかもあなたがしたんだと言つても、役にたたなかつたのよ。」

「なに、僕が！」とクリストフは叫んだ。

「そうよ。」と少女は平気で言った。「あなたは逃げちゃったから、ちつとも構わないじやないの？　すると憲兵たちはあなたを方々捜して、あっちこっちへ追っかけて行つたわ。」

「そしてロールヘンは？」

「ロールヘンはいなかつたの。町へ行つてから、あとでもどつてきたのよ。」

「僕のお母さんに会ったのかしら。」

「ええ。これがその手紙よ。自分で来たがってたけれど、やっぱりつかまったの。」
 「ではどうしてお前は来られたんだい。」

「こようよ。ロールヘンは憲兵に見つからないで、村に帰ってきて、それからまた出かけようとしたの。けれどゲルトルーデの妹のイルミナが、訴えたもんだから、捕り手が来たのよ。憲兵たちが来るのを見ると、自分の室に上がっていつて、すぐに降りてゆく、今着物を着てるから、と言いたてたの。私は裏の葡萄畑ぶどうにいたのよ。ロールヘンは窓から、リディア、リディア、って私を小声で呼ぶの。行ってみると、あなたのお母さんからもらったきた鞆かばんと手紙を、私に渡して、あなたに会える場所を教えてくださいましたの。駆けておゆき、つかまらないようにおし、と言われたわ。私は駆け出して、それからここへ来たのよ。」

「それきりなんとも言わなかったの！」

「言ったわ。自分の代わりに来たんだというしるしに、この肩掛も渡してくれて。」

クリストフは、花の刺繡ししゅうと赤い玉のついているその白い肩掛を見覚えていた。前夜ロールヘンが彼と別れる時、顔を包んだものだった。彼女がそれを愛の記念に贈るために用いた、ほんとうらしからぬ無邪気な口実を聞いても、彼は笑えなかった。

「あら、」と少女は言った、「もう他の汽車ほかが来た。家へ帰らなきやならないわ。さよなら。」

「まあお待ち。」とクリストフは言った。「来るのに、汽車賃はどうしたんだい。」

「ロールヘンからもらったの。」

「でもこれをもっておいで。」とクリストフは言いながら、彼女の手に数個の貨幣を握らした。

彼はもう行こうとする少女の腕を取って引き止めた。

「それから……。」と彼は言った。

彼は身をかがめて、彼女の両の頬ほおに接吻せつぶんした。少女は拒むような顔つきをしていた。

「いやがってはいけない。」とクリストフは冗談に言った。「お前にはないよ。」

「ええ、よくわかってるわ。」と娘はひやかし気味に言った。「ロールヘンにだわ。」

クリストフが牛飼いの少女の両の豊頬ほうきょうで接吻したのは、単にロールヘンをばかりではなかった。自分のドイツ全体をであった。

少女は逃げ出して、発車しかけてる汽車の方へ走っていった。彼女は車室の入口に残つて、見えなくなるまで彼へハンカチを振っていた。故国と愛する人々との息吹いぶきを最後に

もたらしてきた使者の田舎娘を、彼はじつと見送った。

彼女の姿が見えなくなると、彼はこんどこそまったく異境の孤客となった。彼は母の手紙と恋しい肩掛とを手にしていた。肩掛を胸に抱きしめて、それから手紙を開こうとした。しかし彼の手は震えた。いかなることが読まれるだろうか？　いかなる苦しみをそこに見出すだろうか？……いや、すでに聞こえるような気がするその悲しいとがめには、堪えることができないだろう。引き返して帰ることにしよう。

彼はついに手紙を開いた。そして読んだ。

私の憐れな子よ、私のことを心配しないでください。私は物わかりよくしまししょう。神様が私を罰せられたのです。私は自分のためばかりを思ってお前を引き止めてはいけないのでした。パリーへお行きなさい。たぶんその方がお前のためにはいいでしょう。私のことは気にしないでください。どうかやってゆくことができます。いちばん肝心なのは、お前が幸福であることです。私はお前を抱擁します。

できる時には手紙をください。

母より

クリストフは鞆かばんの上にすわって泣いた。

駅夫がパリー行きの乗客を呼んでいた。重い列車が轟ごう然ぜんたる音をたてて到着しかけていた。クリストフは涙をぬぐい、立ち上がってみずから言った。

「やむを得ない。」

彼はパリーの方面の空をながめた。一面に薄暗い空は、その方面ではいつそう暗澹あんたんとしていた。陰暗な深淵しんえんのようであった。クリストフは胸迫る気がした。しかしみずからくり返した。

「止むを得ない。」

彼は汽車に乗った。そして窓からのぞき出しながら、気味悪い地平線をながめつづけた。「おおパリーよ！」と彼は考えていた。「パリーよ！ 僕を助けてくれ。僕を救ってくれ。僕の思想を救ってくれ！」

薄暗い霧は濃くなつていった。クリストフの後方には、去つてゆく故国の上には、両の眼ほどの——ザビーネの両の眼ほどの——薄青い空の片隅かたすみが、重々しい雲の切れ目から、

寂しげに微笑^{ほほえ}み出して、そのまま消えていった。汽車は出た。雨が降った。夜になった。

青空文庫情報

底本：「ジャン・クリストフ（二）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年7月16日改版第1刷発行

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2008年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ジャン・クリストフ

JEAN-CHRISTOPHE

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 第四巻 反抗

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>